

東大阪市・八尾市

# 池島・福万寺遺跡 12

(福万寺Ⅱ期地区08-1調査区)

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

2011年11月

公益財団法人 大阪府文化財センター



東大阪市・八尾市

# 池島・福万寺遺跡 12

(福万寺Ⅱ期地区08-1調査区)

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書



# 序 文

池島・福万寺遺跡は生駒山地の西麓、河内平野の東端に位置します。東大阪市池島町と八尾市福万寺町にまたがり、南北が約1.7km、東西が約1.2kmの範囲に広がっています。

当遺跡は平成元年から財団法人大阪文化財センター（現 公益財団法人大阪府文化財センター）が、大阪府寝屋川水系改修工営所による恩智川治水緑地の建設に伴い発掘調査を行ってきました。調査の先駆けとなった大阪府教育委員会による昭和56年の試掘調査にまで遡りますと、実に30年にわたり継続的に調査が行われてきたこととなります。

このような長期にわたる調査において、縄文時代終り頃の墓地、弥生時代初め頃の集落、古墳時代の集落の発見等々、貴重な成果を上げることができました。

中でも、日本農業の黎明である弥生時代の水稲耕作、古代律令制度を顕示する条里水田、中世河内の耕作を特徴づける島畠の開始と展開、近世の特産物であった良質な木綿の生産など、原始から現代に至るまで、営々と人々が農耕に従事してきた具体相が解明されたことから、日本の農業史を語る上で欠かせぬ遺跡として、大阪府のみならず全国から注目されるようになりました。

また、当地周辺地域は水田など土地区画に、いわゆる条里型の方形地割が観察されることから、地理学、文献史学の分野より早くから注目されてきた地域でもありました。今回の調査では、奈良時代（8世紀中頃）に自然流路が直角に曲がる区画溝に付け替えられ、以降にも続く大畦畔が溝の縁部に構築されたことが判かりましたが、これはすなわち、当遺跡における方形地割の変遷過程を詳らかにしたことになり、古代の条里制の起源に関する議論を、より深める貴重な資料になるものと自負しております。

最後になりましたが、調査の実施にあたり、多大なご協力ならびにご支援を賜りました大阪府都市整備部河川室、同部寝屋川水系改修工営所、同南部工区、大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元関係者の皆様には深く感謝いたしますとともに、今後とも当センターの事業に一層のご協力とご理解を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成23年11月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 水野 正好

# 例 言

1. 本書は、大阪府東大阪市池島町・同八尾市福万寺町に計画された恩智川治水緑地建設に伴う、池島・福万寺遺跡Ⅱ期地区（08－1）調査区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大阪府寝屋川水系改修工営所から「一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査（その9）」事業として委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。事業契約期間は平成20年9月1日～平成22年8月31日までで、引き続き一級河川恩智川治水緑地「池島・福万寺遺跡Ⅱ遺物整理（その1）」を平成22年9月1日～平成23年3月15日まで実施し、本書の刊行をもって終了した。
3. 発掘調査、整理作業は以下の体制で実施した。

平成20年度 調査  
調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、中部調査事務所長 寺川史郎  
池島支所長 金光正裕、調査第二係長 西村 歩、副主査 駒井正明、専門調査員 垣内拓郎

平成21年度 調査  
調査部長兼調査課長 福田英人、調整グループ長 金光正裕、調査グループ長 寺川史郎  
主幹兼池島総括主査 小野久隆、福万寺総括主査 西村 歩、副主査 駒井正明  
専門調査員 垣内拓郎

平成22年度 調査  
調査部長兼調査課長 福田英人、調整グループ長 江浦 洋、主幹 岡本茂史  
調査グループ長 岡戸哲紀、主幹兼総括主査 金光正裕、主査 駒井正明 副主査 岡本圭司  
専門調査員 河本純一

平成22年度 整理  
調査部長兼調査課長 福田英人、調整グループ長 江浦 洋、主幹 岡本茂史  
調査グループ長 岡戸哲紀、主幹兼池島・福万寺総括主査 金光正裕、主査 駒井正明  
副主査 岡本圭司
4. 遺物写真撮影に関しては、中部調査事務所主査 片山彰一が担当し、木製品の樹種鑑定は、同事務所主査 山口誠治が行った。
5. 本報告書作成に際しては、当センター職員から有益な教示を得た。
6. 本書の作成は、調査担当者および試料鑑定者がそれぞれ執筆し、氏名を目次に記した。なお、第4章第1節については（株）古環境研究所に分析および執筆を依頼した。また、第1・2章については、既刊の各書と内容が重複するため、『池島・福万寺遺跡』4の記述を一部改変して掲載した。本書の編集は駒井正明、岡本圭司が行った。
7. 出土した遺物の破片点数は、河本純一が数えたものに岡本圭司が修正を加え本文中に記した。
8. 本調査で出土した遺物、および写真・実測図などの記録類は、当センターで保管している。

# 凡 例

1. 標高は東京湾平均海面（T.P.）を用い、表記に際してはT.P.+を省略した。
2. 座標は世界測地系を使用し、平面直角座標系第Ⅵ座標系に準拠する。座標単位は全てmであるが、本文・挿図中では単位を省略した。
3. 本書で用いた北は座標北である。座標北を基準とした場合、磁北は6°50′西、真北は0°13′東に偏移する。
4. 現地調査ならびに遺物整理は、当センターの定めた『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』2003および『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土色標記は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』平成19（2007）年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修 に準拠した。
6. 遺構番号は、調査区・遺構面・種類に関係なく、検出順にアラビア数字の通し番号を付与し、その後遺構の種類を表記した。ただし本書では、現場で付与した遺構番号を再整理したものをを用いている。新旧遺構番号対照表は、巻末に掲載した。
7. 各遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図に縮尺を明記したスケールを付す。原則として平面図を500分の1、個別平面図を20分の1、断面図を40分の1とし、必要に応じて他の縮尺を用いた。また遺物実測図は原則4分の1、石器・古銭は3分の2とし、必要に応じて他の縮尺を用いた。
8. 本書の遺物番号は、挿図・写真図版・遺物観察表とも一致する。
9. 本書で報告した出土遺物の点数は、出土状況から考え、確実に同一の個体であるもの以外は、機械的・無機的に分けて点数化している。また、数mm以下の遺物は、種などの特殊なものを除き、数に含めていない。
10. 本書を作成するに当たり、大阪府教育委員会および大阪府文化財センターが刊行した池島・福万寺遺跡の既往調査報告書を参照したが、そのほか使用した主な参考文献については第5章「まとめ」の最後に記した。
11. 図4は国土地理院発行の25,000分の1地形図「大阪東南部」（平成10年3月1日発行）、「信貴山」（平成10年11月1日発行）を使用し、大阪府地図情報システムの文化財地図埋蔵文化財を参照して作成した。

## 目次

### 第1章 調査に至る経過と調査の方法

- 第1節 調査に至る経過 …………… 駒井正明…………… 1  
第2節 調査の方法 …………… 駒井…………… 2

### 第2章 地理的・歴史的環境…………… 駒井・岡本圭司…………… 5

### 第3章 調査成果

- 第1節 層序 …………… 駒井…………… 9  
第2節 第13-2 b層から第10 a層までの堆積過程 …………… 井上智博…………… 15  
第3節 近世～中世 …………… 駒井・岡本…………… 19  
第4節 古代 …………… 駒井・岡本…………… 49  
第5節 古墳時代以前 …………… 駒井・岡本…………… 82

### 第4章 自然科学分析

- 第1節 福万寺Ⅱ期地区(08-1)調査区における微化石分析…………… 101  
第2節 福万寺Ⅱ期地区(08-1)調査区出土植物遺体について…………… 山口誠治…………… 116

### 第5章 まとめ…………… 駒井・岡本…………… 118

## 挿図目次

図1 調査区位置図	2	図14 第2-1 a層出土遺物	24
図2 調査区地区割り基準	3	図15 第2-2 a面平面図	25
図3 08-1調査区地区割り	3	図16 第2-3 a面平面図	27
図4 周辺の遺跡	6	図17 第2-3 a層出土遺物	28
図5 X-2トレンチ断面	11	図18 第3-1 a面平面図	29
図6 Y-3トレンチ断面	13	図19 第3-1 b面平面図	30
図7 第13-2 b層から第10 a層 までの堆積過程	18	図20 第3-1 b面3004溝断面図	31
図8 第1面2057井戸平・断面図	20	図21 第3-1 b面遺構断面図	32
図9 第1層出土遺物	20	図22 第3-1 b層出土遺物	32
図10 2057井戸枠	21	図23 第3-2 a面平面図	33
図11 第2-1 a面平面図	22	図24 第3-2 a面3042島畠断面図	34
図12 坪境畦畔断面図	23	図25 第4-1 a面平面図	36
図13 第2-1 a面2051土坑断面図	24	図26 第4-2 a面平面図	37
		図27 第4-1 a層関連出土遺物	38



図28	第5-1 a面平面図	39	図60	第9-1 a面平面図	66
図29	第5-1 a面関連・第5-1 a層 出土遺物	40	図61	第9-1 a面9010ピット 平・断面図	67
図30	第5-2 a面平面図	41	図62	第9-1 a面9017流路出土遺物	67
図31	第5-2 a層出土遺物	42	図63	第9-1 a面・第9-1 a層出土遺物	68
図32	第6-1 a面平面図	43	図64	第9-2 a面平面図	69
図33	第6-1 a面遺構断面図	44	図65	第9-2 a面9039溝 平・立面図	70
図34	第6-1 a層出土遺物	44	図66	第9-2 a面9039溝出土木杭	71
図35	第6-1 b面平面図	45	図67	第9-2 a面9051・9052流路 平面図	73
図36	第6-1 b面島畠断面図	46	図68	第9-2 a面9039溝出土遺物	74
図37	第6-1 b面出土遺物	47	図69	第9-2 a面9039溝、9051・9052流路 合流部出土遺物	74
図38	第6-2 a面平面図	48	図70	第9-2 a面土器埋納ピット 平・断面図	75
図39	第6-2 a面・第6-2 a層 出土遺物	49	図71	第9-2 a面土器埋納ピット 出土遺物	76
図40	第6-3 a面平面図	50	図72	第9-2 a層出土遺物	76
図41	第6-3 a面6039土坑断面図	51	図73	第9-3 a面平面図	77
図42	第6-3 a面・第6-3 a層 出土遺物	51	図74	第9-3 a面9107流路出土遺物	78
図43	第7-1 a面平面図	52	図75	第9-3 a面・第9-3 a層 出土遺物	78
図44	第7-1 a面7003土坑断面図	53	図76	第9-4 a面平面図	80
図45	第7-1 a面関連・第7-1 a層 出土遺物	53	図77	第9-4 a面9107流路出土木杭	81
図46	第7-3 a面平面図	54	図78	第9-4 a面9107流路出土遺物	83
図47	第7-3 a面遺構断面図	55	図79	第9-4 a面関連・第9-4 a層 出土遺物	83
図48	第7-3 a面・第7-3 a層 出土遺物	55	図80	第10 a面平面図	84
図49	第7-3 b面平面図	57	図81	第10 a面関連・第10 a層・第10 b層 出土遺物	85
図50	第7-3 b面遺構断面図(1)	58	図82	第10 b面平面図	86
図51	第7-3 b面遺構断面図(2)	59	図83	第11-2 a面平面図	88
図52	第7-3 b面遺構断面図(3)	60	図84	第11-2 a面溝断面図	89
図53	第7-3 b面ピット群平面図	61	図85	第11-2 a面関連・第11-2 a層 出土遺物	90
図54	第7-3 b面7132ピット 平・断面図	62	図86	第11-3 a面平面図	91
図55	第7-3 b面関連出土遺物	62	図87	第11-3 b面平面図	91
図56	第7-3 b層出土遺物	62	図88	第12-1 a面平面図	92
図57	第8-1 a面平面図	63			
図58	第8-2 a面平面図	64			
図59	第8-2 a面関連・第8-2 a層 出土遺物	65			

図89	第12-3 a 面平面図	93	図96	第13-1 a 面1302畦畔内	
図90	第12-3 a 層出土遺物	93		・第13-2 b 層出土打製石器	98
図91	第13-1 a 面平面図	94	図97	第13-1 a 層出土打製石器	99
図92	第13-1 a 面1325流路 ・第13-1 a 層・第13-1 b 層 ・出土遺物	95	図98	第11-3 a 層・第13-1 a 面 1325流路・第13-2 b 層 出土石包丁類	100
図93	第13-1 a 層出土遺物	96	図99	植物珪酸体分析ダイアグラム	104
図94	第13-1 b 面平面図	97	図100	花粉ダイアグラム	107
図95	第13-1 b 面・第13-1 b 層 出土遺物	97	図101	主要珪酸ダイアグラム	109
			図102	各面・層出土主要土器割合グラフ	138

## 表目次

表 1	周辺の遺跡一覧	7	表 7	推定される環境と植生の変遷	112
表 2	第9-2 a 面9039溝関連木杭	72	表 8	植物遺体同定結果一覧	116
表 3	第9-4 a 面9107流路関連木杭	82			
表 4	植物珪酸体分析結果	104		遺構観察表	122
表 5	花粉分析結果	106		各面・層主要遺物出土数量表	136
表 6	珪藻分析結果	108		遺構番号新旧対照表	139

## 写真目次

写真 1	第9-3 a 面置石	78	写真 4	珪藻	115
写真 2	植物珪酸体	113	写真 5	植物遺体	117
写真 3	花粉・孢子	114			

## 写真図版目次

図版 1	調査区全景 1		図版 8	調査区全景 8	
図版 2	調査区全景 2		図版 9	古代	
図版 3	調査区全景 3		図版10	古代	
図版 4	調査区全景 4		図版11	古代	
図版 5	調査区全景 5		図版12	古代	
図版 6	調査区全景 6		図版13	古代	
図版 7	調査区全景 7		図版14	弥生時代	

# 第1章 調査に至る経過と調査の方法

## 第1節 調査に至る経過

池島・福万寺遺跡の位置する河内平野は、近年まで広大な水田域が広がっていたが、昭和25～35（1950～60）年代頃から市街化が進行したため農地は激減し、当地域一帯の貯水能力は低下した。さらに工業用水の地下水採取による地盤沈下とも複合した結果、治水機能も大幅に悪化した。淀川、大和川、生駒山地、上町台地に囲まれた河内平野一帯は大半が低平地にあるため自然排水に恵まれない。さらに当平野を流下する寝屋川、第二寝屋川、恩智川などの河川で構成される寝屋川水系の出口は、大阪城北方の京橋口1箇所にすぎない。このため悪天候などの際は急激な増水を度々誘発した。昭和47（1972）年7月には集中豪雨によって大東市域を中心に大規模な浸水被害（大東水害）が発生、行政訴訟にまで発展した。こうした事態に対し、大阪府は抜本的に河川改修事業を見直し、寝屋川流域総合治水対策事業として河道改修をはじめ、貯留施設、放流施設の建設に着手することとなった。本事業の依拠する恩智川治水緑地はこれら一連の事業のうち、洪水を一時貯留し下流域の水位調整を行う貯留施設の遊水地である。寝屋川流域において計画された遊水地は、寝屋川治水緑地、打上川治水緑地、花園多目的遊水地の3箇所がすでに完成しており、現段階において恩智川流域の恩智川治水緑地、恩智川（法善寺）多目的遊水地が建設中である。恩智川治水緑地の規模は面積40.2ha、完成時の貯水量は165万m<sup>3</sup>である。北流する恩智川を挟んで東側の池島地区（東大阪市池島町）、西側の福万寺地区（八尾市福万寺町）の2地区に分かれ、また両地区の建設計画はそれぞれⅠ・Ⅱ期にわたる。

恩智川治水緑地の計画地域は、条里型地割が良好に遺存することが早くから知られていた。昭和47（1972）年府立池島高校（現在みどり清朋高校）建設に伴い、東大阪市遺跡保護調査会が発掘調査を進めた。その結果、条里遺構の下層に古墳時代以前の遺構面の存在が明らかとなった。このような状況下、高校建設地と隣接する治水緑地の建設に先立ち、大阪府土木部都市河川課と大阪府教育委員会は埋蔵文化財に関する協議を行い、昭和56・57（1981・82）年に大阪府教育委員会が福万寺Ⅰ期地区で試掘調査を実施した。その結果、現地表下に重層的な条里遺構、さらに下層には弥生時代前期の遺物包含層や遺構面の遺存することが判明した。試掘調査から関係機関による協議を重ね、治水緑地建設によって破壊される部分については記録保存の方針が決定した。発掘調査は、昭和59（1984）年より大阪府教育委員会が実施、平成元（1989）年以降は（財）大阪文化財センター（平成7（1995）年度より（財）大阪府文化財調査研究センター、平成14（2002）年度より（財）大阪府文化財センター）が池島・福万寺Ⅰ期地区の調査を担当する運びとなった。

池島・福万寺地区Ⅰ期分およびⅠ・Ⅱ期を連結する施設部はすでに調査を終えており、現在はⅡ期分の調査が進行中である。調査成果は終了した事業から概要報告書によって適宜公表し、Ⅰ期分の調査の終了後にこれらをまとめた正式な報告書も刊行した。これらは、考古学的手法で農業の変遷を通史的に解明した貴重な成果として知られている。

Ⅰ期地区は福万寺地区で平成7（1995）年、池島地区で平成14（2002）年に整備を終え、現地には遊歩道や運動広場など公園施設が設備され、平素は市民の憩いと活動の場として供用されている。

## 第2節 調査の方法

今回の調査地（08－1）は八尾市福万寺町6丁目地先に所在し、福万寺Ⅱ期地区の西端に位置する。当センターでは、大阪府下の全調査域を統一した基準で区画できるよう、国土座標軸（世界測地系第Ⅵ系）を基準線とした第Ⅰ～Ⅵ区画までの6段階の地区割りを設定する。今回の調査では、このうちの第Ⅰ～Ⅳ区画までを用いた。（図2、3）

調査地の座標は、調査地周辺に3級基準点・4級基準点を設置し、それらをもとに調査地内に基準杭を設定した。このように設定した調査地内の地区割りは、実測図作成の基準や遺物の取り上げの単位に用いた。また調査区を縦横断する南北・東西方向の幅1mのトレンチを20m間隔で設定し、断面を平面掘削に先立つ地層の観察や記録用に用いた。これは過去の調査のトレンチ位置と連続するもので、最終的には遺跡全体をカバーする地層断面図を作成することができる。なお、実地の作業ではX＝－150,080 ラインを境に北側をA区、南側をB区と呼称し、調査の工程や航空測定の撮影をA・B区ごとに分けて行った。本報告書では第4章第1節・写真図版内にてこの呼称で地区名を記している。

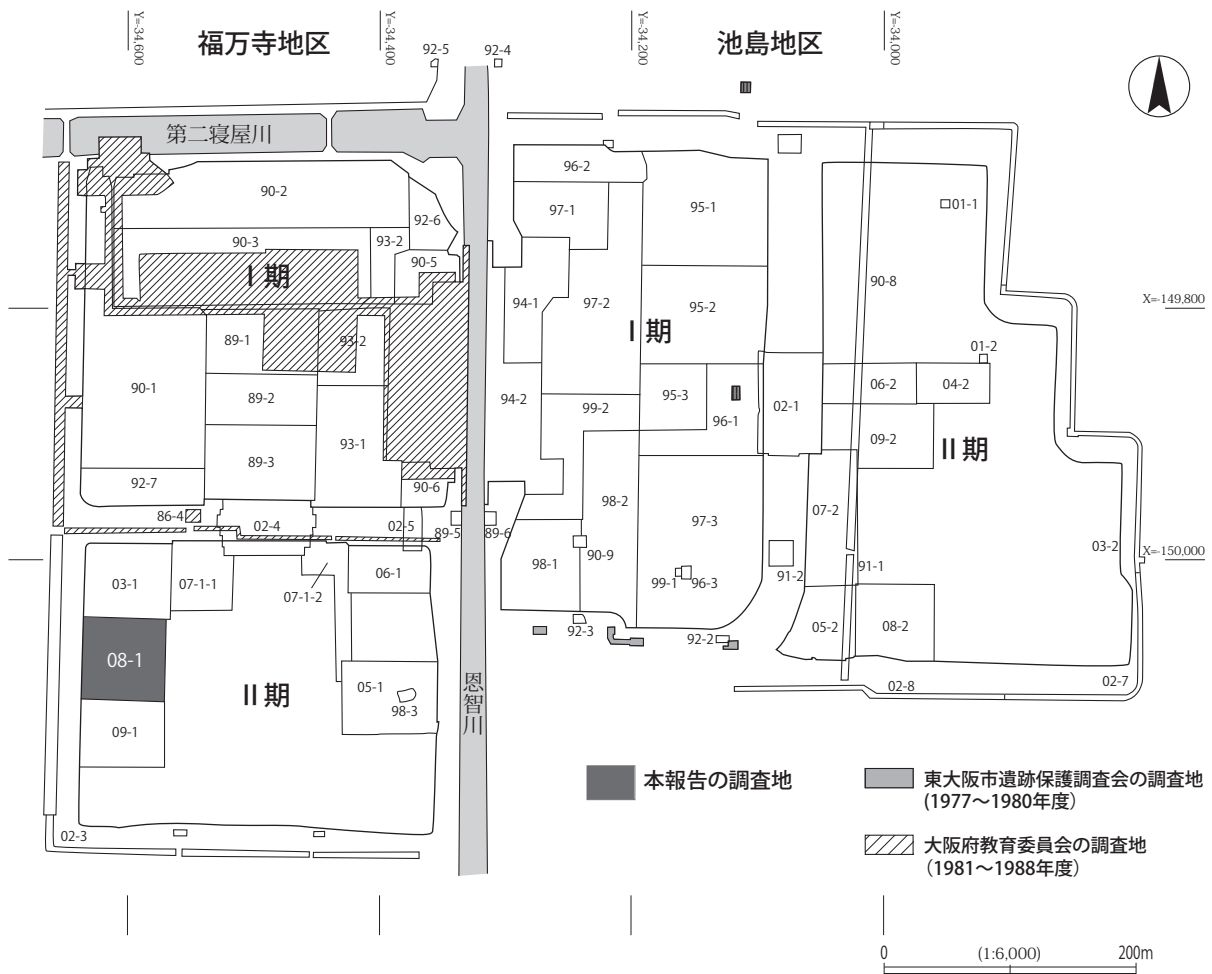


図1 調査区位置図

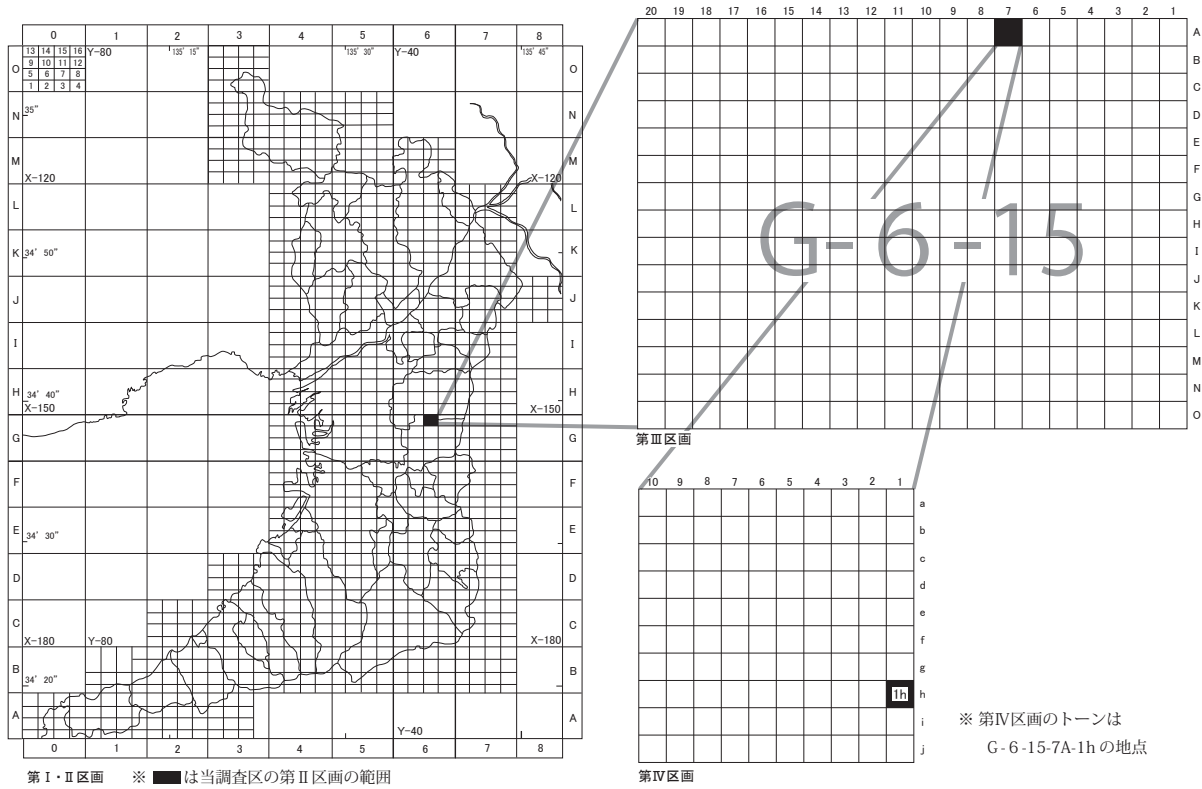


図2 調査区地区割り基準

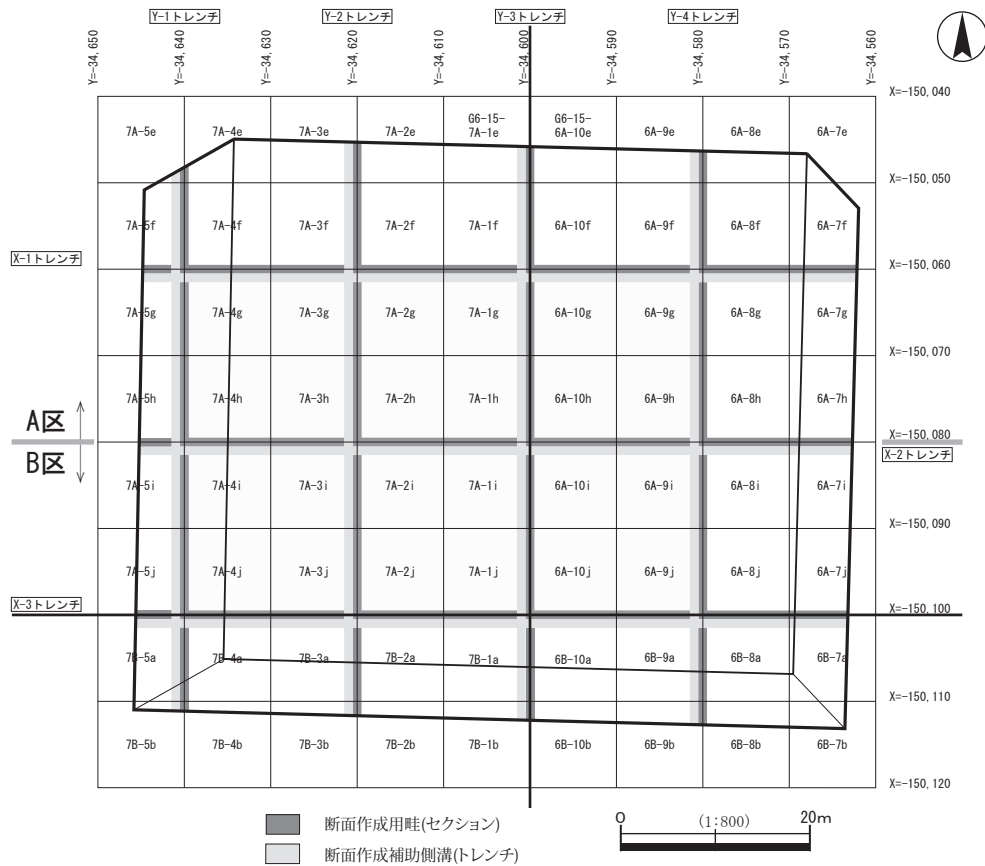


図3 08—1 調査区地区割り

現地調査は盛土・現代作土層を機械掘削し、第1層を土層観察用トレンチに沿って2m幅で人力掘削し、調査終了後第1層全体を機械掘削、第2層以後の調査はすべて人力によって除土作業を行い、工事掘削深度、すなわち最終調査深度である標高0.9mまでの間に、合計32面で遺構検出作業を行った。なお、03-1調査区で確認した大規模な攪乱が、当調査区におよんでいることを事前に把握していたため、トレンチ調査ののち第1層を機械掘削する際に併せて掘削した。攪乱の存在は土層観察の際に連続した断面観察が行えず、調査に多大な支障を来たこととなった。

検出した遺構全体図の作成は、過去の調査履歴を考慮しつつ7面を選定し、ヘリコプターによる航空測量を実施して、50分の1縮尺で図化を行った。これ以外の遺構全体図は、平板測量により50分の1で図化を行った。また、個別の遺構については、必要に応じて10分の1もしくは20分の1で平・断面の実測図を作成し、20mごとに設けたトレンチの地層断面図は20分の1縮尺で作成した。標高はT.P.+値（東京湾平均海面）で、北はすべて座標北をさす。地層断面や遺構などの写真は、35mmカメラ（白黒・カラーリバーサル）およびデジタルカメラでそれぞれ調査担当者が撮影した。特に重要なカットは6×7カメラ（白黒・カラーリバーサル）にて撮影し、その一部を本報告書の図版に用いた。

調査は2010年8月31日に完了した。最終調査面積は3982㎡である。調査終了後速やかに整理作業に入り、『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』に準拠して図面台帳、遺物登録台帳、写真台帳を作成・収納した。また遺物は洗浄、注記、復元を経て重要かつ図化可能なものは実測図を作成、あるいは個別に写真撮影を行い、本報告書に掲載した。最終的に遺物は、報告書掲載遺物と未掲載遺物に分別し、掲載遺物は報告書記載の遺物番号順に収納した。

## 第2章 地理的・歴史的環境

池島・福万寺遺跡は、大阪府東大阪市池島町ならびに八尾市福万寺町に所在する。地形的には河内平野の東南部、生駒山地から西に派生した扇状地と、旧大和川水系である玉串川の天井川化に伴い発達した自然堤防に挟まれた後背湿地にあたり、遺跡の中央を恩智川が条里型地割沿いに北流する。遺跡の規模は、東西約1.2km、南北約1.7km、総面積130haの広範囲におよぶ。今回の調査地は、井上正雄によれば河内国河内郡宇走十四ノ坪から十五ノ坪の位置に相当する。以下、既往の調査成果を基に、地理的・歴史的環境を概略する。

当遺跡周辺は、旧石器時代には沼沢地であったが、縄文時代に入り気候が温暖化すると、海進にて河内平野に海水が侵入しはじめ、内海へと変化する。縄文時代晩期後半になると、逆に海水準が低下して河内湖となるが、湖畔周辺の扇状地帯や三角州帯上の安定した場所に遺跡が出現し、その数が増大する。鬼塚遺跡・縄手遺跡・鬼虎川遺跡・水走遺跡などに加え、池島Ⅱ期地区においても当該期の墓域、居住域が検出されている。突帯文土器とともに弥生時代前期の土器が出土する遺跡が多く、弥生文化への変質を考える上でも重要な地域といえる。

河内平野では弥生時代を通じて、周辺の河川から土砂の供給が行われた後、土壌化の形成が繰り返されるが、この腐食した土壌を利用して土地開発が進んだことが、当遺跡の調査で判明している。若江北遺跡では、近畿地方における最古段階の弥生土器と水田を確認し、大竹西遺跡では弥生時代中期とみられる水田を重層的に検出している。

古墳時代は、弥生時代後期の洪水の結果形成された自然堤防上や微高地上に集落が営まれた。当時代は河川の氾濫による土砂の堆積が比較的少ない安定した環境が続いたと考えられる。久宝寺遺跡・萱振遺跡・中田遺跡などで前期の集落遺跡を検出している。福万寺Ⅰ期調査でも中・後期の集落跡を確認している。

一方、首長級の墳墓は、前期後半から中期にかけて向山古墳・西の山古墳・花岡山古墳・心合寺山古墳・郡川東塚古墳・郡川西塚古墳・鏡塚古墳などが継続的に造営された。後期には生駒山西麓の斜面を利用して、山畑古墳群・高安千塚古墳群などの群集墳が多数築かれた。また、萱振遺跡・長原遺跡・加美遺跡・亀井遺跡・久宝寺遺跡において、集落に近接して造営された古墳が検出されているが、このような例が近年増加している。当遺跡でも埴輪片が出土しており、古墳が存在した可能性がある。

当遺跡周辺は、畿内中枢地域の中でも現在まで条里型地割が良好に残ることで著名で「池島条里遺構」として古くから周知されており、近世の絵図中にも明確に描かれている。福万寺Ⅰ期の調査においても、現行の条里型地割と一致する方形区画を10世紀頃まで遡り検出しているが、これとは方位を異にする飛鳥・奈良時代の区画の存在を指摘する向きもあり、条里制施行時期がさらに古くなる可能性がある。今回の調査では8世紀中頃にそれまでの自然流路を、方形区画の縁辺に沿う形で人工的に付け替えるという変遷過程を詳らかにした。当地の原初的な条里のあり方に一石を投じるものと確信する。

7世紀代の地割は、律令国家主導による施行とされているが、中河内地域では志紀遺跡や美園遺跡などで当代に遡る条里遺構が確認されている。

文献をひも解けば、古代の中河内地方は、美努（御野・三野）県主が盤居した地域と目され、その後凡河内氏が勢力を持ち、国造としての地位を得たとされている。古代の中河内西部域は河内郡、若江



図4 周辺の遺跡



郡、高安郡に分かれるが、当遺跡周辺は河内郡に当たると考えられる。

平安時代には、当遺跡一帯は荘園「玉櫛荘」の範囲に該当するものと思われる。当荘は当初摂関家の所領であったが、保延3（1137）年、宇治平等院の建立の際、平等院に寄進され、以後室町時代にかけて平等院領となっている。平安時代の聞書集『中外抄』に、平等院創建にあたり徴収した玉櫛荘の米を藤原頼通が賞賛する一文が見えることや、当遺跡の南東における平等院創建時の瓦を独占的に供給した向山瓦窯の存在は、当院にとって重要な地域であったことを物語っているものと推察できる。

中世以降、生駒山西麓の扇状地より流下する河川からの堆積物の供給が盛んとなり、自然堤防の形成が活発化する。これに連鎖する形で河川の天井川化と後背湿地化が進み、現地形に近づく。このような中、河内平野では洪水による土砂堆積が多かった地域において、水田の復旧に伴い堆積した土砂を島状に盛り上げ、その上面を畠地とする島畠が出現する。当遺跡でも、平安時代末から現代まで重層的に連続する島畠を広範囲にて確認している。

この時代の周辺集落としては神並・水走・若江・矢作・萱振・花屋敷遺跡などがあり、各遺跡にて掘立柱建物や井戸が検出されている。池島・福万寺遺跡にても13世紀前半から15世紀前半の掘立柱建物、井戸、土坑などが確認され、屋敷地跡と考えられている。

表1 周辺遺跡一覧（図4に対応）

1 池島・福万寺遺跡	34 みかん山古墳群	67 西郡遺跡	100 大竹西遺跡	133 水越遺跡
2 新家遺跡	35 豊浦谷古墳群	68 西郡廃寺	101 鏡塚古墳	134 高麗寺跡
3 意岐部遺跡	36 鶴立遺跡	69 玉串遺跡	102 心合寺跡	135 洪川廃寺
4 西岩田遺跡	37 狐塚遺跡	70 花園遺跡	103 心合寺山古墳	136 跡部遺跡
5 菱江寺跡	38 皿池遺跡	71 北鳥池遺跡	104 太田川遺跡	137 跡部銅鐸出土地
6 吉田遺跡	39 河内寺跡	72 五合田遺跡	105 西の口遺跡	138 植松遺跡
7 稲葉遺跡	40 出雲井遺跡群	73 段上遺跡	106 楽音寺跡	139 太子堂遺跡
8 水走遺跡	41 松本塚古墳	74 下六万寺遺跡	107 萩山古墳	140 勝軍寺跡
9 鬼虎川遺跡	42 丸山古墳	75 縄手遺跡	108 大光寺山遺跡	141 植松南遺跡
10 植附遺跡	43 神津嶽祭祀遺跡	76 えの木塚古墳	109 禿山古墳	142 木の本遺跡
11 塚山古墳	44 水走氏館跡	77 上六万寺遺跡	110 西ノ山古墳	143 老原遺跡
12 西ノ辻遺跡	45 五条古墳	78 船山遺跡	111 花岡山古墳	144 田井中遺跡
13 額田寺跡	46 客坊山遺跡群	79 桜井古墳群	112 花岡山遺跡	145 志紀遺跡
14 鬼塚遺跡	47 五条山古墳群	80 岩滝山遺跡	113 大竹遺跡	146 竜華寺跡
15 日向古墳	48 市尻遺跡	81 二本松古墳	114 向山1号墳	147 矢作遺跡
16 法通寺遺跡	49 山畑古墳群	82 往生院金堂跡	115 向山2号墳	148 中田遺跡
17 神並遺跡	50 山畑遺跡	83 池島東遺跡	116 向山瓦窯跡	149 東弓削遺跡
18 舩古墳群	51 瓢箪山古墳	84 コモ田遺跡	117 双子塚古墳	150 弓削寺跡
19 若宮古墳群	52 成山古墳	85 北屋敷遺跡	118 愛宕塚古墳	151 郡川遺跡
20 正興寺山遺跡	53 馬ハギ塚古墳	86 西代遺跡	119 蘭光寺跡	152 郡川西塚古墳
21 神並古墳群	54 花草山古墳群	87 馬場川遺跡	120 高安古墳群	153 郡川東塚古墳
22 神並古墳群1号墳	55 経塚古墳	88 半堂遺跡	121 核山古墳	154 教興寺跡
23 神並古墳群2号墳	56 鉢伏古墳	89 大賀世古墳	122 中谷山古墳	155 恩智遺跡
24 神並古墳群18号墳	57 五里山古墳群	90 浄土寺谷古墳群	123 佐堂遺跡	156 恩智弥生時代遺跡
25 神並古墳群9号墳	58 岩田遺跡	91 常光寺古墳	124 宮町遺跡	157 恩智銅鐸出土地
26 神並古墳群8号墳	59 瓜生堂遺跡	92 貝花遺跡	125 穴太廃寺	158 恩智城跡
27 神並古墳群4号墳	60 巨摩廢寺遺跡	93 浄土寺跡	126 久宝寺寺内町	159 神宮寺遺跡
28 夫婦塚古墳	61 上小阪遺跡	94 友井東遺跡	127 久宝寺遺跡	160 大泉郡条里遺跡
29 千手寺山遺跡	62 若江北遺跡	95 美園遺跡	128 八尾寺内町	161 岩戸古墳群
30 箸尾古墳群	63 若江遺跡	96 萱振遺跡	129 東郷遺跡	162 信貴靈苑内古墳
31 辻子谷古墳群	64 小若江遺跡	97 萱振1号墳	130 東郷廢寺	163 高安城跡
32 額田山古墳群	65 新上小阪遺跡	98 山本町北遺跡	131 成法寺遺跡	164 平尾山古墳群
33 つば塚古墳	66 山賀遺跡	99 楽音寺遺跡	132 小阪合遺跡	165 花屋敷遺跡

文献によると、南北朝時代の玉櫛荘は楠木氏と関係が深いことがわかり、当遺跡周辺も同氏の拠点の一つであったようである。また、福万寺町内には三十八神社があるが、元は近江源氏の末裔佐々木盛綱の孫、佐々木盛恵の居城・福万寺城跡であったとする伝承がある。そのほか、中河内地方には当地の開発に大きな影響力を及ぼしたとされる有力な在地領主層として水走氏があげられる。

南北朝統一の後、畠山氏が河内国守護となり、この地域一帯に権勢を振るうことになるが、その政治的な拠点として若江城を築く。若江城は当遺跡の北西約2 kmに位置していたと推定されており、15世紀前半の溝や井戸、土坑などが確認されている。当城は、16世紀中頃には三好氏の居城となるが、織田信長に滅ぼされる。その後、新たに同氏の家臣らに与えられるが、16世紀末には廃城となったようである。幅5 m以上の大溝が巡る方形区画や建物跡、礎石や石垣など、城郭に関係すると思われる遺構が検出されている。

近世に入ると、宝永元（1704）年に大和川が付け替えられ、旧河道部の新田開発により農地が大幅に増加した。河内平野では、島畠を利用した木綿栽培が活発になり、江戸時代の河内の綿作について記された『綿圃要務』からその様子がうかがえ、当遺跡でも大規模な島畠が広範囲で検出されている。

たとえば、元禄2（1689）年の貝原益軒の『南遊紀行』に「およそ河内国（中略）山の根の辺り、ことごとく「きわた」を植るといふ。（中略）山の根木綿とて京都の人、是を良しとす」と河内地方での綿作の盛行と、その品質が近郊の都市部にて賞賛されていたことを知りうる記載がみられる。良質な「河内木綿」は商品作物として生産・流通し、当地方の特産品として全国に名を轟かせたといえよう。

一方で、川の付け替えは洪水の減少と同時に、慢性的な水不足をもたらし、旧河川の周辺部では井戸が多く掘られるようになる。先述の『綿圃要務』にも密集する井戸が描かれており、当遺跡の既往の調査でも、深さ数メートルに至る井戸の検出例が多くみられ、水の確保に労を費やしたことがうかがえる。

江戸時代の池島村は幕府領であり、福万寺村は狭山藩北条氏と大坂町奉行の曾我氏領であった。当時の地目は、享保19（1734）年作成、昭和32（1957）年模写の『福万寺村総絵図』に、現行の条里型地割に大局を重ねることができる。また、池島村周辺には明治初期作成の『河内国第二大区四小区河内郡池之島地引図』が、福万寺村周辺には明治12（1879）年『堺県河内国第二大区四小区河内郡福万寺村地租改正地引図』が、地租改正に伴う地引図として残存する。これらの絵図は近世に続き近代も条里型地割が踏襲されたことを如実にものがたり、島畠の存在をもうかがわせてくれる。

なお、十三街道は奈良県側の龍田、平群から生駒山十三峠をへて福万寺を通り大坂玉造へ達する、北方の暗越街道と並ぶ奈良と大坂を結ぶ古くからの中河内の主要道であるが、ちょうど当遺跡の中央部、東大阪市と八尾市の市境、池島と福万寺両地区を南北に区切る形で東西方向に走る。

余談ながら池島村では、幕末の慶応元（1865）年に、現在の漫才の元祖といわれる玉子家円辰こと西本為吉が産声をあげている。

このように当遺跡およびその周辺は、時おり洪水などの災害に見舞われながらも、古代・中世より連続と続く条里型地割を利用して耕作される農作物の生産地であった。また、これら耕作地や恩智川、箕後川周辺には多数の野生の動植物が集住繁茂し、何時しか当地は、自然豊かな大阪の貴重な湿地帯、野鳥の里としても注目されるようになった。

昭和30年代から始まった高度経済成長期は、都市部周辺の農村部が劇的に変化した時代であったが、当地も例外ではない。住宅や工場が進出し、条里の区画はこれら都市化による新たな地目の境に痕跡として認められるだけで、今や上述の牧歌的な田園風景の大半は消え去っている。

## 第3章 調査成果

### 第1節 層序

今回の調査区の中央で地形を最も反映するX＝－150,080ラインと、Y＝－34,600ラインの地層を図示し、調査区内の層序について説明を加える。

**第1層** 表土層を掘削するとほぼ調査区全域で確認できる粗砂～細礫質細砂～極細砂（10YR5/4にぶい黄褐）層で、第1b層由来の細砂ブロックを含む。

**第2層** 第2－1a層・第2－2a層・第2－3a層に分かれる。第2－1a層は粗砂～極粗砂混じり細砂～シルト（2.5Y4/2暗灰黄）の作土層。第2－2a層は中砂～極細砂混じり極細砂シルト（5Y5/2灰オリーブ）の作土層。第2－3a層は、中砂～極粗砂ブロック混じり極細砂～シルト（7.5Y4/2灰オリーブ）の作土層である。

**第3層** 第3－1a層・第3－1b層・第3－2a層に分かれる。第3－1a層は、極細砂～シルトブロック（7.5Y5/1灰）に細礫～粗砂（2.5Y7/4淡黄）のブロックが混じる層で、部分的に粗砂混じりシルト質極粗砂（5Y4/2灰オリーブ）がその上半に残存する場合がある。下半に比べ擾乱が強い。第3－1a層は調査区東端付近で確認した。第3－1b層は調査区全域で確認できた砂層で、平均層厚0.3～0.4mを測る。第3－2a層は、細砂～粗砂ブロック（7.5Y6/4オリーブ黄）にシルト～極細砂ブロック（5Y4/1灰）が混じる極細砂～シルト質極細砂の作土層で、均質な箇所がある。

**第4層** 第4－1a層と第4－2a層に分かれる。第4－1a層は調査区東端付近にて確認した、ラミナのあるシルトブロック（5Y4/1灰）に極粗砂～粗砂ブロック（2.5Y6/6明黄褐）と次に述べる第4－2a層のブロックが混じった層で、第3－2a層に比べても粒径、淘汰の度合いも異なる。第4－2a層は坪境畦畔でのみ確認できる、極粗砂混じり粗砂～中砂（5Y4/2灰オリーブ）層である。

**第5層** 第5－1a層・第5－2a層に分かれるが、ともに層厚0.05m程度しかなく、第5－2a層は遺存状態が悪い。第5－1a層は、極粗砂～粗砂混じり細砂～極細砂（5Y4/2灰オリーブ）、第5－2a層は、粗砂～中砂混じり細砂～極細砂（5Y4/3暗オリーブ）のいずれも擾乱された作土層である。

**第6層** 第6－1a層・第6－1b層・第6－2a層・第6－3a層・第6－3b層に分かれる。第6－1a層は島島を挟んで、東側は細礫～粗砂混じり細砂～極細砂（5Y4/2灰オリーブ）の作土層。西側は粗砂～中砂ブロック（2.5Y6/6明黄褐）と極粗砂～粗砂（5Y4/3暗オリーブ）混じり中砂～極細砂の作土層。第6－1b層は、ラミナのある細砂～粗砂（5Y8/3淡黄）層で、島島の芯となる砂層である。第6－2a層は島島を挟んで、東側は粗砂～中砂混じり極細砂～シルト質極細砂（5Y5/2灰オリーブ）の作土層、西側は中砂混じりシルト質極細砂（5Y4/2灰オリーブ）の作土層である。第6－3a層は極粗砂～粗砂混じり中砂～細砂（5Y3/2オリーブ黒）の作土層で、西側に向かって砂粒が細くなり泥が多くなる。第6－3b層は、ごく限られた場所でのみ確認したラミナのある細砂～中砂（5Y8/3淡黄）で、島島の芯として遺存する。

**第7層** 第7－1a層・第7－3a層・第7－3b層に分かれる。第7－1a層は極粗砂～粗砂が多く混じるシルト質極細砂（7.5Y3/2暗オリーブ）の作土層、第7－3a層は細礫～中砂混じり細砂～シ

ルト質極細砂 (5Y3/2 オリーブ黒) の作土層である。第7-3 b層は、調査区全体を覆う層厚 0.3 ~ 0.4 mの砂層で、調査区南西では 0.6 m前後を測った。

**第8層** 第8-1 a層・第8-2 a層からなる。第8-1 a層は畦畔の盛土のみで確認した。上半はシルト～極細砂混じり極粗砂～粗砂 (5Y4/2 灰オリーブ)、下半は極粗砂～粗砂混じり極細砂～シルト (2.5GY4/1 暗オリーブ灰) である。第8-2 a層は、極粗砂～粗砂混じり極細砂質シルト (2.5GY4/1 暗オリーブ灰) の作土層で、調査区南西側を除きほぼ全域で確認できる。

**第9層** 第9-1 a層・第9-2 a層・第9-3 a層・第9-4 a層に分かれる。第9-1 a層 (上) は極粗砂～粗砂質極細砂～シルト (5Y4/2 灰オリーブ)、同 (下) は極粗砂～粗砂 (5Y4/3 暗オリーブ)、第9-2 a層 (上) は中～粗砂混じり極細砂質シルト (10BG5/1 青灰)、同 (下) は中～極細砂混じりシルト (10BG5/1 青灰) である。第9-3 a層は極粗砂～粗砂の小ブロック～粒団混じり極細砂質シルト (10Y4/1 灰) で、流路に近づくと極粗砂～粗砂の含有量が増える。当層は調査区中央～南半に広がり、第7-3 b層の影響を受けた調査区南西や調査区縁辺部では確認できなかった。第9-4 a層 (上) は中～粗砂混じりシルト (5B4/1 暗青灰)、同 (下) は粗砂～細礫混じりシルト (5B4/1 暗青灰) で、ほぼ全域で確認できたが、北端に近づくと上下の区別がなくなり薄くなる。

**第10層** 第10 a層と第10 b層からなる。第10 a層は細砂混じり極細砂シルト (10BG5/1 暗青灰) だが、調査区西半では細～中砂混じりシルト (5B4/1 暗青灰) の暗色帯となる箇所がある。調査区中央南半では、シルト (10BG4/1 暗青灰) が同層 (下) として堆積する。第10 b層は調査区北端付近でのみ確認した。極細砂とシルトの互層 (10BG4/1 暗青灰) である。

**第11層** 第11-1層・第11-2 a層・第11-3 a層からなる。第11-1層は、シルト (5BG5/1 青灰) で、有機物の薄層を挟む。第11-2 a層は中～粗砂混じりシルト～シルト (N4/0 ~ N5/0 灰) で、「第1 黒色泥層」と呼ばれる有機物粒を多く含む暗色帯である。第11-3 a層は中砂混じりシルト (5B4/1 暗青灰) で、含まれる有機物質の量は、場所によって多寡がある。第11-2 a層よりもシルトブロック (5B6/1 青灰) が大きい。概ね調査地の東半で確認した。第11-3 b層はシルト (5G5/1 緑灰) で均質、調査地北東側の一部で検出した。

**第12層** 第12-1 a層は細～中砂混じりシルト (5B4/1 暗青灰) で、シルトがブロック状を呈する箇所がある。有機物質を部分的に含むいわゆる「第2 黒色泥層」である。概ね調査地東半で検出した。第12-2 b層は、第13-1 a面段階に調査区西端に形成された流路から溢れ出し、自然堤防を形成する層に相当し、細～中砂 (5Y7/3 浅黄、5B5/1 青灰) である。第12-3 a層はシルト (5B4/1 ~ 5/1 暗青灰～青灰) で、細砂が混じる箇所がある。第12-3 b層が土壌化したものか。第12-3 b層はシルト～極細砂 (5B5/1 ~ 6/1 青灰) で、調査区西半は第12-2 b層下層に薄く堆積し、東半は第12-3 a層との層界を不明瞭にしつつ、東端は中砂とシルトの互層となる。

**第13層** 第13-1 a層は細～中砂混じりシルト (N3/0 ~ 4/0 暗灰～灰)、西端付近では極細砂～シルトに中～粗砂混じり (10Y5/1 ~ 4/1 灰、5Y6/2 灰オリーブ) で、シルトブロック (10BG6/1 青灰) を含む。有機物質を多く含む暗色帯で、いわゆる「第3 黒色泥層」である。また東端付近では、有機物質を含む中砂混じりシルト (N5/0 灰) と細分可能である。第13-1 b層はシルト (5B5/1 青灰) で、中位に有機物層挟在し、下位は粗砂混じりシルトで、X-2 トレンチ東半の一部で確認した。第13-2 a層は、シルト～粗砂混じりシルト (N5/0 灰) で、シルトがブロック状を呈する傾向があり、同じく X-2 トレンチ東半にて確認した。

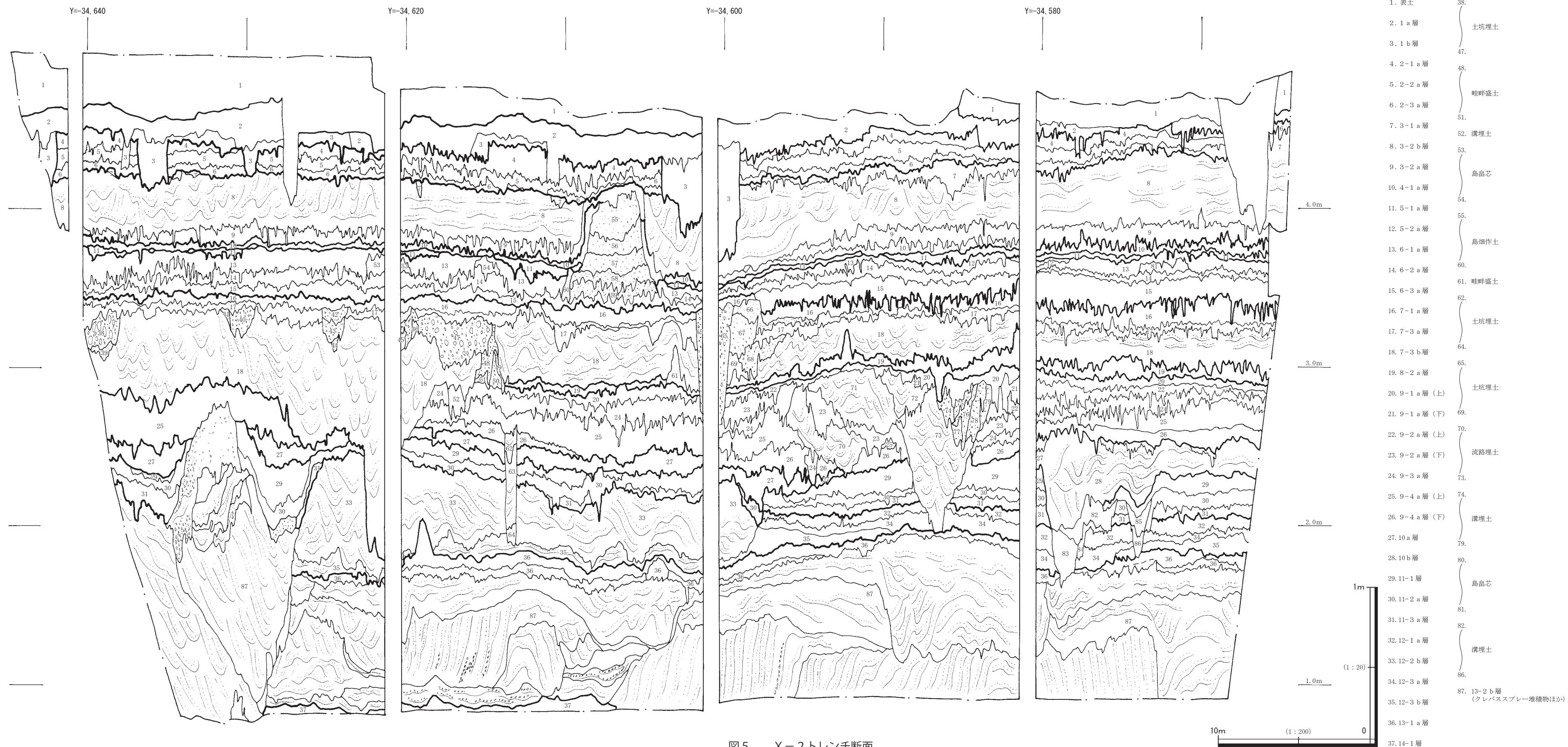


図5 X-2トレンチ断面

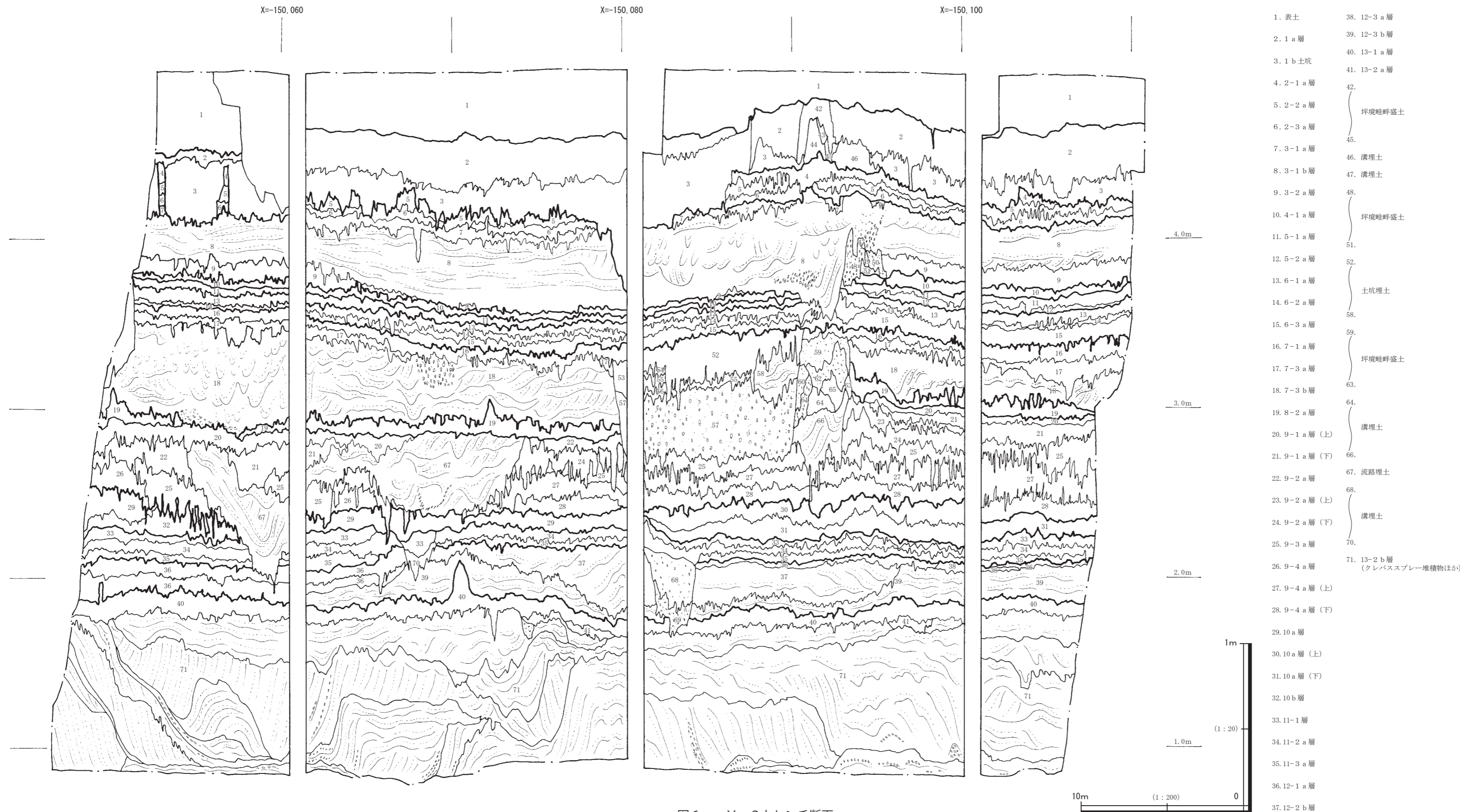


図6 Y-3トレンチ断面

## 第2節 第13-2b層から第10a層までの堆積過程

第13-2b層 古土壌（暗色帯）である第13-1a層の下には厚さ1mを超える砂層が堆積していたが、これは07-1-1調査区の第13-2b層に対応する。07-1-1調査区の第13-2a層に対応する古土壌は、図7に示した断面では確認されなかったが、 $X = -150,060$ ライン東端および南側の $X = -150,100$ ライン東端においてわずかに確認された。この部分では、第13-1a層と第13-2a層の間に厚さ3~5cmの中砂~粗砂が堆積していた（第13-1b層）。これ以外の部分では、第13-1a層の土壌化の影響によって、第13-1b層と第13-2a層は遺存しなかったと思われる。

第13-2b層の堆積過程は以下のとおりである。まず、第14-1層の上に斜交層理の明瞭な中砂~極粗砂が堆積し、高まりを形成した（図7上段の〔1〕）。前者の堆積物は、堆積構造や帯状の高まりを形成したことからみて、調査区よりも南に存在する流路から供給されたクレバスプレー堆積物と考えられる。ちなみに、この層準は07-1-1調査区で「ステージ1-1」とされた段階にあたる。なお、図示した断面では侵食されて遺存していなかったが、この堆積物によって形成されたクレバスプレーの高まりの上には土壌化した部分が認められ、高まりの斜面から低い部分にかけての部分には、シルト・細砂・植物遺体薄層の互層が堆積していた。図96・98の石包丁未製品や石匙は、この層準から出土した（〔2〕）。また、07-1-1調査区における「流路2」の上流にあたると思われるものは、08-1調査区では確認されなかった。これについては03-1調査区の南部に存在していた可能性が考えられる。

次の段階になると、調査区東端に北流する流路が形成され、流路内がトラフ型斜交層理を形成する粗砂~極粗砂で埋積されるとともに、周囲に氾濫堆積物（粗砂~極粗砂）が堆積した（〔3〕）。この流路は、07-1-1調査区における「ステージ1-2」の「流路4-1」の上流部の可能性が高い。さらに、この流路が埋没したのち、調査区東部に新たな流路が形成され、流路内がトラフ型斜交層理を形成する粗砂~極粗砂で埋積されるとともに、周囲に氾濫堆積物（シルト~中砂）が堆積した（〔5〕）。この流路は、07-1-1調査区における「流路4-2」の上流部の可能性がある。一方、この段階には調査区西側にも新たな流路が形成された。「流路4-1」が存在した時期に対応する堆積物は、流路東側に高まりを形成した砂のみである（〔4〕）が、この時期にはその西側に流路が存在した可能性が高い。また、〔5〕の流路を埋める堆積物と同時期の流路充填堆積物が確認された（〔6〕）。ちなみに、この流路に関しては、07-1-1調査区における「流路5」の上流部の可能性がある。なお、この流路埋没後、その上には西方向から供給されたと考えられる氾濫堆積物が堆積した（〔7〕）。

第13-1a層上面の1325流路の脇にあたる部分では、前述の流路から供給された氾濫堆積物を切ってトラフ型斜交層理のみられる粗砂が堆積していた（〔8〕）。第13-2a層が遺存していなかったため断定はできないが、この層準は第13-2a層上面を覆う堆積物（07-1-1調査区の「ステージ2」に対応）の可能性が高い。そうであれば、この段階には既に1325流路の前身となる流路が形成されていた可能性も考えられる。

なお、第13-2b層に含まれる各層準ではコンボリュート葉理が複数箇所を確認できた。これは地震に伴う脱水によって、本来の葉理の形状が変形したものである。変形がおよんだ範囲を考慮すると、これは第13-1a層段階に生じた地震によって形成された可能性が高い。

第13-1 a層 第13-1 a層は「第3黒色泥層」と呼称されてきた古土壌(暗色帯)に対比される。この調査区では、この層準は2~3層に細分され、有機物粒を多く含んだ砂混じりシルト(暗色帯)の下に、シルトブロックと中砂~粗砂が混じった堆積物が存在する部分もあった。

第13-1 a層上面段階には、調査区西端を1325流路が北へ向かって流れていた。流路充填堆積物のうち、下位のもがこの段階の流路を埋積するものであり〔9〕、第13-1 a層を覆う極細砂~中砂の薄層を挟在するシルト〔10〕は、この流路から供給された氾濫堆積物である(第12-3 b層)。

1325流路の埋没過程と第12-3 b~1 a層 第13-1 a層上面段階の1325流路内には砂礫が堆積したが、完全には埋没せず、規模を若干縮小して次の段階にも残存した。また、第13-1 a層の上に第12-3 b層の氾濫堆積物が堆積した後、流路の東脇を中心にトラフ型斜交層理のみられる砂礫が堆積した〔11〕。この砂礫は、堆積構造や分布の特徴からみて1325流路から供給されたクレバススプレー堆積物と考えられ、流路の東側に高まりを形成した。この高まりはその後、第10 a層上面段階まで残存した。

氾濫堆積物である第12-3 b層の上には、やや暗色化した土壌が形成されていたが、これは第12-3 a層に対比される。前述のクレバススプレー堆積物〔11〕は第12-3 a・b層を侵食して堆積しており、第12-2 b層に対比されると思われる。なお、07-1-1調査区の南西部には、このクレバススプレー堆積物の末端にあたと考えられる中砂~粗砂が存在していた。07-1-1調査区では、この堆積物は第12-3 b層を侵食して堆積しており、周囲で確認された第12-2 a層はこの砂層の上に形成された可能性が高いことが判明している。

クレバススプレー堆積物が堆積した直後は、1325流路の深さは約1.5 mあったが、この段階の流路もトラフ型斜交層理のみられる砂礫で埋積され〔12〕、底面に2条のくぼみを有する小規模な流路に変化した〔13〕。くぼみのうち、西側のものを埋める堆積物は、下部が細砂~粗砂、上部が極細砂薄層を挟在するシルトであった。このような堆積状況は、この段階の流路が放棄流路化していった過程を示している。なお、東側のくぼみには砂が堆積せず、西側のくぼみ内堆積物上部に連続するシルトのみが確認された。このことは、基本的には西側のくぼみが滲筋となっていたことを示すと考えられる。なお、西側のくぼみが埋没した後、その上には土壌が形成されたが、これは第12-1 a層と考えられる。ちなみに、この段階にも東側のくぼみは浅い凹地として残存した。

小規模化した段階の流路の帰属層準に関しては、第12-1 a層形成以前であることは確かであるが、クレバススプレー堆積物の上に形成された土壌が第11-3 a層の土壌化の影響によってほとんど遺存しておらず、不明な点が多い。しかし、前述のように、クレバススプレー堆積物の上には第12-2 a層が形成されていたと思われるため、この段階の流路は第12-2 a層上面に帰属する可能性が高い。

なお、福万寺I期地区の報告書(井上編, 2002)には、この流路の上流部分(福万寺I期地区の「流路5」)の断面図が掲載されている。08-1調査区の見所をふまえて写真を再検討したところ、この図に関して、以下のような修正が必要となった(図7下段)。まず、「流路5」内の流路充填堆積物は、トラフ型斜交層理の様子の違いから、図に示した破線部分で2つに細分される。さらに、流路西肩に堆積した砂礫層の上には土壌が形成されていたことが判明し、第12-3 a層に対比される可能性が高くなった。図示した部分よりも西側については良好な写真が残されていないため、第12-3 a層がどのように続いていたのかは不明であるが、おそらく第12-1 a層と接するようになり、その土壌化の影響で広域には遺存していなかったと思われる。また、断面の東側において「第12-1 a層中に挟在する砂」



とされていたものは、層相からみて西側の「規模縮小段階の流路5」とされた部分を埋める堆積物と同一の可能性が高く、この堆積物によって覆われた流路東肩の古土壌は第12-2a層と考えられる。このように考えることで、福万寺I期地区と08-1調査区の状況は矛盾なく説明できる。

なお、今回の検討結果をふまえると、03-1調査区や福万寺I期地区南西端で検出された井堰は、第12-2a層上面段階の流路内に構築され、それが放棄流路化する直前に機能していたと考えられる。一方、池島I期地区ではIK第12-2a層上面段階に水田が営まれていたことが判明しているが、この水田を埋積する堆積物と1325流路を埋積する堆積物は供給源が別であるため、堆積時期が若干異なる可能性も考えられる。このため、これらの井堰と池島I期地区の水田が同時に存在した時期があったとしても、同時に埋没したかどうかは不明である。池島I期地区ではIK第12-2a層上面の水田の埋没に続いて流路が複数形成され、砂や泥の堆積が活発化したが、その段階に福万寺I・II期地区の流路が再活動することはなかった。このことは、福万寺I・II期地区の流路が池島I期地区における水田の埋没・流路形成よりも前に埋没していたことを示す可能性がある。

第11-3a層～第10a層 第11-3a層形成直前には、第12-2a層上面段階に流路があった部分の西側に、侵食によって浅谷が形成され（〔14〕）、放棄流路の痕跡の凹地と合わせて、調査区西側に2つの帯状の凹地が存在するようになった。これらは第11-3a層段階に埋積が進んだものの、第11-2a層上面段階まで残存した。

有機物薄層を挟在するシルトである第11-1層は、調査区全域に堆積したが、その上面段階においても調査区西側の凹地間の高まりや、1101・1106溝も埋没しなかった。その後調査区東部には第10b層の砂が堆積した（〔15〕）が、この部分に関しては1101溝の痕跡部分が流路となって砂が供給されたことが読み取れた。そして、この砂の上には土壌が形成されたが、これは07-1-1調査区の第10a層に対比される。

一方、調査区西側には第10b層の砂は堆積しておらず、有機物粒を含んだ古土壌（暗色帯）が確認された。前述のとおり、この部分は第12-2b層のクレバススプレー堆積物によって高まりとなり、それがこの段階まで残存していた。この高まりの上には第10b層の砂が到達せず、泥質堆積物が第11-1層の上に堆積した後に土壌が発達したと考えられる。この古土壌（暗色帯）が調査区西側における第10a層である。この調査区内に限ってみれば、第10a層上面段階にも調査区西側が若干高くなっているが、福万寺I・II期地区全体でみると、中央部には流路の埋没によって南東-北西方向の高まりが形成されていた。この部分のほうが08-1調査区よりも高く、建物や畠などの遺構が確認されている。一方、08-1調査区南部では第10a層上面に帰属する畦畔が検出され、その周囲の第10a層は人為的に擾乱された可能性の高いことが明らかになったものの、福万寺II期地区南西部における第10a層段階の土地利用については不明な点が多く、今後さらに検討していく必要がある。

#### 【引用文献】

井上智博編 2002『池島・福万寺遺跡』2, (財)大阪府文化財センター調査報告書第79集, p.303.

井上智博編 2011『池島・福万寺遺跡』10, (財)大阪府文化財センター調査報告書第211集, pp.121-158.

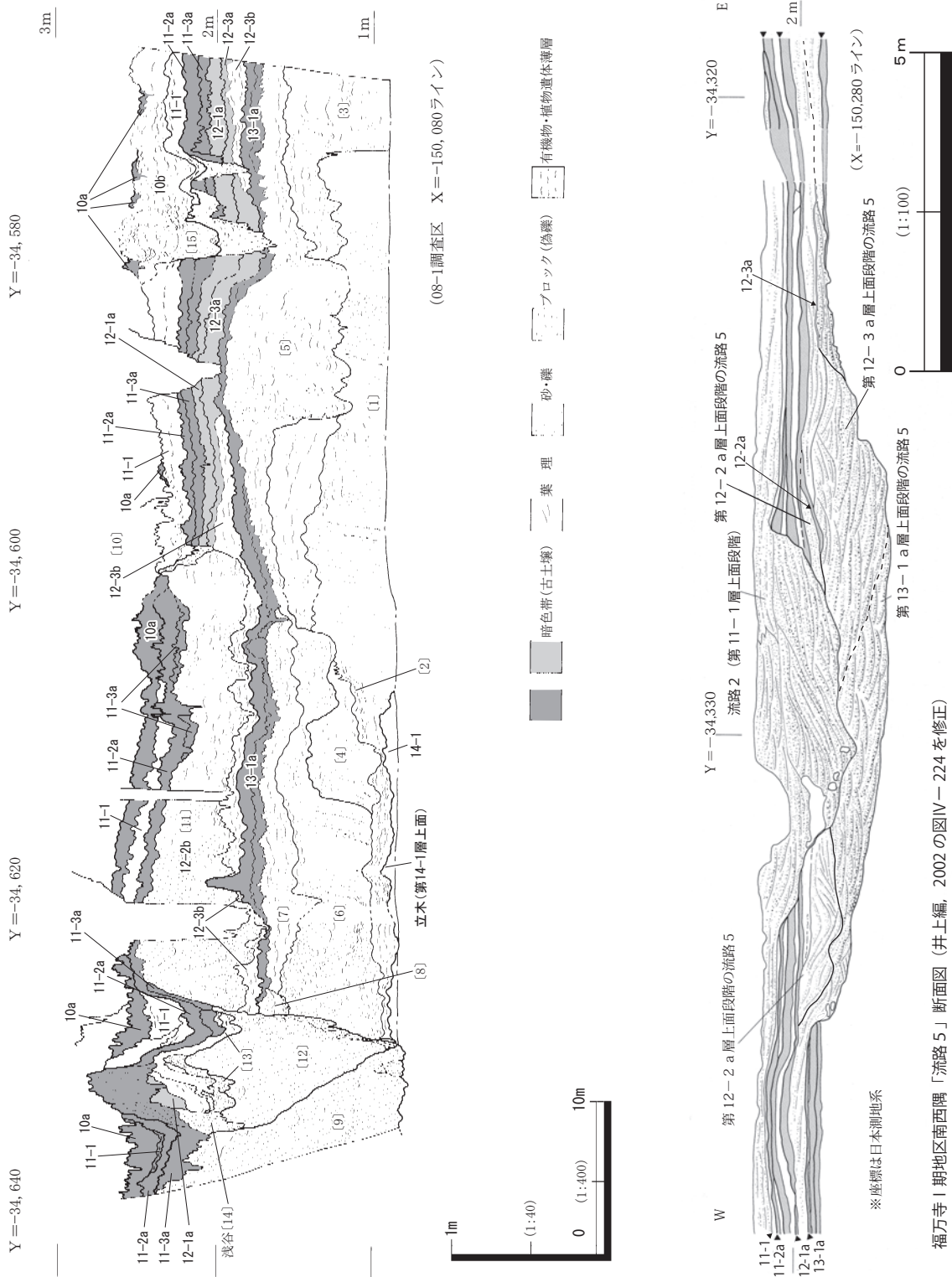


図7 第13-2b層から第10a層までの堆積過程

### 第3節 近世～中世

既往の調査成果から、19世紀以降と考えられる第1面・第1層はトレンチ調査を行い、第2面・第2層以下を人力による調査を実施した。ここでは、まず第1面・第1層の調査成果を記し、近世の第2面・第2層から中世の第6面までを詳述する。

#### 第1面・第1層（図8～10）

第1面は既述したように、東西・南北に幅2mのトレンチを設定し調査したため、本来第1面に営まれた遺構すべてを検出することができなかった。以下に記す第1面の遺構は2057井戸を除き、第2-1a面精査時に検出したものであることを、予め断っておく。

第1面の遺構としては溝・土坑がある。2058溝は、調査区中央やや南側を東西にのびる坪境畦畔に沿って検出したが、調査区東端付近では確認できなかった。溝幅は0.6～0.7mを測る。この2058溝の北側で、並行する2059～2061溝を検出した。いずれも長さ4～5mを検出したが、トレンチもしくは攪乱を挟むと不明瞭となり、確認することができなかった。2059溝は幅0.3m、2060溝は幅0.7mである。また2058溝から南へのびる溝状の遺構を3条見つけたが（2062～2064溝）、いずれも長さ2m以下と短い。

土坑はいわゆる1b土坑と呼ばれるものだが、2011・2012土坑などに代表される小規模なもの、2001・2002土坑などに代表される大型のものに大別できる。小規模な土坑は、坪境畦畔の北側で検出した。最も集中したのは調査区西端で、18基のうち17基の土坑が密集するが、切り合うことはない。これらは平面形が正方形を呈する2008・2010・2021・2023土坑と、長方形をなす2014～2020・2022土坑などがあり、不定形をなす2009土坑、土坑内に段差のある2012土坑がある。深さはいずれも0.2m程度である。同様に坪境畦畔北側には、概ね正方形をなす2007土坑がある。ともに深さは約0.2mを測る。そのほかにも、調査区北東端付近で、小規模な1b土坑を数基確認した。

これに対して調査区中央、坪境畦畔北側で検出した2001土坑は、北に接する既往調査区へのびる。全長は36mを超え、幅も約5mと、今回検出した1b土坑では最も大きい。坪境畦畔南側で検出した1b土坑は、南北方向に長大である。互いに接する2005・2006土坑は長さ16余m、同じく2003・2004土坑は長さ17mを測り、東端付近の2002土坑は17余m、2028土坑は17m、東端で検出した2024土坑は16mで、いずれも調査区南側へのびる。深さはいずれも0.1m程度である。

坪境畦畔以北は後世の攪乱が極めて多く、小規模な1b土坑の存在も否定できないが、攪乱孔の断面を実見した限りでは、その存在を確認することはできなかった。

2057井戸は坪境畦畔の北側の調査が進展し、かつての攪乱孔の底部を第6-2a面として精査中に、一辺2mの掘方と井戸枠を検出した。井戸掘方は検出面から0.4m掘り下げ、それ以下は概ね径1.2mの円形掘方となる。検出した井戸枠は桶3段分で、最下段は調査終了面の第13-1b層（標高1.0m）にまでおよんだ。最上段の桶は19枚の板材を組み合わせたもので、うち2枚の板材外面には墨書がある。長さは1.15mを測る。竹製の箍が底部付近に3条、中位付近に1条残る。中段の桶は、長さ0.87mの板材を17枚組み合わせる。竹製箍は底部で2条のみ残る。最下段は、同じく長さ0.87mの板材を24枚組み合わせた桶で、砂層に食い込ませ易くするために先端を外側から削り尖らせる。箍は底部で

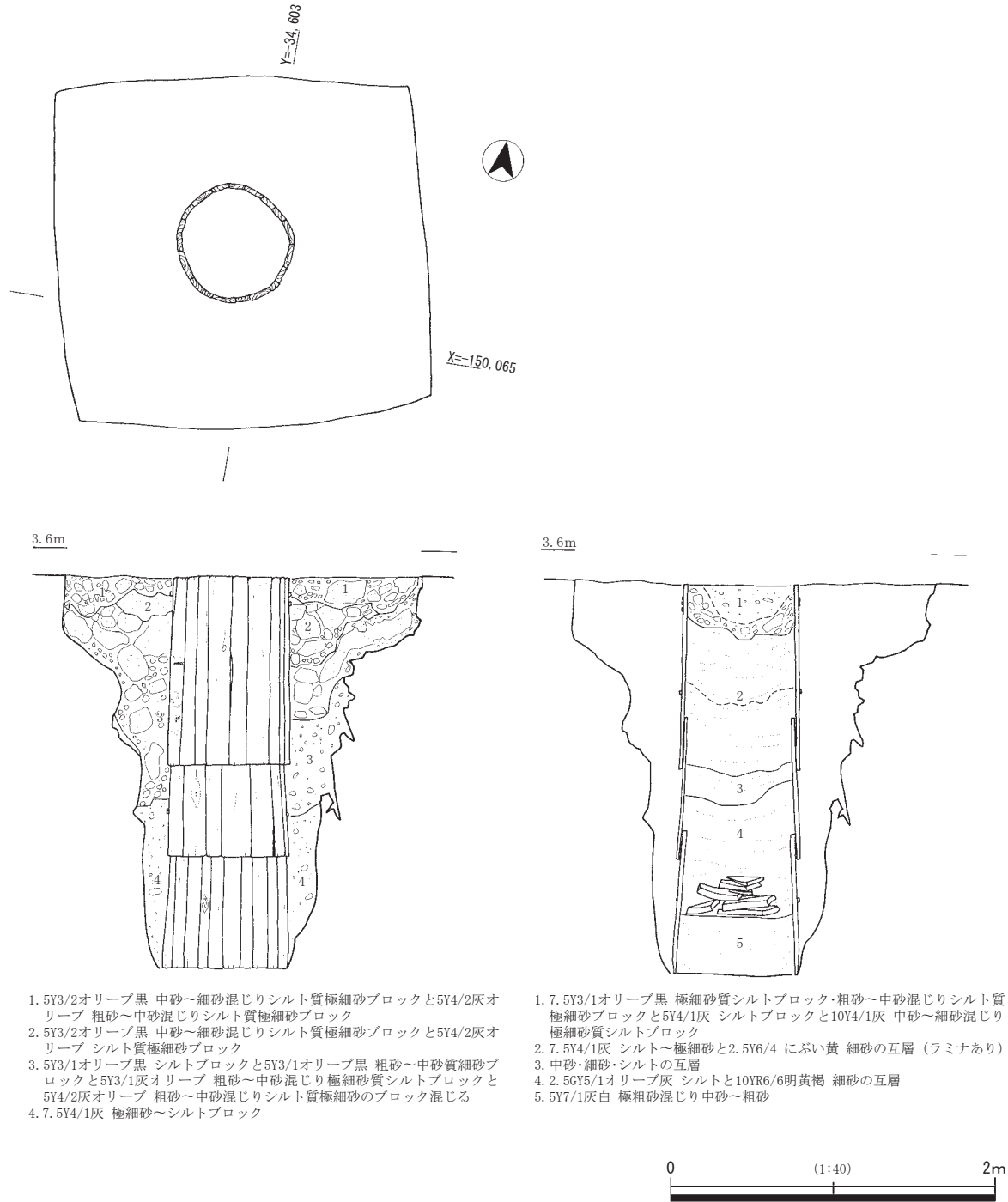


図8 第1面2057井戸平・断面図

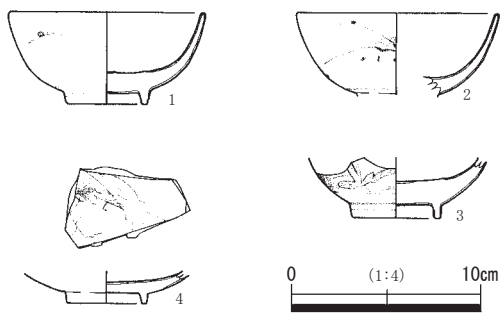


図9 第1層出土遺物

2条、中位で1条残る。桶3段分の井戸枠内部には、シルト・細砂が互層に堆積していたが、最下段の井戸枠内から、転落した井戸瓦12枚、その間に唐津焼鉢片が1点出土した。

**第1層出土遺物** 当層を掘削中に159点の遺物が出土した。近世末期以降に形成された客土層であるが、18世紀以降の陶磁器碗(1～4)や棧瓦が多く混じる。

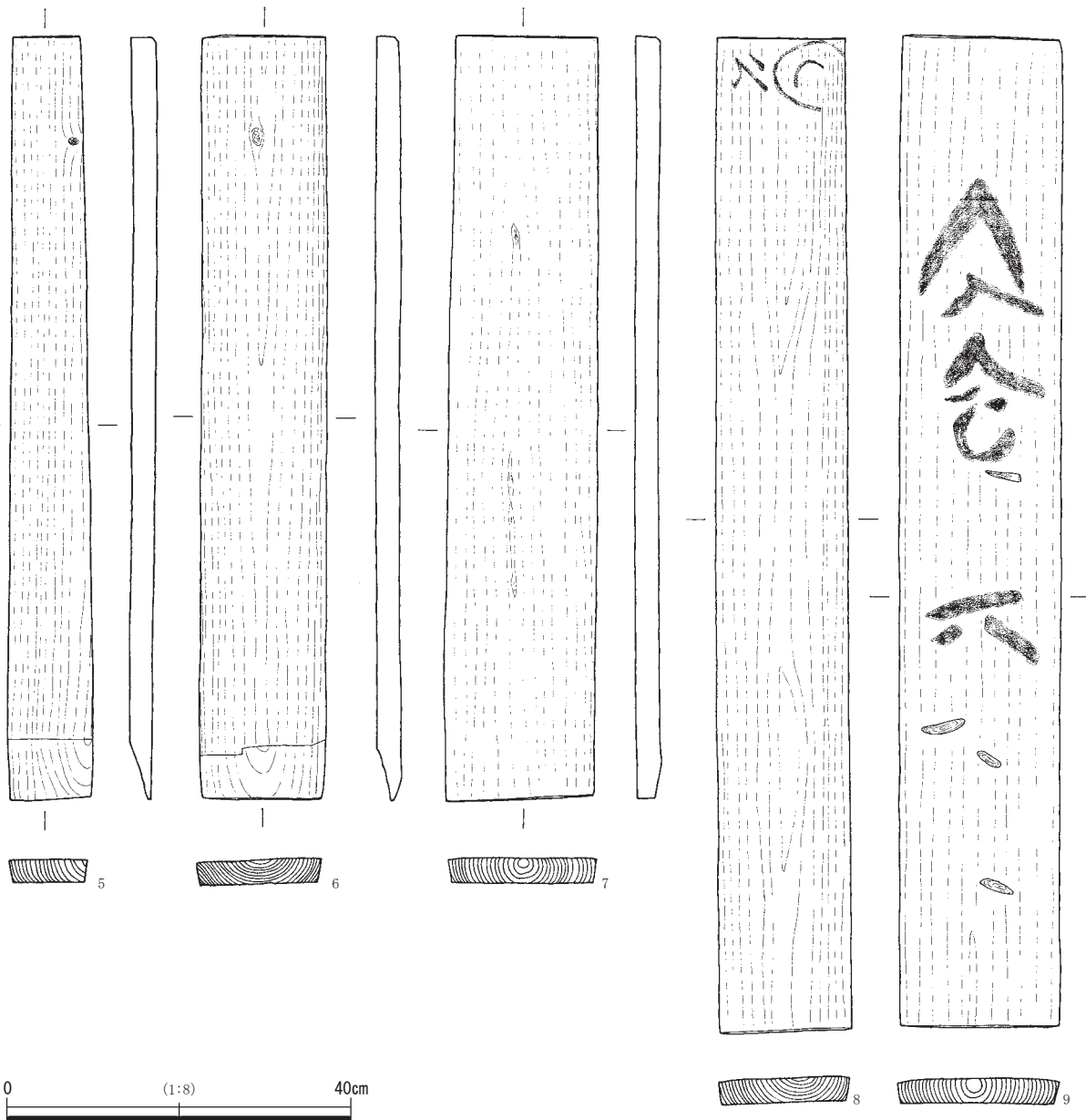


図10 2057井戸枠

ほかに、第1面相当の遺構から出土した遺物に、近世の陶磁器細片4点、瓦2点、古代の土師器細片1点がある。

また、同じく第1面相当の遺構と考えられる2057井戸の井戸枠（5～9）を5枚選び、図化した。遺物は17世紀後半以降の三島手唐津焼鉢の破片が井戸の最下部から出土した。

井戸枠は、外側の下方が斜めに削られ尖る。下の層に残存した3段の枠すべてが同一の材が使用されていると思われる。なお、これらは杉材である。（8）と（9）の外面には墨書が見られる。これらは屋号や店名ないしは組名を示す記号と考えられる。

#### 第2-1 a面・第2-1 a層（図11～14）

第2-1 a面は、第1 b層を掘削したのちに検出した面である。遺構面の標高は4.3～4.4 mを測り、検出した遺構には坪境畦畔・溝・土坑・島島がある。

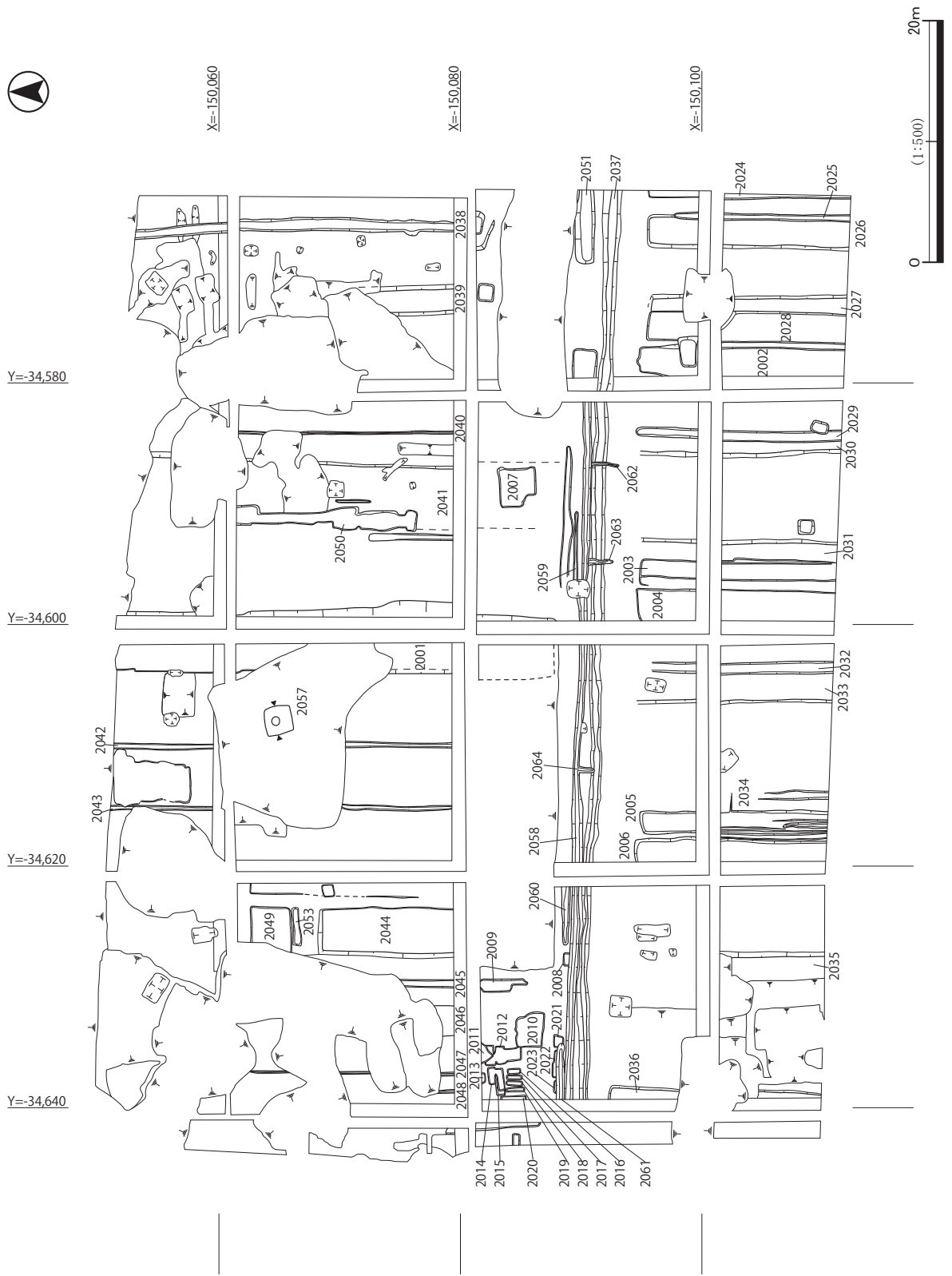


图11 第2-1 a面平面图

この頃、つまり18世紀頃の様子を描いた『福萬寺村惣繪圖』によると、調査区を横断する坪境畦畔の北側を「走十五(ノ坪)」、南側を「走十四(ノ坪)」と標記し、縦長地割の耕地を描く。

今回検出した2037坪境畦畔が「走十五」と「走十四」の坪境に位置するが、西端ではほぼX=-150,090

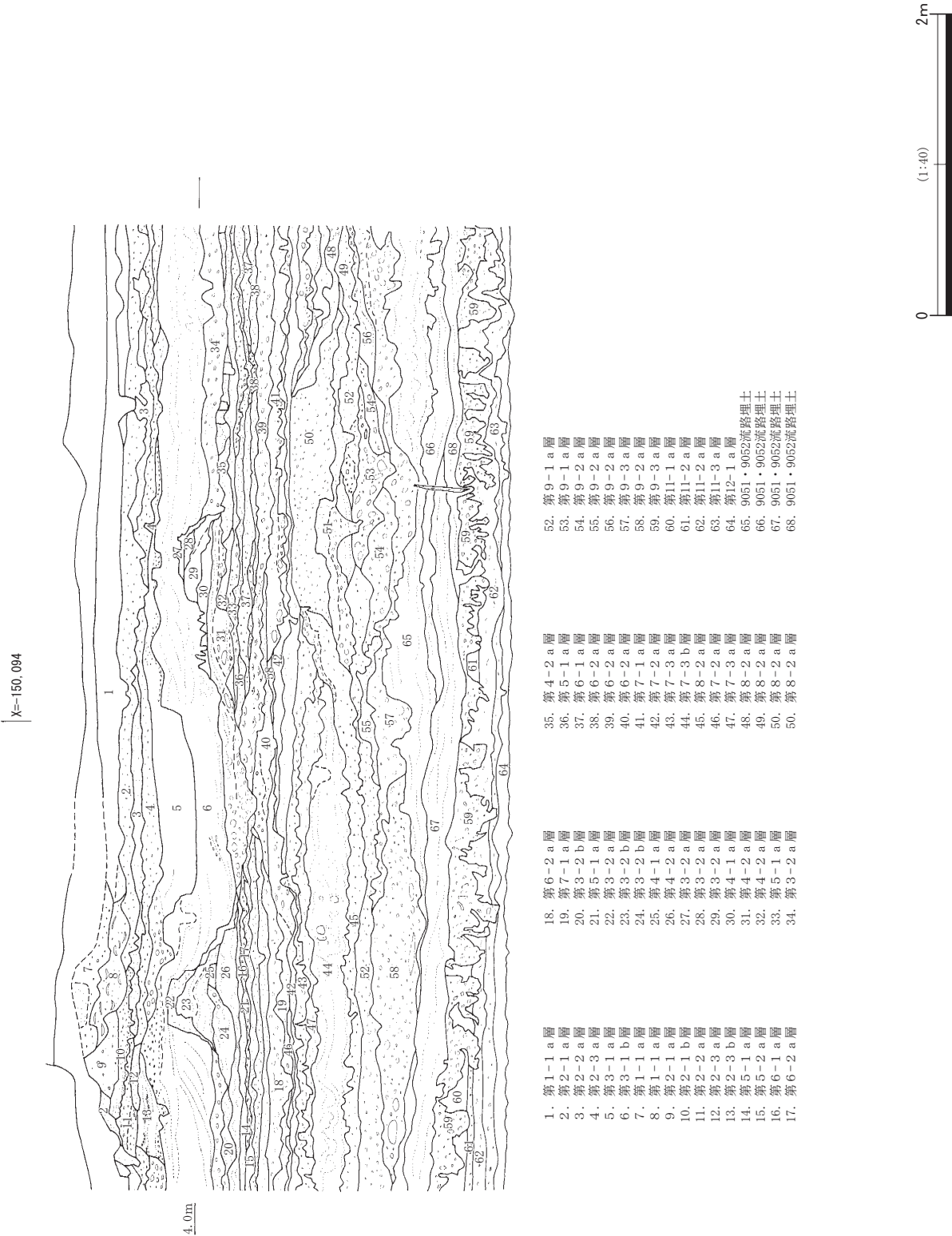


図12 坪境畦畔断面図

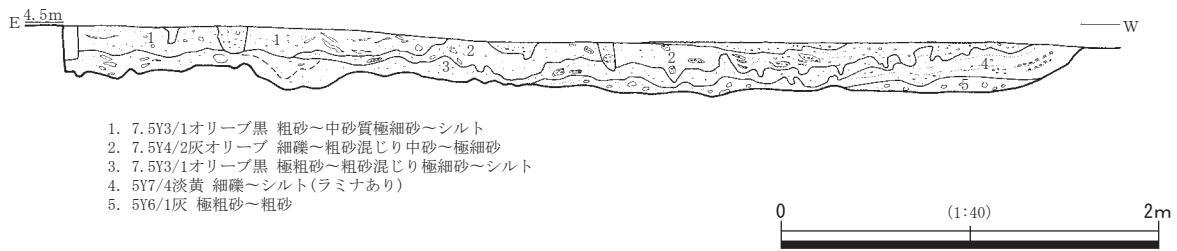


図13 第2-1 a面2051土坑断面図

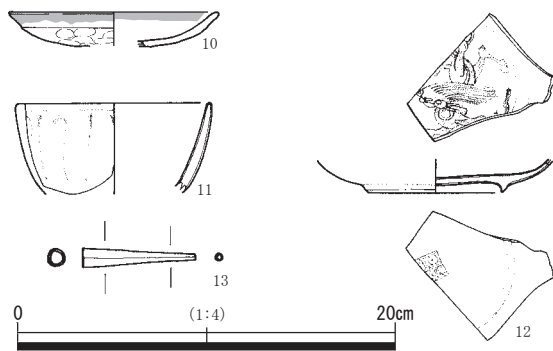


図14 第2-1 a層出土遺物

溝は2037 坪境畦畔以北で数条検出した。いずれも南北方向に掘削されたもので、多くは幅0.3～0.6 mの細い溝であるが、調査区北東端で検出した2038 溝は幅1 m前後を測る。出土遺物はない。

2051 土坑は、調査区東端で坪境畦畔と並行して検出した、東西6 m以上、南北1.5 m、深さ0.3 mの土坑である。

島畠は2037 坪境畦畔を挟んで、北側で3基、南側で8基検出したが(2026・2027・2030・2031・2033～2036・2039・2041・2044 島畠)、いずれもその痕跡を確認したにすぎない。このうち坪境畦畔以北の島畠は、いずれも攪乱等によりその全貌が不明で、北側の03-1調査区へのびる可能性が高い。また以南の島畠は攪乱や1 b土坑の掘削により規模が不明瞭となり、南端は調査区外へのびる。規模の判明する2044 島畠は長さ28.5 m以上・幅4 m、2041 島畠は長さ35 m以上・幅4 m、2039 島畠は長さ7 m以上・幅2.5 m、2026 島畠は長さ17 m以上・幅2.7 mを測る。また攪乱による破壊の少ない坪境畦畔以南の事例では、比較的明瞭に全体を検出した2026 島畠の先端は坪境畦畔と接することなく、小畦畔による繋がりも確認できなかった。

なお、以下に述べる出土遺物のうち○面坪境畦畔・島畠出土遺物とあるものは、それを構成する層から出土したことを示す。

**第2-1 a面出土遺物** 2051 土坑から19世紀頃の肥前系陶磁器碗3点と壺と思われる細片1点、近世の平瓦5点が出土した。

**第2-1 a層出土遺物** 当層を掘削中に8点の遺物が出土した。19世紀以降の陶磁器類(11)3点、瓦1点と、近世の土師器皿(10)1点、瓦質土器細片1点、煙管吸口(13)1点、16世紀頃の中国製青花皿(12)1点が出土した。

また、耕作関係の遺構では2037 坪境畦畔から近世の磁器碗、鉢と思われる近世の陶器、瓦、瓦質甕、



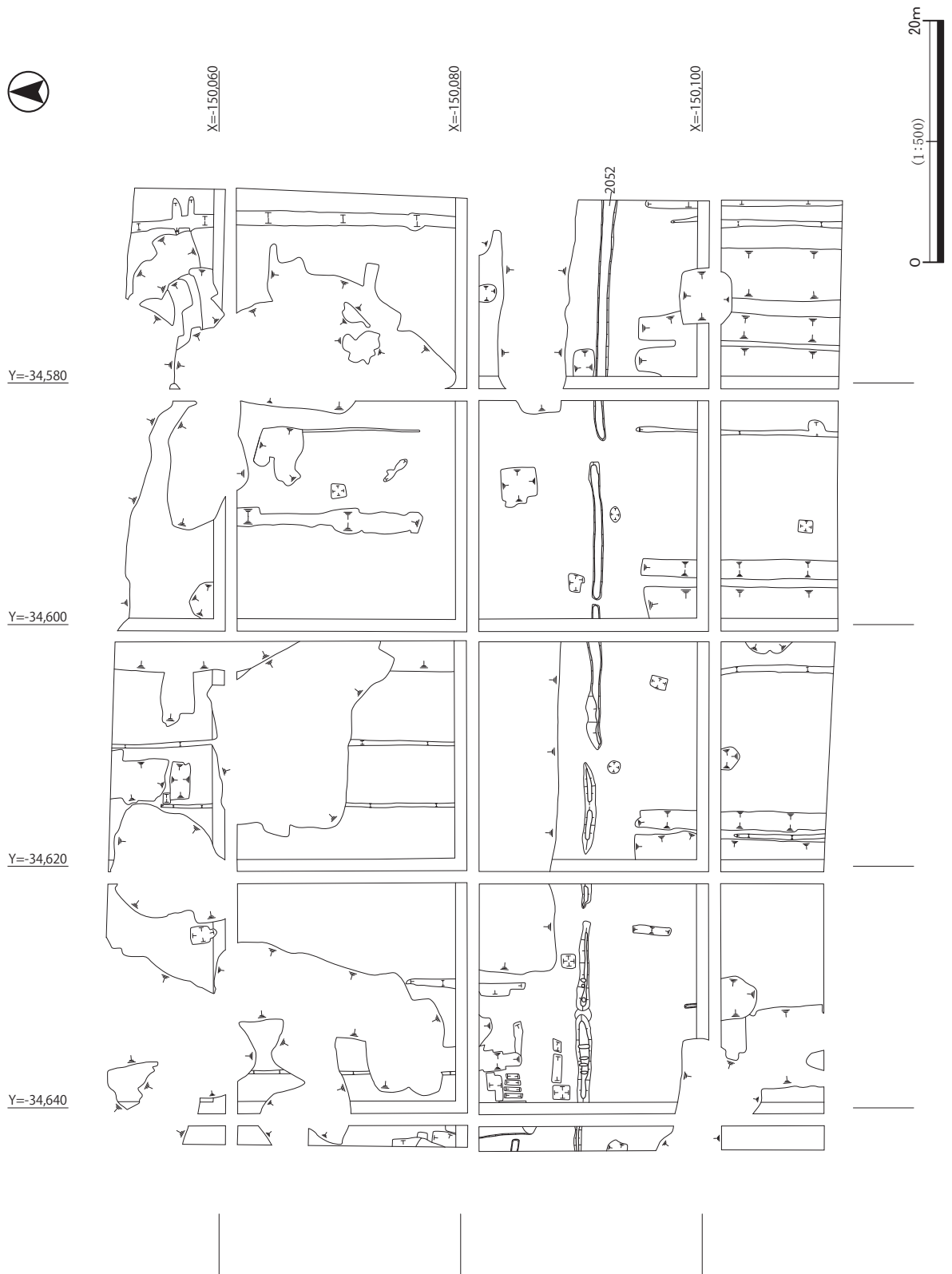


図15 第2-2 a面平面図

中世の須恵質鉢が各々1点出土した。2051土坑から18世紀後半の壺と思われる肥前系陶磁器1点と近世の平瓦5点が、2053土坑からは皿と思われる近世の陶器1点が出土した。

中世や近世初頭の遺物も出土しているが、概ね18世紀から19世紀の遺物によって占められており、既往の調査による年代観と矛盾はないと思われる。

**第2-1b面出土遺物** 出土した遺物はない。

**第2-1b層出土遺物** 当層を掘削中に近世の瓦が1点出土した。

### 第2-2a面・第2-2a層 (図15)

第2-2a面は、第2-1a層もしくは部分的に堆積する第2-1b層を掘削したのちに検出した面で、標高は概ね4.3～4.4mを測る。検出した遺構は、第2-1a面2037坪境畦畔の構成土直下の第2-1b層が、部分的に遺存していたことから、かろうじて坪境畦畔のみを検出することができた。

2052坪境畦畔は調査区横断全域で検出したが、後世の削平のため幅0.6～1m、高さはせいぜい0.1m程度の盛り上がりしかなく、ところどころで途切れて非連続となる。

**第2-2a面出土遺物** 2052坪境畦畔からは近世の磁器碗、陶器細片、瓦質鉢が各々1点と瓦8点、中世の瓦質鉢1点、器種不明の瓦質細片が3点、古代の土師器、須恵器の細片が各1点出土した。

**第2-2a層出土遺物** 当層を掘削中に25点の遺物が出土した。近世の瓦7点、陶器碗1点、細片1点、近世の土師器2点のほか、下層の遺物である中世以前の土師器皿2点、細片1点、中世の瓦質土器細片8点、古代の土師器1点、須恵器壺・甕1点、黒色土器A類甕1点が出土した。

また、耕作関係の遺構では2052坪境畦畔より、近世の瓦7点、陶磁器細片2点、部材片1点、古代の土師器細片1点、中世の瓦質細片2点、土師器細片1点の計14点が出土した。

中世や近世初頭の遺物も出土しているが、概ね18世紀から19世紀の遺物によって占められており、既往の調査による年代観と矛盾はないと思われる。

### 第2-3a面・第2-3a層 (図16・17)

第2-3a面は、第2-2a層を掘削して検出した面で、標高は概ね4.2～4.3mを測る。検出した遺構は、X=-150,090付近で検出した坪境畦畔、およびY=-34,566付近で検出した坪境畦畔である。

2056坪境畦畔は調査区全域で検出した。畦畔としての盛り上がりはわずかで、中央部附近で一箇所途切れる。幅0.5～1m、高さは0.05m前後である。2054坪境畦畔は、先の『福萬寺村惣繪圖』に描かれた「走十(ノ坪)」と「走十五(ノ坪)」を分ける畦畔だが、その痕跡を検出したに過ぎず、幅は約1mを測る。またその西側に幅0.9～1.0m、深さ0.3mの2055溝を検出した。

**第2-3a面出土遺物** 耕作関連遺構として2056坪境畦畔から近世の陶磁器碗1点が出土した。

**第2-3a層出土遺物** 当層を掘削中に65点の遺物が出土した。近世の土師器皿1点、細片1点、陶器壺2点、細片1点、16世紀頃の中国製白磁皿(14)と青磁碗(15)が各1点、中・近世の瓦26点、中世の土師器8点、瓦質土器では播鉢(17)4点、壺、羽釜、火鉢(16)が各1点、器種不明の細片が9点、瓦器細片1点、古代の土師器、須恵器、黒色土器の細片が各2点の計64点あり、木製品1点も出土している。さらに、桃の種も1粒を採取した。

耕作関連遺構では、2054坪境畦畔から近世の磁器碗1点、2056坪境畦畔から17世紀前半頃の唐津焼碗が1点、近世の瓦11点、木製品1点、中世の瓦質では播鉢2点、羽釜1点、甕と思われる細片

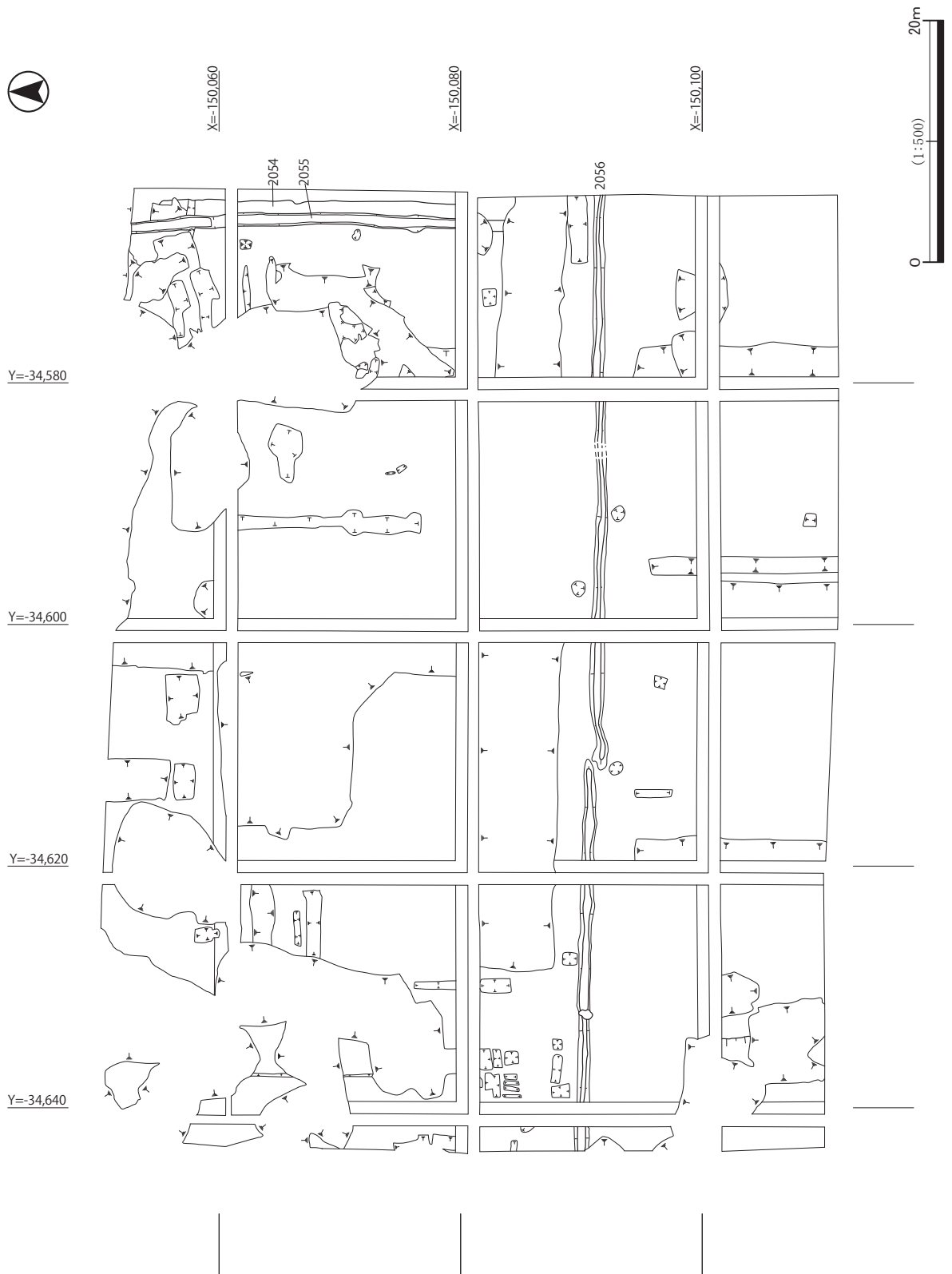


図16 第2-3a面平面図

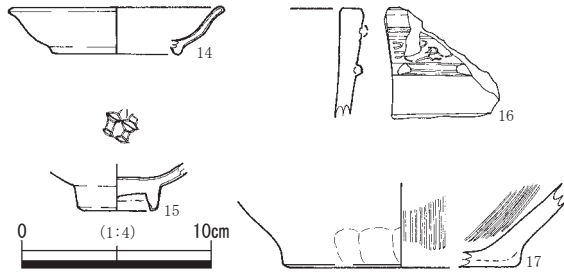


図17 第2-3 a層出土遺物

2点が出土した。

出土した瓦や陶磁器から考え、当面・層は17世紀頃に形成されたと考えられ、既往の調査による年代観と矛盾はないが、それ以前の土器の方が多数を占める。

### 第3-1 a面・第3-1 a層 (図18)

第3-1 a面は第2-3 a層を掘削した結果、第3-1 b層が各所で出現する中、局所的に第3-1 a層が遺存する箇所がある。標高は概ね4.1～4.2 mを測る。検出した遺構は畦畔および島畠である。

3002・3001 畦畔は、ともに調査区北東隅で検出した東西方向の畦畔である。3002 畦畔は検出長2 m・幅0.4 m・高さ0.1 mを、3001 畦畔は検出長2.5 m・幅0.4 m・高さ0.1 mをそれぞれ測る。

第3-1 a層が希薄で第3-1 b層が顕著な中、3046 島畠は調査区中央、X-2 トレンチ以北で検出した。検出長28 m・最大幅4.5 mを測る。

**第3-1 a面出土遺物** 第2-3 a層との境にて、近世の土師器皿が1点出土した。

**第3-1 a層出土遺物** 当層を掘削中に瓦器椀1点、瓦質土器細片が1点、近世の土師器細片が1点出土した。また、3046 島畠から瓦器椀1点が出土した。既往の調査による年代観では当面・層の形成は16世紀後半と考えられているが、今回の調査では出土した遺物の総量が少なく判然としない。

### 第3-1 b面・第3-1 b層 (図19～22)

局所的に残る第3-1 a層を除去したのちに検出した水成層の遺構面で、標高は第3-1 a面同様、概ね4.1～4.2 mを測る。遺構は3003 坪境畦畔の芯を形成する砂層部分、その北側に沿う3008・3010・3016 溝、南側に沿う3004 溝、島畠、畦畔上で検出した数箇所の水口、および数基の土坑、ピットである。これらの遺構はいずれも坪境畦畔上もしくは近接した場所で検出した。なお島畠については、第3-1 a面検出時と変化はない。

3003 坪境畦畔はX=-150,090付近で検出した東西方向の畦畔の芯を形成する砂層部分で、幅0.5～1.5 m、わずかに0.03 mの盛り上がりしかない。この北側に沿って検出した3008・3010 溝は、幅0.3～0.4 m、全長9 m・11 m、深さ0.04 mを、3016 溝は幅0.2 m、全長14.5 m、深さ0.02 mを測るが、本来は一連の溝だったと考える。また南側に沿って検出した3004 溝は幅1 m前後、深さ0.02～0.13 mを測る。

これら3003 坪境畦畔に沿う溝を切り、一部が畦畔上に重複して、不正楕円形そのほかの形状を呈した水口を検出した。3007 水口は長径2.2 m・短径1.4 m、3009 水口は長径2.8 m・短径1.8 m、3011 水口は長径0.7 m・短径0.5 m、3015 水口は長径1.3 m・短径0.8 m、3014 水口は長径1.3 m・短径0.3～0.7 m、3020 水口は長径1.3 m・短径1 mをそれぞれ測る。

土坑は3005・3012・3013・3017～3019・3021の7基を検出したが、必ずしも畦畔上で検出したとは限らない。3005 土坑は長辺3.9 m・短辺2 m・深さ0.5 mの不定形土坑、3012 土坑は長径2.5 m・短径2.3 m・深さ1 mの円形土坑、3013 土坑は長辺3 m・短辺2 m・深さ1 mの隅丸方形土坑であり、いずれも埋め戻したような堆積状況を示す。

**第3-1 b面出土遺物** 当面を精査中に検出した遺物はなく、3004 溝から近世の陶器1点、瓦6点、

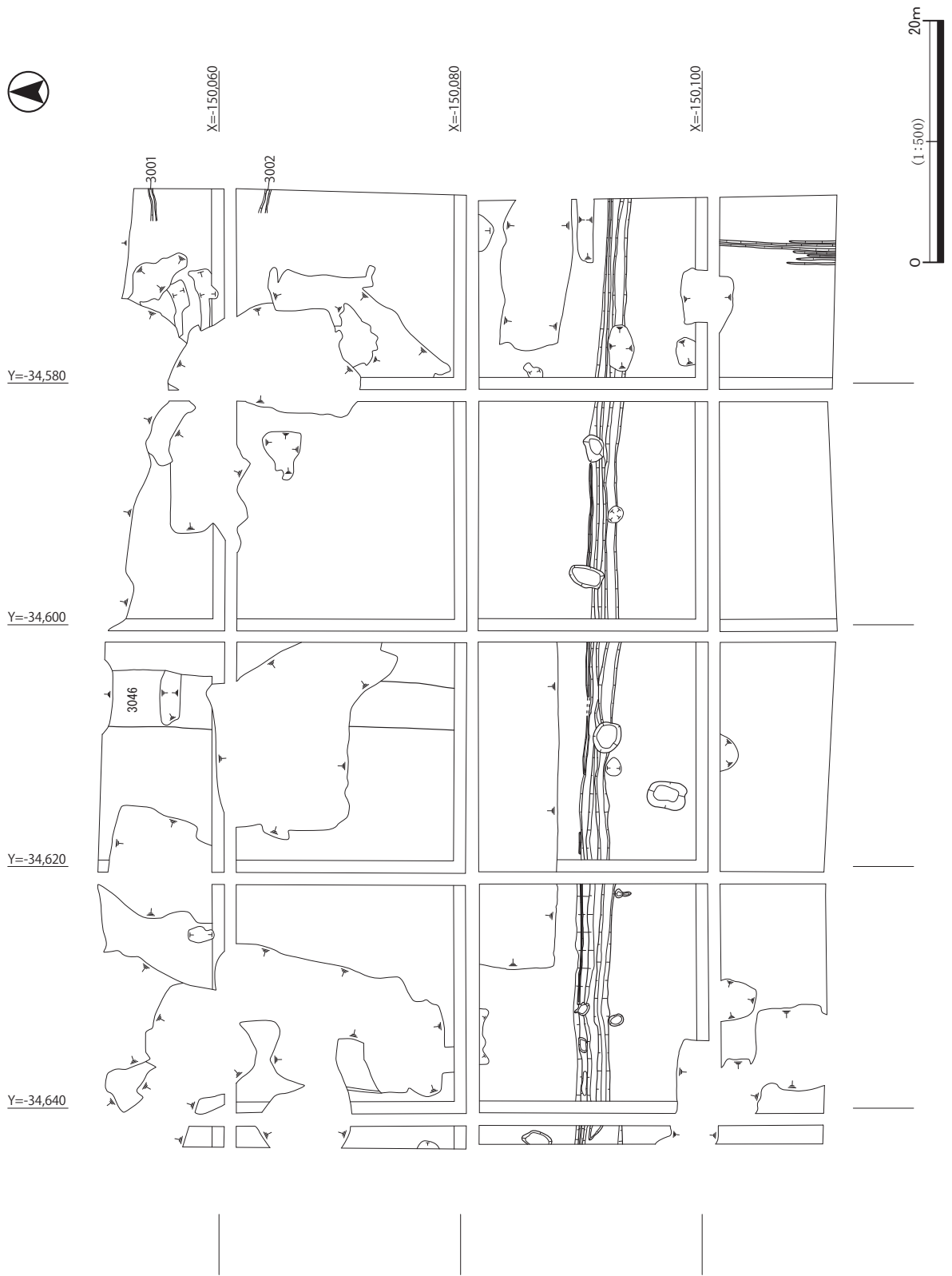


図18 第3-1a面平面図



图19 第3-1 b面平面图

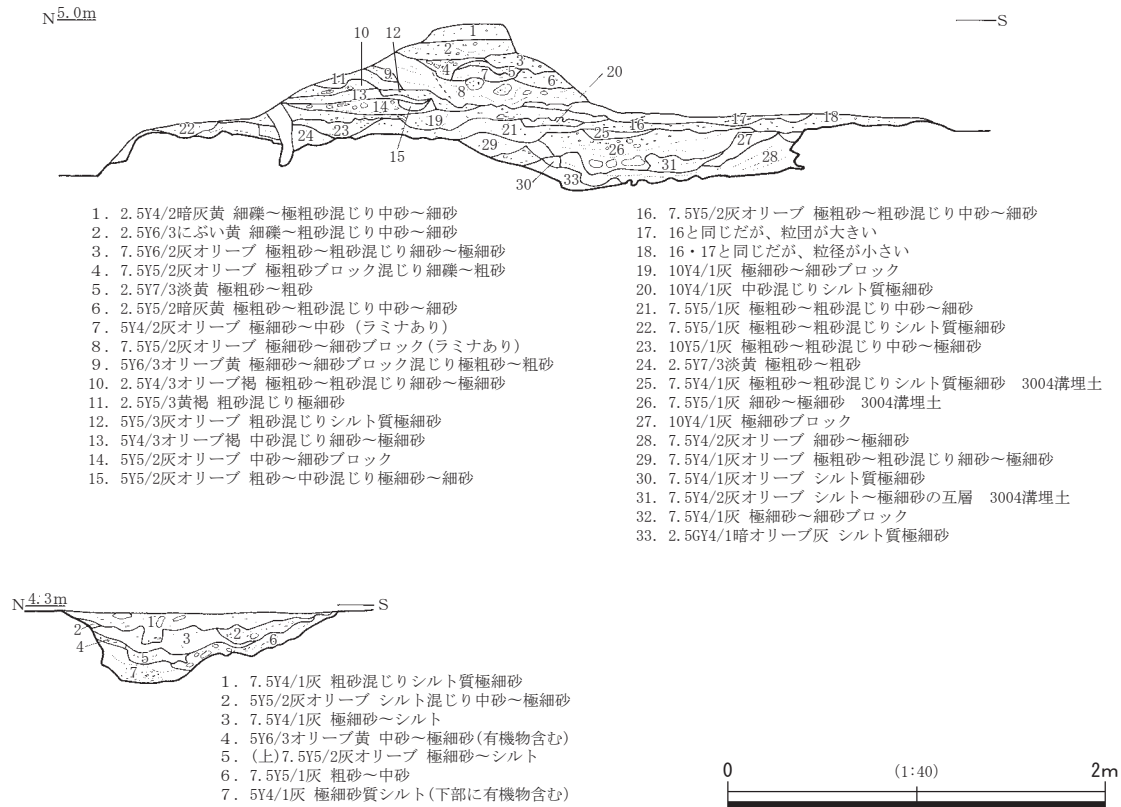


図20 第3-1 b面3004溝断面図

中世の瓦質羽釜1点、細片1点、古代の須恵器細片1点が、3005土坑から中世の瓦質細片1点、古代の須恵器細片1点が、3007水口から中世の中国製青磁碗、古代の平瓦が各1点、3008溝から古代の須恵器細片1点、3003坪境畦畔より中世の瓦が4点、3014水口から瓦1点、3020水口から中世の瓦1点が出土した。

**第3-1 b層出土遺物** 当層を掘削中に58点の遺物が出土した。土師器は皿(18)16点、羽釜、播鉢各1点、細片6点、瓦質土器は播鉢(19、20)4点、鉢1点、細片8点、瓦器椀10点、中・近世の瓦5点、古代の土師器杯、細片、須恵器甕、細片、黒色土器B類椀が各1点、部材片1点が出土した。

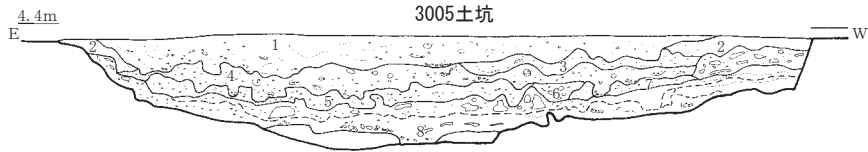
既往の調査による年代観では当面・層の形成は16世紀後半と考えられている。土師器皿の一部や瓦のうち平瓦2枚がこの範疇に属すると思われるが、大半は中世以前の、より古相の遺物で占められる。

### 第3-2 a面、第3-2 a層 (図23・24)

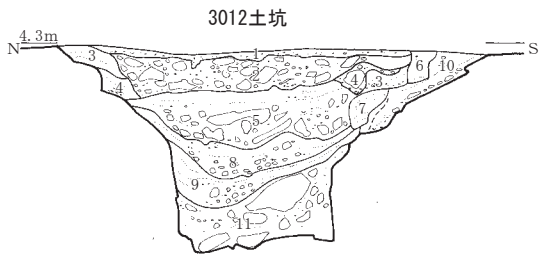
水成層で平均層厚0.3～0.4mの、第3-1 b層を除去して検出した面である。ここで見つかった遺構は、X=-150,090付近にある坪境畦畔および溝、坪境畦畔の南北にのびる畦畔や島畠などである。

3028坪境畦畔は西方に向かってやや斜行しつつも第2面までのそれとは異なり、2条の畦畔とそれに挟まれた溝からなる。畦畔の幅はそれぞれ1～1.4mを、高さは約0.2mを測る。南側の坪境畦畔には、3030溝が重複する。坪境畦畔内の3029溝は幅1～1.5m、深さ0.02～0.05mを測り、調査区東端付近では3028坪境畦畔北側にて3045水口を検出した。またこの坪境畦畔の中央・西端付近の2箇所、洪水による破堤を確認し、中央付近ではクレバススプレーを形成する。

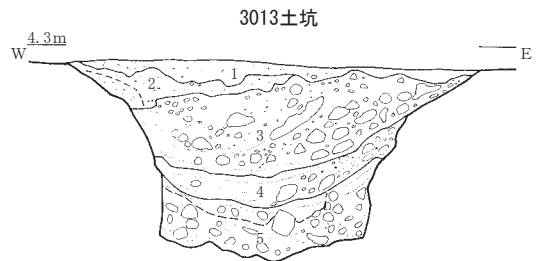
3028坪境畦畔の北側では南北方向の畦畔を8条検出し、縦長の区画水田が広がる。これらは3042島畠以東ではほぼ5m間隔で並んでいるが、同島畠以西では必ずしもそうではない。個々の畦畔は概ね



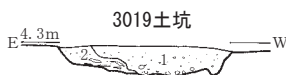
1. 5Y5/2灰オリーブ 細礫～極細砂混じりシルト質細砂～極細砂
2. 5Y4/2灰オリーブ 極粗砂混じり細砂～極細砂
3. 5Y4/1灰 粗砂混じり極細砂質シルト
4. 7. 5Y5/1灰 シルト～中砂
5. 7. 5Y4/1灰 極粗砂～粗砂混じり極細砂質シルト
6. 5Y5/1灰 シルト～細砂ブロック
7. 7. 5Y4/2灰オリーブ シルト～極細砂
8. (上部)7. 5Y4/1灰 シルト混じり極細砂ブロック  
(下部)7. 5Y4/1灰 極細砂ブロック



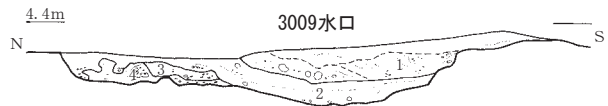
1. 5Y4/2灰オリーブ 細礫～極粗砂混じり細砂～極細砂
2. 7. 5Y4/1灰 シルト質極細砂ブロックと7. 5Y3/1オリーブ黒 極細砂質シルトブロックと5Y3/2オリーブ黒 細礫～極粗砂混じりシルト質極細砂ブロック混じる
3. 7. 5Y4/2灰オリーブ 極細砂～細砂と7. 5Y5/2灰オリーブ 中砂～細砂の互層(ラミナ)
4. 7. 5Y4/1灰 シルトと7. 5Y4/2灰オリーブ 極細砂の互層(ラミナ)
5. 5Y6/3オリーブ黄 中砂～細砂の平行ラミナ
6. 5Y5/1灰 シルト質極細砂
7. 7. 5Y4/1灰 シルト質極細砂
8. 2. 5GY4/1暗オリーブ灰 シルト～細砂のラミナ
9. 7. 5Y5/1灰 シルト～細砂
10. 7. 5Y4/1灰 細砂ブロックと5Y4/2灰オリーブ 細砂～中砂ブロック混じる
11. 2. 5GY5/1灰オリーブ シルト質極細砂ブロックと2. 5GY4/1暗オリーブ灰 シルト～極細砂のブロック混じる



1. 10Y4/1灰 粗砂～中砂混じりシルト質細砂～極細砂
2. 10Y4/1灰 (1と同じか?)シルト質細砂～極細砂
3. 10Y4/1灰 シルト質極細砂ブロックと7. 5Y3/1オリーブ黒 極細砂質シルトブロックと7. 5Y5/1灰 中砂～細砂ブロックと10Y4/1灰 シルト(ラミナあり)ブロックが混じる
4. 7. 5Y4/1灰 シルト(ラミナ)
5. 10Y4/1灰 シルトと10Y5/1灰 極細砂の互層(ラミナ)



1. 5Y5/3灰オリーブ 極細砂～粗砂混じり細砂～シルト
2. 5Y5/3灰オリーブ 極粗砂～粗砂混じり細砂～極細砂



1. 5Y7/3淡黄～5Y4/1灰 細礫混じり極細砂～粗砂
2. 5Y6/3オリーブ黄 粗砂～中砂と5Y4/1灰 極細砂～シルトの互層(ラミナ)
3. 5Y6/3オリーブ黄 極粗砂～中砂と7. 5Y5/1灰 細砂～極細砂混じる
4. 7. 5Y4/1灰 中砂混じりシルト質極細砂

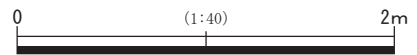


図21 第3-1 b面遺構断面図

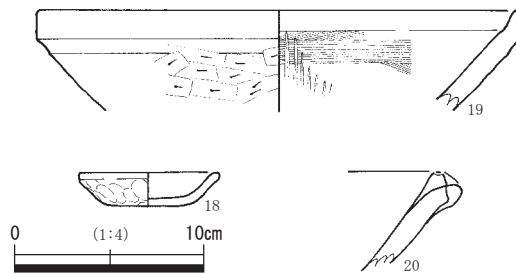


図22 第3-1 b層出土遺物



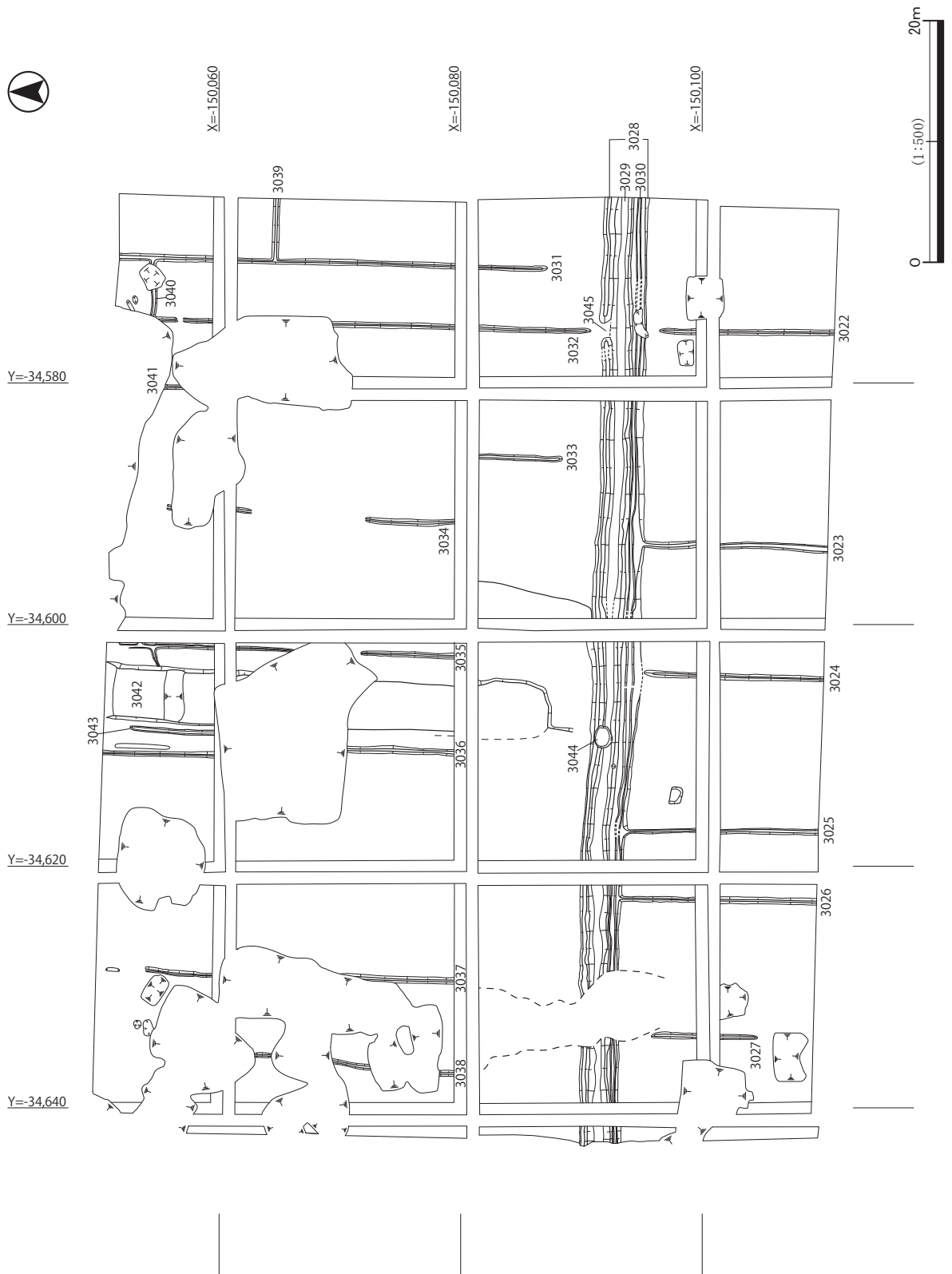


図23 第3-2 a面平面図

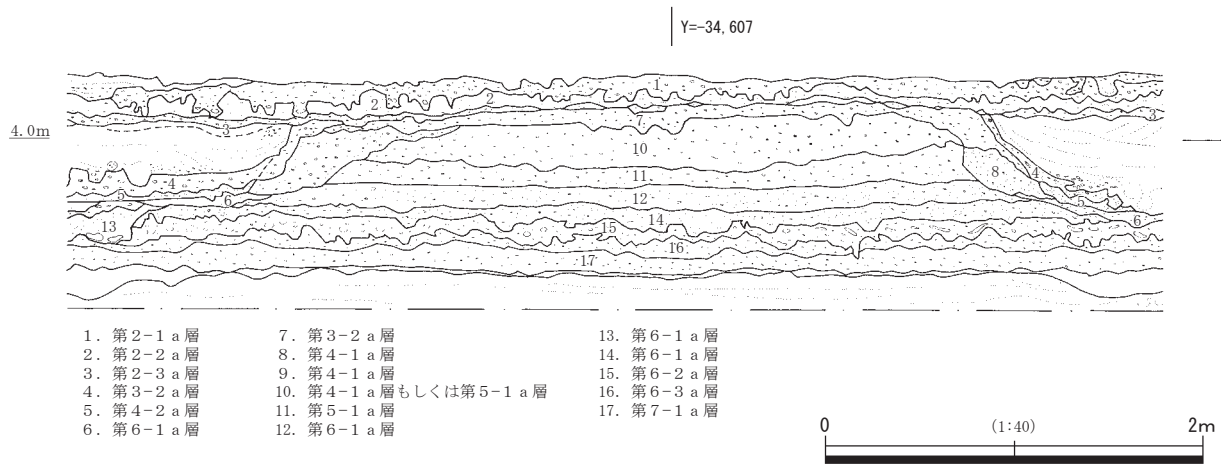


図24 第3-2 a面3042島畠断面図

幅0.5～0.7 m・高さ0.01～0.1 m程度を測り、当調査区北側に隣接する03-1調査区検出の畦畔へ繋がるものが多い。またこれらは、3045水口に接する3032畦畔を除いて3028坪境畦畔と繋がるものがない。坪境畦畔以外で南北畦畔を繋ぐ畦畔は、3039・3040畦畔の2箇所と3035畦畔から3042島畠へ繋がる畦畔のみである。ところで西端で検出した3038畦畔は、後世の大規模な攪乱による遺構検出の不具合のせいか、唯一蛇行する。

坪境畦畔以南は、南北方向の6条の畦畔を検出した。これらのうち3022畦畔のように、坪境畦畔以北で見つかった畦畔の延長上で検出したものもあるが、微妙にずれる3023・3024・3027畦畔、坪境畦畔以北では見つかっていない3025・3026畦畔が主流となる。さらに3023・3025・3026畦畔のように坪境畦畔に繋がるもの、3024畦畔のように微妙に離れる例が目立つ。攪乱やトレンチなどによって確認できなかった場所もあるかもしれないが、極少の感は否めない。ちなみに調査区北側、03-1調査区の第3-1面では、本調査区以上に広範囲に攪乱がおよんでおり、東西・南北方向ともほとんど畦畔を確認することができなかったようだ。

3042島畠は、第4-1 a面の4017島畠に盛土を施したもので、幅5 m・検出長37 m・高さ0.4 mを測り、北側は調査区外にのびる。また北端では島畠の西側にて、幅0.5 m・検出長7 mの3043溝を検出した。

**第3-2 a面出土遺物** 当面を精査中に検出した15世紀前半頃の土師器皿4点、信楽焼と思われる陶器播鉢1点、13世紀代の瓦器椀2点、12世紀前半頃の土師器皿1点、古代の須恵器細片1点の計9点の遺物が出土した。また、3029溝から瓦質羽釜1点、土師器皿3点、羽釜1点、土師器細片3点、中世の瓦3点の計11点が出土した。

**第3-2 a層出土遺物** 当層を掘削中に70点の遺物が出土した。中世の土師器皿が25点と3分の1近くを占める。瓦質製品は羽釜3点、播鉢1点、細片1点、瓦器椀10点、中世の土師器は皿以外に羽釜5点、壺・甕1点、細片12点、瓦5点である。古代の遺物は、須恵器杯・皿、甕、細片、土師器細片、黒色土器A類椀が各1点である。ほかに木製品1点も出土した。

耕作関連遺構では、3028坪境畦畔などから中世の土師器皿4点、羽釜1点、細片3点、瓦器椀1点、中世の瓦1点、古代の土師器壺・甕細片1点、須恵器細片1点の計12点、3042島畠から古代の須恵器壺1点、中世の土師器皿3点、細片3点、瓦質土器細片1点、中世の瓦1点の計21点が出土している。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は16世紀前半から中頃と考えられているが、より古相

の古代、中世の遺物細片の方が多く、かつ今回の調査では出土した遺物の総量が少なく判然としない。

#### 第4-1 a面・第4-1 a層 (図25・27)

第3-2 a・b層を除去して検出した遺構面である。ここで検出した遺構は、坪境畦畔、畦畔、溝、水口、土坑、島島などである。

4006 坪境畦畔は、4007 溝を挟んで南北2条の畦畔からなる。北側の畦畔は、幅0.4～0.9 m、高さ0.1 m前後を測り、2箇所の水口を設ける。これに対し南側の畦畔は、幅0.5～1.7 m、高さ0.1 m弱を測り、北側の畦畔より規模がやや大きい。4007 溝は東端付近で最大0.2 mの深さを有するが、そのほかの場所では畦畔の基部より0.02 m程度低いにすぎず、明瞭な溝とは認識できなかった。

水口は坪境畦畔を切って、4010・4013水口の2基を検出した。4010水口は長辺1.8 m・短辺1.6 mの楕円形を、4013水口は長辺1.2 m・短辺1.0 mのほぼ円形をそれぞれ呈する。4014土坑は、長辺1.4 m・短辺0.6 mを測る楕円形の土坑である。

坪境畦畔を中心として南北方向の畦畔を検出した。その多くは第3-2 a面検出の畦畔に踏襲されるものばかりで、それらに取り付く東西方向の畦畔は確認できなかった。おそらくこれらはすべて、本来の畦畔の直下に形成された疑似畦畔Bであろう。

4017 島島は、第3-2 a面3042 島島の耕作土を除去して検出した。幅4～5 m、検出長36 m、高さ0.2～0.3 mを測り、北側は調査区外へのびる。4017 島島の南西端には4012 高まりが取り付く。今一つははっきりとしないが、4006 坪境畦畔と4017 島島をつなぐ畦畔かもしれない。

**第4-1 a面出土遺物** 当面を精査中に中世の土師器皿が2点と瓦質土器細片1点が出土した。

**第4-1 a層出土遺物** 当層を掘削中に161点の遺物が出土した。中世の土師器皿が48点と最も多く、次いで瓦器椀16点、瓦質羽釜(23、24)11点と続く。

中世では土師器は皿以外に羽釜2点、播鉢1点、細片14点、瓦質は播鉢4点、ミニチュア羽釜1点、瓦質土器細片17点、中国製龍泉窯系青磁碗(21)、備前焼播鉢、陶器甕、陶器細片が各1点、瓦6点のほか木製部材、鉄釘(25)、北宋銭の「咸平元寶」(26)、漆器椀(27)も各1点出土している。

古代では土師器皿8点、壺・甕4点、細片12点、須恵器甕3点、細片2点、製塩土器1点、黒色土器B類細片1点であり、古墳時代の須恵器杯蓋1点、サヌカイト片1点も出土している。

耕作関係の遺構では、4017 島島から中世の土師器皿12点、土師器細片8点、中国同安窯系青磁碗(22)1点、瓦器7点、中世の瓦1点の計29点、古代の土師器甕・壺1点、4006 坪境畦畔から中世の土師器皿4点、細片3点、瓦器椀2点、瓦質土器細片2点、中世の瓦2点、古代の須恵器細片1点の計15点、4007 溝から弥生土器細片1点、中世の土師器皿1点、鍋1点、瓦器細片4点、中世の瓦1点の計8点である。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は15世紀中頃と考えられている。瓦質羽釜、中国製龍泉窯系青磁碗など、若干の遺物がやや古相を示すが、大半は当該期の遺物によって占められており矛盾はないと思われる。

#### 第4-2 a面・第4-2 a層 (図26)

第4-2 a面は、第4-1 a層を掘削すると大半の箇所では第5-1 a面が露出するが、X=150,090付近の坪境畦畔で第4-2 a面を確認することができた。中央に溝をもつ坪境畦畔と、同畦

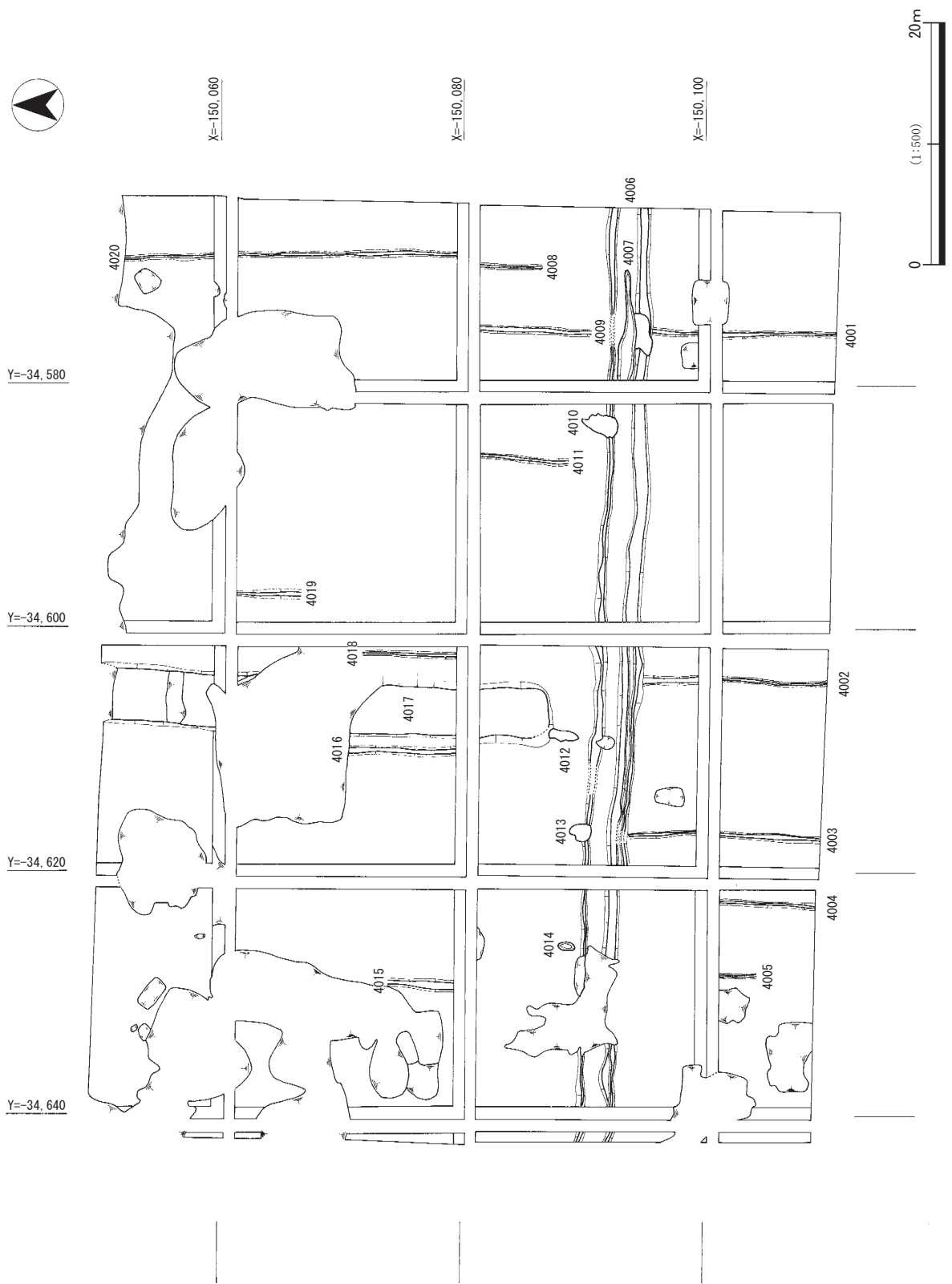


图25 第4-1a面平面图

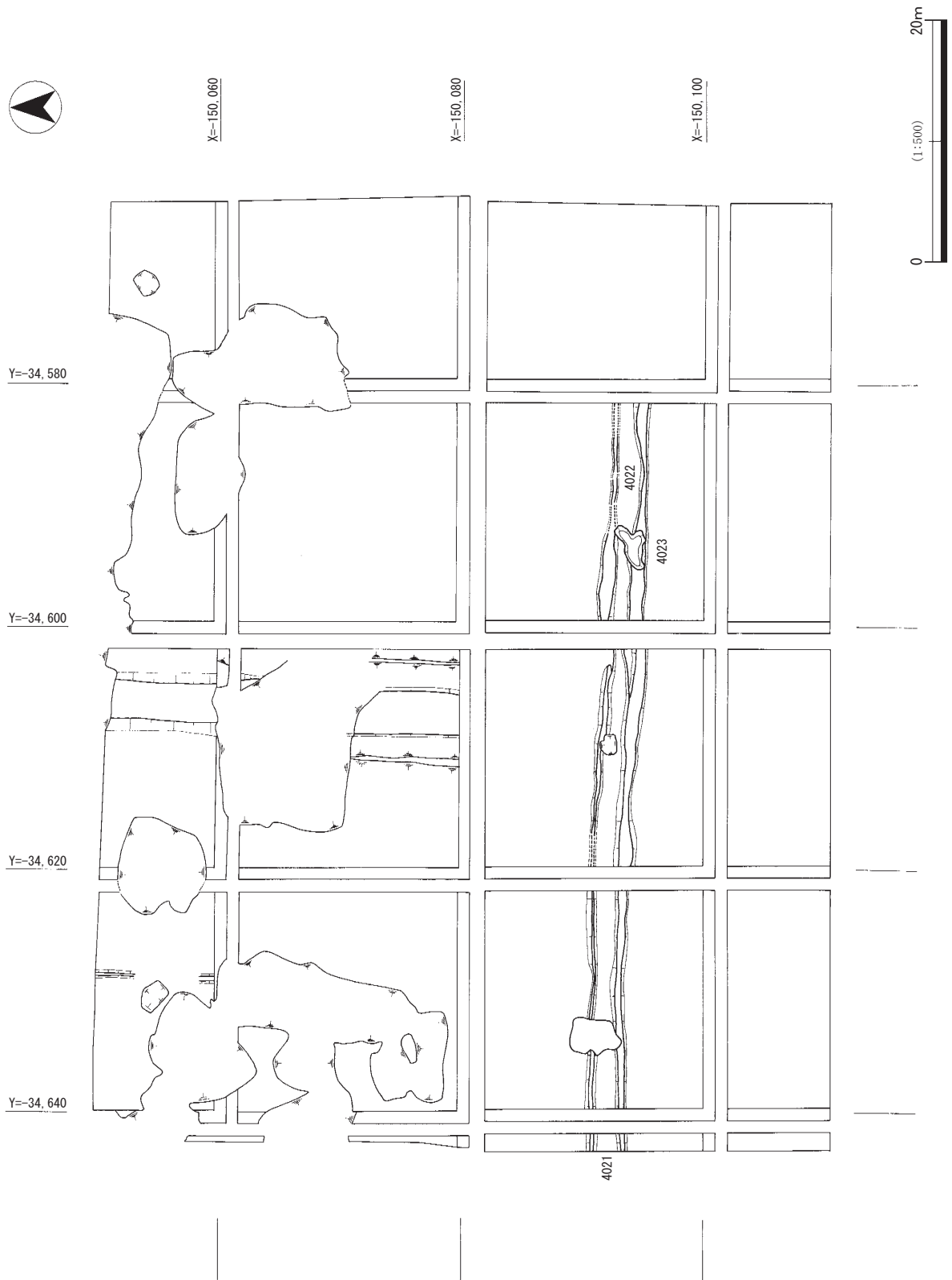


図26 第4-2 a面平面図

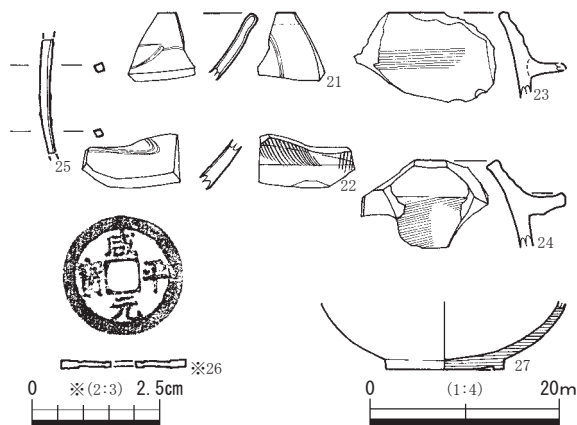


図27 第4-1 a層関連出土遺物

4023 水口は不定形なくぼみで、深さは0.2 m程度である。

第4-2 a面出土遺物 出土した遺物はない。

第4-2 a層出土遺物 4021 坪境畦畔から瓦器碗が1点出土した。既往の調査による年代観では当面・層の形成は14世紀から15世紀中頃と考えられている。当遺物はこの範疇よりやや古く、層序関係的には矛盾はないが、今回の調査では出土した遺物の総量が少なく判然としない。

#### 第5-1 a面・第5-1 a層 (図28・29)

第5-1 a面は、坪境畦畔の南側に沿って、わずか0.05 m程度堆積していた第4-2 a層掘削後に検出した遺構面である。X=-150,090付近で坪境畦畔を、そのほか南北方向の畦畔・島畠を検出した。遺構面の高さは調査区東半で3.6~3.7 mを、西半では3.7~3.8 mを測る。

5001 坪境畦畔は、第3-2 a面~第4-2 a面で検出した坪境畦畔のように、南北2条の畦畔とそれに挟まれた1条の溝で構成されるのではなく、1条の大畦畔のみとなる。調査では調査区東端付近で、かろうじて0.01 m程度の盛り上がりを確認できたにすぎなかった。調査区中央付近から西端にかけては、坪境畦畔の北側に沿う溝によって、本来存在したであろう位置を想定した。幅は1 m前後、検出長約15 m、高さ0.01 m弱を測る。

5003 畦畔は、調査区北西隅で検出した南北方向の畦畔で、南側は攪乱で消失し、北は調査区外へのびるようだ。幅0.7~0.8 m、検出長10 m、高さ0.13 mを測る。

5002 島畠は、幅4~5 m、検出長35 m、高さ0.01~0.2 mを測る。5002 島畠の南西端には、第4-1 a面で見つかった畦畔と思しき5004 高まりが残る。

第5-1 a面出土遺物 当面を精査中に計37点の遺物が出土した。中世の土師器皿が11点あり、土師器細片6点、瓦器碗3点、瓦質播鉢3点、甕1点、羽釜2点、瓦質土器細片3点がある。15世紀頃の中国製白磁皿(29)や14世紀後半から15世紀頃の中国龍泉窯系青磁碗(30)、陶器甕も各1点出土した。古代の土器は、土師器高杯、杯類、須恵器杯が各1点、須恵器細片2点が出土した。耕作関係の遺構では、5001 坪境畦畔直上から鉄鎌(35)が出土した。

第5-1 a層出土遺物 当層を掘削中に204点の遺物が出土した。13世紀から14世紀を中心とした瓦器碗・皿57点、ほぼ同時期の土師器皿(28)が50点と拮抗し、多数を占める。中世の土師器壺・甕1点、羽釜5点、土師器細片25点、瓦質羽釜5点、播鉢(33、34)9点、瓦質土器細片14点、や

畔上にある水口を検出した。

4021 坪境畦畔ならびにその中央にある4022 溝は、調査区東端付近では確認できず、Y=-34,570以西で確認した。東側の畦畔は幅0.5~1.5 m、高さ0.05 mを、南側は0.5~1.8 m、高さ0.02 mをそれぞれ測る。畦畔の間に挟まれた4022 溝は、深さ0.02~0.1 m程度である。これらは、坪境畦畔の南側畦畔の位置にあった第5-1 a面の坪境畦畔上と、2 m余北側に新たな畦畔を築造、両畦畔に挟まれた箇所を溝とし、まとめて坪境畦畔としたのである。

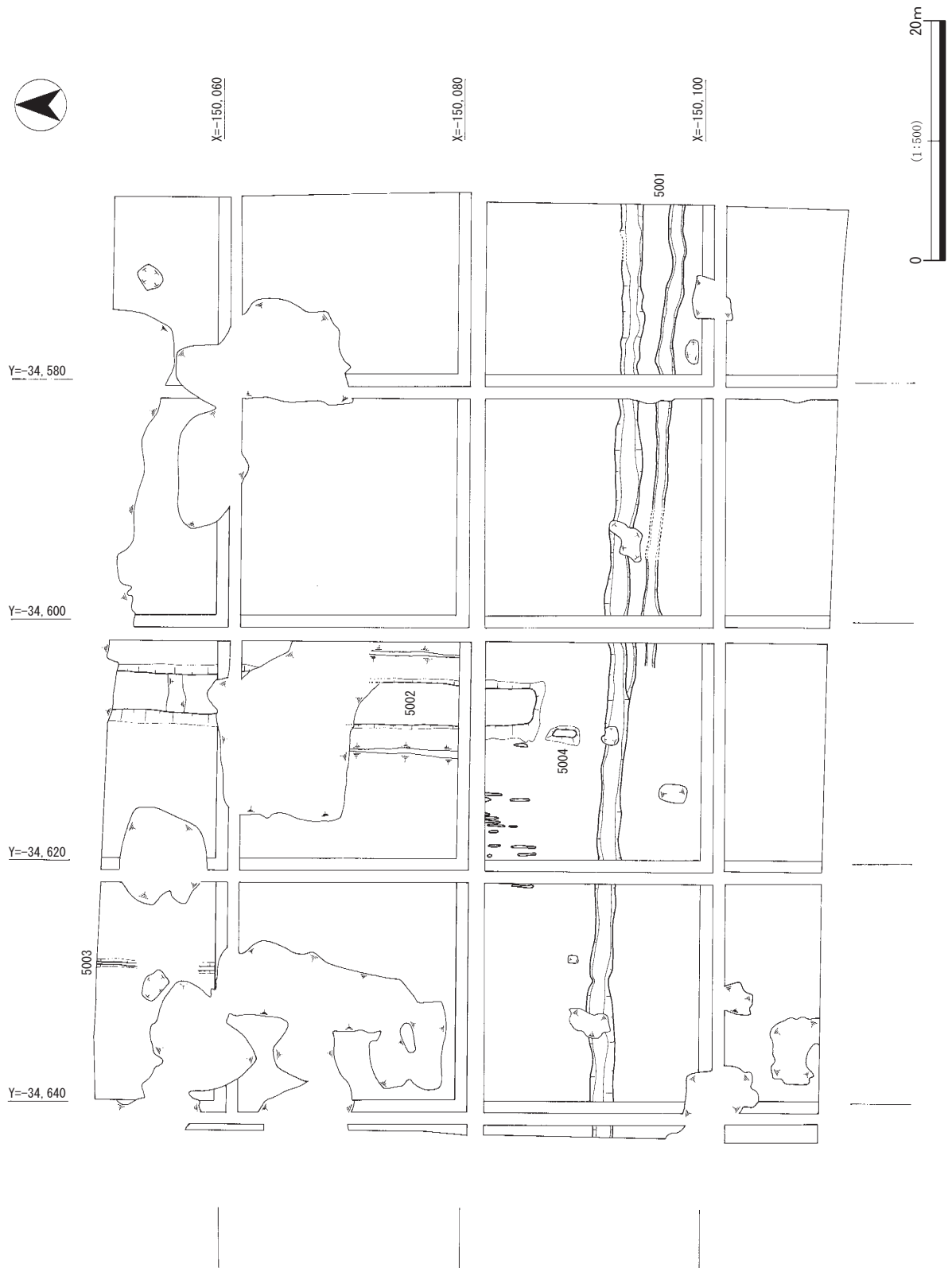


図28 第5-1a面平面図

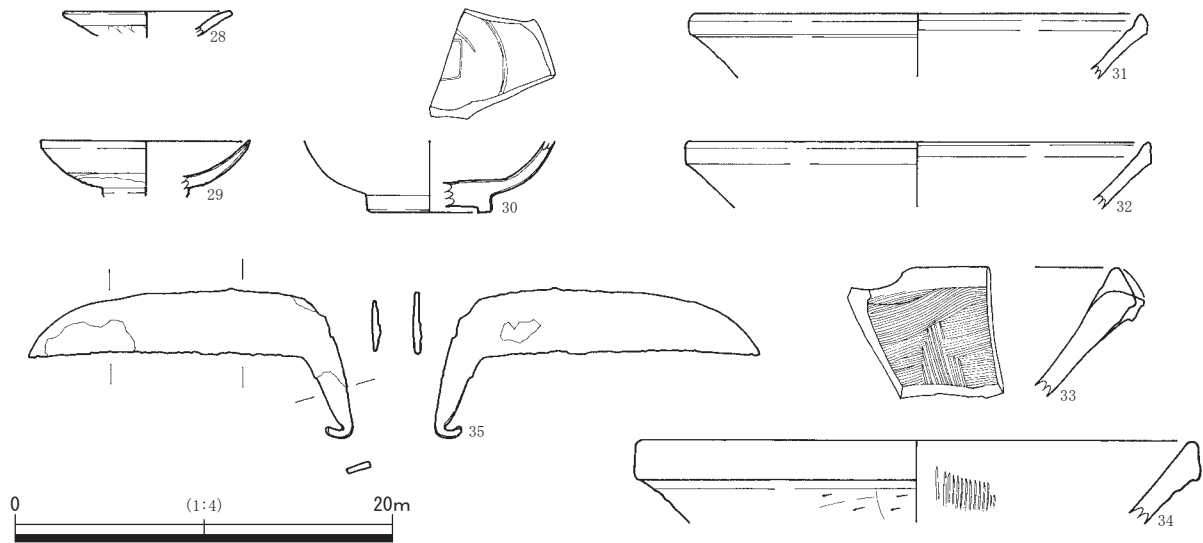


図29 第5-1 a面関連・第5-1 a層出土遺物

や古い様相の東播系須恵質練鉢（31、32）5点、中世の陶器壺・甕3点、瓦8点が出土した。古代の遺物は土師器杯2点、羽釜1点、土師器細片4点、黒色土器椀A類細片1点、須恵器杯1点、壺・甕3点、細片4点、古墳時代以前の遺物は土師器甕1点と細片2点、須恵器杯蓋と思われる2点、弥生土器細片1点が出土した。

遺構では、5002 島畠から、瓦器椀・皿21点、土師器皿9点、壺・甕2点、羽釜3点、土師器細片4点、中世の瓦2点、瓦質羽釜3点、中世の須恵質土器細片1点、須恵器細片5点の計50点が出土した。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は14世紀から15世紀中頃と考えられているが、矛盾はないと思われる。

### 第5-2 a面・第5-2 a層（図30・31）

調査区全域に堆積する第5-1 a層は層厚0.05 m程度で、同層を掘削すると調査区南～南東部を中心に第5-2 a面を検出することができる。X=-150,095付近に想定される坪境畦畔のほか、2基の島畠や耕作に伴う溝を検出した。遺構面の高さは、調査区東半で3.6～3.7 m、調査区南西部で3.8 m前後を測るが、第5-1 a面との差異はほとんどない。

5005 坪境畦畔は、辛うじてY-3・Y-4トレンチ断面の観察で判別できる程度で、平面的にはほとんど把握することができないが、南側に接する溝の存在から、Y-2トレンチ付近までおおよその位置を類推することが可能である。

島畠は調査区中央で継続的に営まれている5006 島畠のみである。耕作に伴う溝は、東西方向の溝が5005 坪境畦畔西端付近にて見つかった。前者は長さ0.7～4.7 m、幅0.1～0.2 m、後者は長さ0.8～2.5 m、幅0.2 mをそれぞれ測る。

**第5-2 a面出土遺物** 当面を精査中に瓦器椀1点、細片4点、瓦質土器細片6点、中世の土師器皿1点、計12点が出土した。

**第5-2 a層出土遺物** 当層を掘削中に33点の遺物が出土した。14世紀頃の土師器皿（36、37）10点、細片6点、瓦器椀・皿8点、中世の瓦質土器細片4点、須恵器細片3点、中世の瓦2点がある。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は14世紀から15世紀中頃と考えられており、矛盾は



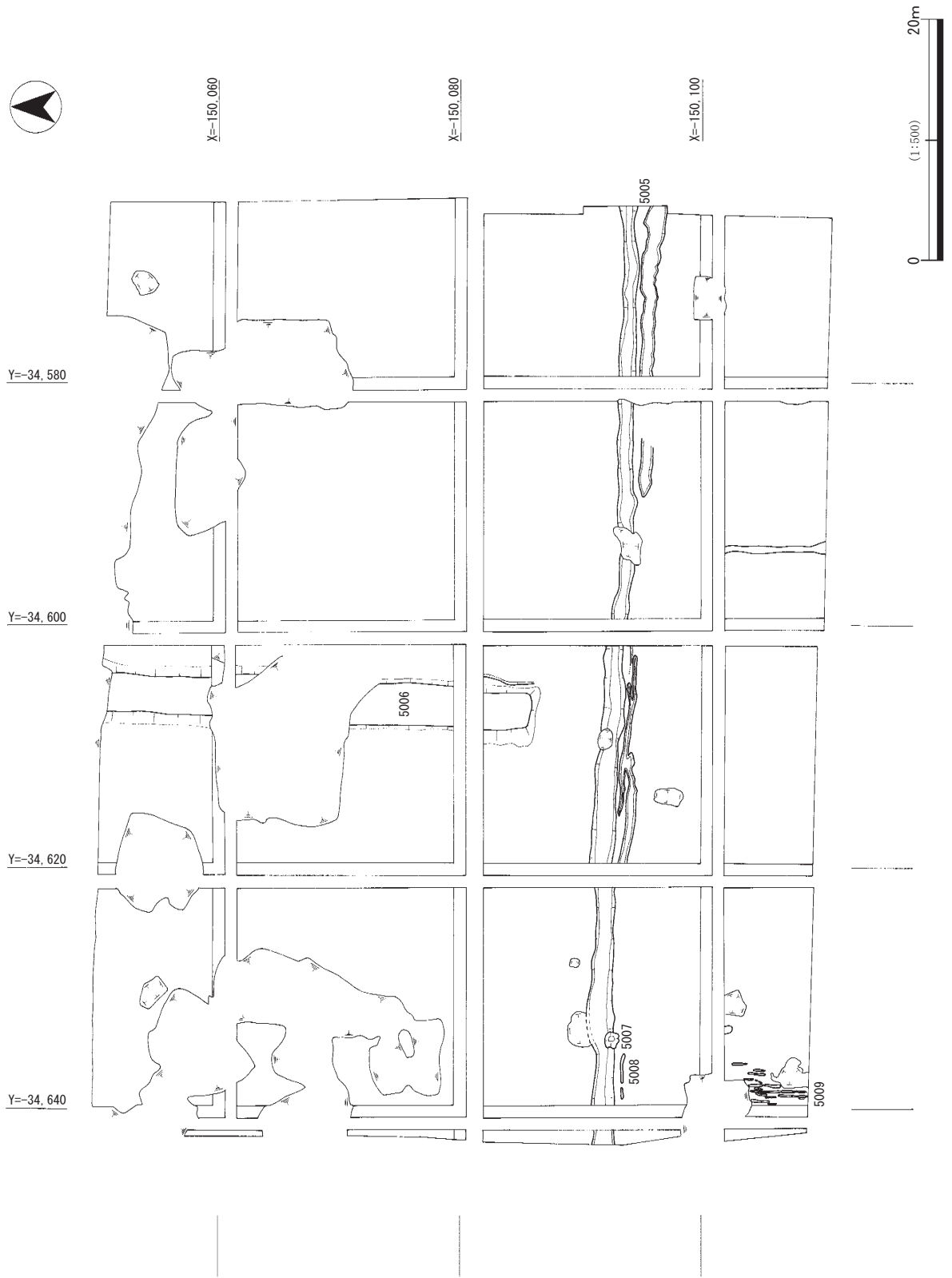
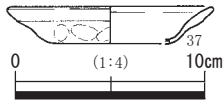


図30 第5-2a面平面図



ないと思われる。



#### 第6-1 a面・第6-1 a層 (図32～34)

第6-1 a面は、調査区南東部を中心に0.05 m程度堆積する第5-2 a層を掘削して検出した。調査区を東西に横切る坪境畦畔のほか、溝、土坑と坪境畦畔の北に島島を検出した。遺構面の標高は3.6～3.7 mで、調査区南西隅付近では3.8 mを測る。

Y-3・Y-4 トレンチ断面によると、6003 坪境畦畔は南に並行する溝状の落ち込みを考慮すれば、基底部の幅は1 m強だった可能性もあるが、高さは後世の改変を受けてわずか0.02 mしかない。Y-2 トレンチ断面では痕跡すらなく、並行する溝も確認できなかったことから、位置の特定は困難である。6003 坪境畦畔に沿って、溝1条と小規模な土坑を数基検出した。

6001 島島は第6-1 b層堆積後、それを芯として島島を形成するのではなく耕作地として利用され、次の第6-1 b層で述べる14基の島島が一様に廃絶した直後、第6-1 a層堆積中に機能し始めた島島である。よってこの島島は、ほかの島島のように第6-1 b層を芯とするのではなく、第6-1 a面上に周辺に堆積した土をかき集めたものが盛土となる。その規模は、第6-1 b層中で検出した14基の島島と比較しても群を抜く大きさで、最大幅6 m余を測り、第3-2 b層が堆積するまで存続する。調査区東半で検出した6002 島島も、同様に砂層を芯とはせずに第6-1 a層堆積中に形成した島島であるが、6001 島島のように長期間存続したわけではなく、そのほか14基の島島とともに廃絶したらしい。想定される検出長は約35 mで、坪境畦畔とは接しない。

**第6-1 a面出土遺物** 当面精査中に83点の遺物が出土した。瓦器碗・皿は33点あり、13世紀代が中心である。ほかに土師器皿28点、土師器細片10点、瓦質羽釜、鉢、甕が各1点、瓦質土器細片4点、古代の須恵器杯と細片が各1点、土師器細片2点、古墳時代の須恵器甕1点が出土した。

遺構では、6003 坪境畦畔から瓦器細片4点と土師器細片1点、6007 溝から土師器細片1点が出土した。

**第6-1 a層出土遺物** 当層を掘削中に388点の遺物が出土した。中世の土師器皿(38、39)が台付皿1点を含め92点、13世紀代中心の瓦器(40)が162点あり、供膳具で6割5分以上を占める。ほかに瓦質羽釜3点、甕2点、細片28点、土師器羽釜(43、44)4点、細片67点、東播系須恵質練鉢4点、中国製白磁碗(41)1点、中世の瓦3点、古代の遺物では黒色土器A類碗1点、土師器甕2点、須恵器杯身2点、杯蓋1点、細片12点、土師器ミニチュア土器高杯(42)1点が出土した。サヌカイト細片、砥石、鉄釘(45)も各1点出土している。

6001・6002 島島、6003 坪境畦畔の埋土と坪境畦畔など、耕作関係遺構から、遺物は60点が出土した。土師器皿12点、細片14点、東播系須恵質練鉢1点、須恵質土器細片1点、中国製白磁碗1点、瓦器碗・皿27点、瓦質羽釜三足1点、細片2点、中世の瓦1点である。

古代の遺物も散見されるが、当面・層の形成は12世紀後半から14世紀前半頃と考えられており、矛盾はないと思われる。また、坪境畦畔の遺物を取り上げる際に、上層出土の遺物が若干混じった可能性があるが、この年代の中に遺物はおさまると思われる。

#### 第6-1 b面・第6-1 b層 (図35～37)

第6-1 b面は、調査区全体に層厚0.1 m前後堆積する第6-1 a層を掘削して、検出した面である。



図32 第6-1a面平面図

ここで検出したのは、第6-1b層の母材である砂を芯として形成された島島12基である。

12基の島島のうち、坪境畦畔の北側では7基を検出した。これらの北端はすべて調査区外へのびる。6009・6010島島はX-2トレンチ以南、坪境畦畔の間で見つかった島島で、部分的にラミナの残る芯の部分が残る。南端が坪境畦畔に接したか否か、またX-2トレンチ以北の状況は不明瞭である。6011島島の南端は坪境畦畔付近で検出し、検出長は39mを測る。芯となる砂層はかなり明瞭にラミナが残る。6012島島は、南端があるいは坪境畦畔と接続した可能性のある島島で、芯の砂層では比較的明瞭にラミナを観察することができる。検出長は41mを測る。6013島島は、X-1トレンチの南側6mを南端とする当調査区では最も短い島島で、検出長は約17mを測る。芯の砂層は部分的に遺存する。6014島島は南端が不明瞭となり、砂層も遺存状態は必ずしも良好ではない。推定する検出長は約37mを測る。6015島島は検出長約37mで、部分的にラミナのある砂層が堆積する。

坪境畦畔以南では5基の島島を検出したが、これらはすべて調査区外へのびる。調査区南西端にある6016島島は、坪境畦畔のすぐ南側で検出し、ラミナが明瞭に残る砂層の遺構面上で数条の畝間の溝を検出した。同様に隣接する6017島島も、遺構面上で数条の畝間の溝を検出した。この両者の北端は、坪境畦畔とほとんど接しているように見える。6018島島はわずかに芯を形成する砂層が残り、北端は

不明瞭である。調査区東側に位置する6020島島も、芯を形成する砂層がわずかに残るのみである。

以上12基の島島は、いずれも第6-1b層堆積後に島島として機能し始め、第6-1a層堆積終了までの短期間存続し、廃絶した。

**第6-1b面出土遺物** 当面を精査中に中国同安窯系青磁碗(46)が1点出土した。

**第6-1b層出土遺物** 島島の芯部より土師器皿3点、13世紀頃の瓦器椀1点、瓦質土器細片1点、須恵器壺が各1点出土した。

#### 第6-2a面・第6-2a層(図38・39)

第6-2a面は、島島の芯を形成する第6-1b層を掘削して検出した面で、標高は3.4~3.5mを測る。調査区南半に東西に横切る坪境畦畔、その南北で溝や土坑、さらに

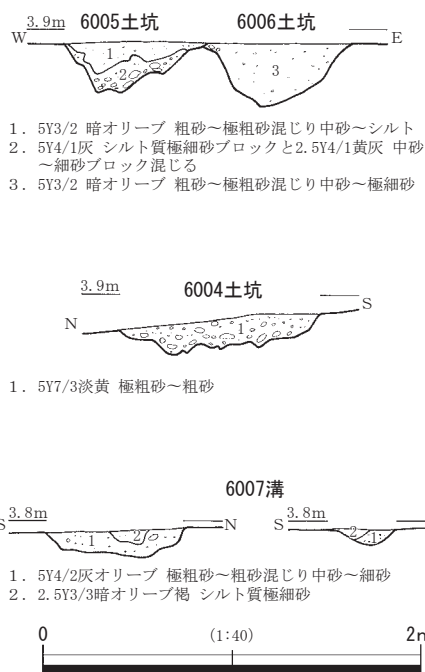


図33 第6-1a面遺構断面図

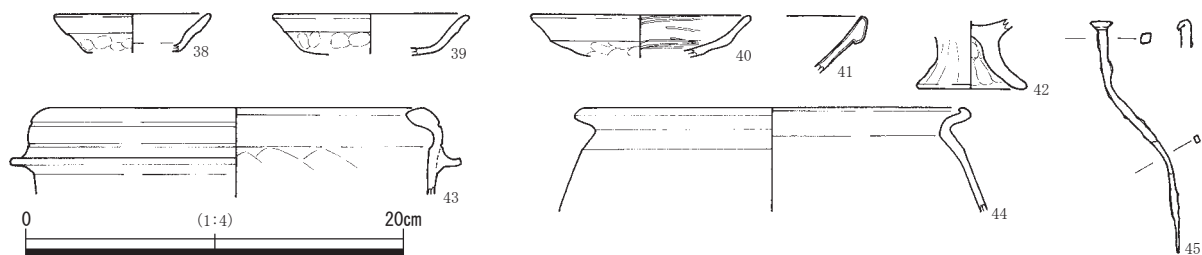


図34 第6-1a層出土遺物

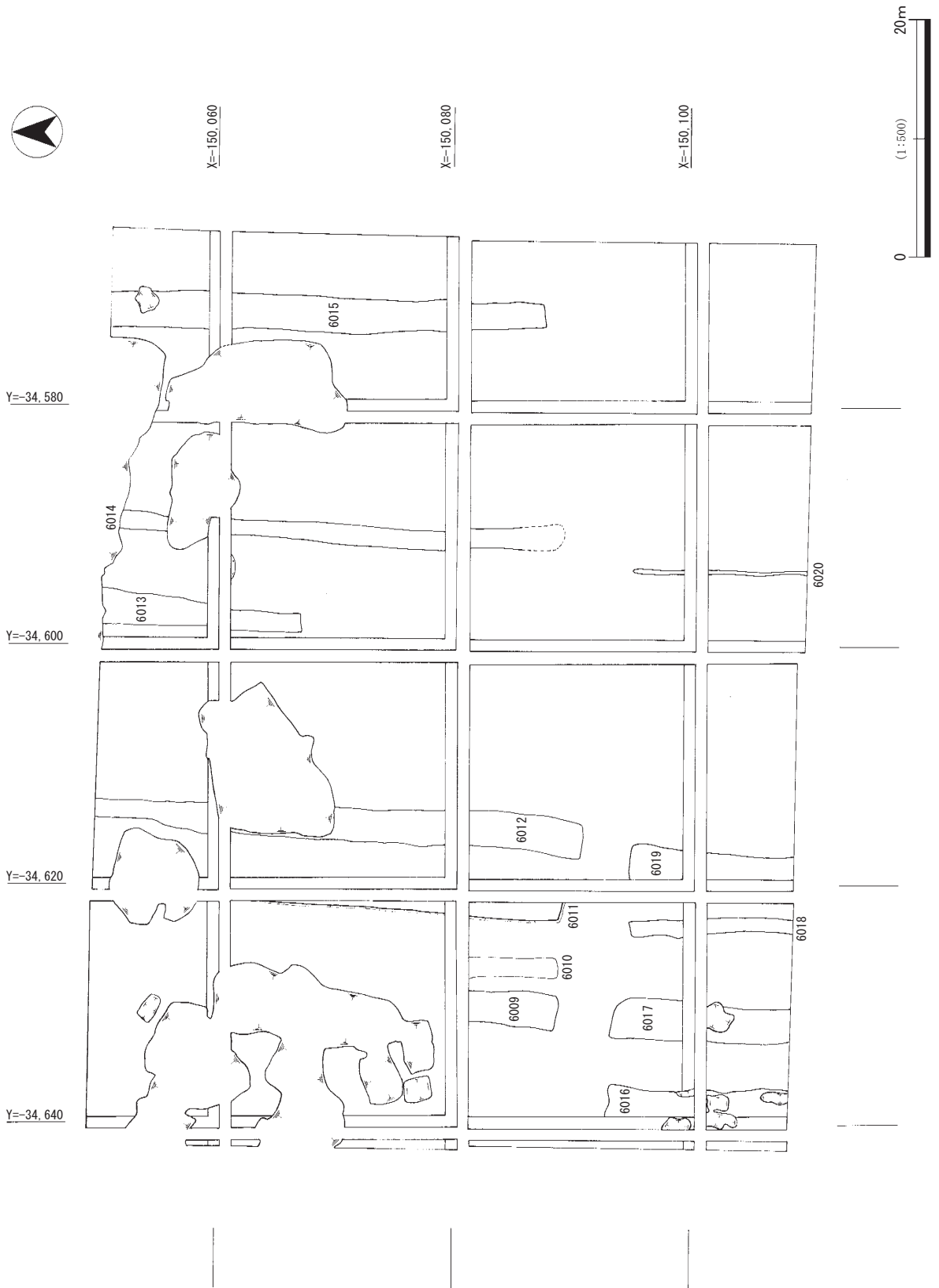
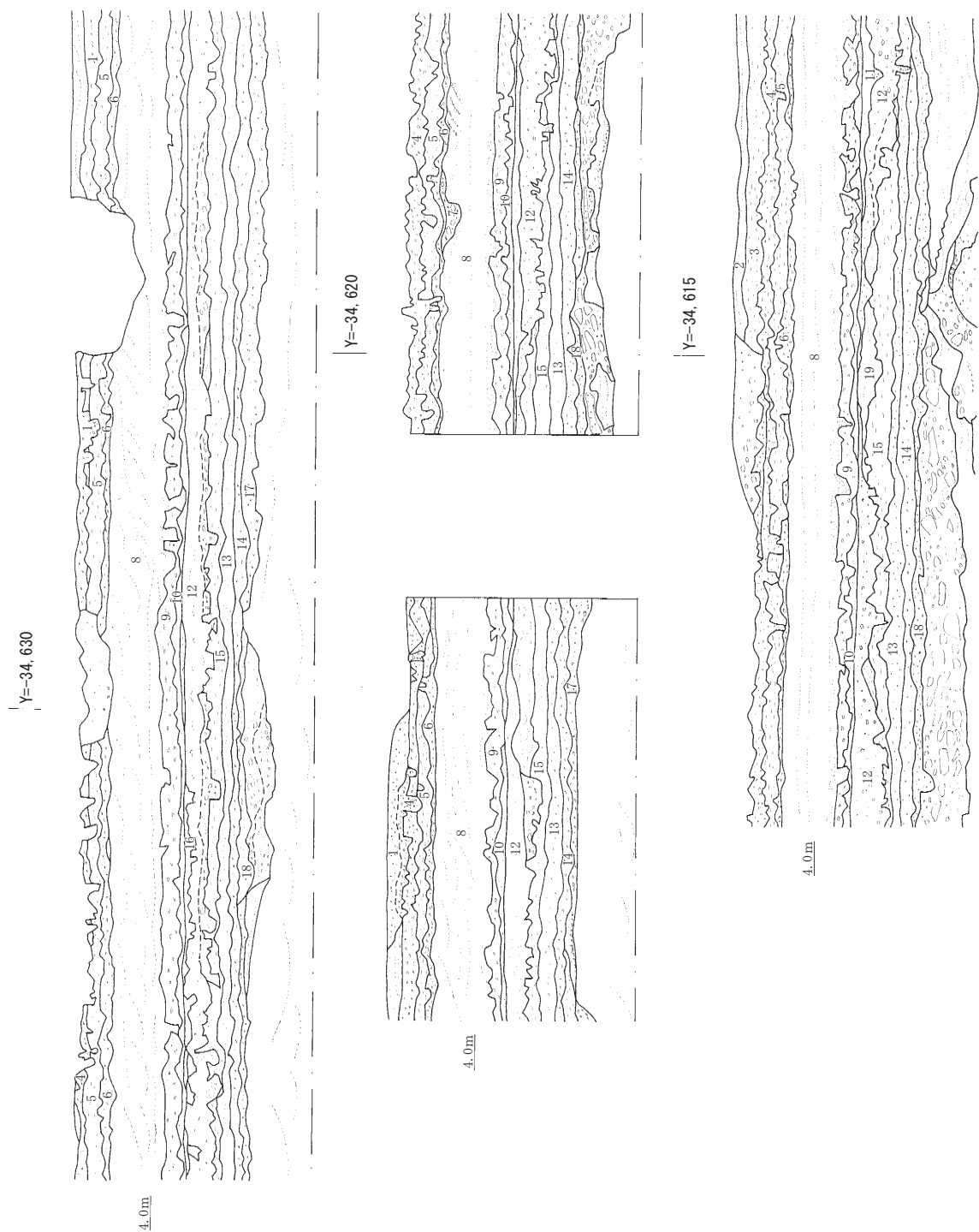


図35 第6-1 b面平面図



- 1. 第1a層(下)
- 2. 第1b層
- 3. 第2-1a層
- 4. 第2-1a層
- 5. 第2-2a層
- 6. 第2-3a層
- 7. 第3-1a層
- 8. 第3-1b層
- 9. 第3-2a層
- 10. 第4-2a層
- 11. 第6-1a層
- 12. 第6-1a層
- 13. 第7-1a層
- 14. 第7-2a層
- 15. 第6-2a層
- 16. 第5-1a層
- 17. 第7-3a層
- 18. 七坑の埋戻土
- 19. 第6-1b層



図36 第6-1b面島畠断面図

島畠や畠状の遺構を検出した。調査区中央北側に掘削された攪乱の底を第6-2 a面として精査した際、2057 井戸の存在を確認したのは既述のとおりである。

6022 坪境畦畔は、幅 0.5 ~ 1.5 m、高さはわずか 0.1 m前後の高まりとして確認した。数基の土坑を掘削したため、この坪境畦畔は数箇所に分断される。

第6-2 a面は島畠形成直前の耕作面、つまり第6-1 a面以降島畠の営まれた箇所であり、直下に畠状遺構の残る箇所、あるいは残らない箇所をそれぞれ確認した。6023 高まりは、調査区西端にて検出した高さ 0.02 m程度の高まりで、高まりの中では畝間溝のような耕作痕は確認できなかった。なお、直上でも第6-1 b層は堆積しておらず、島畠の名残とは考えにくい。南端は坪境畦畔に接することなく、調査区内の攪乱を経て、北側の調査区外へと伸びる。残存長約 38 m、最大幅 3 mを測る。

畝間の溝らしき溝が残る畠状遺構は、調査区西半ならびに北東に集中する傾向があった。第6-2 b面の6024 ~ 6028 畠状遺構で島畠の芯を構成する砂層直下では、ほかよりやや盛り上がった第6-2 a面を検出し、粗密の差はあれ畝間の溝を確認した。6029 島畠では、その北半部分で畝間の溝を検出した。これらのうち6024・6027・6028 島畠の先端は、坪境畦畔と極めて近接しており、あるいは接続していた可能性もある。

**第6-2 a面出土遺物** 当面を精査中に 108 点の遺物が出土した。13 世紀代を中心とした遺物が多い。瓦器椀 (49)・皿が 73 点、土師器皿が 21 点と供膳具が大半を占める。さらに、土師器細片 9 点、瓦質三足羽釜 1 点、細片 2 点、東播系須恵質練鉢、瓦、鉄釘が各 1 点出土している。ほかに、6022 坪境畦畔から木製品が 1 点出土している。

**第6-2 a層出土遺物** 当層を掘削中に 499 点の遺物が出土した。瓦器椀 (50)・皿が 315 点と圧倒的に多く、次いで土師器皿 84 点である。ほかに土師器羽釜 5 点、細片 62 点、瓦質甕 2 点、羽釜 1 点、三足羽釜 (48) 4 点、細片 4 点、東播系須恵質練鉢 4 点、古代、中世の瓦が各 1 点、陶器細片 1 点、古代では須恵器杯蓋、甕各 1 点、細片 8 点、黒色土器 A 類細片 2 点、サヌカイト細片 1 点、木製品 2 点が出土している。種子類も採取している。

坪境畦畔、島畠など耕作関係遺構にて 135 点を検出した。13 世紀代を中心とした瓦器 78 点、中世の土師器皿 20 点と、やはり供膳具が大半を占める。ほかに土師器羽釜 4 点、甕 1 点、細片 23 点、瓦質甕 (47) 2 点、三足羽釜 1 点、細片 1 点、中世の瓦 1 点、古代の須恵器杯 1 点、細片 2 点、弥生土器高杯 1 点がある。

古代以前の遺物も散見されるが、当面・層の形成は 12 世紀後半から 14 世紀前半頃と考えられており、矛盾はないと思われる。

### 第6-3 a面・第6-3 a層 (図 40 ~ 42)

第6-3 a面は、調査区西半では 0.1 m前後、東半では 0.03 m程度堆積した第6-2 a層を掘削したのちに検出した面で、標高は 3.5 ~ 3.6 mを測る。検出した遺構は、調査区南半を東西方向へのびる坪境畦畔、それを挟む南北で見つかった土坑、島畠である。

6045 坪境畦畔は、途中で土坑や水口により寸断されているが、調査区南半を東西方向に横切る。幅 0.7 ~ 1.5 mを測るが、必ずしも遺存状態が良好とは言えず、高さは多くの箇所でも 0.04 m程度しか確認で

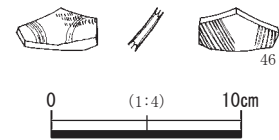


図37 第6-1 b面  
出土遺物

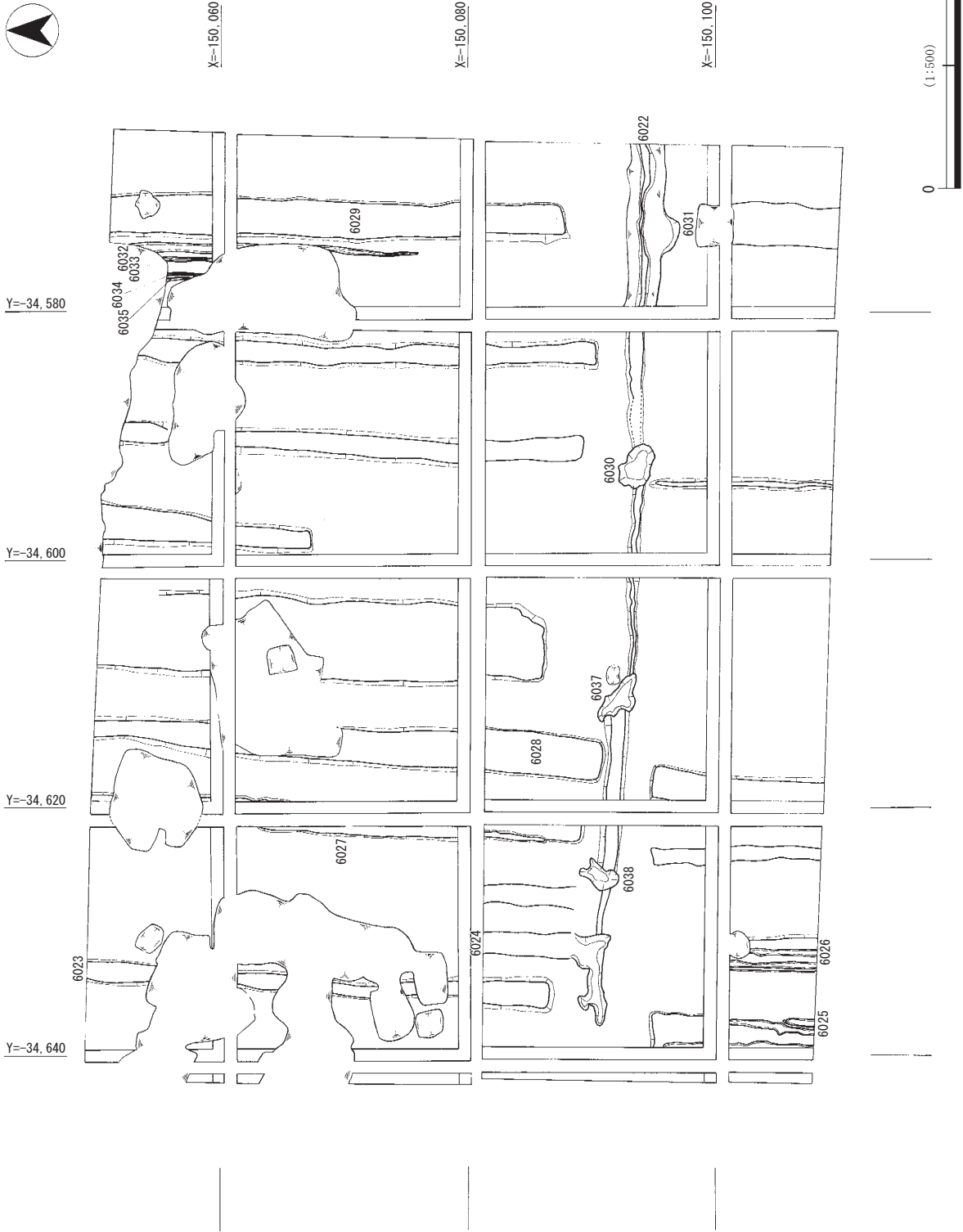


图38 第6-2a面平面图



きなかった。しかし坪境畦畔として整備されており、続く第7-1 a面の坪境畦畔が第8面に見られる歪な形態の名残を留めているのとは極めて対照的である。

6040 高まりは調査区東端、X-2トレンチ以北で検出した南北方向の高まりである。検出長は17 m余で、第6-3 a層があまり擾乱されていない箇所もしくは第6-3 b層が、緩やかな畦状を呈する。また調査区中央、X-2トレンチ以北でも畦状の高まりを検出した(6049 高まり)。

調査区東端付近で6039・6041土坑を検出した。6039土坑は長辺約6 m、短辺約3 m、6041土坑は長辺3.5 m、短辺1 mをそれぞれ測る。

調査区中央では、主軸を約15°東へ振った6047島畠を検出した。X-2トレンチではわずかに島畠の芯と思しき第6-3 b層が、またY-3トレンチでも同様の第6-3 b層が残ることから、これを島畠と判断した。おおよその規模は、東西約5 m、南北17 mを測る。なお6047島畠の北東隅と南東隅付近で、拳大の自然石を検出した。何らかの境界を示す石かもしれない。また調査区東半、Y-4トレンチに沿って6043島畠を検出した。これは、X-2トレンチとの交点付近で第6-3 b層をかるうじて確認したもので、検出長は約15 mを測る。6044島畠は、坪境畦畔を挟んで6043島畠の真南にある。やはりかるうじて残った芯となる第6-3 b層が、X-3トレンチ・Y-4トレンチの交点で確認できる。これらの島畠は、いずれも第6-3 a層中で廃絶する。

**第6-3 a面出土遺物** 当面を精査中に105点の遺物が出土した。中世の土師器皿(54)24点、土師器細片8点、瓦器椀・皿69点と、供膳具関係が大半を占める。中国龍泉窯系青磁碗(56)1点、須恵器甕1点、細片2点もある。

**第6-3 a層出土遺物** 当層を掘削中に451点の遺物が出土した。瓦器椀(55)・皿は258点あるが、うち15点は12世紀代に遡る可能性がある。土師器皿類は93点で、大半は中世段階に属するであろう。ほかに瓦質三足羽釜(53)7点、東播系須恵質練鉢(51、52)7点、細片9点、中世の陶器細片4点、中国製白磁碗と青白磁合子蓋(57)が各1点ある。瓦(58、59)は8点あるが、多くは古代に属すると思われる。古代の土師器は羽釜14点と杯類1点と甕2点、細片37点、黒色土器はA類細片が3点、B類は甕と細片が各1点ある。環状鉄製品(60)、滑石製紡錘車(61)、弥生土器細片も各1点出土した。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は12世紀後半から14世紀前半頃と考えられており、矛盾はないと思われる。

## 第4節 古代

### 第7-1 a面・第7-1 a層(図43~45)

第7-1 a面は、層厚平均0.1 mの第6-3 a層を掘削して検出した遺構面である。所によっては、ブロック状になった第6-3 b層を掘削して検出した箇所もある。遺構面の標高は3.3~3.5 mを測る。

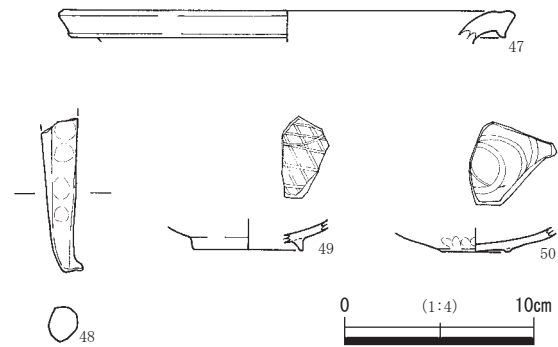


図39 第6-2 a面・第6-2 a層出土遺物

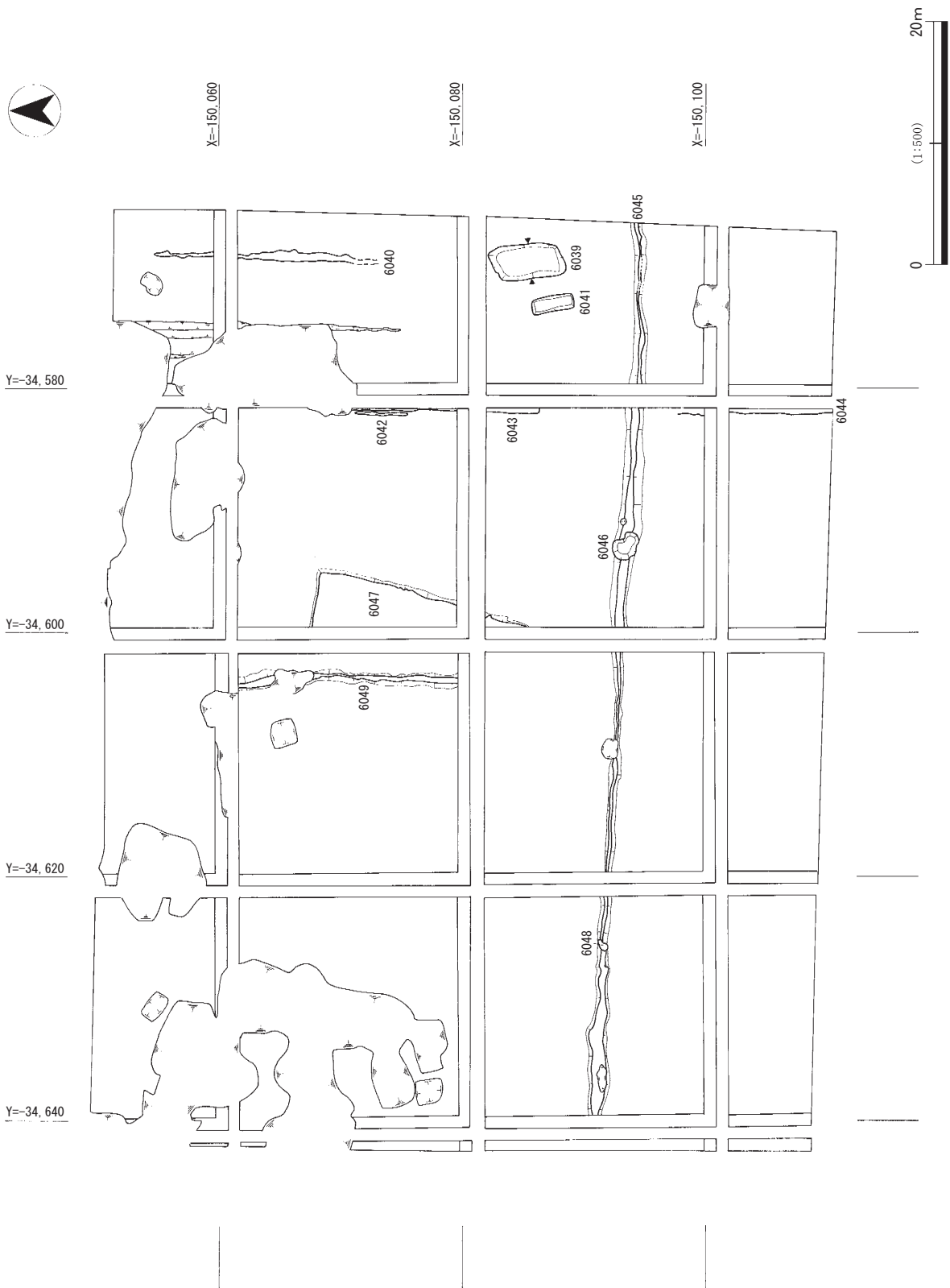


图40 第6-3 a面平面图

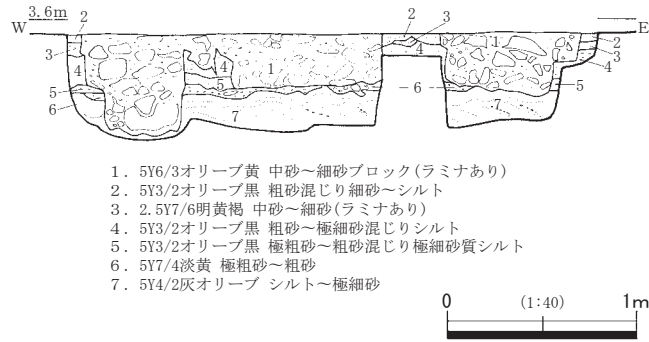


図41 第6-3 a面6039土坑断面図

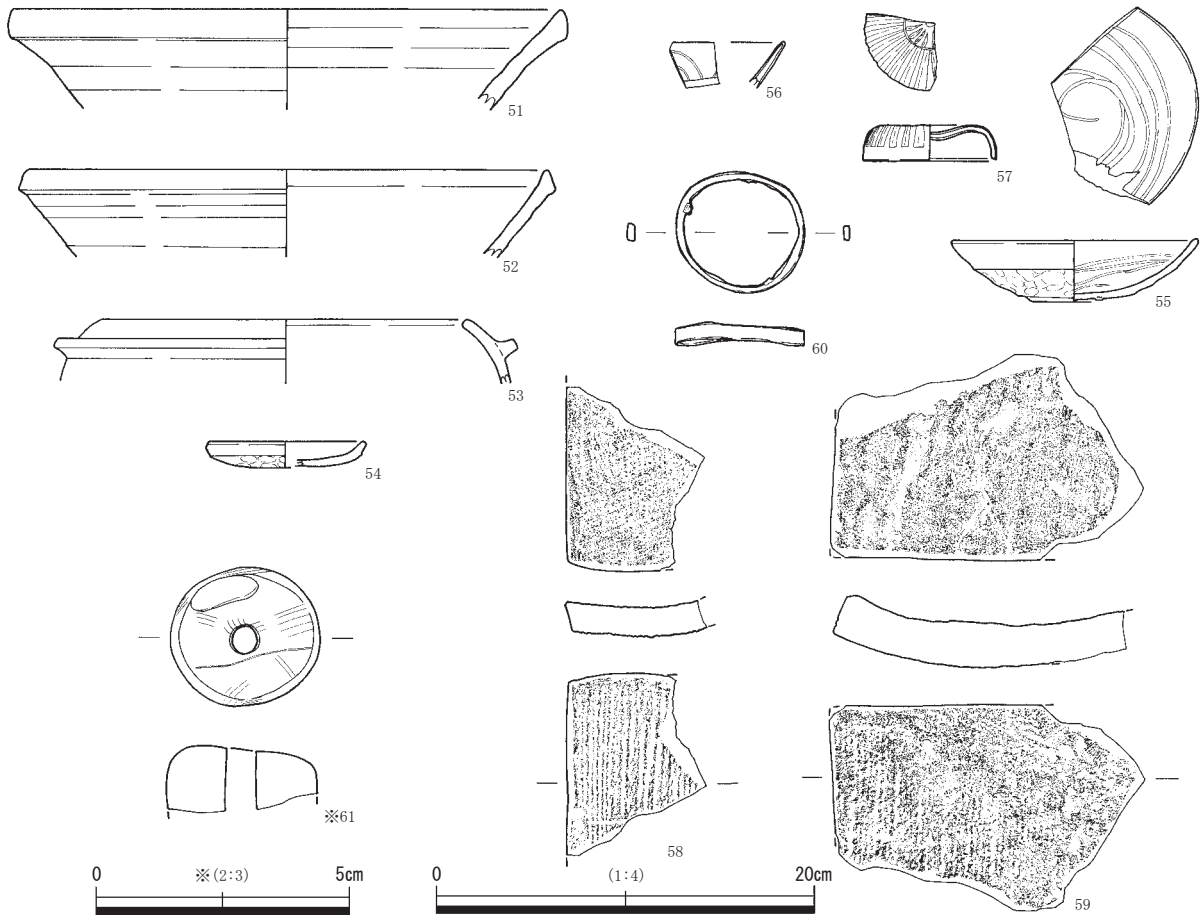


図42 第6-3 a面・第6-3 a層出土遺物

検出した遺構は、坪境畦畔、畦畔、溝、土坑などである。

7007 坪境畦畔は、調査区南東隅付近のX = - 150,094 付近で東端を検出した。高さは0.1 m前後。ところがY-4トレンチ以西では、その延長線上に坪境畦畔を検出することができず、第7-1 a面に後述する第8-2 a面の歪な坪境畦畔の輪郭が現れた。この広がり、調査区中央西側まで確認できた。

南北方向の畦畔を3条検出した。第6-3 a面で頂部が露出していた7018 畦畔は、元来畦状に成形した第7-3 a層に第7-1 a層を付加したもので、調査区中央をほぼ南北にのびるが、X-1トレンチ以南あたりから徐々に不明瞭となる。畦畔北側は調査区外へのびる。調査区東端にて検出した7014 畦畔は、畦状の高まりの上面に第6-3 b層起源のラミナがブロック状に残っていることから、畦畔と判断した。また7019 畦畔は、第7-3 a面の畦畔の頂部が当遺構面に露出したもので、X-1トレン

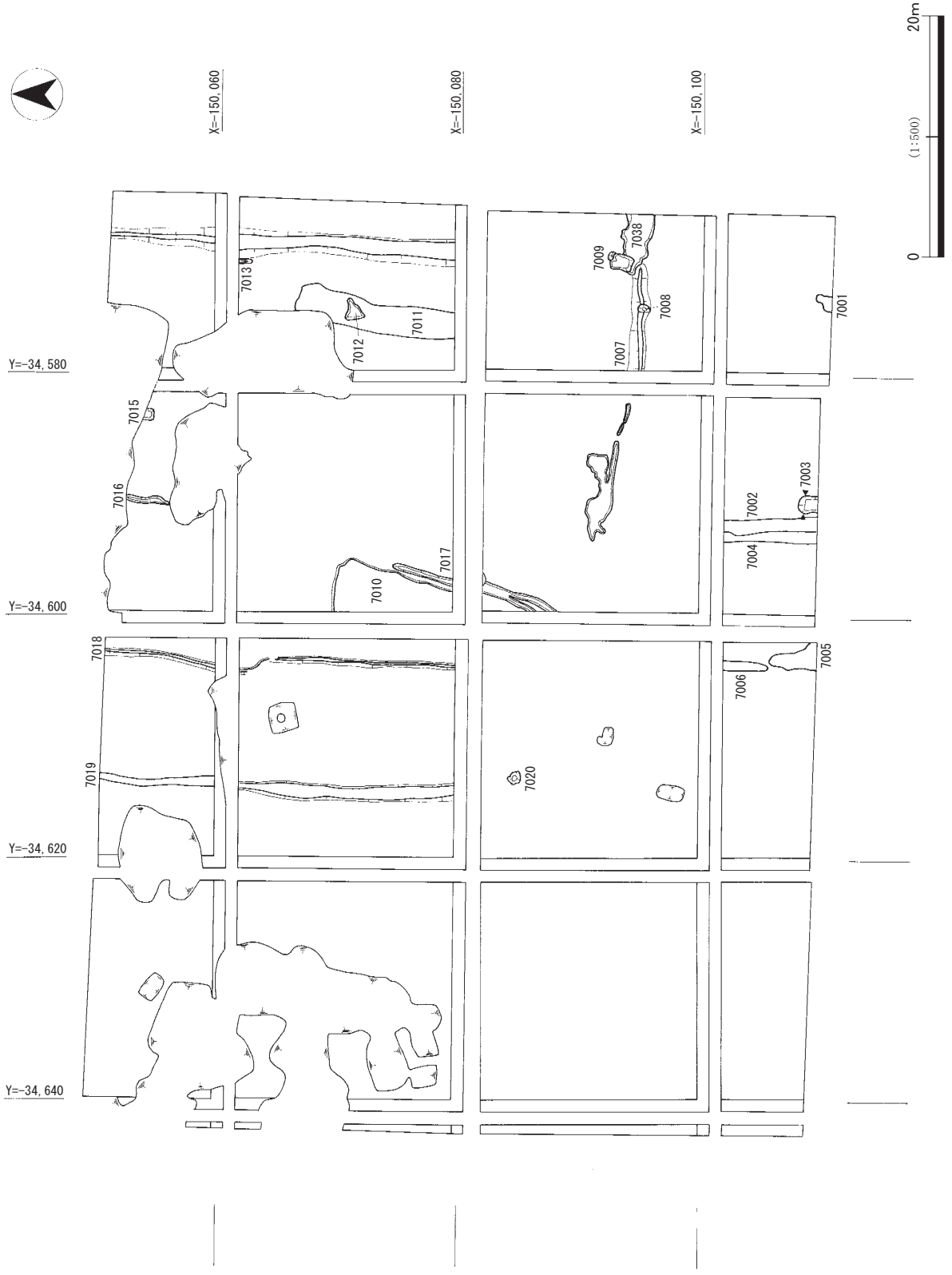


图43 第7-1a面平面图

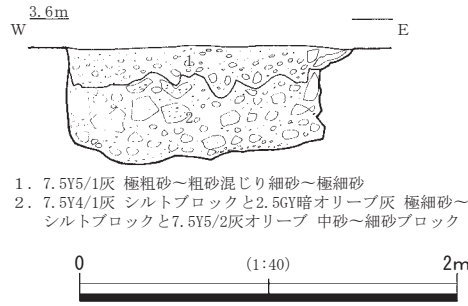


図44 第7-1 a面7003土坑断面図

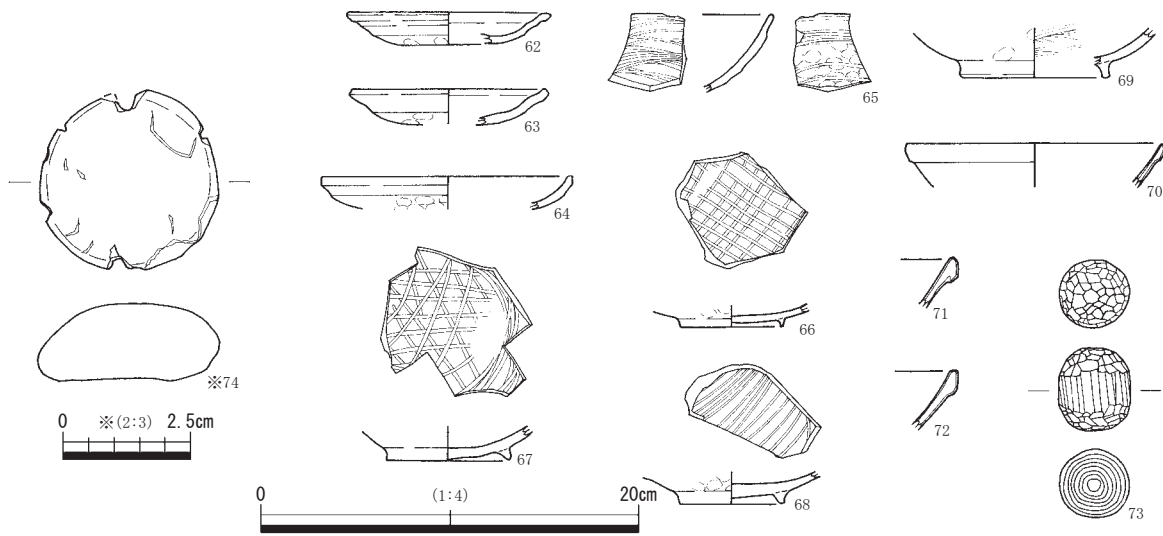


図45 第7-1 a面関連・第7-1 a層出土遺物

チ以南はその範囲が不明瞭になる。

7017 溝は、第6-3 a面検出の6047 島島の東辺跡に沿って検出した。全長13 m以上、深さ0.09 mを測る。この東側には耕作痕が目立つことから、この7017 溝も耕作関連の溝かもしれない。このほか、土坑は調査区東半で確認した。

**第7-1 a面出土遺物** 当面を精査中に49点の遺物が出土した。土師器皿13点、須恵器杯1点、瓦器椀・皿は29点あるが、うち9点は12世紀代に属するであろう。ほかに、土師器羽釜1点、土製円盤(74)1点、土師器細片3点や須恵器細片1点がある。

遺構からは7008土坑から土師器皿1点、7003土坑から土師器細片2点と瓦器椀(69)2点、7017溝から瓦器椀1点が出土した。瓦器椀は高台部のみが残存し、Ⅱ期・12世紀代に属すると考えられる。

**第7-1 a層出土遺物** 当層を掘削中に375点の遺物が出土した。土師器椀・皿類(62~64)142点、羽釜1点、細片91点、瓦器椀(65~68)・皿110点、瓦質土器細片1点、中国製白磁碗(70~72)4点、黒色土器A類細片2点、B類細片1点、瓦6点、須恵器甕3点、杯身3点、細片10点、弥生土器細片1点が出土した。木製品に、毬杖の毬(73)が出土している。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は12世紀頃と考えられており、第7-1 a面出土の瓦器類にはやや新しい様相もみられるが概ね矛盾はないと思われる。

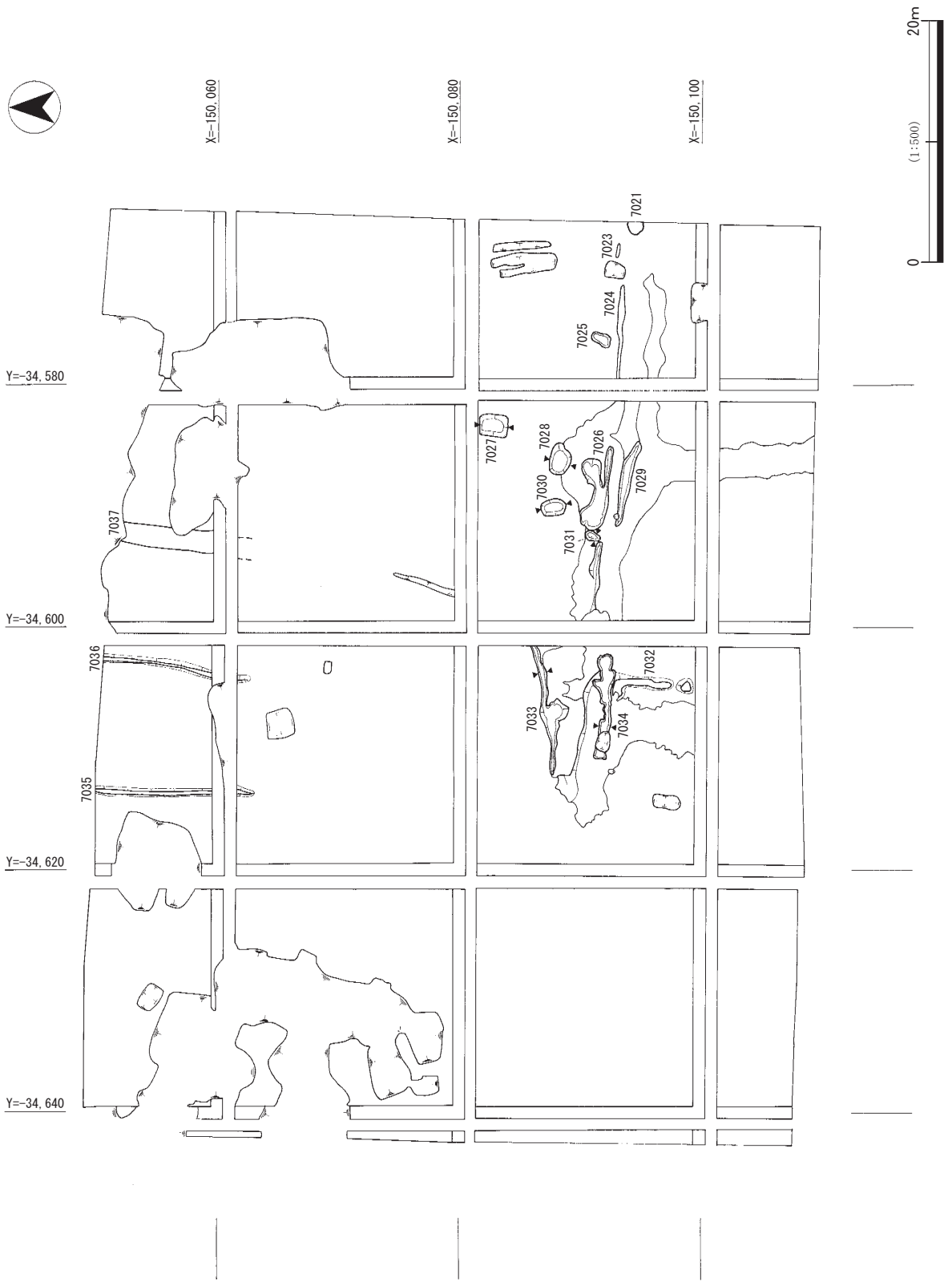


图46 第7-3 a面平面图

第7-3 a面・第7-3 a層 (図46～48)

第7-3 a面は、調査区全域ではほぼ0.1 m厚に堆積した第7-1 a層を掘削し検出した遺構面である。当調査区内には第7-2 a層はない。標高3.3～3.4 mを測る。検出した遺構は、坪境畦畔、畦畔、溝、土坑などである。

第8-1 a層で構成される坪境畦畔は、第7-1 a層を掘削した結果、所々露出箇所が増大する。しかし第7-1 a面7007坪境畦畔は、当遺構面で検出した第8-1 a面坪境畦畔に継承されない。

この坪境畦畔に接して、南北方向の7032畦畔、調査区北辺にて7035畦畔と7036畦畔を検出した。このうち7032畦畔は検出長6 m、幅1 m、高さ0.08 m、7035畦畔は検出長13 m、幅0.5 m、高さ0.03 m、7036畦畔は検出長12 m、幅0.7 m、高さ0.17 mを測り、後二者の南端はいずれもX-1トレンチ南側で不明瞭となり、北端は調査区外へのびる。

坪境畦畔周辺で土坑や溝状の落込みを検出した。7027・7028・7030土坑は、いずれもブロック土で埋められるが、機能時堆積層のある7028・7030土坑と機能時堆積層のない7027土坑の違いがある。また埋土の状況から、第7-1 a層下面遺構と判断できるもの(7033溝・7034溝状落込み)もある。

調査区中央北端付近で検出した7037島畠は、第7-3 a層堆積中に機能し廃絶したものである。

**第7-3 a面出土遺物** 当面を精査中に57点の遺物が出土した。土師器皿・杯22点、細片17点、瓦器椀(77)12点、須恵器杯身2点、杯蓋1点、甕2点、細片1点と種子類を採取した。

7030土坑から黒色土器A類椀2点、瓦器細片1点、土師器細片1点、7027土坑から土師器皿



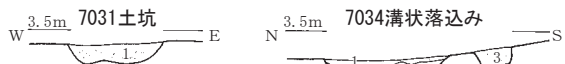
1. 5Y4/1灰 シルトブロックと5Y3/2暗オリーブ 極粗砂～粗砂質極細砂～シルトブロックと2.5Y5/4黄褐 極粗砂～細砂ブロック混じる
2. 2.5Y4/1暗オリーブ灰 極細砂質シルトブロックと5Y3/2暗オリーブ 極粗砂～粗砂質極細砂～シルトブロック混じる
3. 2.5GY4/1暗オリーブ灰 極細砂質シルトブロックと7.5Y4/2灰オリーブ 粗砂～中砂ブロックと5Y3/2暗オリーブ 極粗砂～粗砂質極細砂～シルトブロック混じる



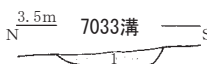
1. 5Y4/1灰 極細砂混じりシルトブロックと5Y4/4暗オリーブ 極粗砂～粗砂
2. 5Y4/1灰 極細砂混じりシルト大ブロック
3. 5Y4/1灰 極細砂混じりシルト小ブロックと7.5Y4/1灰 極粗砂～粗砂混じり中砂～細砂ブロック混じる



1. 7.5Y3/1オリーブ黒 極粗砂～粗砂混じりシルトブロックと10Y4/1灰 極粗砂～粗砂混じり中砂～細砂ブロックと5Y5/4暗オリーブ 極粗砂～中砂ブロックが混じる
2. 5Y4/1灰 シルト～5Y8/2灰白 極粗砂～粗砂(ラミナあり)の互層
3. 5Y7/4淡黄 極粗砂～粗砂



- |   |   |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 5Y4/2灰オリーブ シルトと5Y5/4オリーブ 細砂～極細砂のラミナの互層</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 5Y5/1灰 極細砂～細砂混じりシルト</li> <li>2. 10Y4/1灰 シルト質極細砂</li> <li>3. 5Y4/2灰オリーブ 中砂混じり細砂～極細砂</li> </ol> |
|---|---|



1. 5Y3/2オリーブ黒 細砂混じりシルト質極細砂

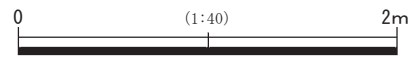


図47 第7-3 a面遺構断面図

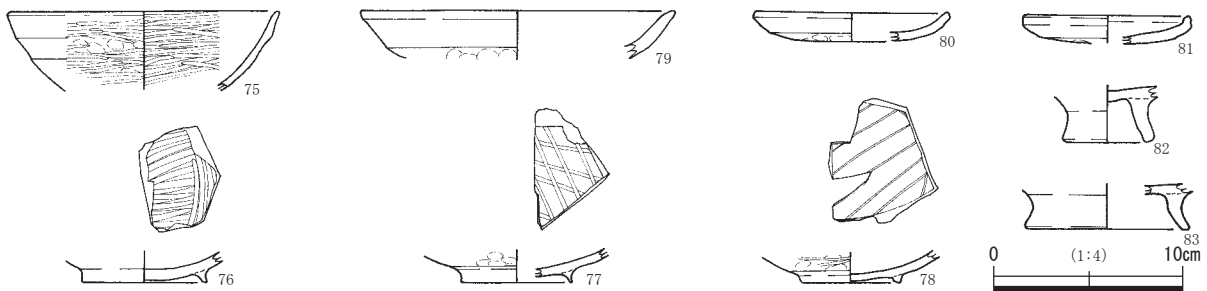


図48 第7-3 a面・第7-3 a層出土遺物

3点、細片2点、古墳時代の甕1点、瓦1点、7029 溝状落込みから土師器細片1点が出土した。

**第7-3 a層出土遺物** 当層を掘削中に219点の遺物が出土した。土師器杯・皿(79~81)が51点、細片93点、瓦器椀(75、76、78)・皿が39点である。台付土師器皿(82、83)2点、黒色土器A類細片6点、須恵器は杯身4点、杯蓋1点、高杯2点、甕5点、壺1点、細片4点がある。鉄製刀子も1点出土した。古墳時代の遺物は古式土師器を含め、甕5点、壺1点、高杯1点がある。ほかに、弥生土器細片1点、サヌカイト細片1点、焼成粘土塊1点がある。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は11世紀後半から12世紀前半頃と考えられており、矛盾はないと思われる。

### 第7-3 b面・第7-3 b層(図49~56)

第7-3 b面は、調査区全域で概ね0.1 m厚に堆積した第7-3 a層を除去して検出した。調査区中央北側では、第7-1 a層掘削後に当遺構面が露出した箇所もある。坪境畦畔の第8-1 a層露出部分以外にて、第7-3 b面を検出した。検出した遺構は、溝、土坑、ピット列群などであるが、遺構そのものは第7-3 a面からの掘り込みであろう。第7-3 b層は第8-2 a面(一部第8-1 a面)を覆った分厚い洪水砂層で、標高は3.2~3.3 mである。

調査区の中央付近で、南北方向の溝を多数検出したが、調査区北東隅あるいは南西隅では、馬鍬痕を含む多数の耕作痕が見つかった。またこれらの溝とともに多数の土坑も確認している。

調査区中央、X-2・Y-3トレンチ交点付近で、7065~7067土坑を検出した。これらのうち最初に掘削された7067土坑は、長軸6 m前後、短軸5 m前後を想定、深さ0.8 mを測り、ブロック土にて埋め戻したような状況を呈する。7067土坑埋没後に掘削された7065土坑は、長軸2 m弱、短軸1 m余を想定、深さ0.5 m、7066土坑の長辺2.5 m、短辺1.4 m、深さ0.7 mをそれぞれ測る土坑で、いずれもブロック土によって埋め戻されていた。

ところで、この遺構面を特徴づける遺構として、調査区南西側で検出したピット列群がある。これらは概ね直径0.5 m前後、検出面からの深さ0.2 m未満の円形もしくは楕円形のピットが、数基~十数基ずつで一単位(2~8 m)を形成し串団子状に並んだものである。方向は概ね北西~南東、もしくは西北西~東南東を向く。このピット群の分布域・方向は、一帯の洪水砂が流れた範囲・方向と一致する。このうち7132ピットの埋土中から、短刀とその直下から鞆が出土した。しかしそのほかのピット群から、遺物はほとんど出土しなかった。

**第7-3 b面出土遺物** 当面を精査中に36点の遺物が出土した。土師器皿(87・90)5点、細片23点、瓦器椀(92)3点である。古墳時代の土師器壺・甕各1点、須恵器壺2点、黒色土器A類細片1点があり、種子類も採取した。

遺構からは31点の遺物が出土した。7040土坑から土師器壺4点、細片5点、須恵器高杯、甕各1点、鉾滓1点、7057土坑から土師器皿1点、7058土坑から土師器皿(86)1点、7067土坑から土師器皿1点、細片7点と獣骨・歯細片7片(骨6、歯1)、7072土坑からⅡ期の瓦器椀1点、土師器細片1点、7132ピットから短刀(84)と同刀鞆(85)、7117・7195ピットから土師器細片が各1点、7196ピットから須恵器細片1点、7048溝からⅡ期の瓦器椀細片、土師器皿細片が各1点である。

**第7-3 b層出土遺物** 当層を掘削中に529点の遺物が出土した。土師器杯・皿(88、89)41点はじめ羽釜9点と続き、高杯4点、椀(93)3点、鉢1点、古式土師器5点を含み壺・甕18点、竈2



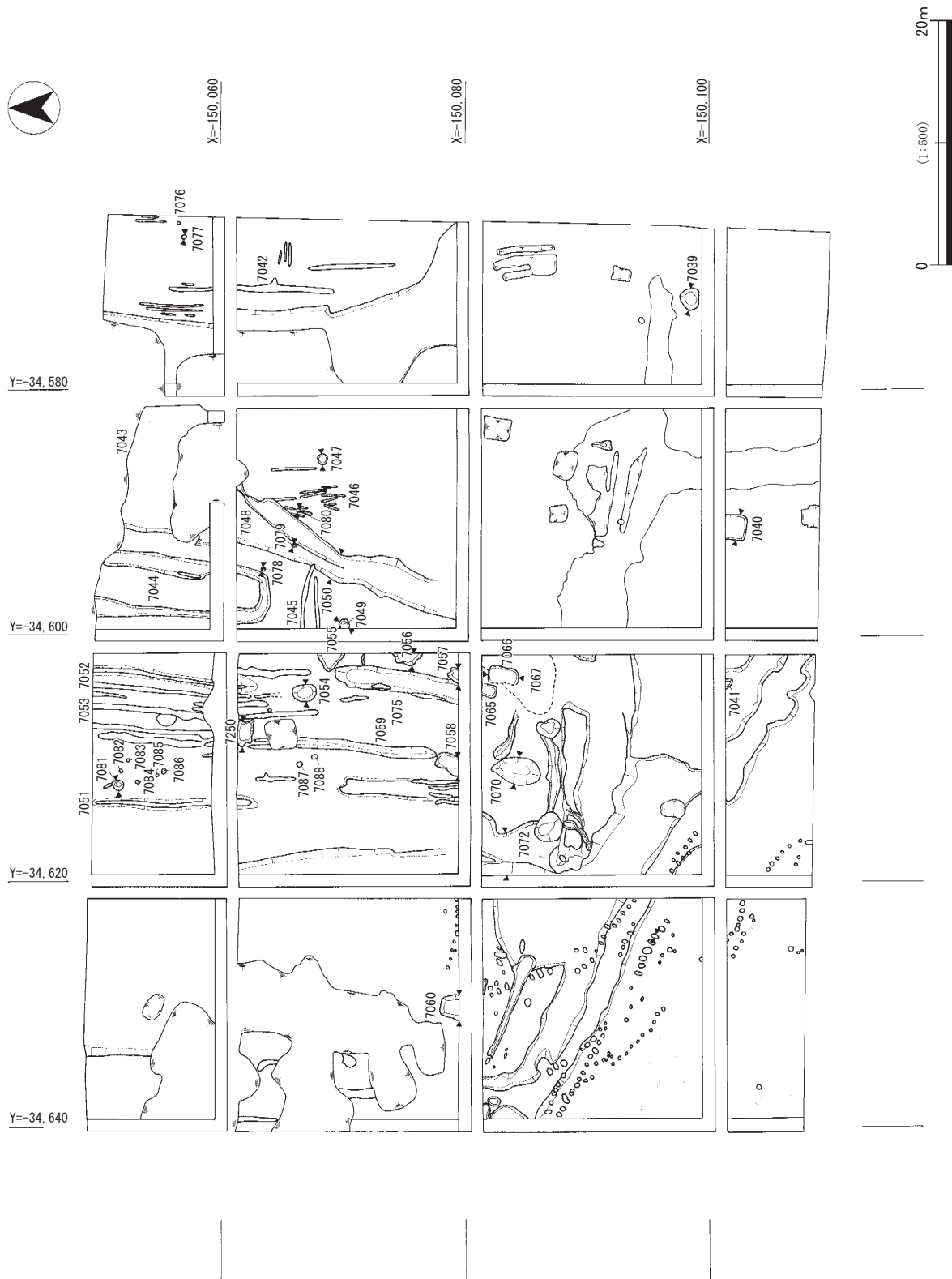
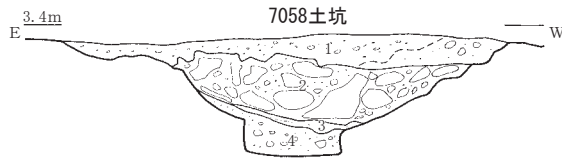


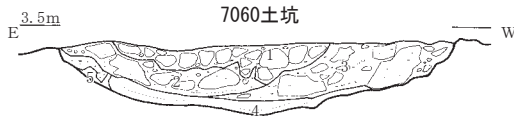
図49 第7-3b面平面図



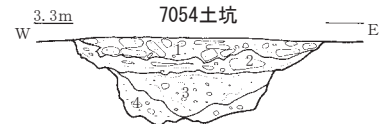
1. 7.5Y3/2オリーブ黒 シルト～極細砂混じり粗砂～中砂
2. 5Y6/4オリーブ黄 極粗砂～粗砂
3. 10Y4/1灰 シルト (ラミナあり)
4. 5GY5/1オリーブ灰 極粗砂～粗砂



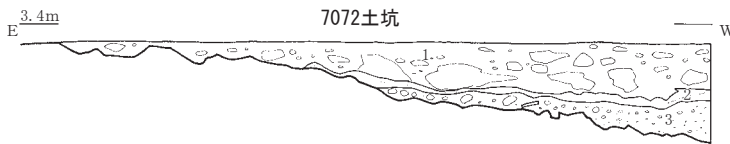
1. 10Y4/1灰 粗砂～中砂混じり極細砂質シルト
2. 10Y4/1灰 シルトブロックと10Y3/1オリーブ黒 中砂～細砂混じり極細砂質シルトブロックが混じる
3. 7.5Y4/2灰オリーブ シルト～極細砂混じり極粗砂～粗砂
4. 7.5Y3/2オリーブ黒 シルト (ラミナあり)
5. 10Y4/1灰 極粗砂～細砂



1. 5Y3/1オリーブ黒 極細砂質シルトブロックと5Y4/1灰 極細砂～細砂ブロック混じる
2. 5Y5/4オリーブ 極粗砂～粗砂 下部に7.5Y3/2オリーブ黒 極細砂～細砂の五層 (ラミナあり)
3. 10Y3/1灰 細砂～極細砂～5Y5/4オリーブ 極粗砂～粗砂
4. 5Y3/1オリーブ黒 シルト質極細砂 (ラミナあり)
5. 5Y3/2オリーブ黒 シルト質極細砂



1. 2.5Y5/4黄褐 極粗砂～粗砂
2. 5Y6/4オリーブ黄 極粗砂～粗砂
3. 10Y5/1灰 極細砂～細砂混じり極粗砂～粗砂
4. 10Y6/1灰 極粗砂～粗砂



1. 7.5Y3/1オリーブ黒 極細砂質シルトブロックと7.5Y3/2オリーブ黒 中砂～細砂の粒団、シルト質極細砂ブロック混じり、5Y5/4オリーブ 極粗砂～粗砂
2. 7.5Y3/2オリーブ黒 粘土質シルト
3. 7.5Y3/2オリーブ黒 粘土質シルトブロックと7.5Y3/2オリーブ黒 極細砂～シルト混じり極粗砂～粗砂ブロック混じる



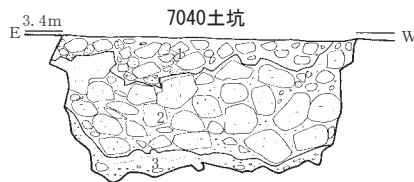
1. 7.5Y3/2オリーブ黒 シルト質極細砂ブロックと10Y3/1オリーブ黒 シルト質極細砂ブロック、7.5Y5/3灰オリーブ 粗砂～中砂ブロックと7.5Y4/1灰 極細砂質シルトブロック混じる



1. 7.5Y3/1オリーブ黒 極細砂混じり粘土質シルトブロックと2.5Y4/4オリーブ褐 シルト混じり極粗砂～粗砂混じる
2. 7.5Y3/1オリーブ黒 粘土質シルト
3. 10Y3/1オリーブ黒 極細砂質シルト
4. 7.5Y4/1灰 極粗砂～粗砂



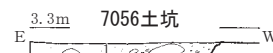
1. 2.5Y6/4浅黄 極粗砂～粗砂
2. 7.5Y3/2オリーブ黒 細砂～極細砂質シルト
3. 2.5Y6/4にぶい黄 極粗砂～粗砂



1. 7.5Y3/2オリーブ黒 極細砂混じりシルト質極細砂ブロックと7.5Y3/2オリーブ黒 中砂～細砂混じり極細砂質シルトブロックと5Y4/2灰オリーブ 極細砂質シルト混じり極粗砂～中砂ブロック混じる
2. 7.5Y4/1灰 シルトブロックと7.5Y3/1オリーブ黒 粘土質シルトブロックと10Y3/1オリーブ黒 粗砂～中砂混じり極細砂質シルトブロックと10Y4/1灰 中砂～細砂混じりシルト質極細砂ブロック混じる
3. 10Y3/1オリーブ黒 極細砂質シルト混じり、10Y4/1灰 シルト混じり極粗砂～粗砂



1. 2.5Y3/3暗オリーブ褐 極粗砂～粗砂混じり細砂～極細砂
2. 7.5Y3/2オリーブ黒 極細砂質シルトブロックと10Y4/1灰 シルトブロック混じる



1. 7.5Y3/2オリーブ黒 粗砂～中砂混じり極細砂質シルト

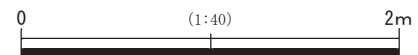


図50 第7-3 b面遺構断面図 (1)

点、ミニチュア土器高杯（91）1点、小型丸底壺1点と多種の土師器製品が出土したが、器種の判別がつけ難い遺物が326点と多く、これらが出土量の半数以上を占める。須恵器は壺（94）・甕が70点と目立ち、杯身18点、杯蓋11点と続く。ほかに、須恵器細片9点、黒色土器A類細片8点、瓦器細片2点、瓦2点、刀子（95）、銅製鈴（97）、双環状鉄製品（96）がある。馬歯や種子類も採取した。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は11世紀後半から12世紀前半頃と考えられており、矛盾はないと思われる。

**第8-1 a面・第8-1 a層（図57）**

第8-1 a面は、調査区全域に堆積した第7-3 b層を除去したのち、調査区中央西寄りにある南北方向畦畔と坪境畦畔付近で遺構を検出した。標高は2.9 m前後である。

8019 坪境畦畔は、第7-3 a面以降その輪郭を徐々に現出しつつあったが、当遺構面調査時には東西方向のやや不定形な高まりとして検出した。検出長10 m・幅1.5 m余である。

8001 畦畔は調査区西半、X-2トレンチ以北で検出した南北方向にのびる畦畔である。しかし同トレンチ以南は、必ずしも良好に遺存せず、8019 坪境畦畔の関係は詳らかではない。北側は調査区外へのびる。検出長は34 mを測る。

**第8-1 a面出土遺物** 8001 畦畔中より土師器細片が4点出土した。

**第8-1 a層出土遺物** 当層を掘削中に35点の遺物が出土した。土師器皿、羽釜が各1点、古式土師器甕3点、土師器細片が26点、須恵器は甕2点、細片1点である。ほかにⅡ期以前の瓦器碗と思われる細片が1点出土した。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は11世紀後半頃と考えられており、矛盾はないと考えられるが、今回の調査では出土した遺物の総量が少なく判然としない。

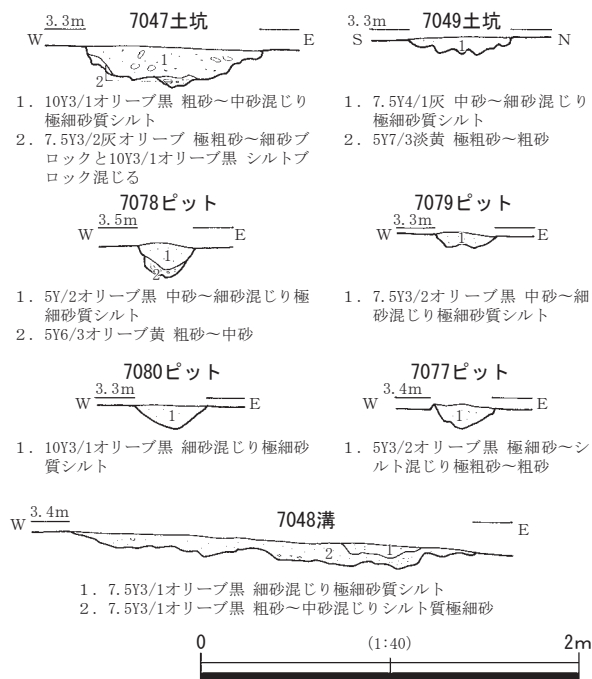


図51 第7-3 b面遺構断面図（2）

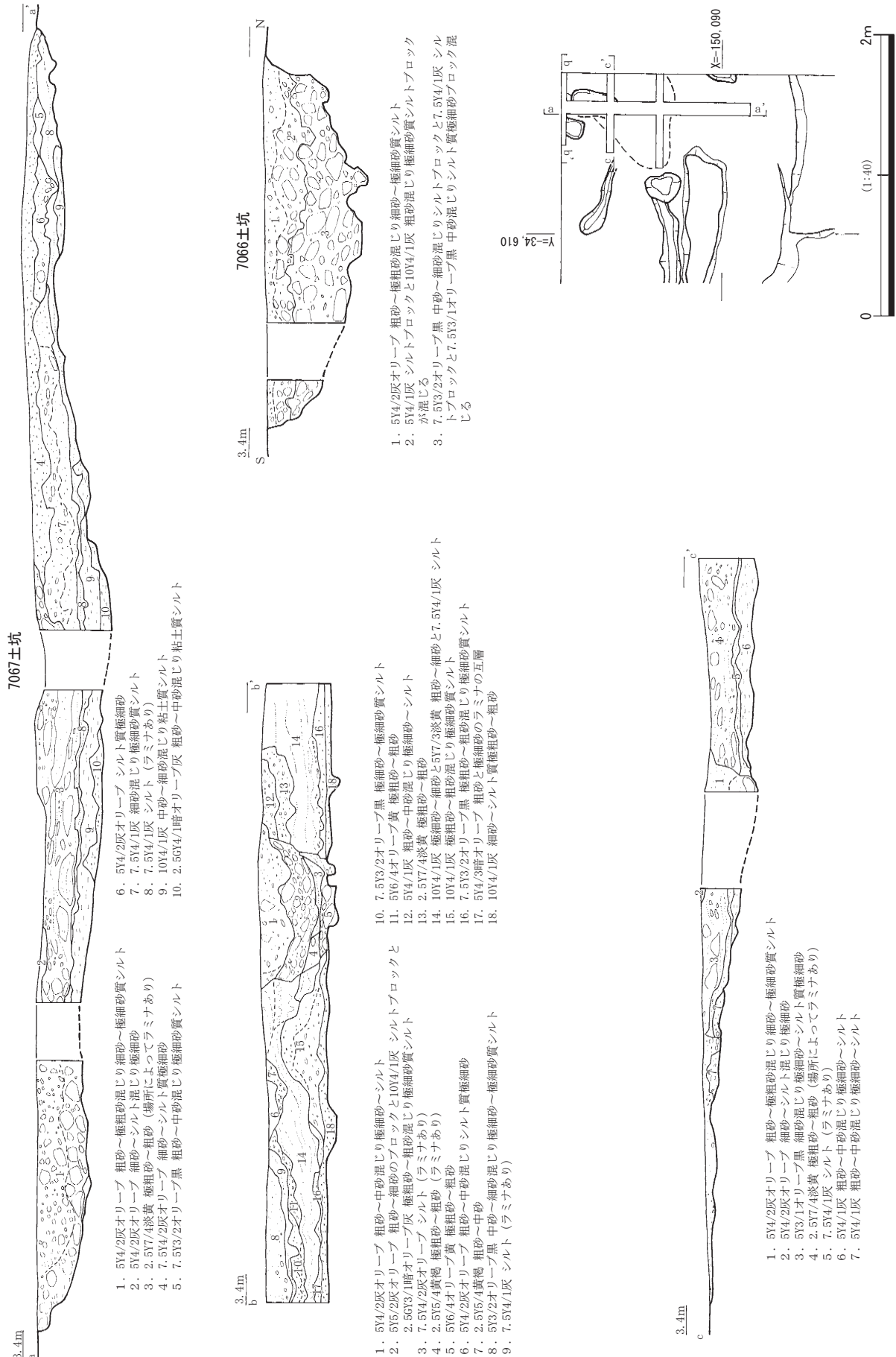


図52 第7-3 b面遺構断面図 (3)

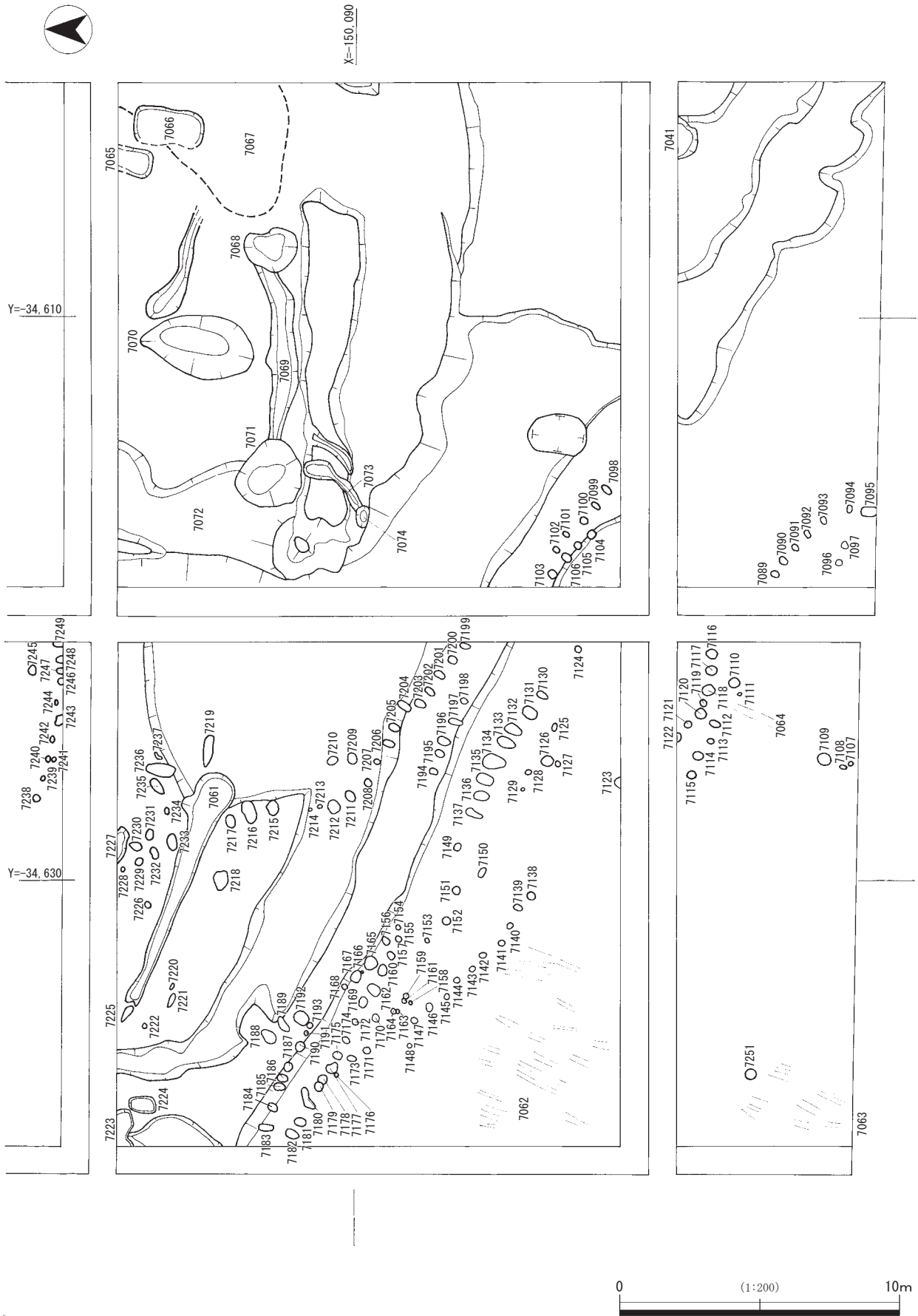
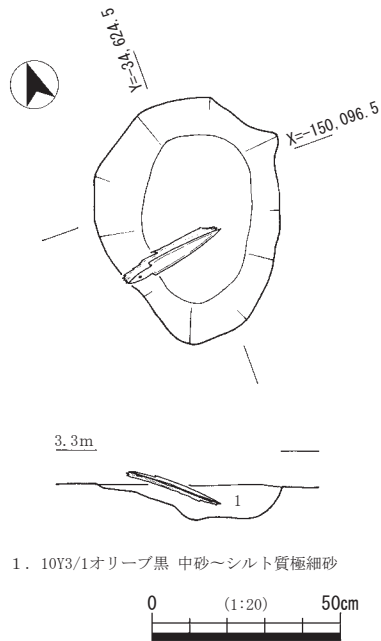


図53 第7-3 b面ピット群平面図

第8-2 a面・第8-2 a層 (図58・59)

第8-2 a面は、今日まで池島・福万寺遺跡において現行の地割として遡ることができる最古の事例とされていた遺構面である。第8-1 a面を検出した地点以外では、第7-3 b層を除去して検出した遺構面である。また第8-1 a面を検出した地点では、第8-1 a層ならびに第8-1 b層を除去して同遺構面を検出した。その結果、大半の箇所で坪境畦畔・畦畔を検出し、水田域として利用されていたことが明らかとなったが、調査区南西では第7-3 b層による著しい削平がおよんでおり、遺構は皆無であった。調査地の標高は2.8～3.0 mである。



1. 10Y3/1オリーブ黒 中砂～シルト質極細砂

図54 第7-3 b面7132ピット  
平・断面図

8018 坪境畦畔は調査区南半で検出したが、先述したようにやや南北に振れ、さらに幅が一定しない。この坪境畦畔を構成する土は、第9-2 a面で東西方向に掘削した9039溝を埋没させた土砂を起源とする。検出長50 m、最大幅6 m、高さ0.3～0.4 mを測る。

畦畔は東西4条、南北7条検出した。8016 畦畔は、8018 坪境畦畔から南側へ派生したもので、ほかの畦畔とは異なり、幅3 m、最大幅5 m、高さ0.3 mを測る大型畦畔である。これは坪境畦畔と同様、第9-2 a面検出の9039溝の埋土に起因する。そのほかの南北方向の6条の畦畔(8003～8008 畦畔)は、すべて坪境畦畔の北側で検出したが、坪境畦畔とは接しない。これらは概ね2～3°座標北から東へ振れており、調査区外へのびる。幅は0.7 m前後、高さは0.1～0.2 mを測る。これに対して東西方向の4条の畦畔(8009～8012 畦畔)は、南北方向の畦畔と直交するのではなく、西に向かってやや北側へ振れる坪境畦畔とほぼ並行する。

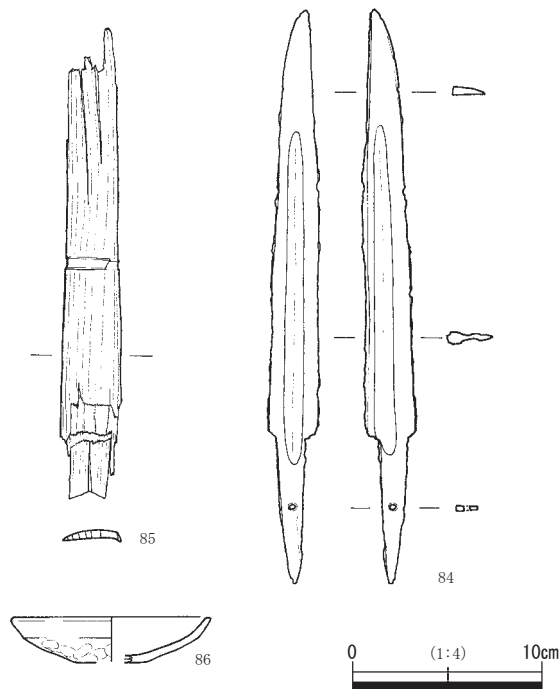


図55 第7-3 b面関連出土遺物

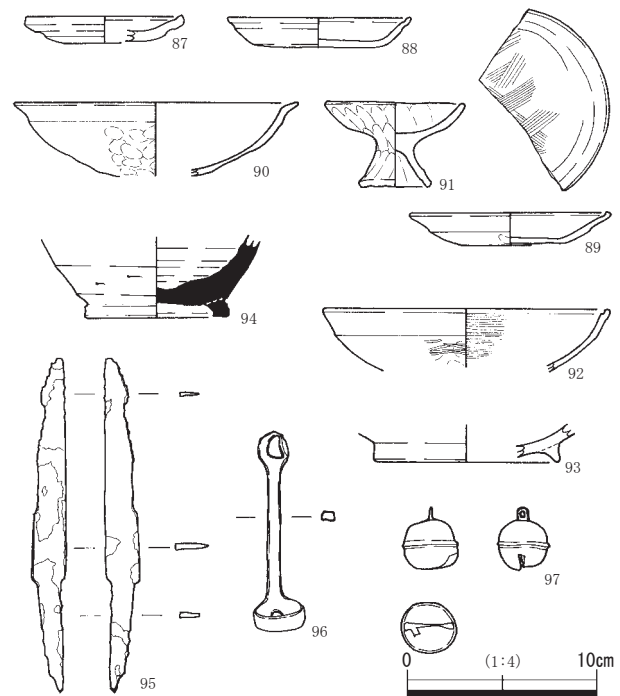


図56 第7-3 b層出土遺物

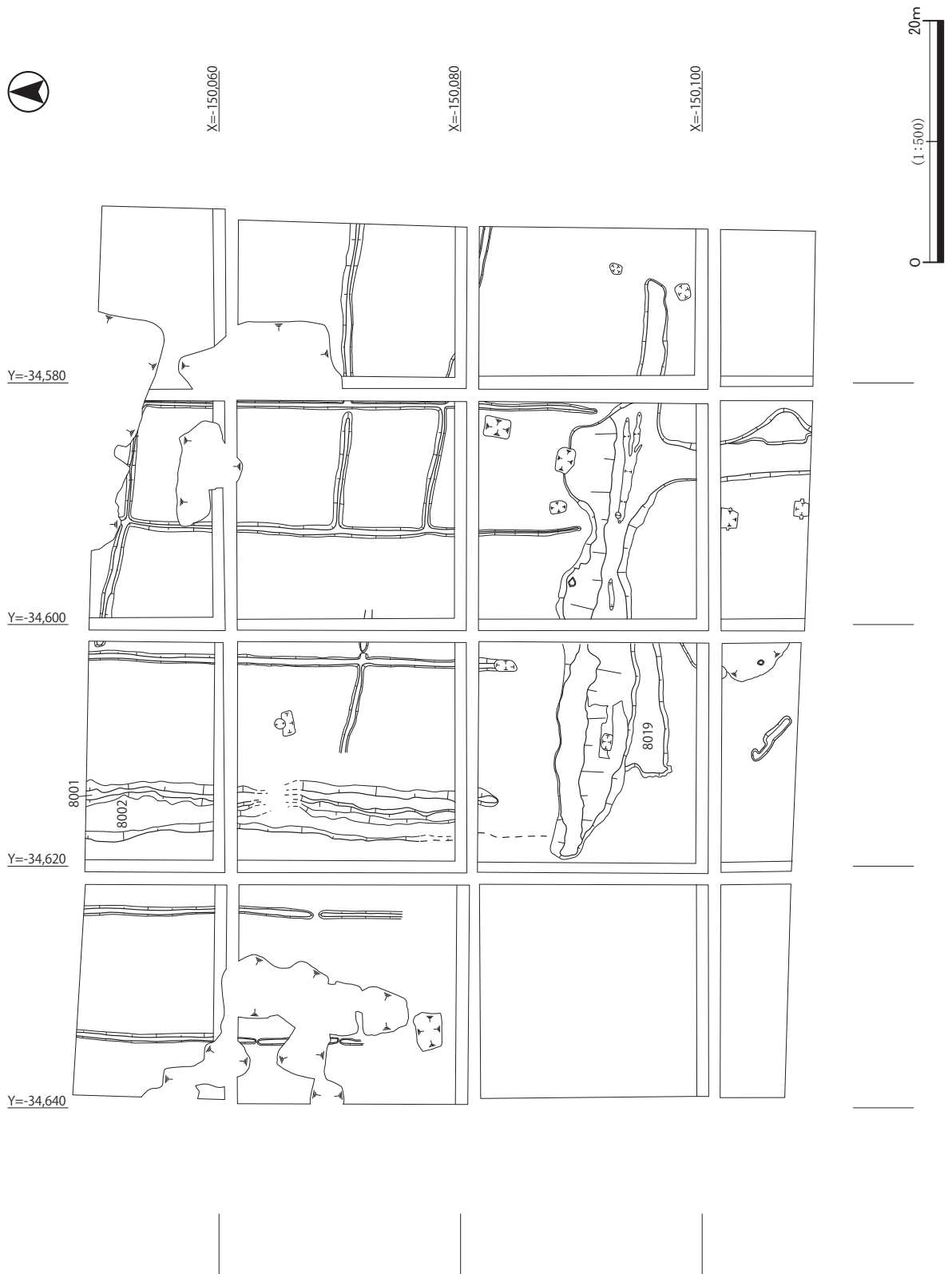


図57 第8-1 a面平面図

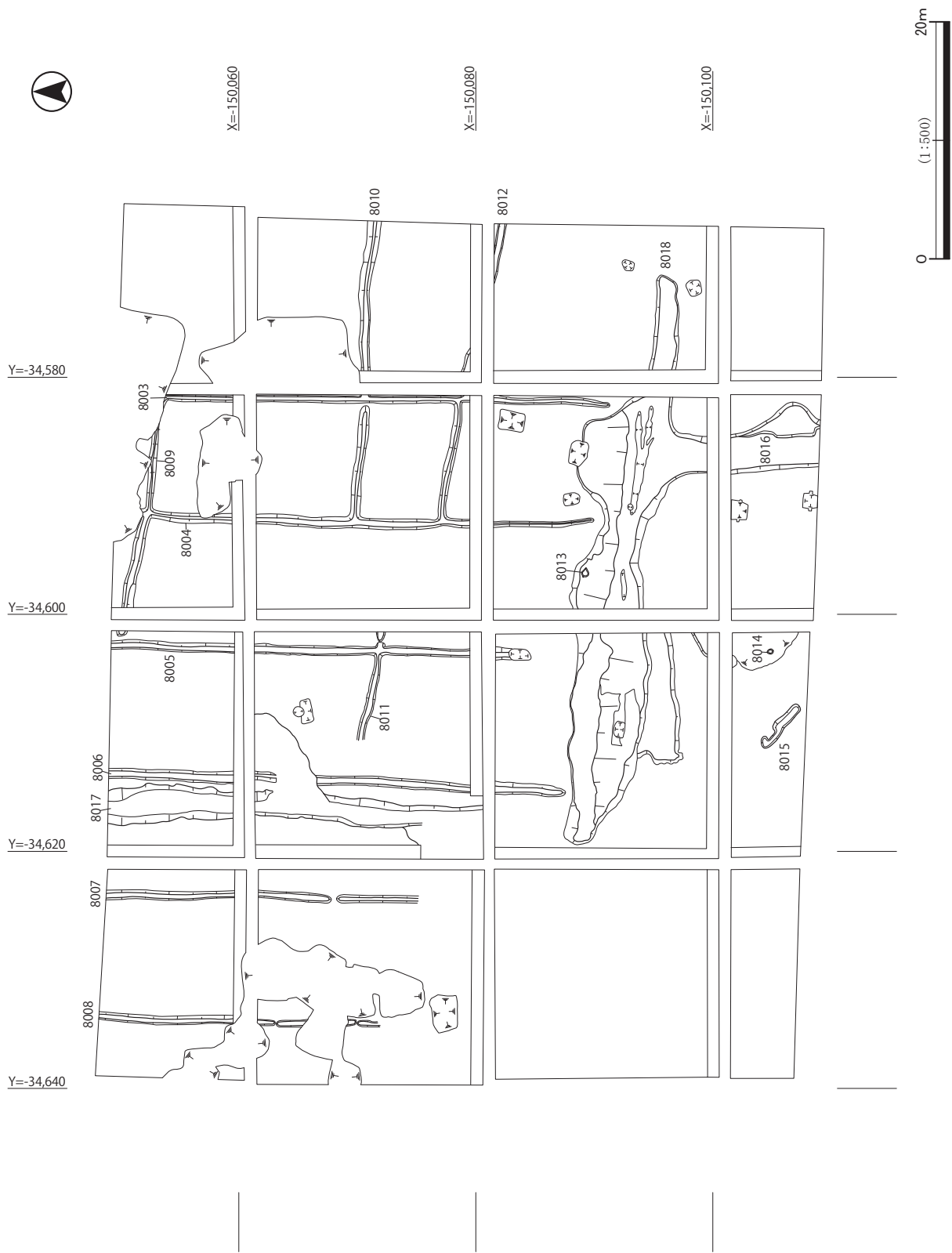


图58 第8-2 a面平面图



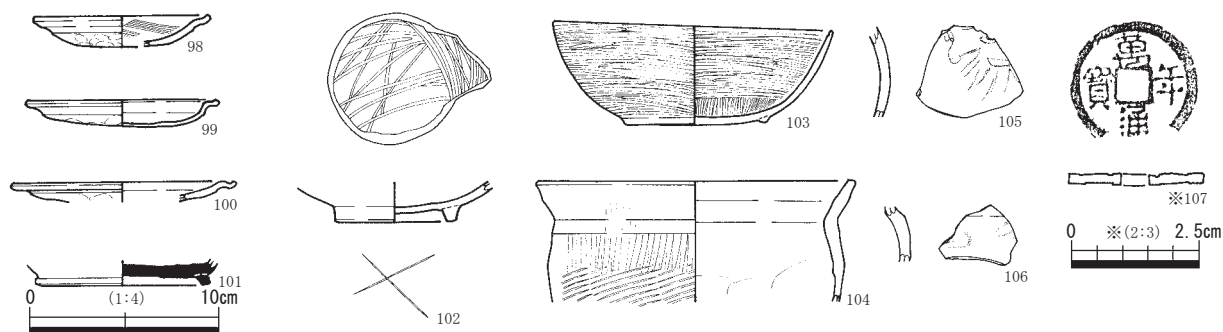


図59 第8-2 a面関連・第8-2 a層出土遺物

これらの畦畔によって区画された水田は、坪境畦畔以北では東端を除くと、8003～8008 畦畔の間隔は概ね 10 m 余である。

このほか 8018 坪境畦畔に接して 8013 土坑を、同畦畔の南側で 8014・8015 土坑を検出した。

最初にも触れたように、調査区南西は第7-3 b層による遺構面の削平が著しく、その一部はクレバスチャネルを形成する。さらに、8006 畦畔の西側に沿って北流する 8017 溝にも流入し、その畦畔の一部を侵食する。

**第8-2 a面出土遺物** 当面を精査中に 230 点の遺物が出土した。土師器は皿 (98、99) 16 点、杯 6 点、椀 3 点、高杯 3 点がある。また、古墳時代前期の甕 1 点を含め、土師器甕は 12 点ある。器種を特定できなかった細片も 133 点ある。須恵器は甕 29 点、杯身 13 点、壺 5 点と続く。瓦器 1 点、黒色土器 A 類の細片が 1 点、B 類椀 1 点、細片が 2 点ある。ほかに、土製品 1 点、鉄滓、「萬年通寶」(107) が各 1 点出土した。遺構の検出は第9-1 a面であるが、本来この面に属すると考えられる 9011 ピットから瓦の細片 1 点が、同様に 9010 ピットから、ほぼ完形の黒色土器 B 類椀(103) 1 点が出土している。

**第8-2 a層出土遺物** 当層を掘削中に 245 点の遺物が出土した。土師器は杯・皿 (100) 43 点、鉢 2 点、椀 1 点、甕 (105、106) 4 点、壺 1 点、羽釜 3 点、甑 15 点、細片 137 点ある。須恵器は杯身 (101) 16 点、杯蓋 1 点、甕 4 点、壺 4 点、細片 3 点である。黒色土器 A 類椀 (102) 7 点と B 類の細片が 1 点ある。瓦 1 点と製塩土器 2 点も出土した。

耕作関係の遺構では、8018 坪境畦畔内より 224 点の遺物が出土した。土師器は墨書土器の細片を含め、甕 (104) 31 点、羽釜 17 点、甑 12 点、杯 5 点と椀、高杯、壺、ミニチュア土器高杯が各 1 点、細片 121 点がある。須恵器は甕 17 点、壺 6 点、杯身・蓋 5 点、細片 3 点がある。黒色土器は A 類椀 2 点がある。また平安時代後期と思われる古手の瓦器椀の細片も 1 点ある。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は 10 世紀前半から 11 世紀後半頃と考えられており、矛盾はないと思われるが、より古相の 8 世紀から 9 世紀頃の遺物も散見される。

### 第9-1 a面・第9-1 a層 (図 60～63)

第9-1 a面は、調査区全体に 0.1 m 前後堆積した第8-2 a層を除去して検出した遺構面である。検出した遺構は、坪境畦畔、畦畔、土坑、ピットである。標高は 2.8～2.9 m を測る。

調査区南半で検出した 9022 坪境畦畔は、南北方向の畦が取り付くあたりで、緩やかに逆 S 字状に曲がり、その幅を狭めながら調査区東端へのびる。規模は西端付近で最大幅 3.5 m、高さ約 0.05 m、中央部の最大幅 4 m、高さ約 0.2 m、東端で最大幅 0.8 m、高さ約 0.13 m を測る。

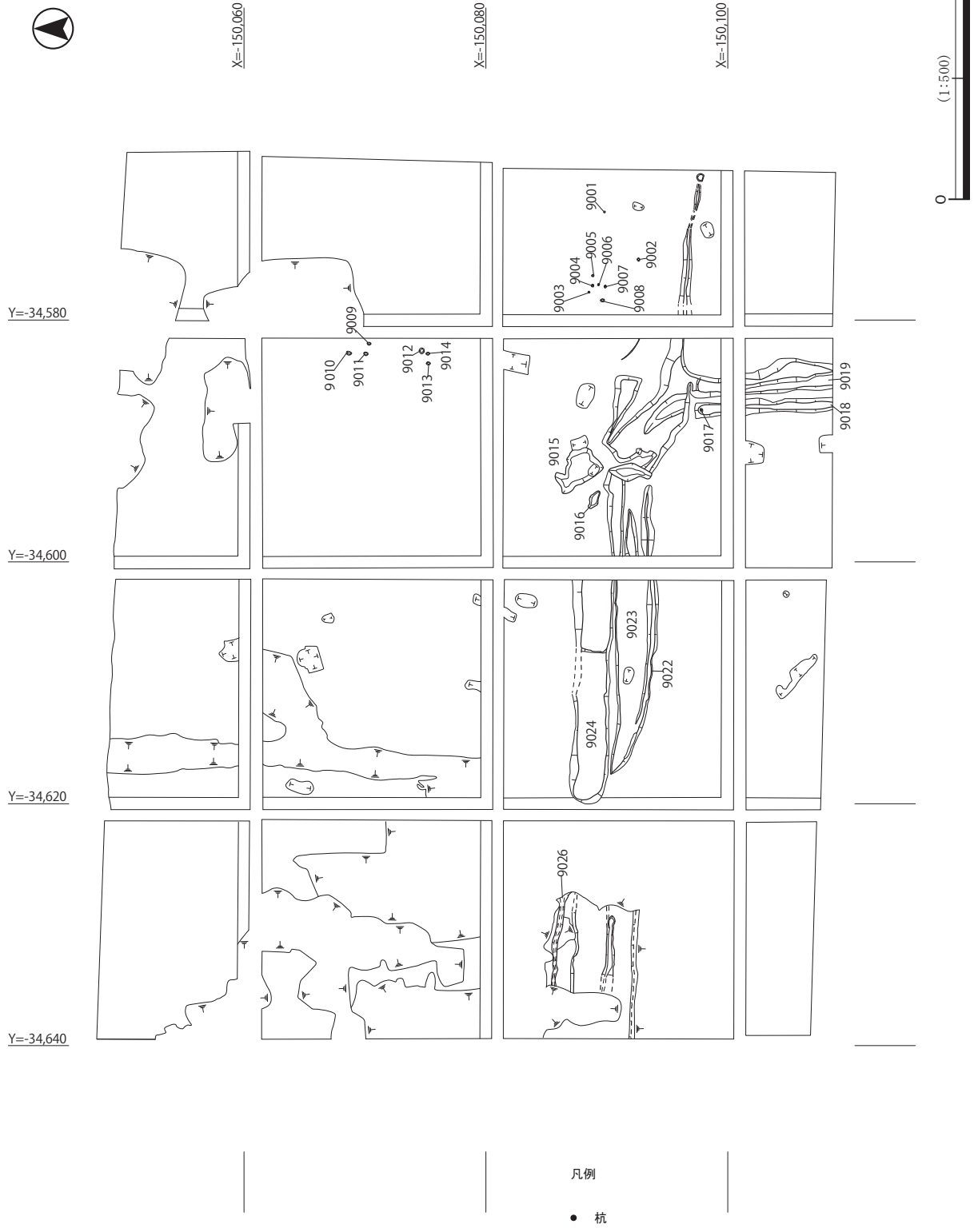


图60 第9-1 a面平面图

9022 坪境畦畔の北側に接するように、9024 畦畔を検出した。この畦畔は第7-3 b面Y-3トレンチ土坑のため断面には現れず、東側でも確認できなかったが、間に溝状のくぼみを挟み9022 坪境畦畔と一体となって、坪境畦畔を成していた可能性がある。検出長は18.5 m、最大幅3.3 m、高さ約0.1 mを測る。逆S字状に坪境畦畔が曲がるところで、2条に分かれる南北方向の9018・9019 畦畔を検出した。検出長は11 m余で調査区外へのび、高さは0.15 m前後を測る。

坪境畦畔が曲がるあたりでは、9015～9017 土坑を、また調査区東半では、大きく2群に分かれるピット14基を検出した。

**第9-1 a面出土遺物** 当面を精査中に土師器細片が1点出土した。遺構からは9016 土坑から土師器細片と須恵器の高杯と思われる細片が各1点出土した。9023 流路からは計52点が出土した。古代の土師器は墨書土器1点を含め、甕(108、109)30点と一番多く、杯、高杯(110)、羽釜およびミニチュア土器甕(111)、同高杯(112)が各1点、細片9点となる。ミニチュア土器甕は体部の中位あたりを水平に打ち欠き、底部から体部下位が鉢状となるように形を整えたものと考えられる。須恵器は壺3点、甕2点、杯身1点、細片が1点である。ほかに鞆羽口が1点出土している。

なお、9010 ピットよりほぼ完形の黒色土器A類椀(103)が出土している。この遺構は当面を精査した段階で検出したが、埋土の質や色を観察し、出土した遺物の年代観を勘案すると、本来は第8-2 a面に帰属すると考えられるため、同面に関連する遺構の出土遺物として既述し、図59に掲載している。

**第9-1 a層出土遺物** 当層を掘削中に518点の遺物が出土した。土師器は杯(113)・皿52点、椀4点、高杯5点、壺(114)・甕12点、人面墨書土器(115、116)2点を含む甕79点、壺8点、羽釜19点、竈10点、ミニチュア土器甕(117)1点、細片266点がある。須恵器は杯身17点、杯蓋2点、甕12点、高杯1点、壺(120)14点、ハソウ1点、細片6点がある。このほか緑釉陶器細片1点、黒色土器A類椀(119)3点、黒色土器B類鉢(118)が1点、細片1点、須恵器の焼成不良により瓦質化したと思われる把手1点、弥生土器と思われる細片が1点である。さらに獣骨26片も採取した。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は8世紀後半から9世紀頃と考えられている。黒色土器B類鉢は、やや後出の可能性があるが、ほかの遺物には、矛盾はないと思われる。

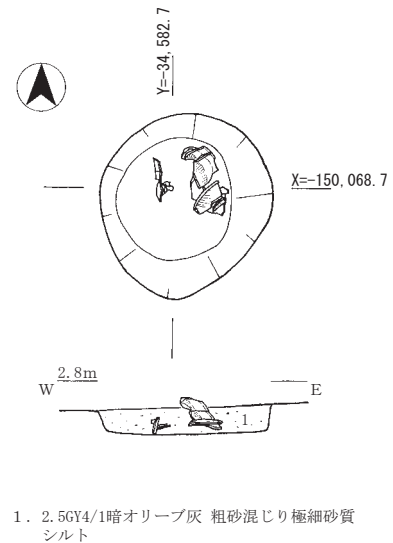


図61 第9-1 a面9010ピット  
平・断面図

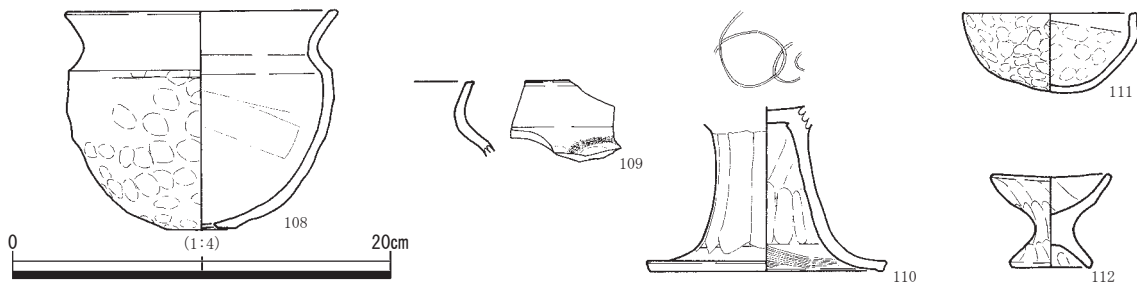


図62 第9-1 a面9023流路出土遺物

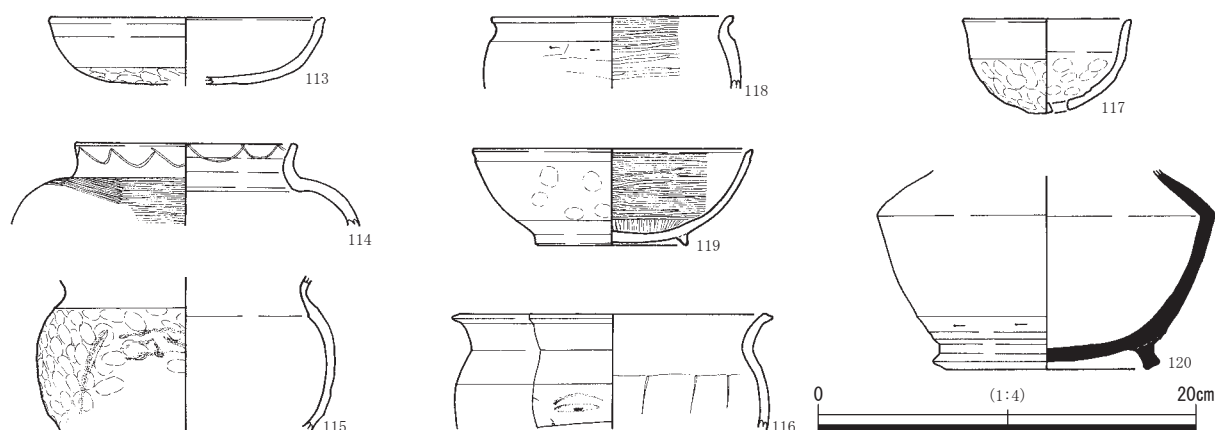


図63 第9-1 a面・第9-1 a層出土遺物

### 第9-2 a面・第9-2 a層 (図64～72、表2)

第9-2 a面は、調査区南西を除くほぼ全域に、平均0.1 m堆積した第9-1 a層を除去して検出した遺構面である。検出した遺構は、流路とそれに伴う杭列、畦畔、ピットなどで、標高は2.7～2.8 mを測る。

9039 溝は調査区東半、Y = - 34,586 付近を北流する流路を、X = - 150,093 付近で杭の打設ならびに盛土によって西方へ付け替えたものである。杭はおおよそ西北西へ向けほぼ一直線上に打ち込むことで、緩やかに流れを変えるよう仕向けてある。杭の素材となった木材はその半数がスギで、そのほか10数種類の材木を使用していることがわかっている。また第9-3 a面以下を調査する過程で付近から杭が出土したが、それらはおそらく当遺構面の杭列に関わるものだった可能性が高い。北流部分は幅4～6 mであったが、西流後は概ね3 m幅と一定する。第8-2 a面～第9-1 a面で検出した坪境畦畔は、この9039 溝を埋没させた土砂をほぼそのまま利用したため不定形となったのである。

9039 溝の北側に接して畦畔を検出したが、第9-1 a面9024 畦畔同様、Y-3 トレンチ以東では確認することができなかった。

杭の打設と盛土ならびに9039 溝開削以前の流路は、北流する流れを緩やかに北西に向け、その先は二股に分かれていた(9051 流路と9052 流路)。このうち9052 流路は調査区外へと伸びる。

この流路に沿って、計5箇所土器埋納ピットを検出した。最も東で検出した9033 ピットは9051・9052 流路東岸に位置し、一部がY-4 トレンチの掘削で削平された。ピット内には、土師器杯Bが直立し破損した状態で出土した。最も北で検出した9053 ピットは、9052 流路西岸に位置し、一部X-1 トレンチによって削平されたが、口縁部が一部欠損した土師器杯Aがほぼ水平状態で出土した。9050 ピットは9051 流路西岸際で検出した。径0.4 mほどの不正円形で、深さは0.4 mを測り、ピット底部付近で口縁部を約4分の1欠損した状態で出土した。ほぼ水平に据えられた状態で出土したのは、土師器杯Aである。9049 ピットは、9051 流路西岸で見つかった。出土した土師器杯Aは、口縁部の一部が欠損しており、ほぼ水平状態であった。9042 ピットは調査区南端、9051・9052 流路西岸で検出した。ピット内から、ほぼ水平状態で土師器皿Aが口縁部の一部を欠損した状態で出土した。

**第9-2 a面出土遺物** 当面を精査中に古代の土師器杯・皿11点、壺・甕2点、羽釜3点、ミニチュア土器高杯2点、細片16点 須恵器杯身、壺、細片が各1点、古墳時代の土師器壺・甕3点の計40

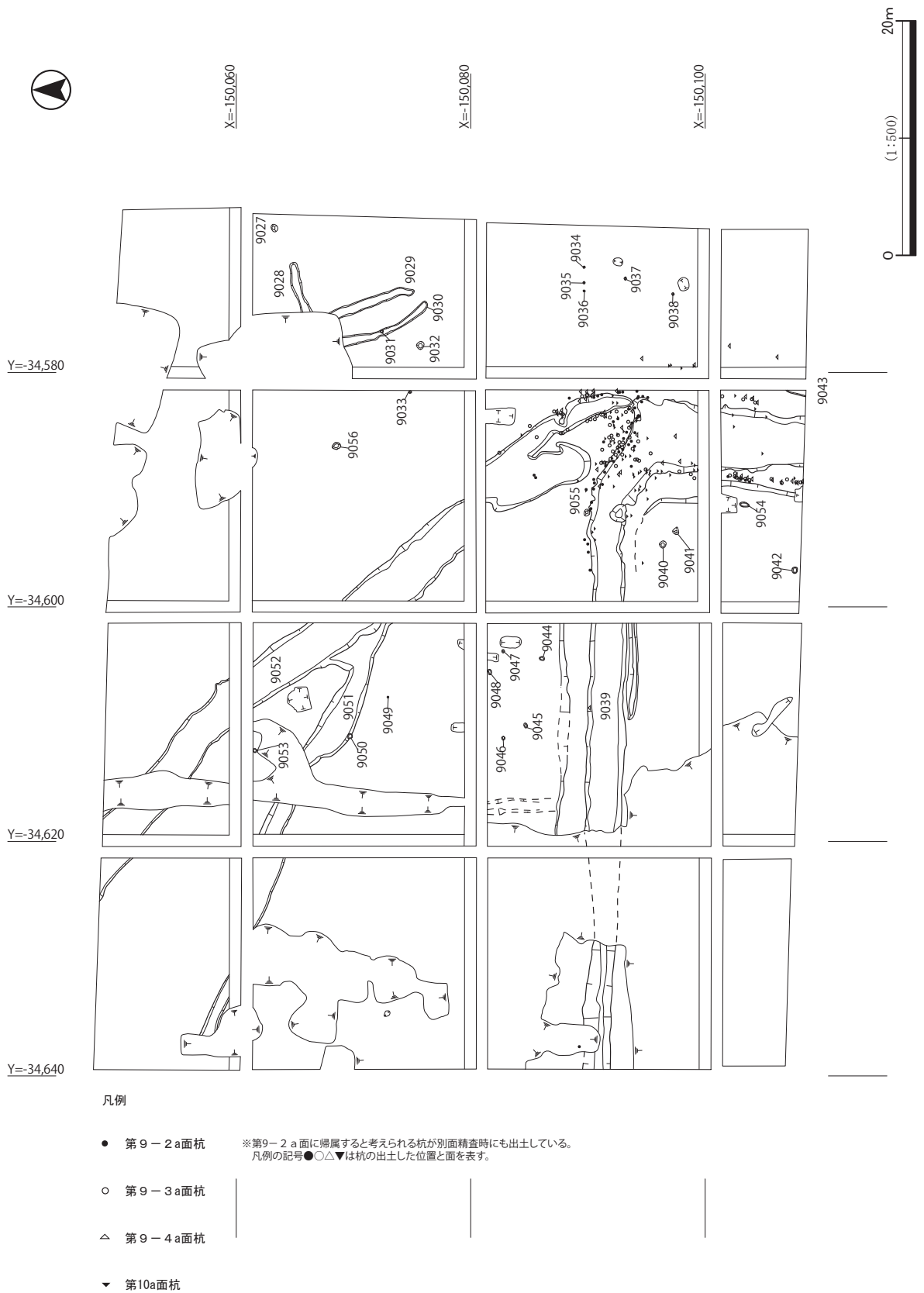


図64 第9-2a面平面図

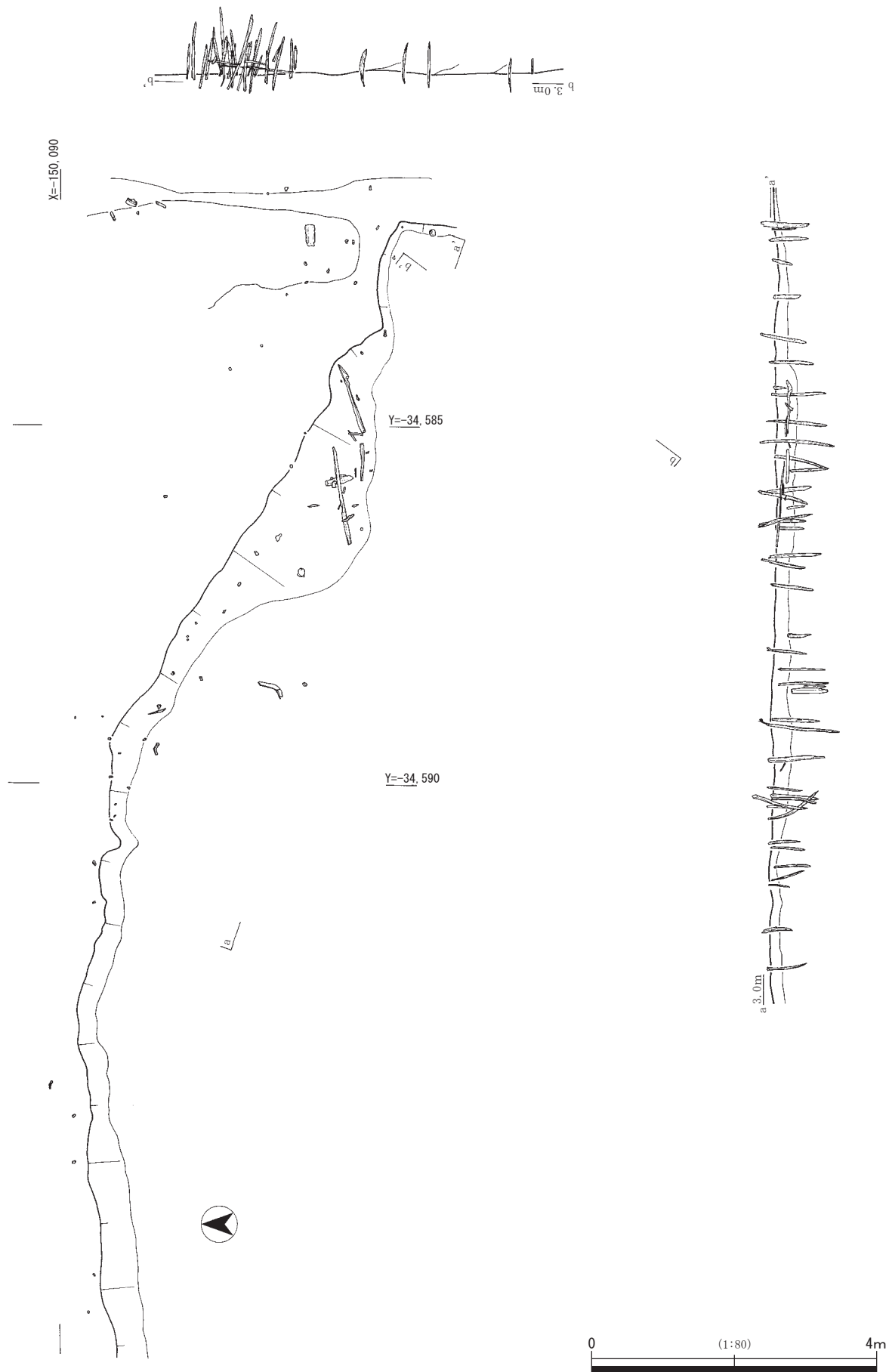


图65 第9-2 a面9039溝平·立面图

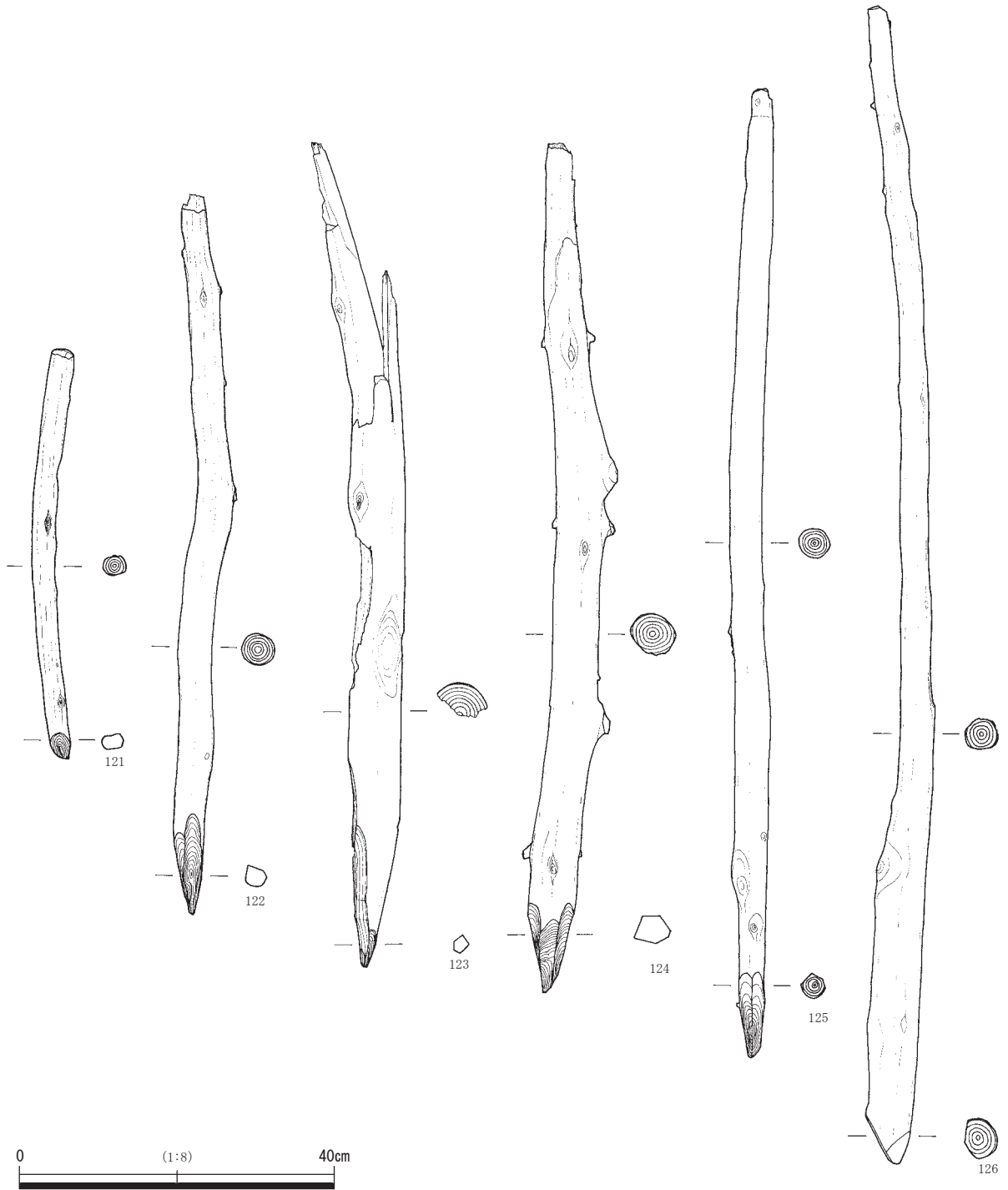


図66 第9-2 a面9039溝出土木杭

表2 第9-2a面9039溝関連木杭

樹種	割り方	先端の形											合計
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	
スギ	○	23	7	39	15	18				5	2		109
	■				1				1				2
	▲												0
	不明												0
アカガシ属	○	7	3	1	9	4							24
	■												0
	▲												0
	不明												0
サカキ	○	2	2	2	6	1							13
	■												0
	▲												0
	不明				1								1
ヤブツバキ	○	1		4	9	2							16
	■												0
	▲												0
	不明												0
ヒノキ	○	1		2	1	1							5
	■				1								1
	▲												0
	不明												0
クリ	○			1	3	2							6
	■												0
	▲												0
	不明												0
ヤナギ	○			3	2								5
	■												0
	▲												0
	不明												0
サクラ属	○		1	1	3								5
	■												0
	▲												0
	不明												0
ホオノキ	○				4	1							5
	■												0
	▲												0
	不明												0
マツ科	○	2			2								4
	■												0
	▲												0
	不明												0
ヤマグワ	○				2	2							4
	■												0
	▲												0
	不明												0
ムクノキ	○	1		1		1							3
	■												0
	▲												0
	不明												0
クスノキ	○			1									1
	■				1								1
	▲												0
	不明												0
グミ	○				1								1
	■												0
	▲												0
	不明												0
コナラ	○				1								1
	■												0
	▲												0
	不明												0
小計		37	13	55	62	32	0	0	1	5	2	0	207

**\* 先端の形**

- A: 片側のみ切込
- B: 4方向から切込
- C: 片側のみ2方向から切込
- D: 欠損のため判断できず
- E: 片側のみ3方向から切込
- F: 3方向から切込
- G: 角材を両側より切込
- H: 角材を片側からのみ切込
- I: 5方向から切込
- J: 6方向から切込
- K: 両側から切込

**\* 割り方**

- : 丸棒  
(枝・木をそのまま使用)
- : 板
- ▲: みかん割り
- 不明: 判別つかず





图67 第9-2 a面9051・9052流路平面图

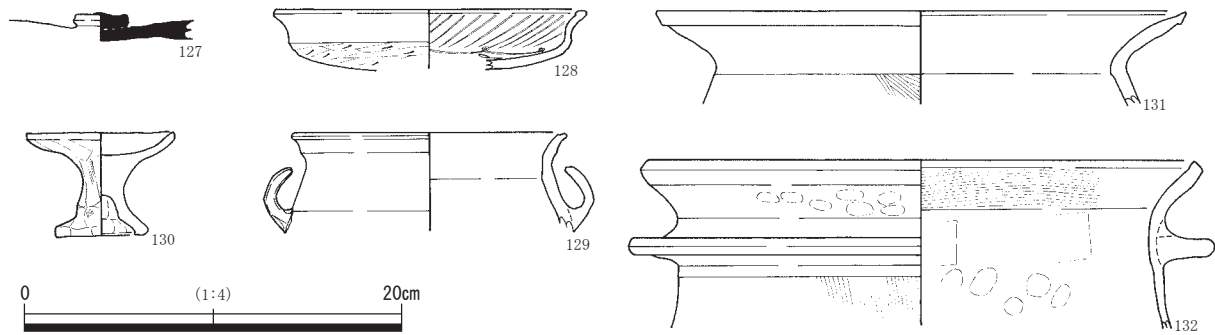


图68 第9-2 a面9039溝出土遺物

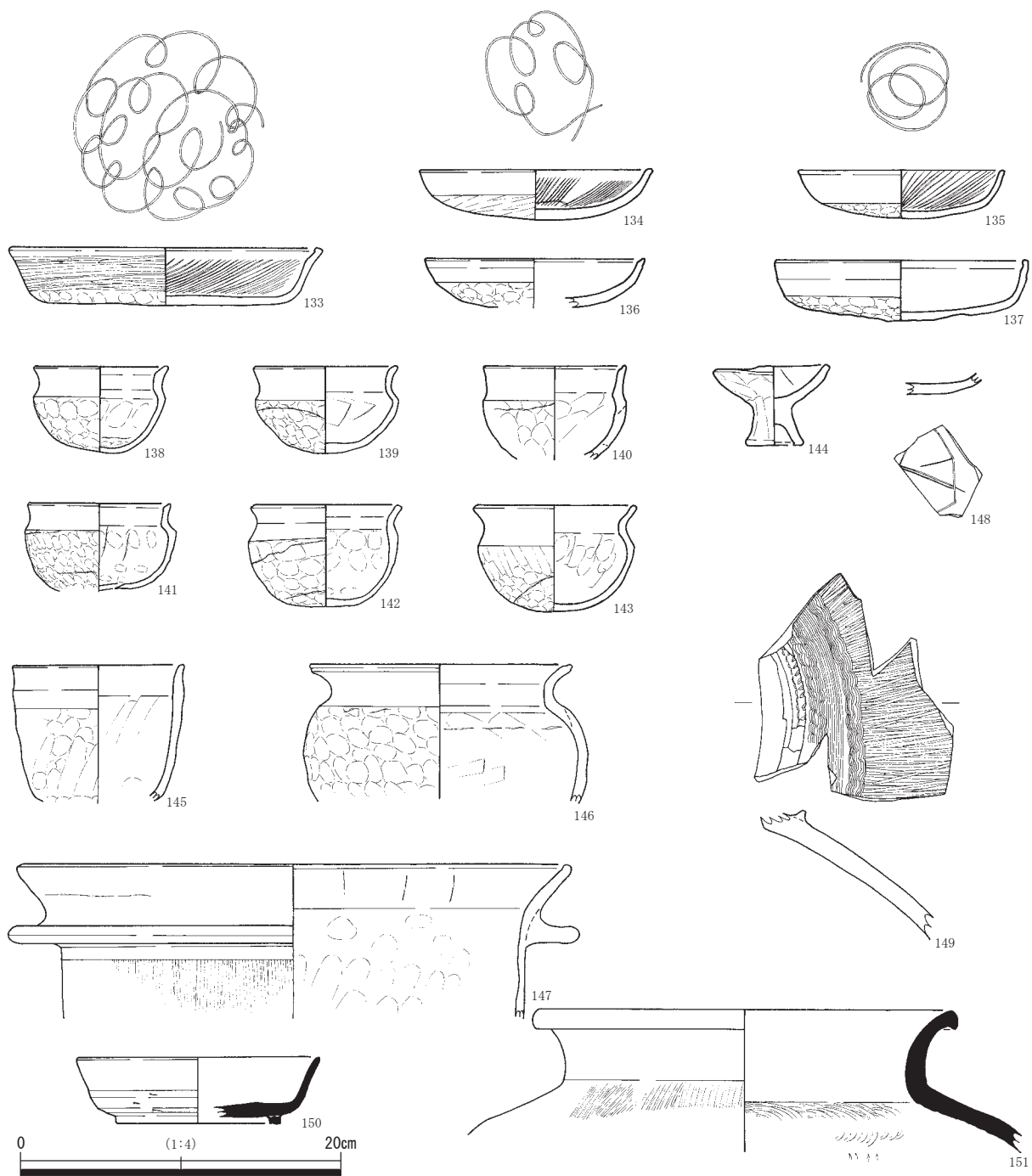


图69 第9-2 a面9039溝、9051・9052流路合流部出土遺物

点の遺物が出土した。

9039 溝、9051・9052 流路からは多量の遺物が出土し、983 点を数えた。うち、古代の遺物は土師器では、杯（128、133～136）・皿（137）175 点、鉢（145）と蓋が各 1 点、高杯 15 点、壺・甕（131、146）327 点、羽釜（132、147）71 点、甗 3 点、把手付甕（129）1 点、細片は杯と思われる破片（148）を含め 294 点、ミニチュア土器高杯（130、144）3 点、ミニチュア土器甕（138～143）8 点がある。須恵器では杯身（150）23 点、杯蓋 4 点、鉢 1 点、高杯 4 点、甕（151）16 点、壺 14 点、細片 3 点がある。古墳時代は土師器甕 7 点と古墳時代前期の装飾壺（149）1 点、細片 1 点、須恵器杯身 3 点・杯蓋（127）4 点である。ほかに、石器 2 点、瓦 1 点のほか、種子、獣骨片も採取した。

9033 ピットから墨書土師器皿（154）1 点、9050 ピットから墨書土師器杯（155）1 点、9053 ピットから墨書土師器杯（156）1 点、9042 ピットから土師器皿（153）1 点、9049 ピットから土師器杯（152）1 点、9031 ピットから土師器細片 9 点が出土した。

**第9-2 a 層出土遺物** 当層を掘削中に 140 点の遺物が出土した。土師器杯・皿（157～159）26 点、高杯 3 点、壺・甕 38 点、羽釜 15 点、竈と思われる細片 1 点、ミニチュア土器甕（160）2 点、土師

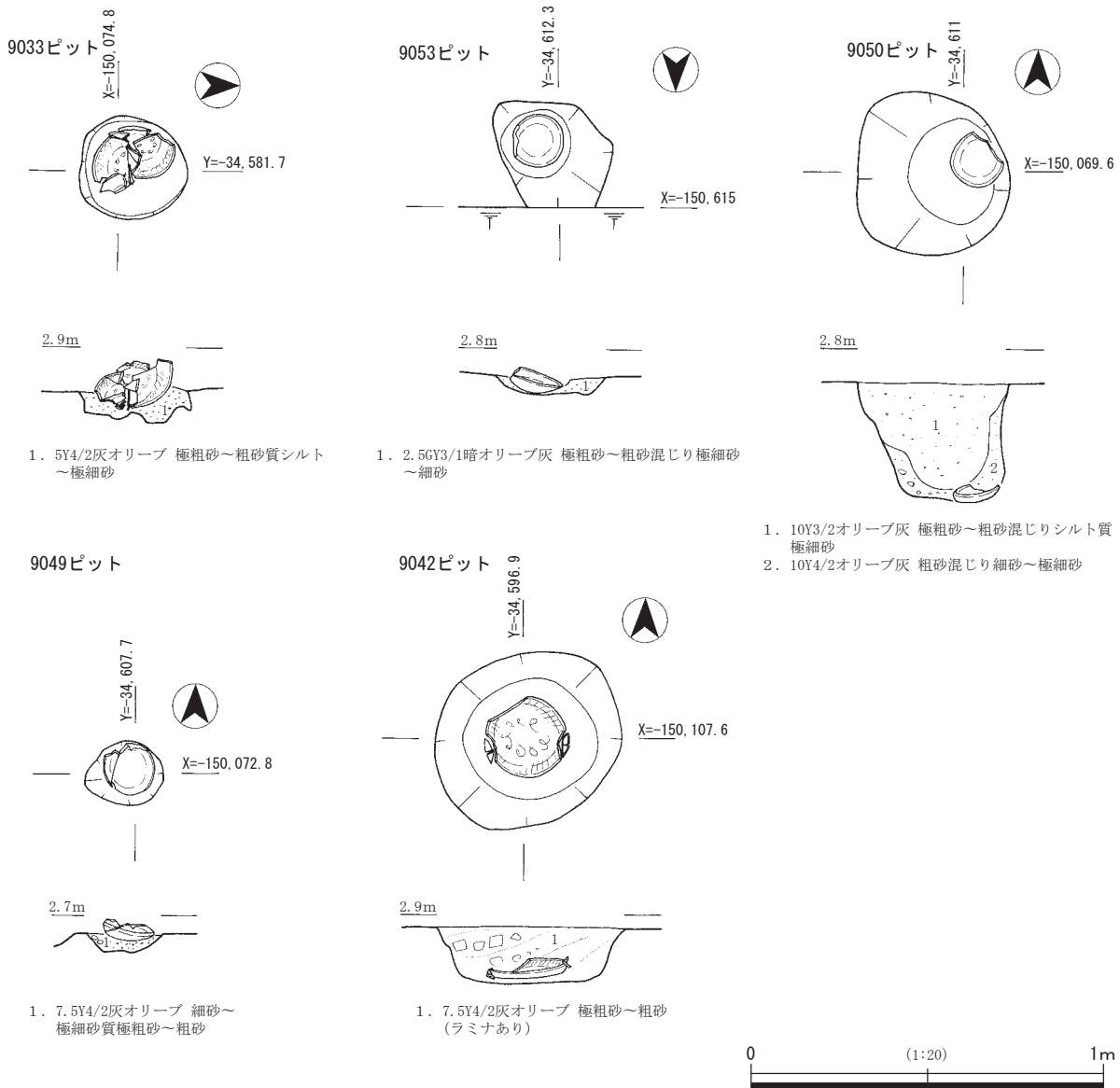


図70 第9-2 a 面土器埋納ピット平・断面図

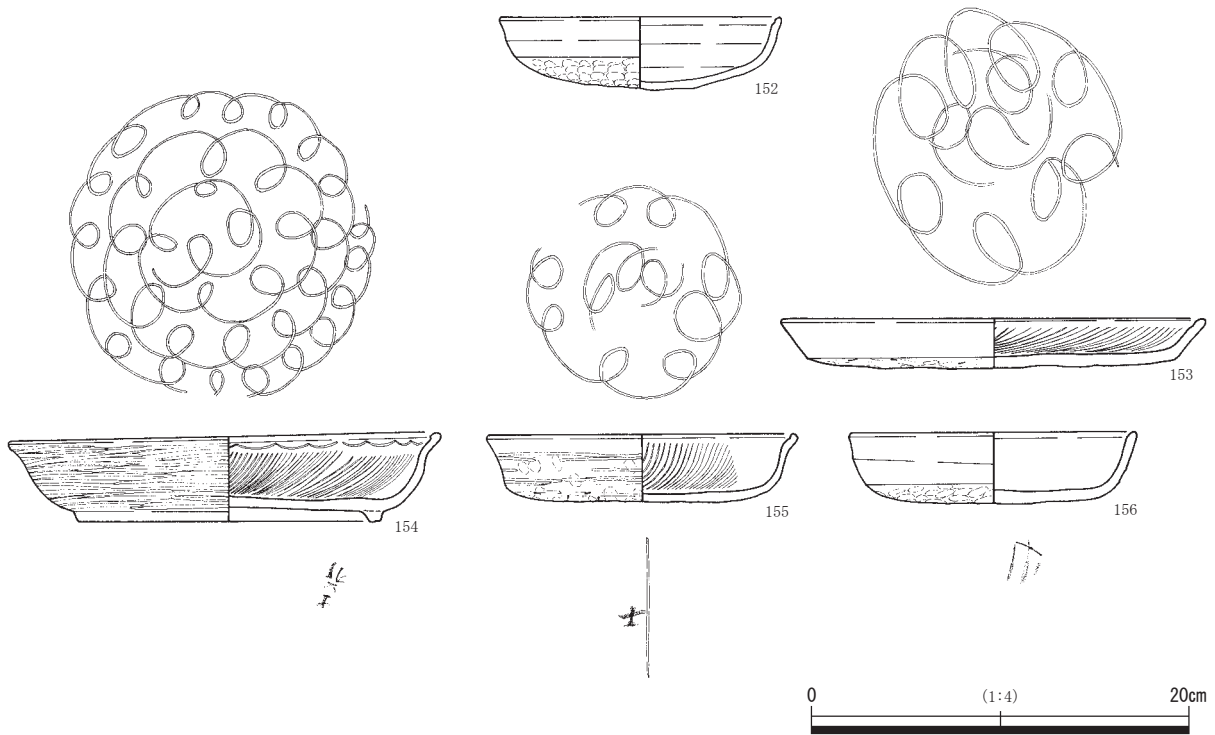


図71 第9-2 a面土器埋納ピット出土遺物

器細片 34 点のほか、壺・甕のうち古式土師器として甕 1 点、装飾壺 4 点がある。弥生土器壺・甕 1 点、須恵器は杯身 3 点、杯蓋 (161) 4 点、甕 8 点、壺、高杯、細片が各 1 点、黒色土器は A 類および B 類細片が各 1 点ある。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は 8 世紀中頃と考えられており、矛盾はないと思われる。

### 第9-3 a面・第9-3 a層 (図 73 ~ 75、写真 1)

第9-3 a層は、調査区中央~南側に堆積する第9-2 a層を掘削して検出した面で、そのほかの箇所では第9-1 a層を掘削した際に第9-3 a面を検出していた。遺構面の標高は概ね 2.7 ~ 2.8 m を測る。検出した遺構は、9051・9052 流路と、第9-2 a面にて検出の 9039 溝との分岐部分周辺、および同地点西岸で堤状高まり (9058 堤)、土坑、ピットがある。

9039 溝、9051・9052 流路分岐部分の掘削を通して、9051・9052 流路西岸ならび

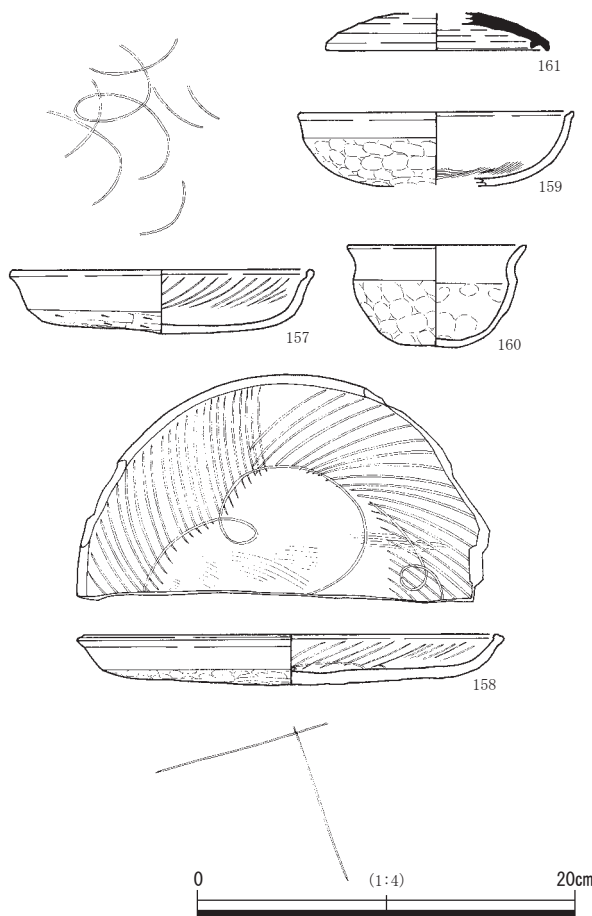


図72 第9-2 a層出土遺物



図73 第9-3 a面平面図

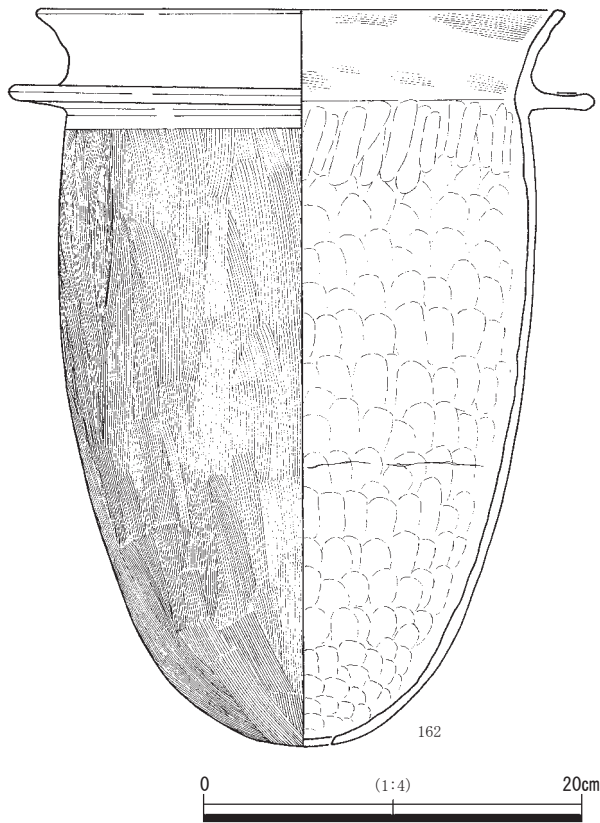


図74 第9-3 a面9107流路出土遺物

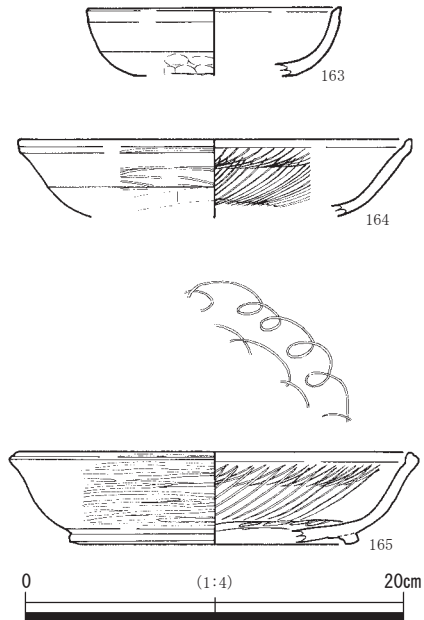


図75 第9-3 a面・第9-3 a層出土遺物



写真1 第9-3 a面置石

に底面を検出した。その結果、9039 溝分岐部分の 9051・9052 流路は、最大幅約 8 m、深さ 0.3 m を測る規模だったことが判明した。流路内から杭や土器片とともに、長辺を東西方向に向けた長辺 0.44 m・短辺 0.19 m・高さ 0.19 mを測る、不定形な直方体を呈した自然石（花崗閃緑岩）が据え置かれた形で出土した。なお、この置石が出土した地点は、 $X = -150,090.5$ 、 $Y = -34,588.2$  であり、9039 溝が開削された北辺にほぼ一致する。

9052 流路の南部西岸には、検出長 8 m、高さ 0.2 m の堤状の高まり（9058 堤）があり、南端へ向かうほど、この高まりは低くなる。

そのほか調査区中央南側では、土坑や多数のピットを検出した。

**第9-3 a面出土遺物** 当面を精査中に16点の遺物が出土した。土師器杯・皿(165)5点、壺・甕9点、細片2点である。

当面では、検出した各ピットから、比較的多くの遺物が出土した。9071ピットから土師器羽釜3点、細片1点、9072ピットから土師器壺・甕3点、羽釜1点、獣骨・歯の破片、9084ピットから土師器細片1点、9088ピットから土師器杯・皿1点、9092ピットから土師器杯・皿1点、古墳時代の土師器甕1点、9095ピットから土師器羽釜25点、壺・甕1点、須恵器甕3点である。

また、第9-4 a面9107流路埋土内出土の破片と接合する土師器羽釜(162)が出土しており、1個体がほぼ完形に復元された。

**第9-3 a層出土遺物** 当層を掘削中に43点の遺物が出土した。古代の土師器は杯(163、164)・皿6点、高杯2点、壺・甕14点、羽釜3点、細片13点、古代の須恵器は杯身2点、甕・壺3点である。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は8世紀前半頃と考えられており矛盾はないと思われる。

#### 第9-4 a面・第9-4 a層(図76～79、表3)

第9-4 a面は、調査区北東部および南西部を除く全域にて、第9-3 a層を掘削し検出した遺構面である。遺構面の標高は、概ね2.7～2.8mを測る。検出した遺構は、調査区を縦断する流路および流路周辺で検出したピット群などである。

9107流路は、第9-2 a面～第9-3 a面検出の9052流路の前身にあたる。特に調査区北半では最大幅14m、最深部0.4mとなり、流路中央に高まりができ、その西側では細砂が、その東側では細礫がそれぞれ埋土の主体となって、北西方面へ流れる。第9-2 a面9039溝との分岐点付近以南では、西岸に堤状の高まりがあり、そこで木杭20数本を検出した。これらは第9-2 a面9039溝付け替えに際して打設された木杭とみられたことは既述のとおりであるが、あるいはこの堤状高まりに関係するかもしれない。

9138土坑は調査区南半、X-2トレンチとY-2トレンチの交点付近で検出した。一部がX-2トレンチによって切られていたが、長軸1.5m・短軸0.8m・深さ0.7mを測り、埋土中から7世紀中頃の土師器杯が出土した。ピットは主として流路西岸で多数確認した。

**第9-4 a面出土遺物** 当面を精査中に13点の遺物が出土した。土師器杯・皿2点、壺・甕8点、高杯(187)1点、須恵器杯身1点、甕1点である。

9107流路から603点の遺物が出土した。土師器は壺・甕(172)188点、杯・皿(166～171、176)85点、高杯28点、鉢(177)1点、第9-3 a面の遺物と接合するものも含め、羽釜(173)37点、甗2点、ミニチュア土器高杯(174、175)4点、製塩土器1点、細片199点、須恵器は杯身(179、180)19点、杯蓋(178)1点、高杯2点、甕24点、壺7点、細片1点である。また、陶器質ではあるが、胎土に粗礫を多く含み焼成も暗灰黄色を呈する、通有の須恵器とは異質な袋状の壺(181)が1点出土している。黒色土器B類細片1点もある。ほかに、弥生土器と思われる細片1点、砥石(182)1点が出土した。獣骨・歯162片や種子類も採取した。

これら一連の流路以外の遺構では、9110土坑から古墳時代の甕と思われる土師器細片が1点、9114土坑から土師器細片1点、9123ピットから土師器杯2点、9116・9128～9130ピットから土師器細片が各1点、9138土坑から土師器杯(183)が1点、須恵器甕1点が出土している。

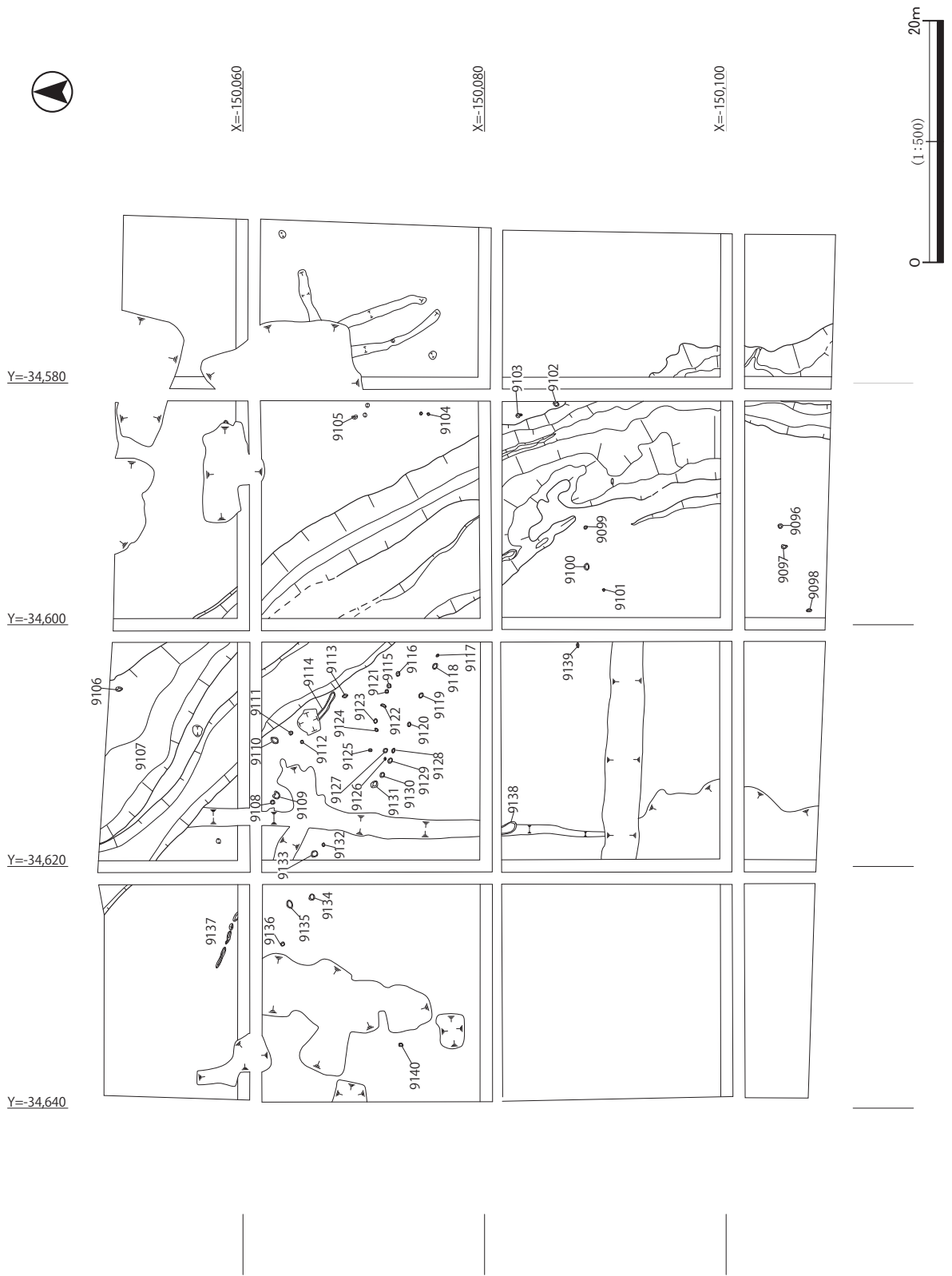


图76 第9-4 a面平面图





図77 第9-4 a面9107流路出土木杭

表3 第9-4 a面9107流路関連木杭

樹種	割り方	先端の形											合計	
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K		
スギ	○	1	2	1	1	1							1	7
	■													0
	▲													0
	不明													0
ヒノキ	○													0
	■				1			1						2
	▲													0
	不明													0
マツ科	○					1								1
	■													0
	▲													0
	不明													0
クリ	○													0
	■				1									1
	▲													0
	不明													0
小計		1	2	1	3	2	0	1	0	0	0	1	11	

* 先端の形
A: 片側のみ切込
B: 4方向から切込
C: 片側のみ2方向から切込
D: 欠損のため判断できず
E: 片側のみ3方向から切込
F: 3方向から切込
G: 角材を両側より切込
H: 角材を片側からのみ切込
I: 5方向から切込
J: 6方向から切込
K: 両側から切込
* 割り方
○: 丸棒 (枝・木をそのまま使用)
■: 板
▲: みかん割り
不明: 判別つかず

第9-4 a層出土遺物 当層を掘削中に481点の遺物が出土した。土師器は杯(186)・皿12点、高杯16点、壺・甕281点、鍋1点、羽釜2点と古墳時代の装飾土師器壺2点、小型丸底壺と思われる1点、および細片51点である。須恵器は杯身(185)・杯蓋(184)90点、高杯1点、壺・甕16点、提瓶5点、細片3点である。また、弥生土器と思われる細片も1点ある。木製品は「コ」字型部材(188)1点がある。獣骨58片や種子類も採取した。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は7世紀から8世紀初頭と考えられている。古墳時代の遺物も散見されるが、矛盾はないと思われる。

## 第5節 古墳時代以前

### 第10 a面・第10 a層 (図80・81)

第10 a面は、調査区北側の一部を除いて層厚0.2 m前後堆積した第9-4 a層を掘削して検出した遺構面である。特に、調査区西半の第10 a層には有機物粒を多量に含み、暗色帯を形成する箇所がある。遺構面の標高は2.5~2.6 mを測る。検出した遺構は、流路南端の西岸にある堤状の高まり、および暗色帯上のピット群である。

1003 堤は、第9-4 a面9107 流路南端付近で検出した堤状高まりとほぼ同一地点で検出したもので、0.2 m程度の高まりを有する。

調査区西半には、一見「第1 黒色泥層」とみまがう暗色帯がひろがり、古墳時代のピット群が点在する。小型丸底壺が出土した1030ピットも、その一つである。

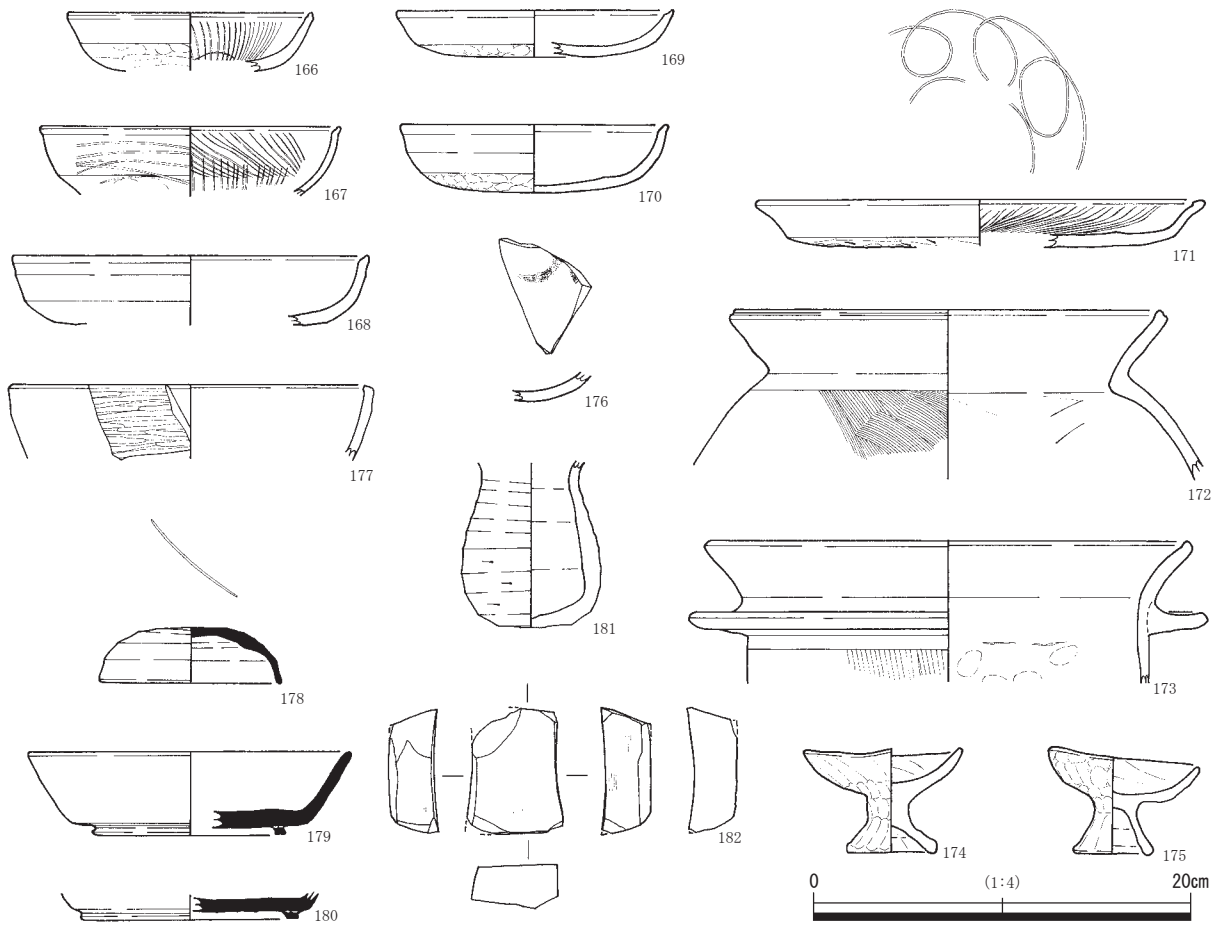


図78 第9-4 a面9107流路出土遺物

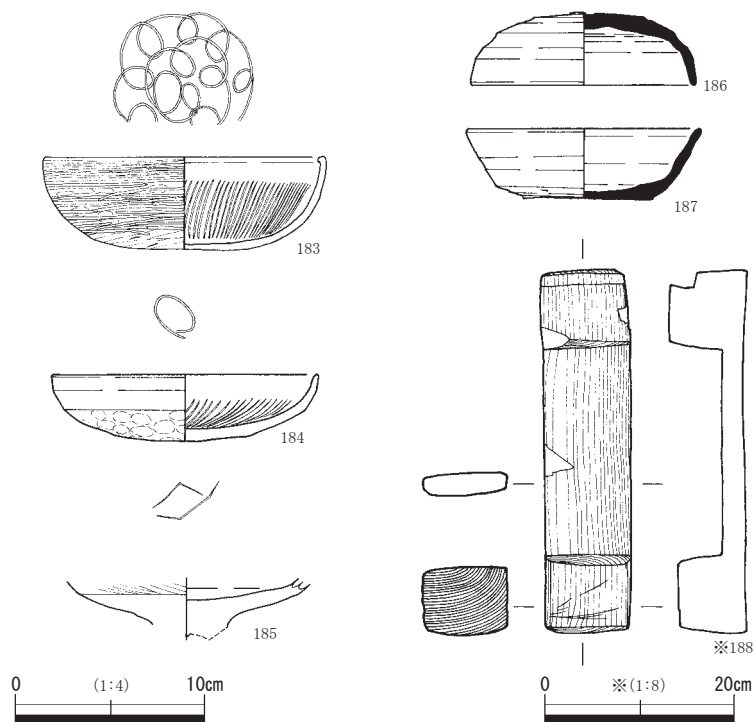


図79 第9-4 a面関連・第9-4 a層出土遺物

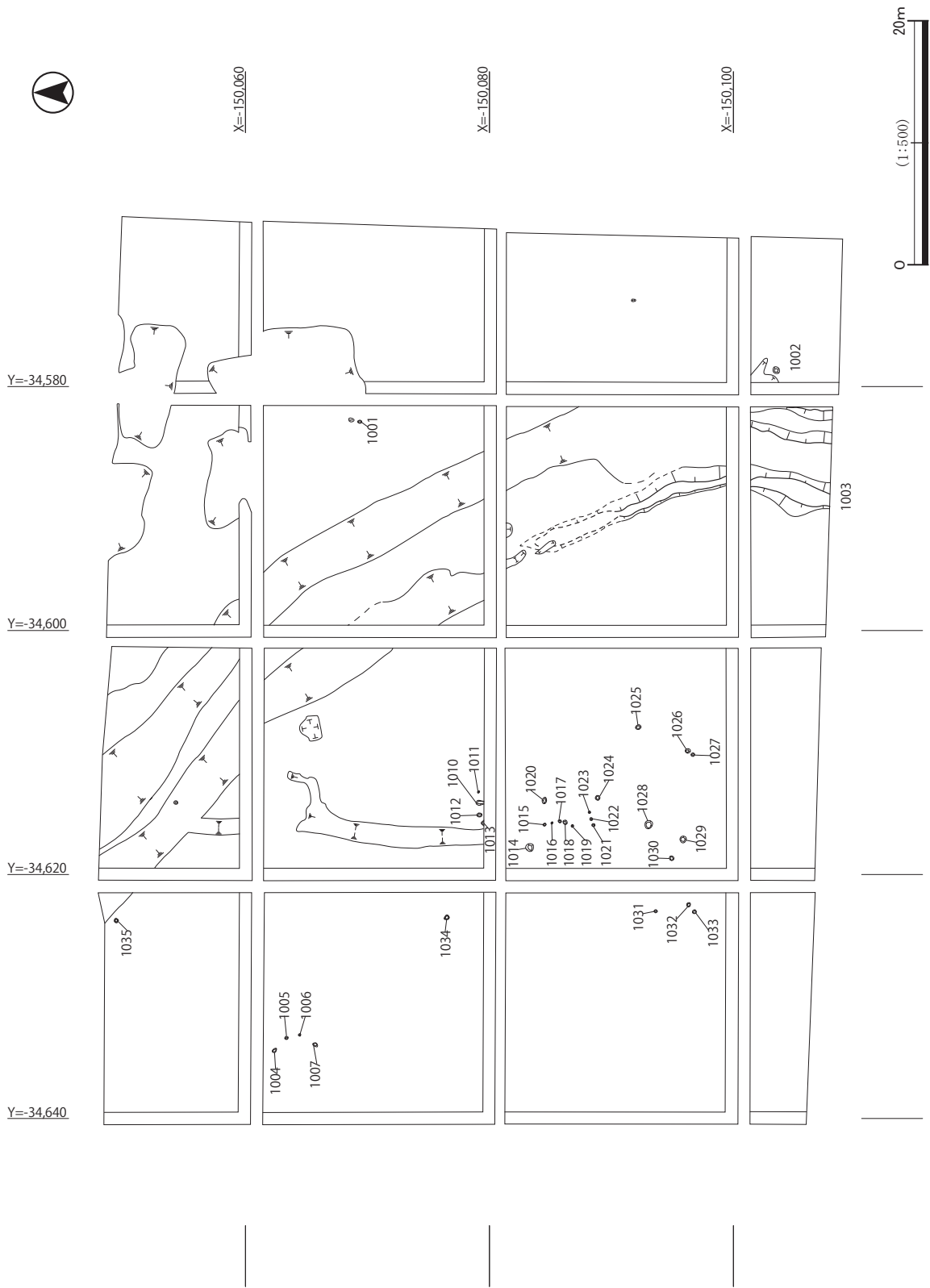


图80 第10a面平面图

**第10 a面出土遺物** 当面精査中に95点の遺物が出土した。土師器壺・甕60点、高杯(194)6点、羽釜1点、細片13点、須恵器杯身(200)9点、壺2点、甕4点である。骨片11片、種子類も採取した。

遺構からは1012ピットから須恵器杯身1点、1030ピットから土師器壺・甕1点、小型丸底壺(195)1点が出土している。

**第10 a層出土遺物** 当層を掘削中に370点の遺物が出土した。土師器杯・皿2点、高杯(193)28点、古式土師器甕2点を含め、壺・甕(189～191)202点、杯1点、羽釜4点、小型丸底壺(196)が24点、細片60点である。須恵器は杯身(199)32点、杯蓋(197)1点、壺4点、甕5点である。弥生土器は壺・甕が6点と細片1点である。獣骨片39片も採取している。

なお、落込み部分から、土師器壺・甕6点、甕と思われる細片1点、須恵器杯身9点、弥生土器細片1点および獣骨片17片が、堤部分からは土師器壺・甕が1点出土している。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は古墳時代頃と考えられている。土師器羽釜など若干上層の遺物の混入が生じている可能性もあるかと思われるが、概ね妥当と考える。

**第10 b面・第10 b層 (図81・82)**

第10 b面は、調査区のほぼ全域に堆積した厚さ0.2 m前後の第10 a層を掘削すると、調査区北東隅付近でのみ確認でき、多くの箇所では第11 - 1 a面が露出する。遺構面の標高は、調査区東半が2.6 m、西半が2.2～2.3 mを測り、おおよそ西へ向かって緩傾斜する。当遺構面から、顕著な遺構は検出できなかった。

**第10 b面出土遺物** 当面を精査中に2点の遺物が出土した。土師器壺・甕1点、須恵器甕1点である。獣骨片も1片だけ採取している。

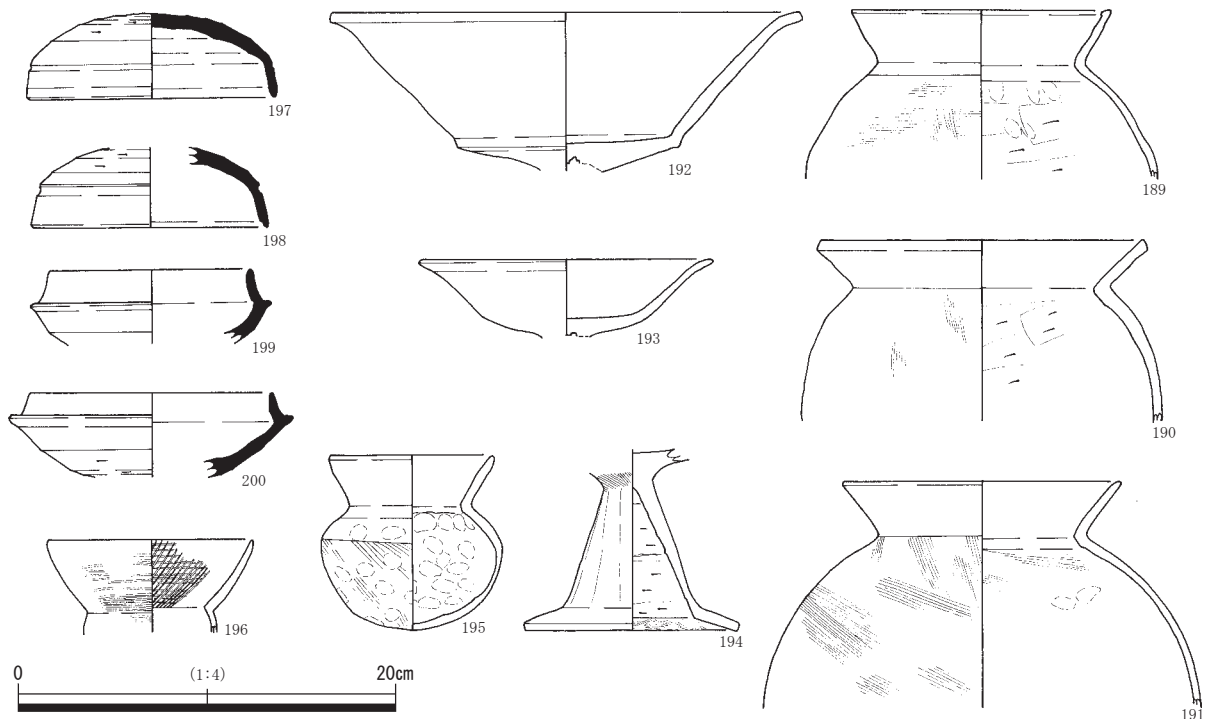


図81 第10 a面関連・第10 a層・第10 b層出土遺物

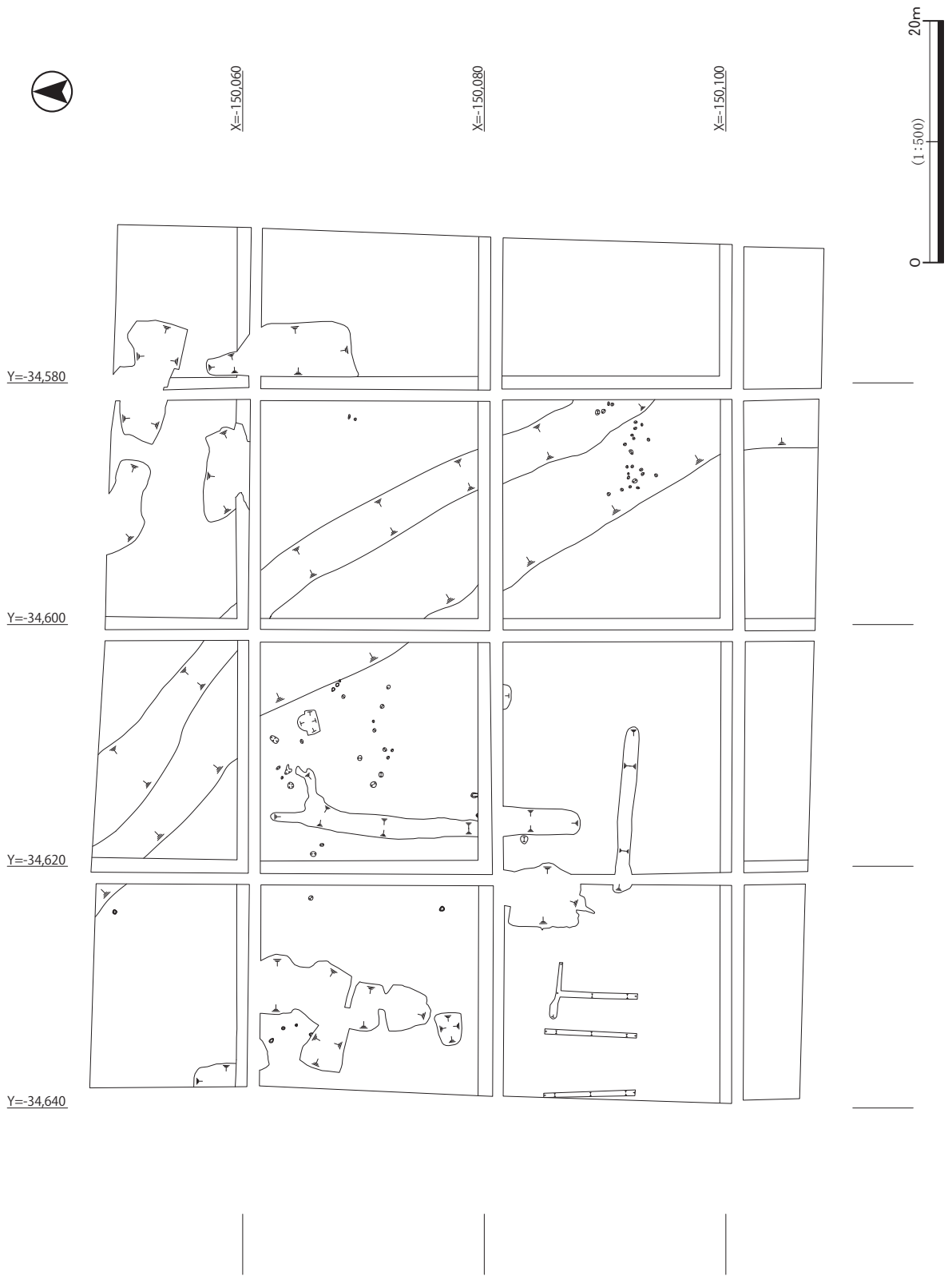


图82 第10b面平面图

**第10 b層出土遺物** 当層を掘削中に210点の遺物が出土した。土師器は杯・皿1点、高杯(194)12点、壺・甕158点、小型丸底壺23点、羽釜1点、壺1点、装飾壺1点、細片6点である。須恵器は杯身6点、杯蓋(198)1点である。弥生土器も細片が1点ある。

既往の調査による年代観では当面・層の形成は古墳時代頃と考えられており、矛盾はないと思われる。

#### 第11-2 a面・第11-2 a層(図83~85)

第11-2 a面は、調査区全域に層厚0.1~0.5 mで堆積する第11-1 a層を掘削し検出した遺構面である。検出した遺構は、水田に伴う畦畔、水路、および微高地である。標高は、調査区東半の水田域が2.2 m前後、調査区西半の微高地は2.4 m前後を測る。

水田は西半の微高地の縁辺に沿い、幅0.2~0.5 m、高さ0.03~0.1 m程度の小規模な畦畔によって区画される。畦畔はほぼ確認することができたが、調査区東端付近で1箇所見落とした場所がある。水田内を北流する水路に沿った水田は、いずれも不規則な三角形もしくは四角形、場合によっては五角形を呈する。しかしそれらを除くと、その平面形態は調査区南端では方形が目立ち、その他の箇所では概ね長方形を呈する。それらのうち確実に判明するものの平面積は、最小が15.8㎡、最大が30㎡である。

水路は4条検出した。調査区南端付近で分岐したと思われる水路のうち、1102溝と1103溝の2条が東側へせり出す微高地の縁辺にほぼ沿って北流し、調査区北西端から調査区外へのび、1102溝は03-1調査区の第11面452溝へと繋がる。1101溝は、緩やかなS字を描きながら北流し、途中調査区東側から流れ込んできた1106溝と合流、そのまま調査区外へのび、03-1調査区の第11面383流路へと繋がる。この水路には、水田に伴うものよりやや大きめの幅0.5~0.7 mの畦畔が伴うが、1103溝右岸側では確認することができなかった。また水口は、南端で検出した1105水口の1箇所のみである。

これに対して、水田域より0.2 m前後高い調査区西半に広がる微高地上には、第11-1 a層の堆積がそれほど顕著ではなく、遺構を確認することもできなかった。

**第11-2 a面出土遺物** 当面を精査中に弥生土器壺・甕9点と鉢1点が出土した。

遺構では、1101溝から弥生土器鉢(202)1点、壺・甕と思われる7点、同一個体である後期の弥生土器甕(201)2点のほか、細片2点、板材(205)1点、1102溝から弥生土器壺・甕9点、1103溝から弥生土器壺・甕10点が出土した。また、1107畦畔直上から弥生土器鉢(203)が出土している。

**第11-2 a層出土遺物** 当層を掘削中に13点の遺物が出土した。すべて弥生土器で、壺・甕(204)が12点と細片1点である。

既往の年代観では当面・層の形成は弥生時代後期頃と考えられており、矛盾はないが、今回の調査では出土した遺物の総量が少なく判然としない。

#### 第11-3 a面・第11-3 a層(図86・98)

第11-3 a面は、調査区全域に広く堆積する第11-2 a層を除去して検出した面で、同面を構成する第11-3 a層は、調査区東半では第12-1 a層上面に堆積していたが、西半では徐々に同層がなくなり、西端にある第13-1 a面1325流路から溢れ出て自然堤防を形成する第12-2 b層が直接露呈する。

第11-3 a面上では、溝1条検出したのみで、標高は概ね2.1~2.2 mを測る。

1197溝はY-3トレンチから東側付近で検出し、幅0.8 m、深さ0.3~0.4 mを測る。

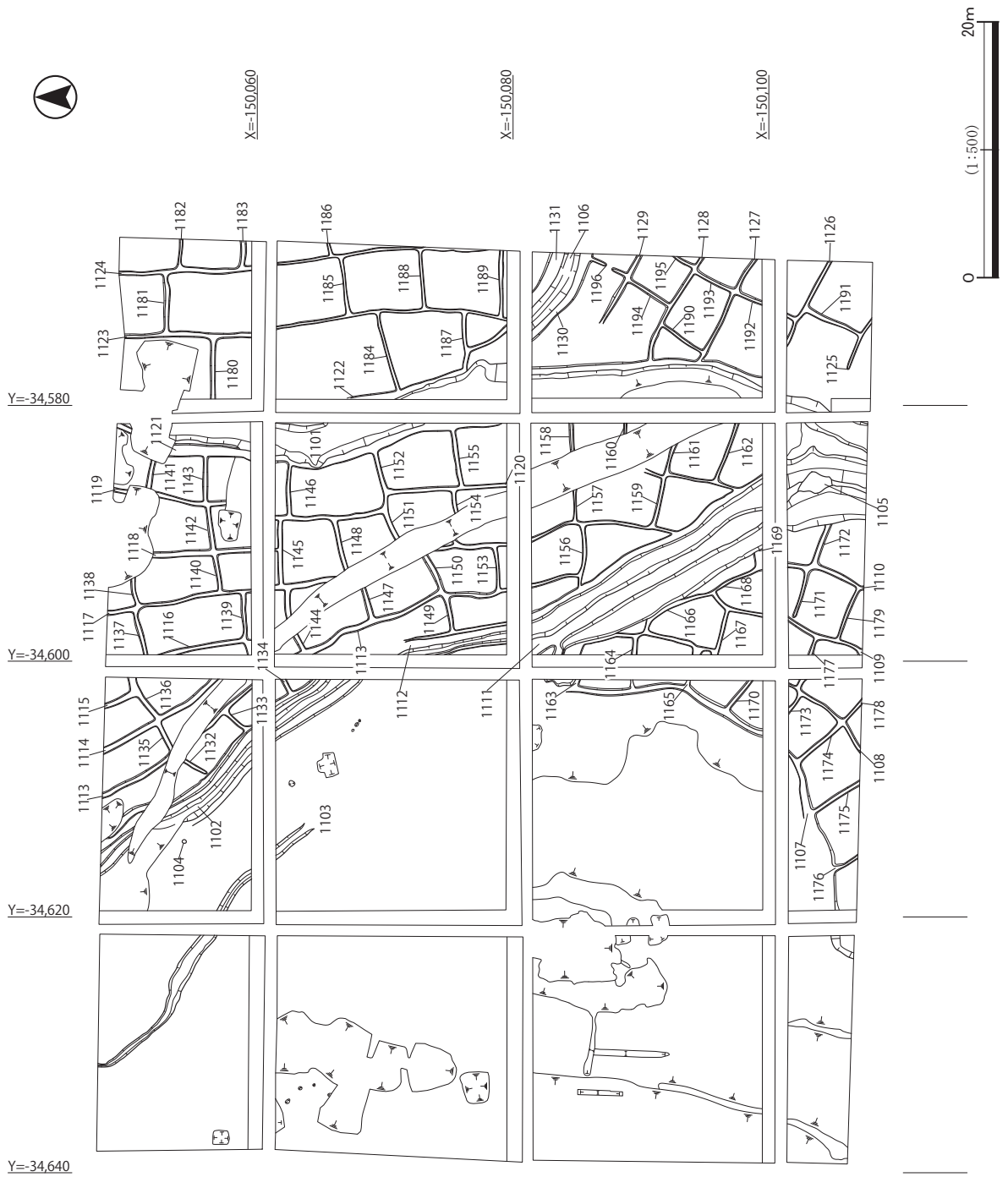


图83 第11-2 a面平面图



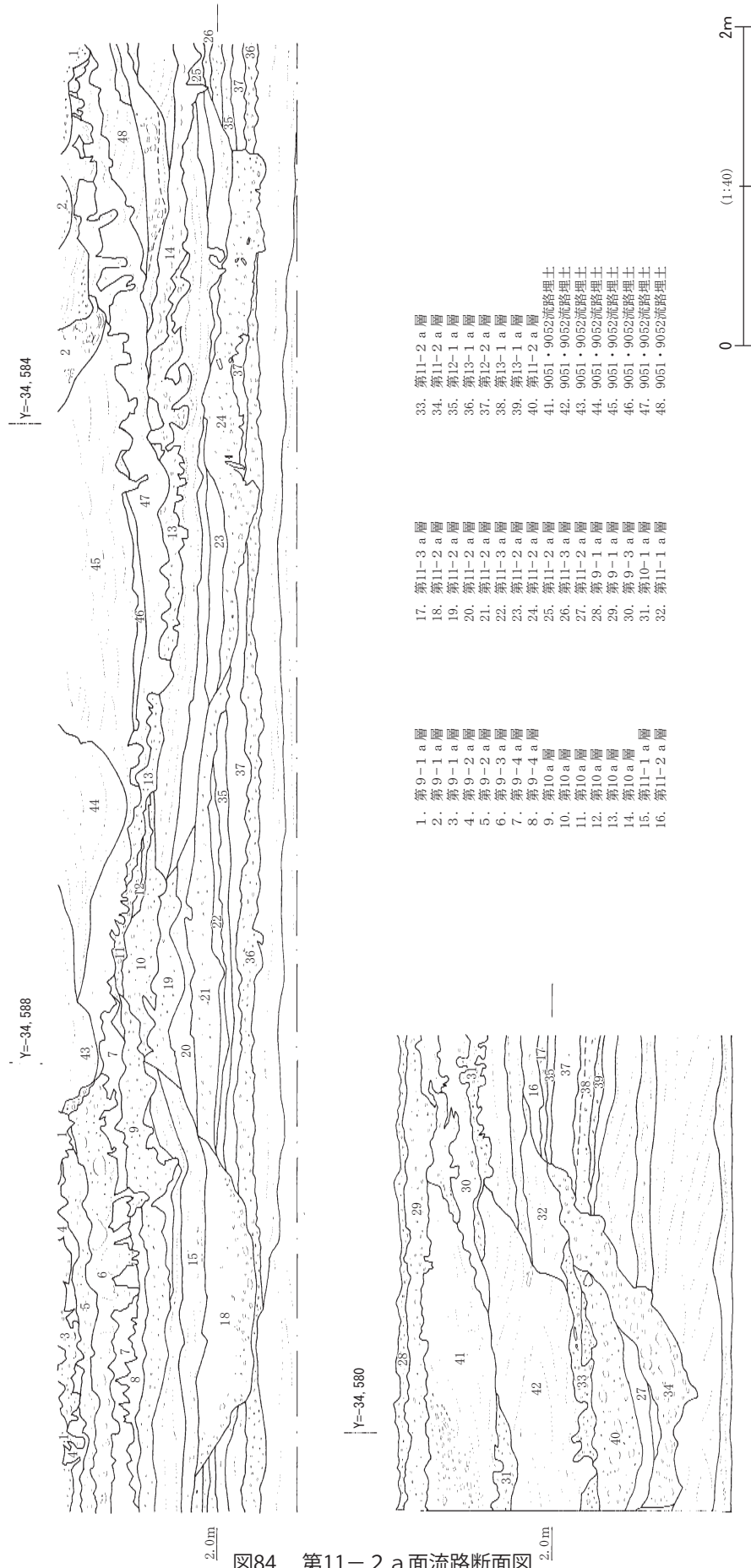


図84 第11-2a面流路断面図

第11-3 a面出土遺物 出土した遺物はない。

第11-3 a層出土遺物 当層を掘削中に石包丁(229)1点と弥生土器細片1点が出土した。

#### 第11-3 b面・第11-3 b層(図87)

第11-3 b面は、第11-3 a層を除去して検出した面だが、第11-3 b層の堆積を確認したのはX=-155,060、Y=-34,580周辺のごく限られた範囲のみで、そのほかは第12-1 a層が露出する。検出遺構は、溝1条のみで、標高は概ね2.0~2.1 mを測る。

1198溝は調査区東端付近で検出し、幅1 m、深さ0.7~1 mを測る。

第11-3 b面出土遺物 出土した遺物はない。

第11-3 b層出土遺物 当層を掘削中に弥生土器甕1点が出土した。

#### 第12-1 a面・第12-1 a層(図88)

第12-1 a面はごく一部で第11-3 b層を、大半の箇所では第11-3 a層を掘削して検出した面で、一般に「第2黒色泥層」と呼ばれる層であるが、「第1黒色泥層」「第3黒色泥層」に比べて暗色の度合いがかなり低い。第12-1 a層の広がり、調査地北西部から調査区東半および南西端では0.1 m以下の厚さで堆積するが、それ以外の調査区西半を中心とする箇所では、第13-1 a面1325流路から溢れ出した第12-2 b層が全域に堆積する。

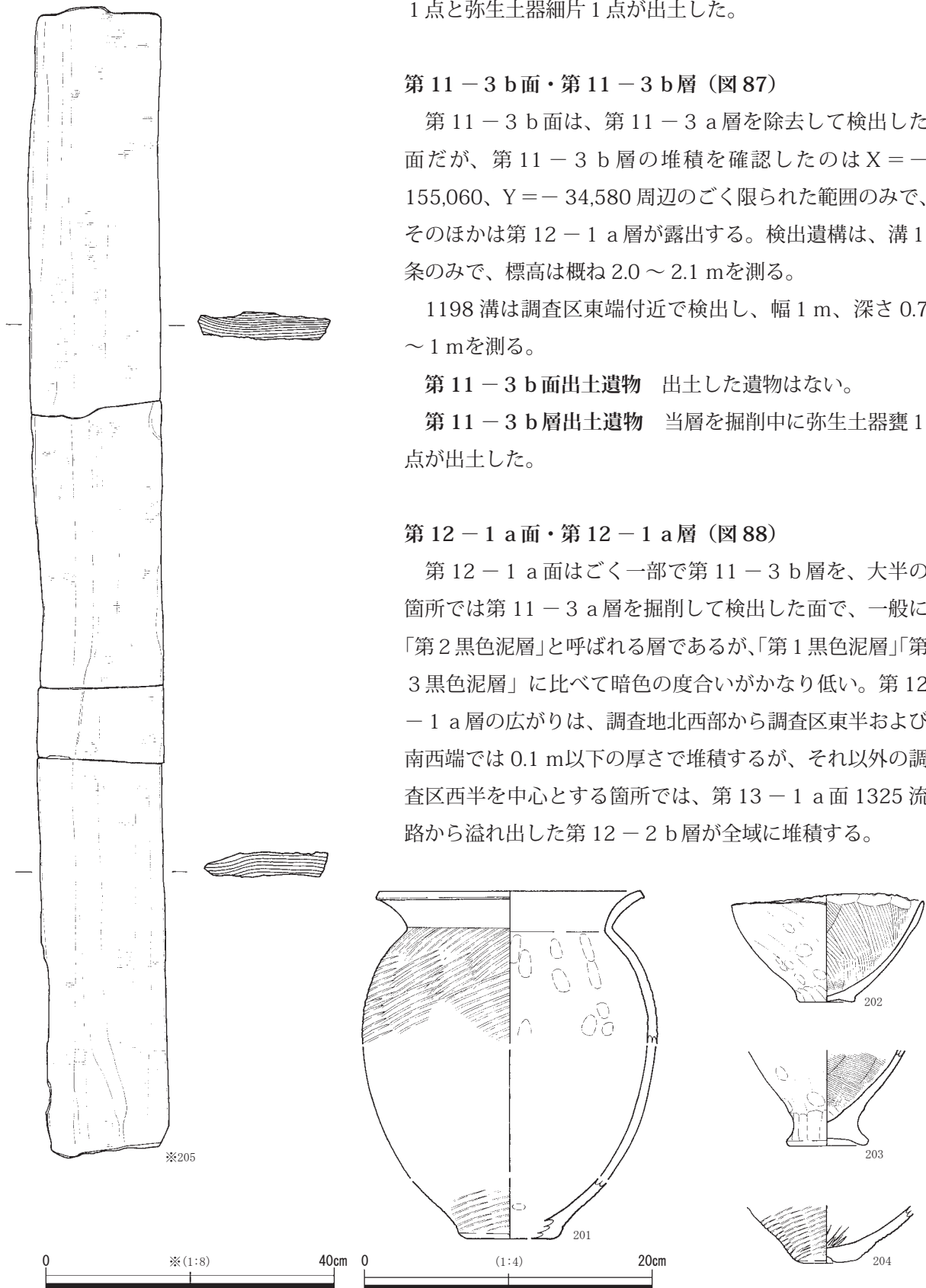


図85 第11-2 a面関連・第11-2 a層出土遺物



図86 第11-3 a面平面図



図87 第11-3 b面平面図

地形的には、第12-1b層が堆積する調査区西半の標高は2.4mと高く、逆に第12-1a層が堆積する調査区東半は2.1～2.2mを測る。検出した遺構はなく、出土遺物も弥生土器片が1片出土したにすぎない。

**第12-1a面出土遺物** 出土した遺物はない。

**第12-1a層出土遺物** 当層を掘削中に弥生土器甕が1点出土した。

**第12-3a面・第12-3a層 (図89・90)**

第12-3a面は、調査区東半を中心に堆積する第12-1a層を掘削して検出した遺構面である。調査区西半は、第12-1b層堆積時に第12-3a層を削平したため、部分的に遺存しない箇所がある。遺構面の高さは、概ね1.9～2.1mを測る。

第12-3a面の遺構として検出したものは特にないが、直下の第13-1a面の1303・1312畦畔が高まりとして姿を現す。

**第12-3a面出土遺物** 出土した遺物はない。

**第12-3a層出土遺物** 当層を掘削中に同一個体を多く含む弥生土器壺・甕(206)38点が出土した。

既往の年代観では当面・層の形成は弥生時代中期中葉から後葉であり、矛盾はないが、今回の調査では出土した遺物の総量が少なく判然としない。

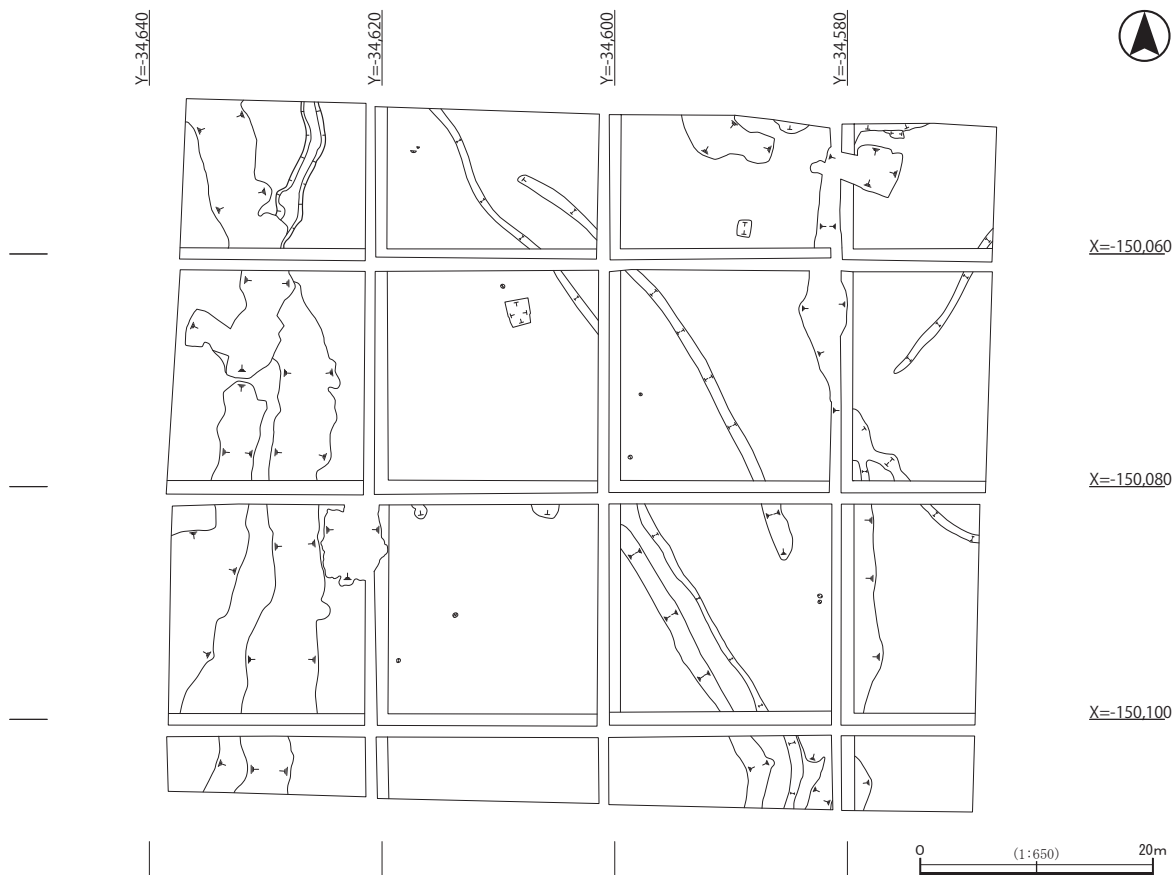


図88 第12-1a面平面図



図89 第12-3 a面平面図

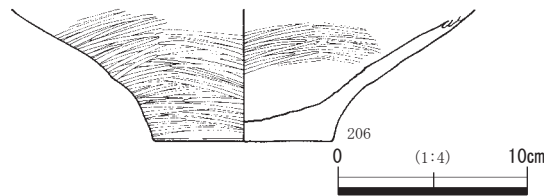


図90 第12-3 a層出土遺物

第13-1 a面・第13-1 a層 (図91～93、96～98)

第13-1 a面は、調査区東半では第12-2 a層を、同中央から西半では第12-2 b層を除去して検出した面である。ベースとなる層は、「第3黒色泥層」と呼ばれる暗色化した層で、「第1黒色泥層」ほどではないが、比較的明瞭に暗色化した層が、調査区西端の1325流路を除くほぼ全域で確認できる。遺構面の標高は調査区南半で1.9 m、北半で1.8 mを測る。検出した遺構は、大畦畔、畦畔、流路などである。

1302～1304大畦畔は調査区中央～南半で「コ」字状を呈した状態で検出したが、それらのうち1303大畦畔が幅2 m・高さ0.07 mと最も大きく、1302・1304大畦畔も幅0.5～1.5 mとかなりの規模を有する。またこの大畦畔に取り付くように検出した1312大畦畔は、幅2 m・高さ0.1 mを測り、調査区北東隅へと伸びる。この大畦畔に囲まれた内側・外側での標高差はない。

この大畦畔周辺では、幅0.4 m前後・高さ0.03 m程度の畦畔を各所で検出したが、面的な広がり方が十分明らかになったとは言い難い。

第13-1 a層中から弥生時代前期の土器が、散発的に数個体出土した。



图91 第13-1 a面平面图

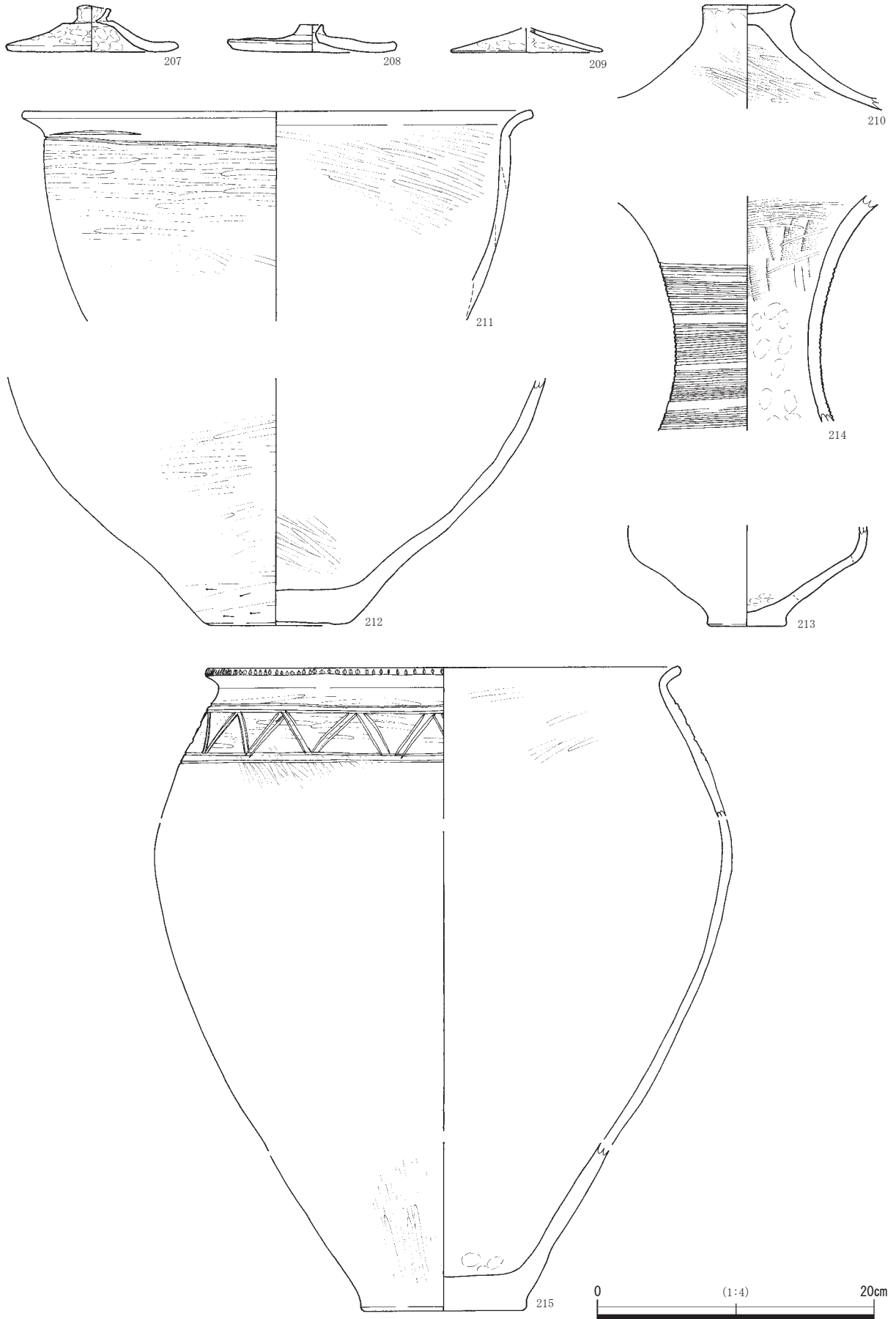


图92 第13-1 a面1325流路・第13-1 a層・第13-1 b層出土遺物

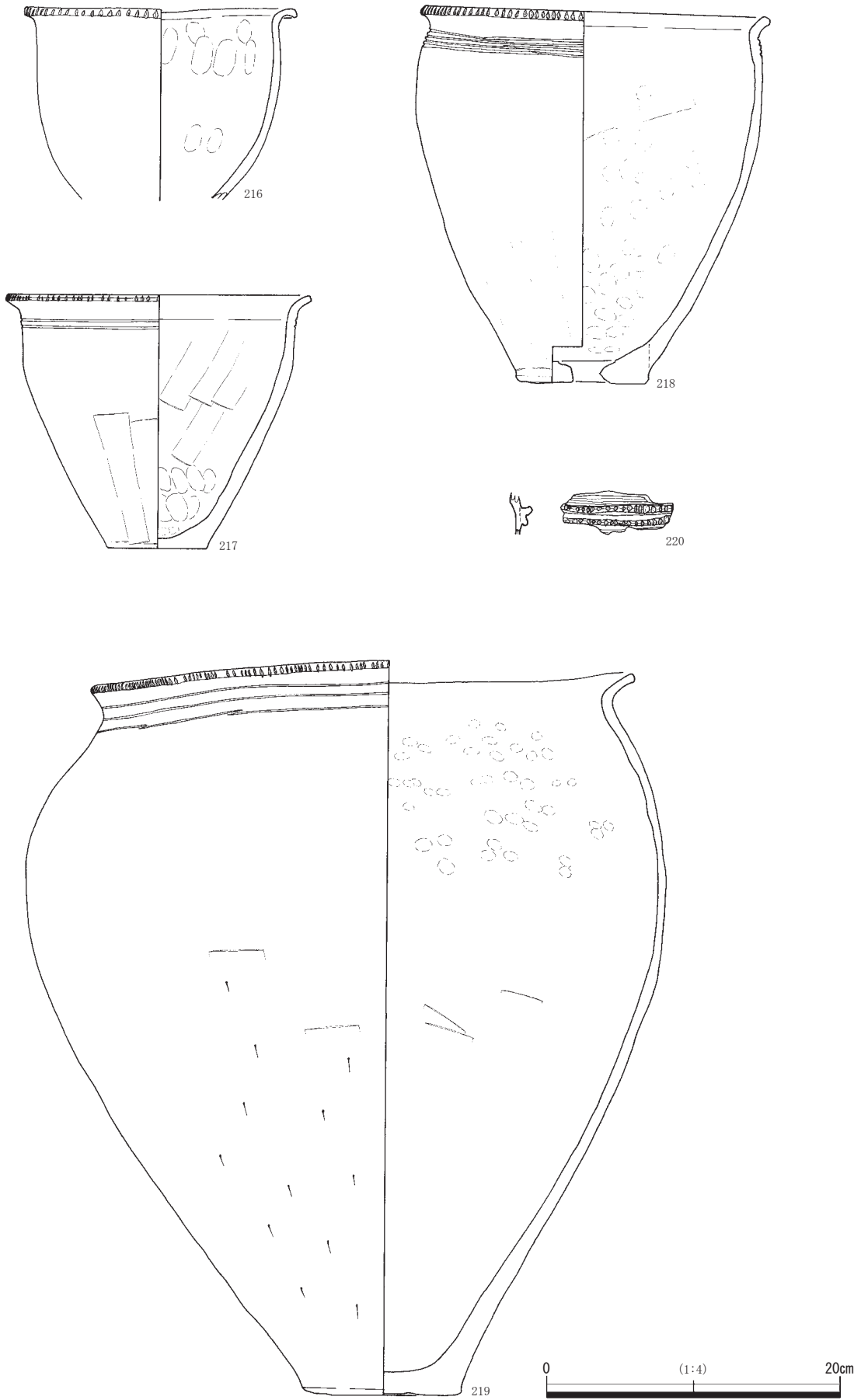


图93 第13-1 a层出土遗物



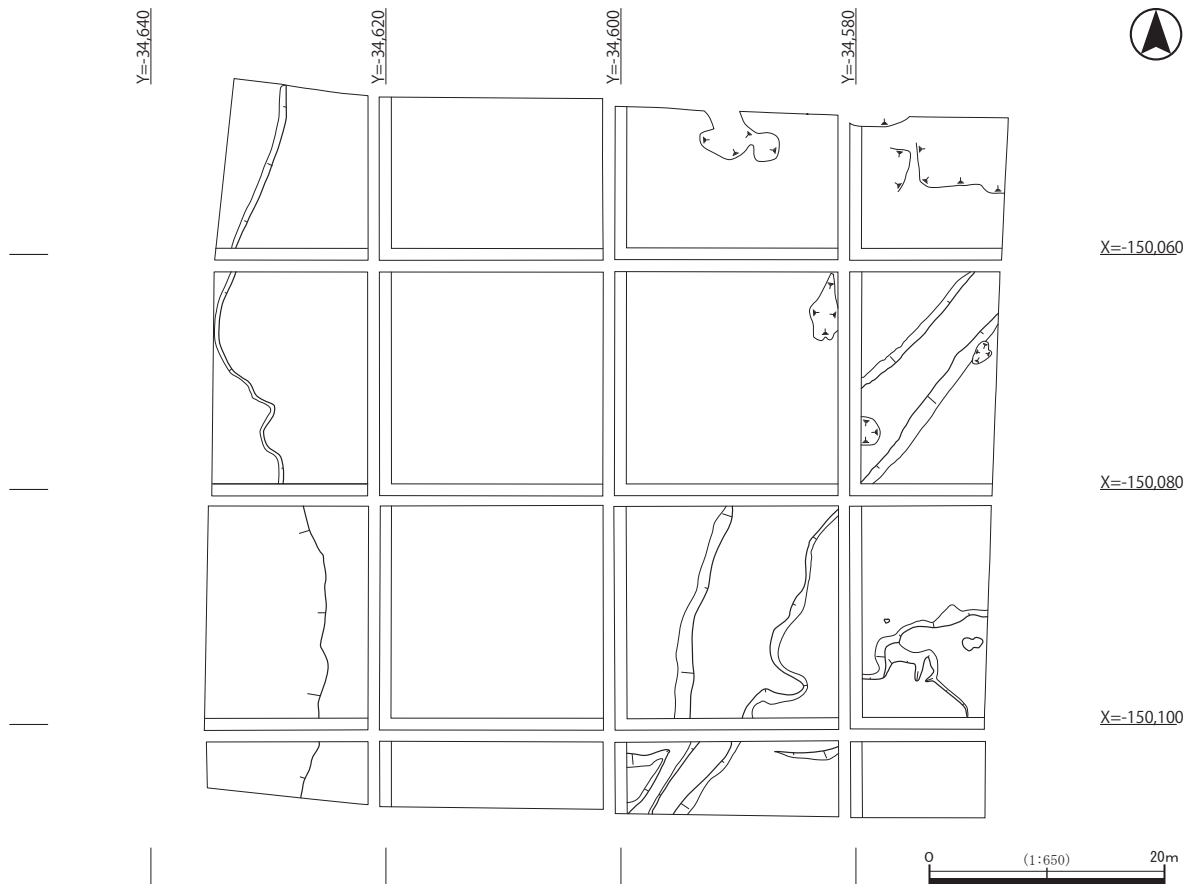


図94 第13-1 b面平面図

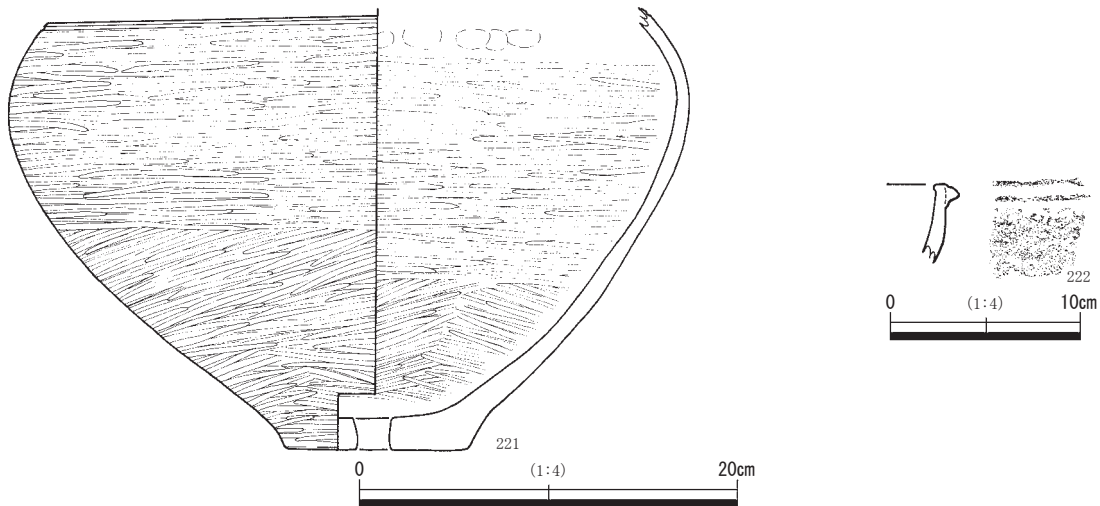


図95 第13-1 b面・第13-1 b層出土遺物

**第13-1 a面出土遺物** 1325 流路から 147 点の遺物が出土した。弥生土器壺 (214)・甕 140 点、蓋 (210) 1 点、縄文土器深鉢 1 点とサヌカイト細片 4 点、石包丁 (228) 1 点も出土している。種子類も採取した。1302 畦畔からは楔形石器 (225) 1 点が出土した。

**第13-1 a層出土遺物** 当層を掘削中に 123 点の遺物が出土した。遺物は散発ではあるが、まとまる形で個体の破片が出土しており、器形を復元できた遺物が多いのが特徴的であった。弥生土器壺

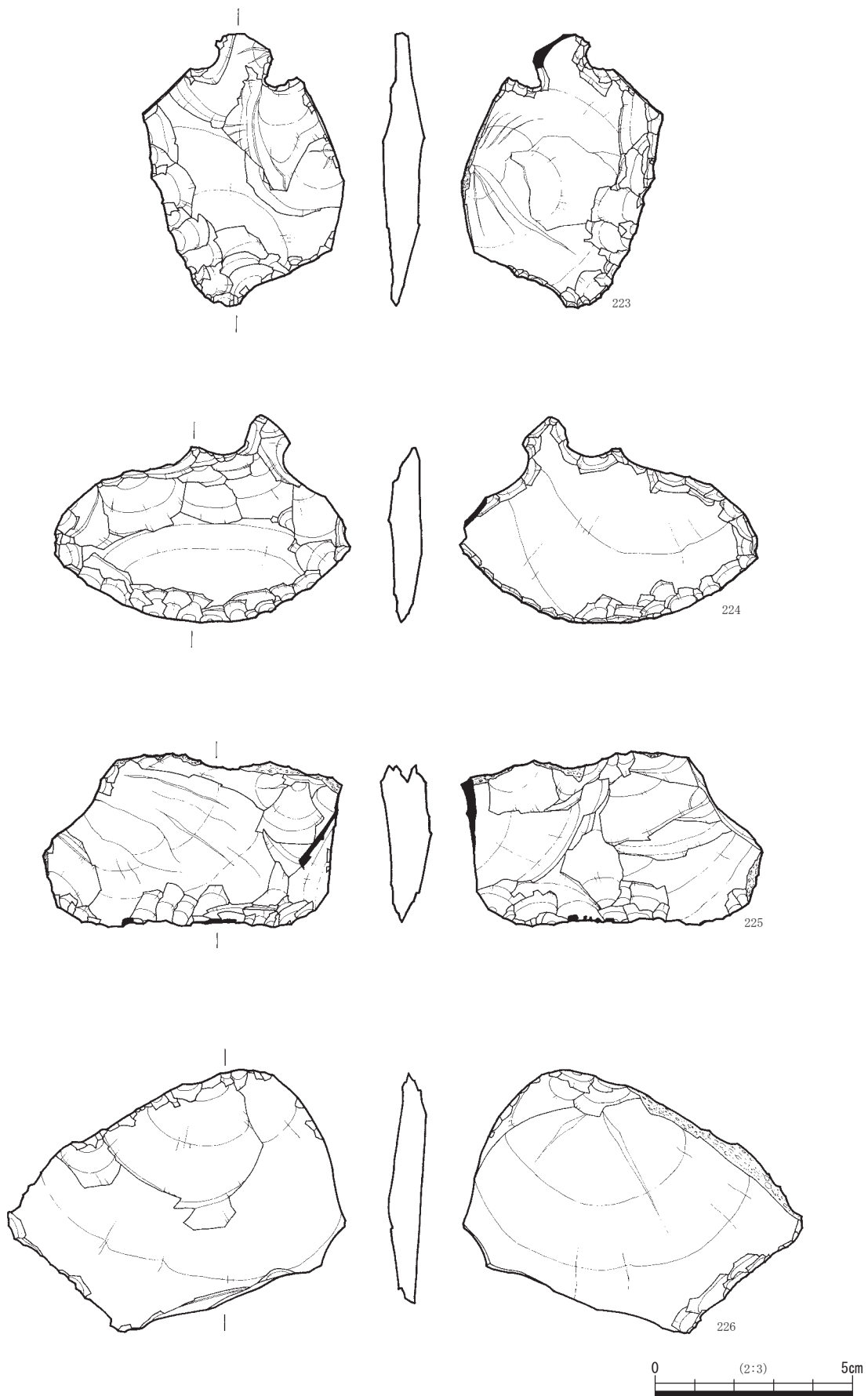


图96 第13-1 a面1302畦畔内·第13-2 b层出土打製石器

(212、213、220)・甕(215～219) 98点、鉢(211) 1点、蓋(208、209) 2点がある。壺体部の破片と思われる細片が1点ある。また、器種が不明の弥生土器細片は15点である。

既往の年代観では当面・層の形成は弥生時代の前期末から中期前葉頃と考えられており、矛盾はないと思われる。

### 第13-1b面・第13-1b層・第13-2b層 (図94～96・98)

第13-1a層を掘削して、第13-1b面を検出した。第13-1a面検出の1312畦畔直下では、第13-1b層が0.6mほどの高まりとなっているが、他所は概ね標高1.6～1.7mである。当遺構面では検出遺構はなかった。第2節に述べているように、第13-2a層は遺存せず、第13-2b層がみられた。

**第13-1b面出土遺物** 当面を精査中に弥生土器壺(221)・甕10点と突帯がわずかに残る縄文土器の細片が1点出土している。

**第13-1b層出土遺物** 当層を掘削中に計38点が出土した。弥生土器は壺・甕22点、蓋1点、鉢1点、細片11点がある。摩滅の著しい縄文土器深鉢(222)も出土した。石器類はサヌカイト細片2点がある。種子類や木片も採取した。

既往の年代観では当面・層の形成は弥生時代の前期後葉頃と考えられている。今回の調査では遺物の量がやや少なく判然としないが、矛盾はないと思われる。

**第13-2b層出土遺物** 当層を掘削中に石包丁の未成品(230、231) 2点とサヌカイト製の楔形石器(227) 1点、石匙(223、224) 2点、剥片(226) 1点が出土している。

既往の年代観では当層の形成は弥生時代の前期後葉頃と考えられている。今回の調査では出土遺物が石器のみであり、その量も少なく判然としない。

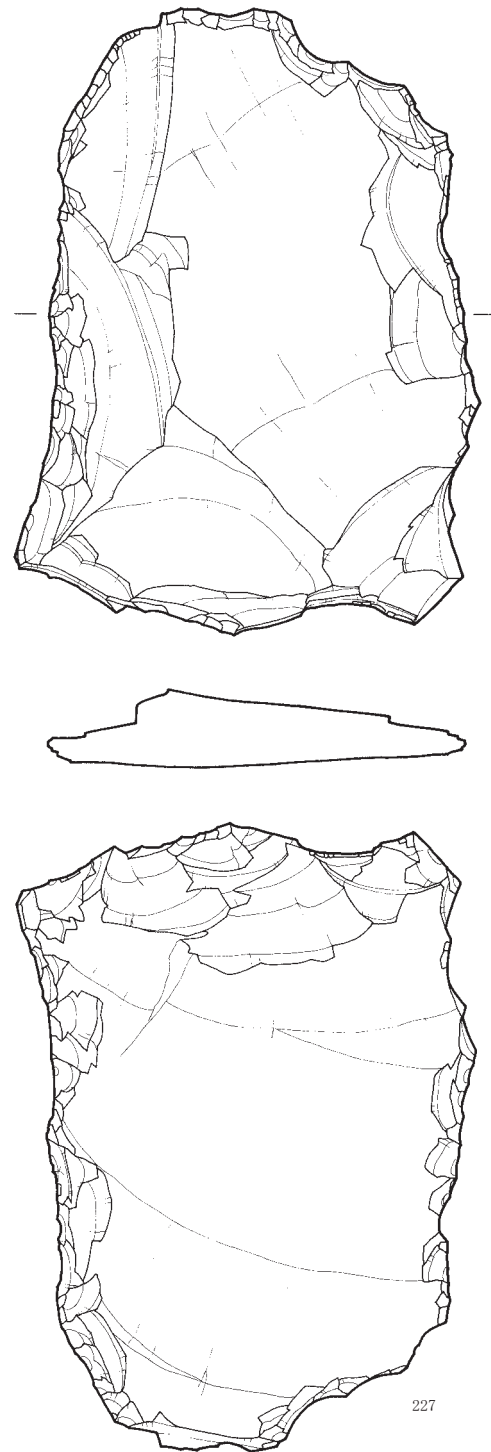


図97 第13-1a層出土打製石器

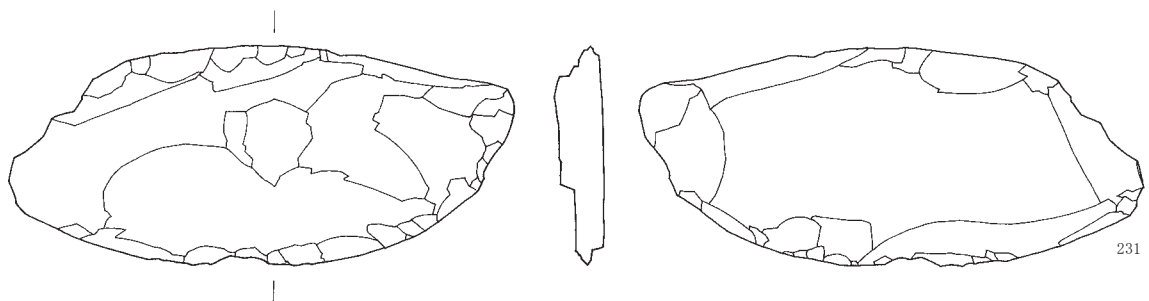
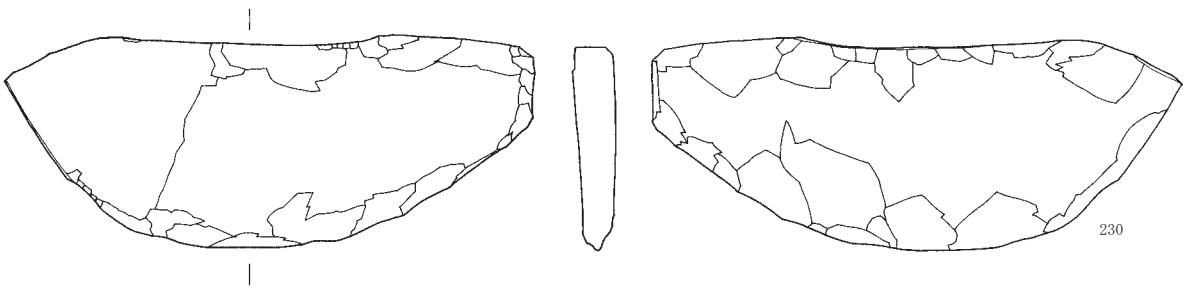
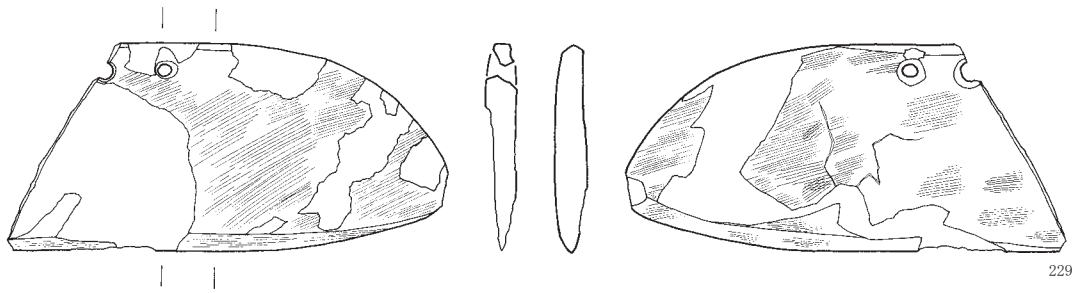
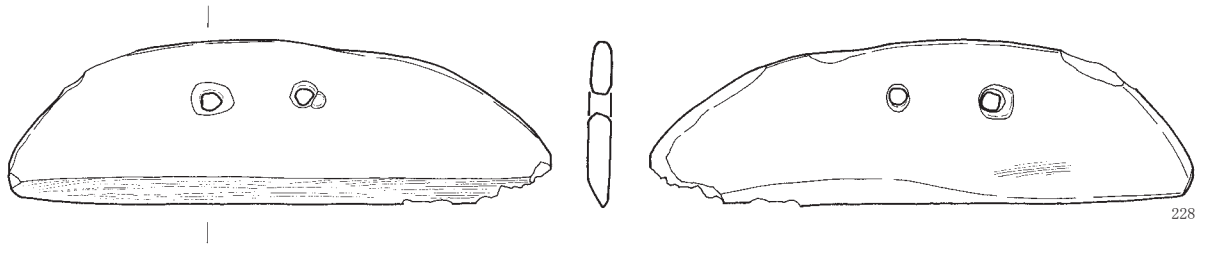


図98 第11-3 a層・第13-1 a面1325流路・第13-2 b層出土石包丁類

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 福万寺Ⅱ期地区（08－1）調査区における微化石分析

#### 1. はじめに

池島・福万寺遺跡は、河内平野の東南部、大阪府東大阪市池島町と同八尾市福万寺町に所在し、生駒山地から西に形成された扇状地と、旧大和川水系の玉串川の自然堤防に挟まれた後背湿地に立地する。

本遺跡では、昭和47（1972）年に府立池島高校敷地内で初めて発掘調査が実施された後、現在まで30年以上にわたって調査が継続されている。これまでの調査において、本遺跡では弥生時代前期から後期にかけ広範囲で水田開発が行われ、その後、幾度も洪水被害に遭いながらも都度復旧し、水田稲作が営まれ続けてきたことが明らかとなっている。また、当地域では水田の復旧と同時に土砂を島状に盛り上げ、そこを畠として利用する島畠が造成され、本遺跡においても平安時代から現代まで連続して広い範囲で確認されている。

ここでは、福万寺Ⅱ期地区（08－1）調査区において、植物珪酸体分析、花粉分析および珪藻分析をあわせて実施し、稲作をはじめとする農耕の様相、周辺植生さらに堆積環境とそれらの変遷について検討した。

#### 2. 原理

##### （1）植物珪酸体分析

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

##### （2）花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

##### （3）珪藻分析

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

### 3. 試料

分析試料は、B区X-3トレンチにおいて、上位より第8-2 a層、第9-1 a層、第9-2 a層上、第9-2 a層下、第9-3 a層、第9-4 a層上、第9-4 a層下、第10 a層より採取された8試料である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図（図99）に示す。

### 4. 分析方法

#### (1) 植物珪酸体分析

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40 $\mu$ mのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 $\mu$ m以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中の植物珪酸体個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節型は0.3である（杉山，2000）。

#### (2) 花粉分析

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）

をアトラスとして、所有の現生標本とを対比して行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

### （3）珪藻分析

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600～1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

## 5. 結果

### （1）植物珪酸体分析

分析試料から検出された植物珪酸体は、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 4、図 99 に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。

以下に植物珪酸体の検出状況を記す。なお、機動細胞珪酸体の生産量は植物種によって相違することから、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

第 8-2 a 層では、イネ、キビ族型、メダケ節型およびネザサ節型が検出されたが、いずれも低い密度である。

第 9-1 a 層では、イネ、ヨシ属、ススキ属型およびネザサ節型が検出された。イネが比較的高い密度である以外は、いずれも低い密度である。

第 9-2 a 層上では、イネ、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型およびミヤコザサ節型が検出されたが、いずれも低い密度である。

第 9-2 a 層下では、ススキ属型とネザサ節型が検出されたが、いずれも低い密度である。

第 9-3 a 層では、イネ、ススキ属型、メダケ節型およびネザサ節型が検出されたが低い密度である。

第 9-4 a 層上では、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出された。イネが高い密度である以外は、いずれも低い密度である。

第 9-4 a 層下では、イネ、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型およびミヤコザサ節型が検出された。イネが高い密度であるものの、ほかはいずれも低い密度である。

第 10 a 層では、イネとネザサ節型が検出されたが、いずれも低い密度である。

表4 植物珪酸体分析結果

分類群 (和名・学名) \ 試料採取地点 (層序)		B区X-3トレンチ							
		8-2a	9-1a	9-2a上	9-2a下	9-3a	9-4a上	9-4a下	10a
イネ科	Gramineae (Grasses)								
イネ	<i>Oryza sativa</i>	18	24	12		18	36	36	12
キビ族型	<i>Panicaceae</i> type	6					6		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		6	12			6	6	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		6	6	6	12	6	6	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)								
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	6		6		6	6		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	24	12	12	6	12	12	6	6
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.						6		
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>			6			6	6	
その他	Others	12	18	18		6	12	18	6
未分類等	Unknown	54	72	61	85	72	66	60	85
植物珪酸体総数	Total	120	138	133	97	126	162	138	109

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.53	0.70	0.36		0.53	1.06	1.05	0.36
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		0.38	0.76			0.38	0.38	
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		0.07	0.08	0.07	0.15	0.07	0.07	
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.07		0.07		0.07	0.07		
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.12	0.06	0.06	0.03	0.06	0.06	0.03	0.03
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.						0.05		
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>			0.02			0.02	0.02	

※層序名の表記を一部省略している。以下、表5、6、図99~101、写真2~4も同じ。

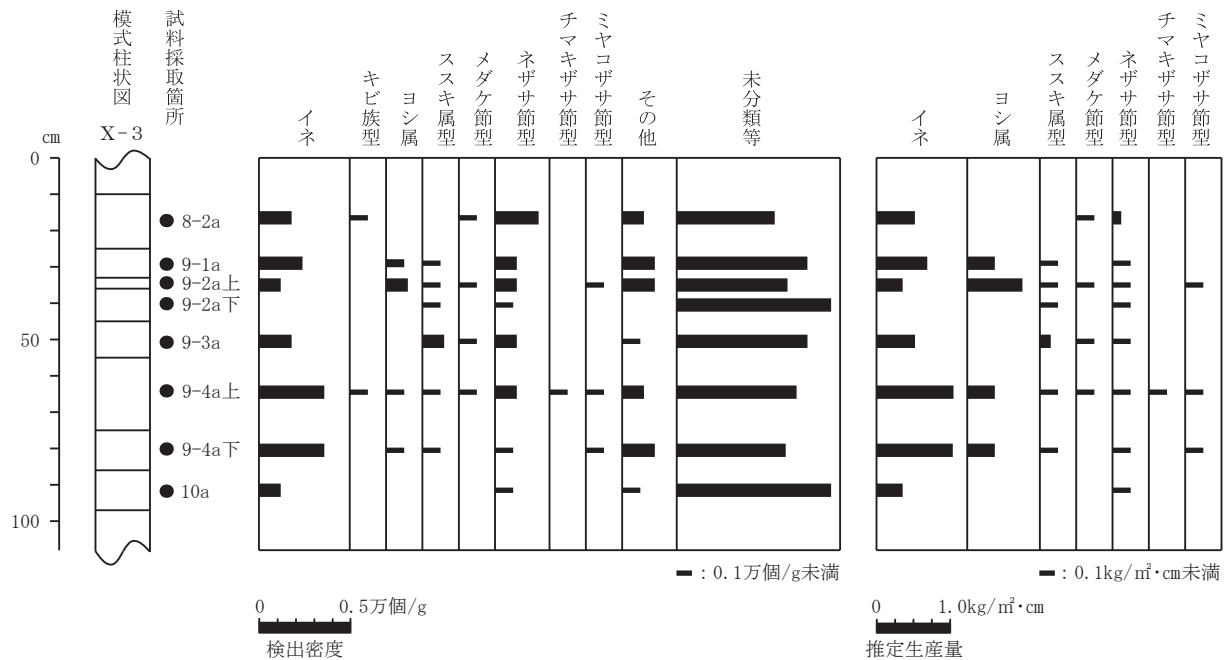


図99 植物珪酸体分析ダイアグラム



## (2) 花粉分析

### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 24、樹木花粉と草本花粉を含むもの 4、草本花粉 24、シダ植物孢子 2 形態の計 54 である。これらの学名と和名および粒数を表 2 に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを作成した (図 100)。なお、200 個未満であっても 100 個以上の試料については傾向をみるために参考に図示した。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。

また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

#### [樹木花粉]

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、グミ属、スイカズラ属

#### [樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属-ガマズミ属

#### [草本花粉]

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、キカシグサ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オオバコ属、ゴキヅル、タンポポ科、キク亜科、ヨモギ属

#### [シダ植物孢子]

単条溝孢子、三条溝孢子

### 2) 花粉群集の特徴

花粉構成と花粉組成の変化から、下位より 3 帯の花分帯を設定した。以下、分帯に沿って特徴を記載する (図 100)。

#### ・ I 帯 (第 10 a 層から第 9-4 a 層上: 古墳時代~飛鳥時代)

草本花粉の占める割合がやや高く、約 50% から 60% を占める。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、シイ属、コナラ属コナラ亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、スギ、マツ属複雑管束亜属などが連続して出現する。草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む) が高率に出現し、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われ、オモダカ属、ミズアオイ属などが出現する。

#### ・ II 帯 (第 9-3 a 層から第 9-2 a 層上: 奈良時代)

樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が増加する。草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む) が高率に出現し、増加傾向を示すカヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われ、アブラナ科、セリ亜科などが出現する。

#### ・ III 帯 (第 9-1 a 層、第 8-2 a 層: 奈良時代~平安時代)

草本花粉の占める割合がやや増加する。草本花粉ではイネ科 (イネ属型を含む)、カヤツリグサ科が増加する。第 9-1 a 層上ではソバ属がわずかに出現する。樹木花粉ではシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が減少し、マツ属複雑管束亜属が微増する。

表5 花粉分析結果

学名	分類群	和名	B区X-3トレンチ							
			8-2a	9-1a上	9-2a上	9-2a下	9-3a	9-4a上	9-4a下	10a
Arboreal pollen		樹木花粉								
<i>Podocarpus</i>		マキ属							1	1
<i>Abies</i>		モミ属	8	1				1	4	1
<i>Tsuga</i>		ツガ属	3						2	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属復雑管束亜属	20	9	1	3	3	12	13	7
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	28	16	4	6	9	35	34	31
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	1		1		1	2	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	33	39	4	21	15	53	39	32
<i>Salix</i>		ヤナギ属		1				1		
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	1				1		1	1
<i>Betula</i>		カバノキ属						2	1	
<i>Corylus</i>		ハシバミ属				2				1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	4			1	2	3	4	4
<i>Castanea crenata</i>		クリ	1	3	2	2	2	3	2	
<i>Castanopsis</i>		シイ属	15	16	8	19	21	27	26	40
<i>Fagus</i>		ブナ属			1	1				1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	5	16	15	12	20	22	27	11
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	30	10	8	20	19	48	41	46
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	2	1				1	2	1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	2		1	1		4		1
<i>Acer</i>		カエデ属						1		
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	1							1
<i>Vitis</i>		ブドウ属						1		
<i>Elaeagnus</i>		グミ属								1
<i>Lonicera</i>		スイカズラ属								1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	5	4	4	2	4	9	5	5
Rosaceae		バラ科	2					1		
Leguminosae		マメ科		1	1			1	1	
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属		1		1	1	2		
Nonarboreal pollen		草本花粉								
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属								4
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	2	1			1	8	13	15
Gramineae		イネ科	217	187	36	79	79	174	227	168
<i>Oryza type</i>		イネ属型	14	1	2	5	12	19	18	13
Cyperaceae		カヤツリグサ科	95	71	15	19	16	22	17	13
<i>Aneilema keisak</i>		イボクサ	1			1			2	2
<i>Monochoria</i>		ミズアオイ属	2		1				5	8
<i>Polygonum</i>		タデ属	1	1						
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	1		1		1	2	2	3
<i>Rumex</i>		ギンギン属					1			
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属		1						
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	1	2		1	2	3	1	
Caryophyllaceae		ナデシコ科	2	2				1	1	
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属	1				1			
Cruciferae		アブラナ科	12	7	5	4	6	5	4	5
<i>Rotala</i>		キカシグサ属	2				1	1		
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科	2	3		1		4		1
Apiioideae		セリ亜科	3	1	5	3	2	1	2	5
Labiatae		シソ科								1
<i>Plantago</i>		オオバコ属		1						
<i>Actinostemma lobatum</i>		ゴキツル							1	1
Lactucoideae		タンポポ科	3	2	1	2		2	1	
Asteroidae		キク亜科	2	1		2	2	2		1
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	26	29	4	9	15	31	12	10
Fern spore		シダ植物胞子								
Monolate type spore		単条溝胞子	2	4	15	16	9	6	3	1
Trilate type spore		三條溝胞子	6	6	5	8	6	9		3
Arboreal pollen		樹木花粉	154	113	45	88	93	216	200	180
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	7	6	5	3	5	13	6	5
Nonarboreal pollen		草本花粉	387	310	70	126	139	275	307	249
Total pollen		花粉総数	548	429	120	217	237	504	513	434
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>		試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	1.3	5.7	4.7	1.0	1.1	9.7	1.6	9.4
			×10 <sup>-4</sup>	×10 <sup>-3</sup>	×10 <sup>-2</sup>	×10 <sup>-3</sup>	×10 <sup>-3</sup>	×10 <sup>-3</sup>	×10 <sup>-4</sup>	×10 <sup>-3</sup>
Unknown pollen		未同定花粉	8	9	6	5	5	12	3	6
Fern spore		シダ植物胞子	8	10	20	24	15	15	3	4
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments		微細炭化物			(+)	(+)		(+)		

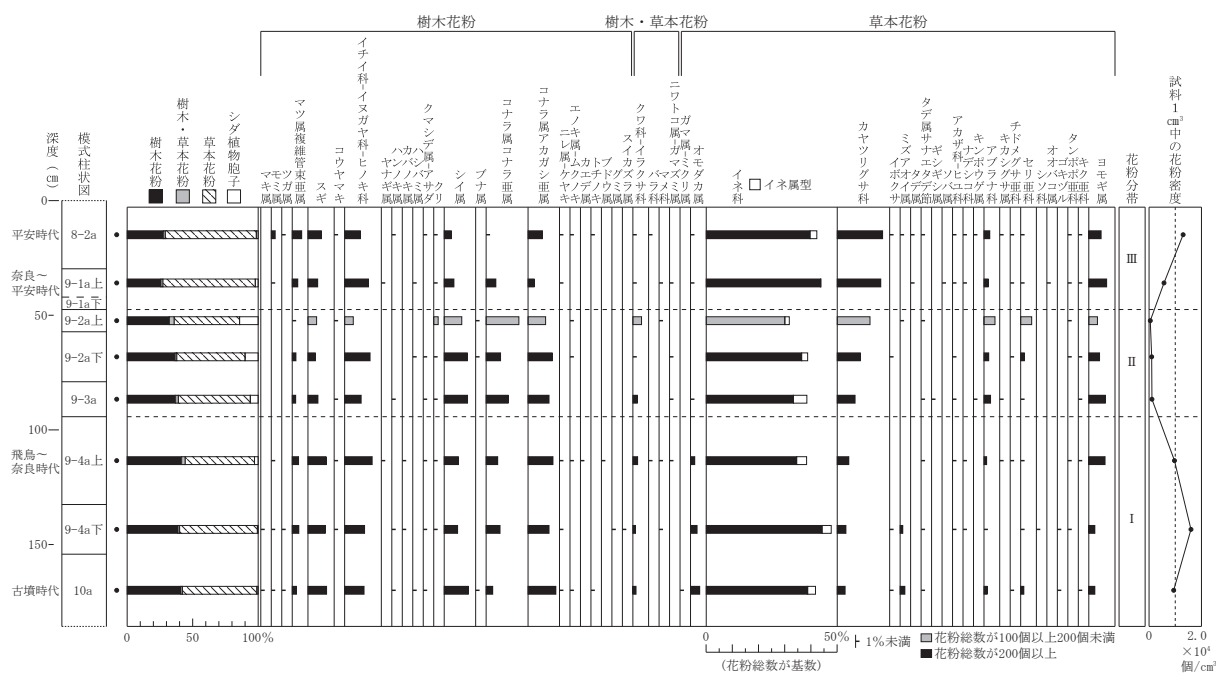


図100 花粉ダイアグラム

(3) 珪藻分析

1) 分類群

試料から出現した珪藻は、中-貧塩性種（汽-淡水生種）3分類群、貧塩性種（淡水生種）80分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものとし、中心域がない種については両端2個につき1個としてカウントした。表6に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図101に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は、Lowe（1974）や渡辺（2005）等の記載による。陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群では淡水生種は安藤（1990）による。

また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

*Amphora copulata*, *Aulacoseira ambigua*, *Aulacoseira crenulata*, *Aulacoseira* spp., *Cocconeis placentula*, *Cymbella naviculiformis*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella turgidula*, *Diploneis elliptica*, *Diploneis* spp., *Eunotia minor*, *Eunotia praerupta*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema parvulum*, *Gyrosigma* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula confervacea*, *Navicula cryptocephala*, *Navicula cuspidata*, *Navicula elginensis*, *Navicula laevisissima*, *Navicula mutica*, *Navicula pupula*, *Navicula pusilla*, *Neidium ampliutum*, *Pinnularia appendiculata*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia subcapitata*, *Pinnularia viridis*, *Stauroneis acuta*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Synedra ulna*

2) 珪藻群集の特徴

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より4帯の珪藻分帯を設定した。以下、分帯に沿って特徴を記載する（図101）。

表6 珪藻分析結果

分類群	B区X-3トレンチ							
	8-2a	9-1a上	9-2a上	9-2a下	9-3a	9-4a上	9-4a下	10a
貧塩性種 (淡水生種)								
<i>Achmanthes hungarica</i>		2						
<i>Achmanthes inflata</i>						1		
<i>Achmanthes lanceolata</i>	2	2				1		
<i>Amphora copulata</i>	58	25	1	1	9	91	57	
<i>Amphora montana</i>					1	2		
<i>Amphora ovalis</i>		1				3	2	
<i>Amphora</i> spp.		2				2		
<i>Amphora veneta</i>		1						
<i>Aulacoseira ambigua</i>	8	10			2	10	22	
<i>Aulacoseira canadensis</i>						1		
<i>Aulacoseira crenulata</i>	4					5	7	
<i>Aulacoseira granulata</i>						2		
<i>Aulacoseira</i> spp.		5				8	15	
<i>Caloneis silicula</i>	1							
<i>Cocconeis placentula</i>	2				3	6		
<i>Cyclotella bodanica-radiosa</i>						1		
<i>Cymbella cuspidata</i>	1					1	2	
<i>Cymbella naviculiformis</i>	6	3						
<i>Cymbella silesiaca</i>	3	1			1	4		
<i>Cymbella tumida</i>						1		
<i>Cymbella turgidula</i>						6	2	
<i>Diploneis elliptica</i>	10	4		1		2		
<i>Diploneis ovalis</i>		2						
<i>Diploneis</i> spp.	28	45			2	2	7	
<i>Diploneis yatukaensis</i>	2	3	1			1		
<i>Eunotia minor</i>		5				3	2	
<i>Eunotia pectinalis</i>	1					1	2	
<i>Eunotia praeurupta</i>	15	11	1	1	7	22	81	
<i>Eunotia soleirolii</i>	1					1	2	
<i>Eunotia</i> spp.						4	1	
<i>Fragilaria capucina</i>	2							
<i>Fragilaria construens</i>	1	3				1		
<i>Fragilaria pinnata</i>				1		1		
<i>Fragilaria ulna</i>						2		
<i>Frustulia vulgaris</i>		3						1
<i>Gomphonema angustum</i>								1
<i>Gomphonema clevei</i>						1		
<i>Gomphonema gracile</i>	2	4					5	
<i>Gomphonema minutum</i>	1					1		
<i>Gomphonema parvulum</i>	3	1			2	18	2	
<i>Gomphonema truncatum</i>	1					3	2	
<i>Gyrosigma</i> spp.	51	2			2	60	1	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	4	6				1		1
<i>Navicula americana</i>	2					1	4	
<i>Navicula confervacea</i>	9				1	6	5	
<i>Navicula contenta</i>							1	
<i>Navicula cryptocephala</i>	5	2				3	2	
<i>Navicula cuspidata</i>	8	10	2		4	8	8	1
<i>Navicula elginensis</i>	32	1						
<i>Navicula goeppertiana</i>	5	1					1	
<i>Navicula kotschy</i>	3					2		
<i>Navicula laevis</i>	26	20				9	5	
<i>Navicula lanceolata</i>	1							
<i>Navicula mutica</i>	8	11		1	3	7	11	
<i>Navicula pupula</i>	6	1				1	1	
<i>Navicula pusilla</i>					1	3	7	
<i>Navicula soehrensii</i>						1		
<i>Navicula</i> spp.	1	1						
<i>Neidium affine</i>		3			1	2		
<i>Neidium ampliatum</i>	8	1				3	4	
<i>Nitzschia amphibia</i>	1							
<i>Nitzschia brevissima</i>	1							
<i>Nitzschia debilis</i>	2							
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>		4				1		
<i>Pinnularia appendiculata</i>	2						7	
<i>Pinnularia borealis</i>	1					1		
<i>Pinnularia gibba</i>						3		
<i>Pinnularia interrupta</i>	1							
<i>Pinnularia microstauron</i>	1	1			3	1	1	
<i>Pinnularia schroederii</i>	52	46			5	15	7	
<i>Pinnularia subcapitata</i>	5	1					2	1
<i>Pinnularia viridis</i>	5	2				3		
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>						1		
<i>Rhopalodia gibba</i>	4					1	1	
<i>Stauroneis acuta</i>	2	4				1	3	
<i>Stauroneis anceps</i>					1			
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	10	16				1	3	
<i>Surirella angusta</i>	3							
<i>Synedra ulna</i>	1				3	4	1	
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>						1	1	
中-貧塩性種 (汽水-淡水生種)								
<i>Achmanthes brevipes</i>	1		1			2		
<i>Navicula peregrina</i>	4	1				1		
<i>Rhopalodia gibberula</i>	2	2					1	
合計	419	269	6	5	51	351	290	3
未同定	12	16	2	0	1	8	7	1
破片	252	311	38	29	168	378	465	21
試料 1 cm <sup>3</sup> 中の殻数密度	2.2	6.4	1.6	1.0	1.0	2.5	5.1	8.0
	$\times 10^5$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^5$	$\times 10^4$	$\times 10^2$
完形殻保存率 (%)	63.1	47.8	-	-	-	48.7	39.0	-

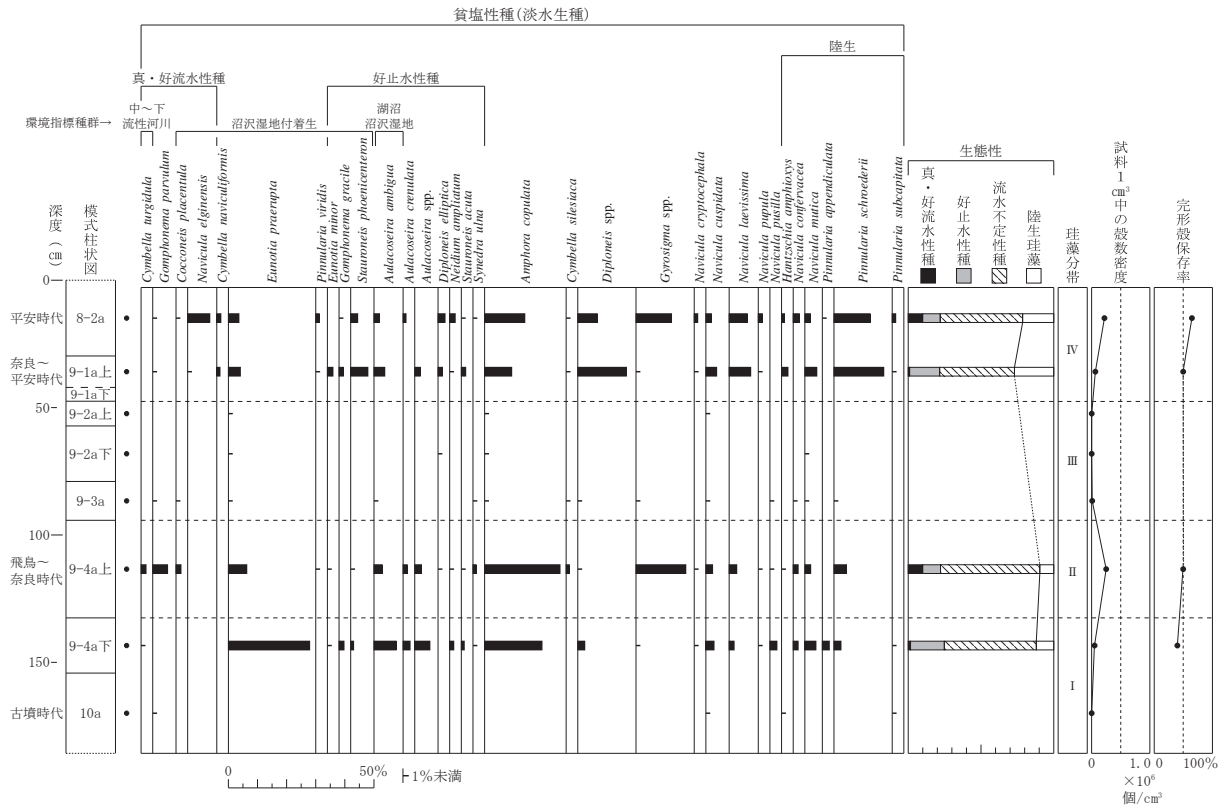


図101 主要珪酸ダイアグラム

・ I 帯（第 10 a 層、第 9 - 4 a 層下：古墳時代～飛鳥時代）

第 10 a 層（古墳時代）では珪藻密度が極めて低く、ほとんど検出されない。

第 9 - 4 a 層下では流水不定性種が約 65% を占め、次いで好止水性種が約 25%、陸生珪藻が約 10% を占める。

流水不定性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia praerupta*、流水不定性種の *Amphora copulata* が優占種であり、好止水性種で湖沼沼沢湿地付着生環境指標種群の *Aulacoseira ambigua*、好止水性種の *Aulacoseira* spp.、*Aulacoseira crenulata* などが伴われる。ほかに流水不定性種の *Navicula cuspidata*、*Navicula laevisissima*、陸生珪藻の *Navicula mutica*、*Pinnularia appendiculata*、*Pinnularia schroederii*、*Navicula confervacea* などが低率に出現する。

・ II 帯（第 9 - 4 a 層上：飛鳥時代）

真・好流水性種の占める割合が微増する。流水不定性種の *Amphora copulata*、*Gyrosigma* spp. が優占種となり、I 帯で優占した沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia praerupta* は減少する。真・好流水性種では好流水性種の *Gomphonema parvulum*、中～下流性河川環境指標種群の *Cymbella turgidula*、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Cocconeis placentula* が低率に出現する。

・ III 帯（第 9 - 3 a 層から第 9 - 2 a 層上：奈良時代）

珪藻密度が極めて低くなり、ほとんど検出されなくなる。

・ IV 帯（第 9 - 1 a 層から第 8 - 2 a 層：奈良時代～平安時代）

陸生珪藻と好止水性種の占める割合が増加する。陸生珪藻の *Pinnularia schroederii*、流水不定性種の *Diploneis* spp.、*Amphora copulata* が優占種となり、流水不定性種の *Navicula laevisissima*、*Navicula cuspidata*、好止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Stauroneis phoenicenteron*、湖沼沼沢湿地付

着生環境指標種群の *Aulacoseira ambigua*、陸生珪藻の *Navicula mutica* などが伴われる。第8-2 a層では、真流水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Navicula elginensis* が比較的多く出現する。

## 6. 福万寺Ⅱ期地区(08-1)調査区における稲作

植物珪酸体分析において水田跡の可能性を判断するにあたっては、イネ機動細胞珪酸体(プラント・オパール)が試料1 gあたり5,000個以上の密度で検出された場合が一つの基準とされている。ただし、近年における各地の調査事例で、2,000~3,000個/gの密度でも水田遺構が検出された例が多くあることから、5,000個/gはあくまで目安であり、植物珪酸体の産出状況や遺構の状態をふまえて判断する必要がある。

X-3トレンチでは、上位より第8-2 a層、第9-1 a層、第9-2 a層上、第9-3 a層、第9-4 a層上、第9-4 a層下および第10 a層でイネ植物珪酸体が検出されている。このうち、第9-4 a層上と第9-4 a層下ではともに植物珪酸体密度が3,600個/gと高い値である。さらに、第9-1 a層では2,400個/gと比較的高い密度であり、ピークとなっていることから上層から後代の植物珪酸体が混入した危険性は考えにくい。また第9-3 a層では、イネの植物珪酸体は1,800個/gとやや低い密度であるが、直上の第9-2 a層下からはイネが検出されていないことから、ここでも上層からの混入の危険性は考えられない。一方、イネ以外の分類群は総じてすべての層で低い密度である。こうしたことから、これらの層の堆積時には調査地において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

第8-2 a層、第9-2 a層および第10 a層では、植物珪酸体密度が1,200~1,800個/gとやや低いことから、稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層もしくは近傍から植物珪酸体が混入した危険性も否定できない。

## 7. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉群集の特徴から、分帯に沿って植生の復元を行う。

### 1) I帯期(第10 a層から第9-4 a層上:古墳時代~飛鳥時代)

周辺地域には、コナラ属アカガシ亜属、シイ属を主要構成要素とする照葉樹とコナラ属コナラ亜属を主とする落葉樹が混在し、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの針葉樹も分布していた。草本花粉において、イネ属型がオモダカ属、ミズアオイ属などの水田雑草を伴って出現することから、堆積地周辺には水田が分布していた。堆積地および水田周囲にはイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本が繁茂していたと考えられる。

### 2) II帯期(第9-3 a層から第9-2 a層上:奈良時代)

森林要素ではコナラ属コナラ亜属を主とする落葉樹の二次林が増加する。堆積地周辺には水田が分布していたとみなされるが、アブラナ科が微増し、畑作がやや拡大したと推定される。

### 3) III帯期(第9-1 a層、第8-2 a層:奈良時代~平安時代)

シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属など平野部の広葉樹の森林が縮小する一方、マツ属複雑維管束亜属が微増しアカマツ二次林がやや増加する。スギやイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科は減少せず、やや遠方の山地に分布していたと推定される。イネ科、カヤツリグサ科が増加し、湿原ないし湿地の環境が拡大したと推定される。またソバ属の花粉が出現し、ソバの畑作が示唆される。

## 8. 珪藻分析から推定される堆積環境

珪藻群集の特徴から、下位より分帯に沿って環境の復元を行う。

### 1) I帯期（第10 a層、第9-4 a層下：古墳時代～飛鳥時代）

第10 a層（古墳時代）の時期は、珪藻の生育できない乾燥した堆積環境であったか、土層の堆積速度が速かったことなどが考えられる。

第9-4 a層下の時期は、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia praerupta* と、流水不定性種で水田に多い *Amphora copulata* が優占することから、水田の環境が示唆される。

### 2) II帯期（第9-4 a層上：飛鳥時代）

水田に多い *Amphora copulata* を主とする流水不定性種が優占し、真・好流水性種が微増し、水田の環境が示唆される。

### 3) III帯期（第9-3 a層から第9-2 a層上：奈良時代）

珪藻が少なく、珪藻の生育しにくい比較的乾燥した堆積環境であったか、土層の堆積速度が速かったことなどが推定される。

### 4) IV帯期（第9-1 a層から第8-2 a層：奈良時代～平安時代）

流水不定性種が優占種であり、陸生珪藻が特徴的に出現する。好止水性種も伴われることから、調査地は沼沢から湿地ないし湿った土壌のやや多様な環境が示唆され、水田であったと推定される。

## 9. まとめ

福万寺Ⅱ期地区（08-1）調査区B区X-3トレンチにおいて、植物珪酸体分析、花粉分析および珪藻分析をあわせて行い、農耕、植生および堆積環境について検討を行った（表7）。その結果、下位より第9-4 a層、第9-3 a層、第9-1 a層において稲作が行われていた可能性が高いと判断され、本地点は古墳時代から平安時代にかけて概ね水田であったと推定された。なお、下部の第9-4 a層下と第9-4 a層上は低湿な水田であり、上部の第9-1 a層上から第8-2 a層ではやや低湿な水田へと変遷したことが示唆された。また、第10 a層と第8-2 a層については、珪藻分析では水田の環境が示唆されたものの、植物珪酸体の検出量は少なく、稲作跡である可能性を積極的に肯定することはできなかった。

本調査地における植生は、花粉分析において3帯の変遷が認められた。すなわち、下部よりI帯（第10 a層から第9-4 a層上：古墳時代～飛鳥時代）は、森林では照葉樹と落葉樹、針葉樹が分布し、堆積地周辺には水田が分布していた。II帯（第9-3 a層から第9-2 a層上：奈良時代）になるとコナラ属コナラ亜属を主とする落葉樹の二次林が増加し、水田に加えアブラナ科などの畑作がやや拡大した。III帯（第9-1 a層、第8-2 a層：奈良時代～平安時代）では広葉樹の森林が縮小し、アカマツ二次林がやや増加し、堆積地周辺の湿地化とソバ属を主とする畑の分布が示唆された。

表7 推定される環境と植生の変遷

推定される時代	層序	農耕	花粉分帯	主要分類群と推定される植生			珪藻分帯	主要分類群と推定される堆積環境
				←山地				
平安時代	第8-2a層	水田か？	III イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科・スギの針葉樹の多いアカガシ亜属・シイ属の照葉樹林	アカマツ(二次林)	イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科	IV	沼沢湿地ないしやや低湿な水田 ( <i>Amphora copulata</i> , <i>Diploneis</i> spp., <i>Gyrosigma</i> spp., <i>Navicula laevis</i> )  ( <i>Navicula elginensis</i> , <i>Eunotia praerupta</i> , <i>Stauroneis phoenicenteron</i> ) ( <i>Pinnularia schroederii</i> )	
奈良時代～平安時代	第9-1a層	水田とソバ属などの畑						
奈良時代	第9-2a層上	水田か？	II イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科・スギの針葉樹の多いアカガシ亜属・シイ属の照葉樹林	シイ属・コナラ亜属の多くなった広葉樹林(二次林)	イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科	III	珪藻の生育できない乾燥した環境か、堆積速度の速い環境	
	第9-2a層下	近傍で水田？						
飛鳥時代～奈良時代	第9-3a層	水田とアブラナ科などの畑						
飛鳥時代～奈良時代	第9-4a層上	水田	I アカガシ亜属・シイ属を主とする照葉樹林  山地部ではイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科・スギの針葉樹が多い	イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、オモダカ属、ミズアオイ属	II	やや流水の影響がある不安定な水域ないし低湿な水田 ( <i>Amphora copulata</i> , <i>Gyrosigma</i> spp., <i>Gomphonema parvulum</i> )		
	第9-4a層下						沼沢湿地ないし低湿な水田 ( <i>Eunotia praerupta</i> , <i>Amphora copulata</i> )	
古墳時代	第10a層	水田か？				I	珪藻の生育できない乾燥した環境か、堆積速度の速い環境	

【引用文献】

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6,p.23-45.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本，第10巻，古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—．植生史研究，第1号，植生史研究会，p.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1-20.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花形形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-102.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（*Oryza sativa*）を中心として．第四紀研究，13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—．考古学と自然科学，9，p.15-29.

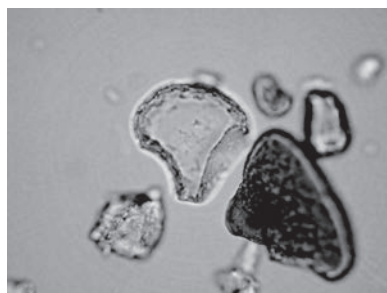
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) —プラント・オパール分析による水田址の探査—．考古学と自然科学，17，p.73-85.

渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIPo, pH 耐性能．内田老鶴圃，pp.666.

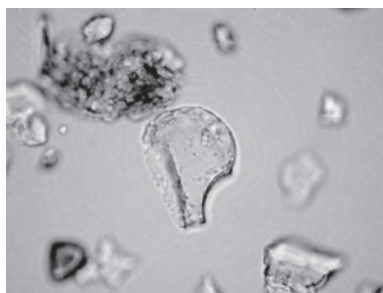
Asai,K.&Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution( 2) Saprophylic and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

Hustedt,F.(1937 — 1938)System a tische und ologische Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach

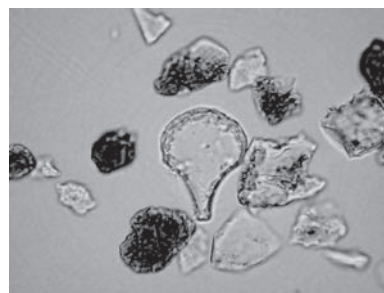




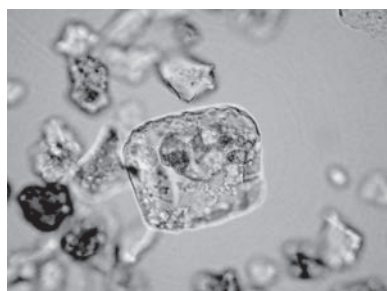
イネ(9-1a層)



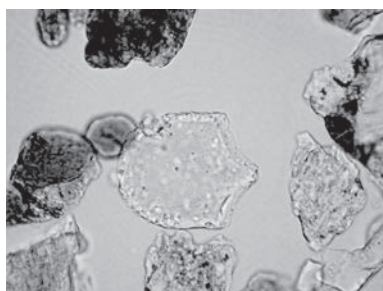
イネ(9-4a層上)



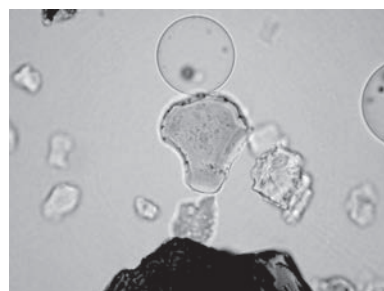
イネ(9-4a層下)



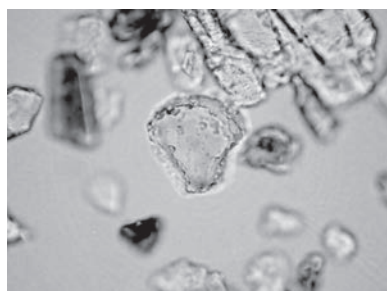
キビ族型(9-4a層上)



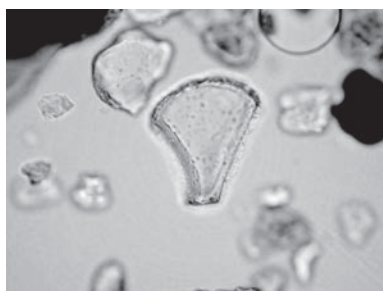
ヨシ属(9-2a層上)



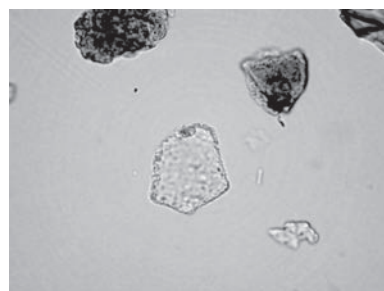
ススキ属型(9-3a層)



ネザサ節型(9-3a層)



メダケ節型(9-4a層上)



ミヤコザサ節型(9-4a層上)

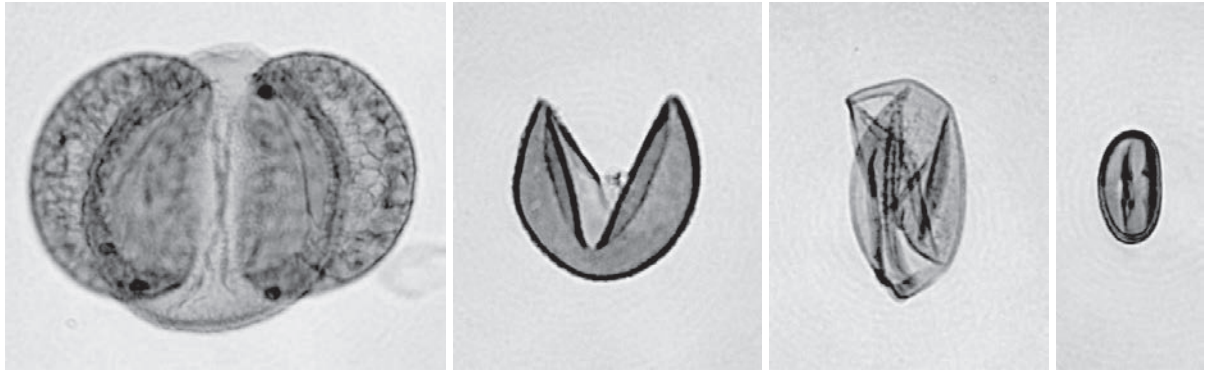
写真2 植物珪酸体

— 50 μm

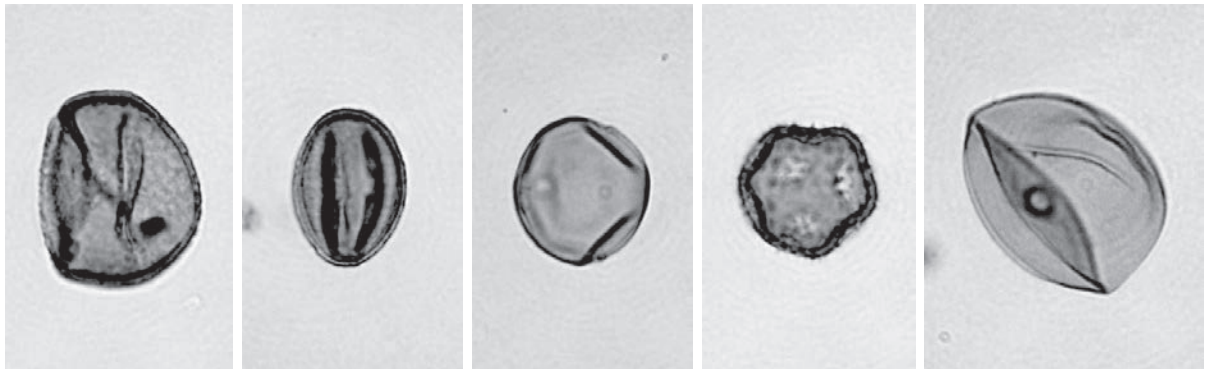
dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15,p.131-506.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae, 1-4.

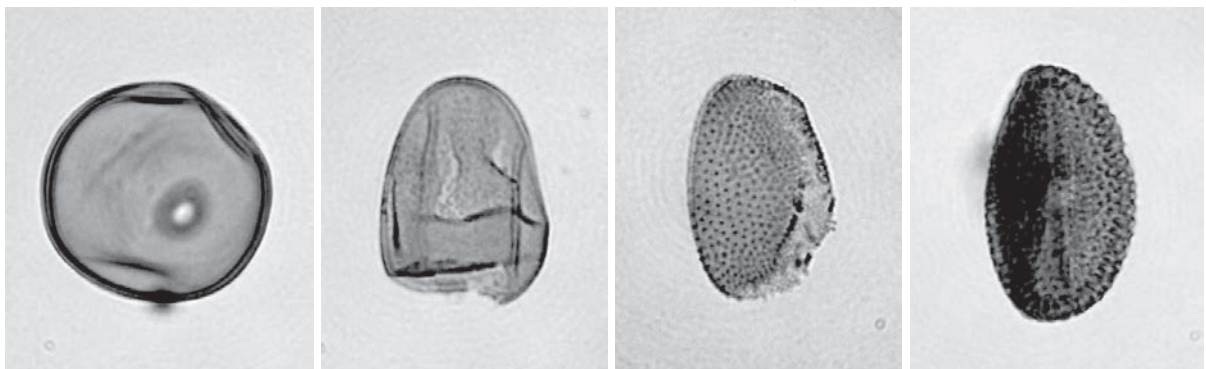
Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh — water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.



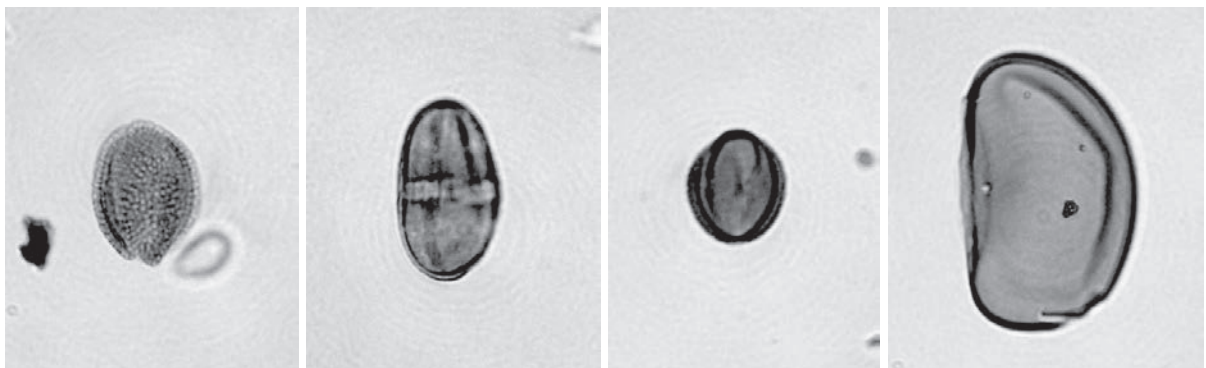
1 マツ属複維管束亜属(8-2a層)      2 スギ(10a層)      3 イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科(10a層)      4 シイ属(10a層)



5 コナラ属コナラ亜属(10a層)      6 コナラ属アカガシ亜属(10a層)      7 クワ科-イラクサ科(8-2a層)      8 オモダカ属(10a層)      9 イネ科(10a層)



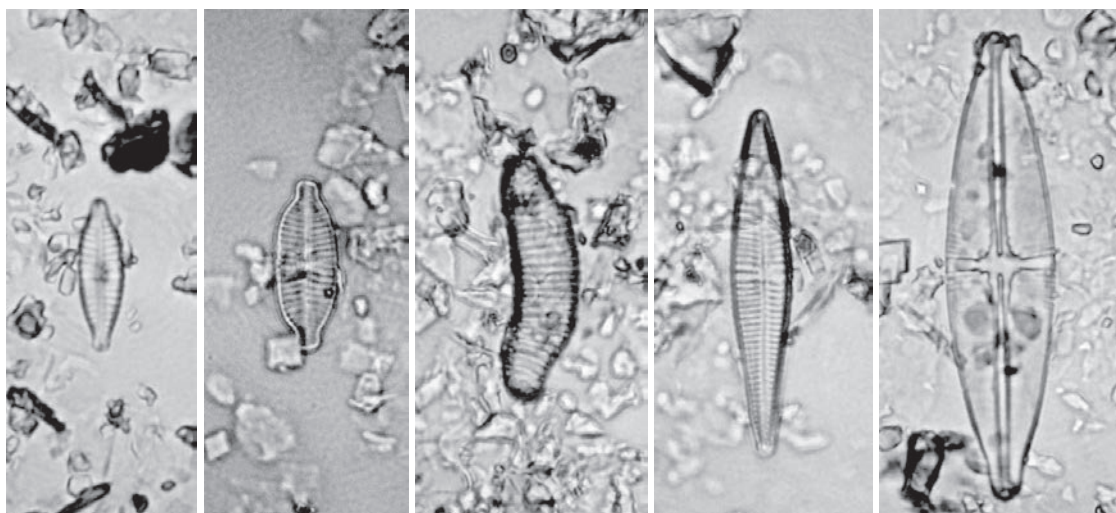
10 イネ属型(9-3a層)      11 カヤツリグサ科(10a層)      12 イボクサ(10a層)      13 ソバ属(9-1a層上)



14 アブラナ科(8-2a層)      15 セリ亜科(10a層)      16 ヨモギ属(10a層)      17 シダ植物単条溝孢子(10a層)

— 10 μ m

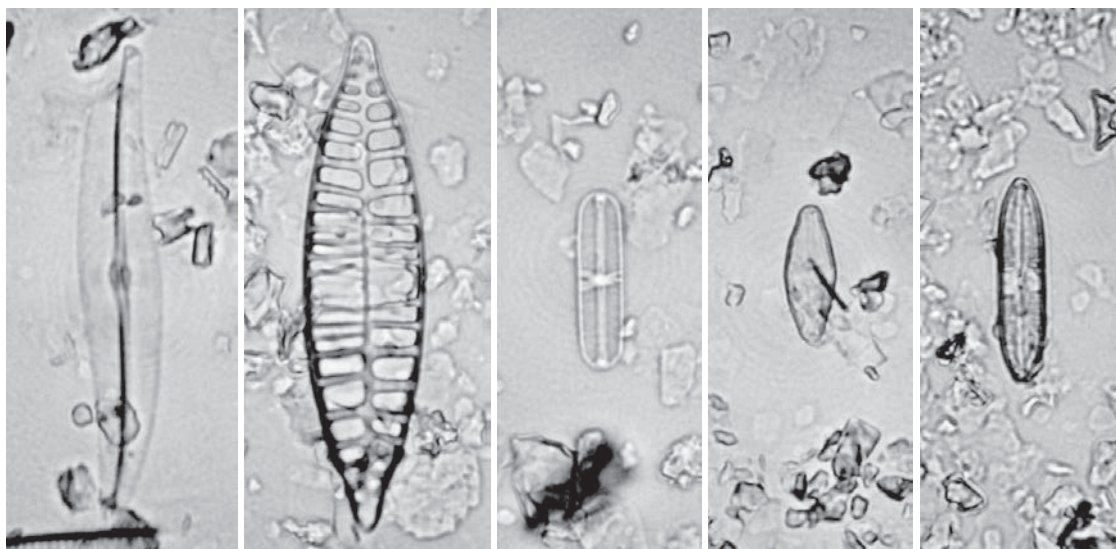
写真3 花粉・孢子



1 *Gomphonema parvulum* (9-4a層上)    2 *Navicula elginensis* (8-2a層)    3 *Eunotia praerupta* (9-4a層上)    4 *Gomphonema gracile* (9-1a層上)    5 *Stauroneis phoenicenteron* (8-2a層)



6 *Aulacoseira ambigua* (8-2a層)    7 *Diploneis elliptica* (8-2a層)    8 *Neidium ampliutum* (8-2a層)    9 *Amphora copulata* (8-2a層)    10 *Diploneis* spp. (8-2a層)

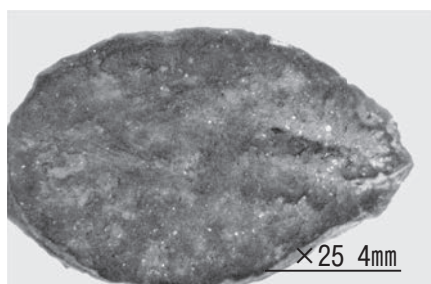


11 *Gyrosigma* spp. (8-2a層)    12 *Navicula cuspidata* (8-2a層)    13 *Navicula laevis* (9-1a層上)    14 *Navicula mutica* (9-4a層下)    15 *Pinnularia schroederii* (8-2a層)

— 10 μ m

写真4 珪藻

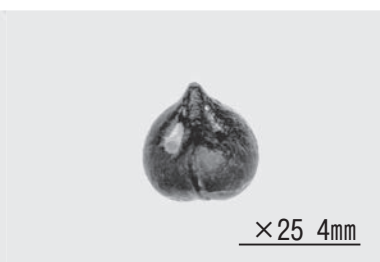




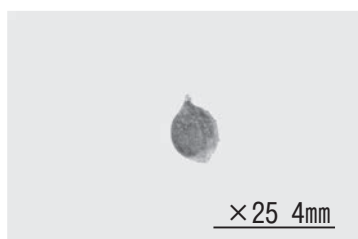
ゴキツル



スミレ属



ブドウ属



タデ属

写真5 植物遺体

【参考文献】

1. 植物分類に関しては、以下の文献に従っている。

大井次三郎, 北川政夫, 1983. 新日本植物誌 顕花編. 至文堂, 東京.

## 第5章 まとめ

今回の調査地は、福万寺Ⅱ期地区調査の嚆矢となった03-1調査区の南側に位置し、大小さまざまな攪乱により調査の進捗や資料の作成に困難を極めたものの、以下のような成果を得た。

近世～中世（第2面～第6面）は、既往の調査事例と同じく島島の造営が顕著である。特に第6-1b面では、短期間に消長する長大な島島を12箇所確認した。

出土した遺物は、表土採集や側溝・法面採取など不確定な検出も含めて、総数が約8400点である。これらの多くは細かな破片として出土した。よって、出来るだけその器種と生産された時代とを明らかにしようとしたが不明なものも多かった。（本文中では器種不明の遺物を「細片」と呼称した。）

近世後半以降では日本製陶磁器類が多く見られる。中・近世では土師器・瓦器・瓦質土器など、遺物の種類が多様化する。しかし第2面以下では、本来帰属すべき面・層以外の細片化した遺物が目立ち、器種が特定できないものも数多い。また、下層の遺物が上層にて出土した巻上げの現象も多くある。

特に第2層から第5層の間では、中国製陶磁器や瓦質土器、黒色土器などの巻上げが少なからず見られる。これは当地が耕作地として激しく攪拌されていたことを示す。例えば、第4-1a層4017島島内出土の中国製青磁碗（22）など、巻き上がった可能性の高い遺物である。

土師器皿類は下層ほど出土量が増し、第6・第7の各面・層にピークを迎える。既往の年代観によると、11世紀後半から14世紀前半頃となる。瓦器椀・皿類は12世紀後半から14世紀前半頃に形成されたと考えられる第6の各面・層での出土量が傑出する。他地域の製品に目を転じると、東播系練鉢は12世紀頃の比較的古い製品も出土している。器種不明の破片に含まれる可能性も残るが、東播系甕類の出土はない。備前焼や常滑焼などの陶器もほとんど見られない。瓦質の製品も羽釜・播鉢が少し目立つ程度で、東播系と同様、瓦質の甕もほとんどない。ただし、若干ではあるが大和産の土釜（43、44）が第6-1a層から出土している。そのほか、第6-3a層では青白磁合子蓋（57）が出土している。

農耕馬への装着か、第6-3a層や古代の第7-3a面から轡の部品らしき鉄製品（60、96）も出土している。ほかに農耕具では鉄鎌（35）を第5-1a面5001坪境畦畔直上にて検出している。単なる遺失物とも思えるが、祭祀に使用されたとも考えられる。

古代（第7面～第9面）では、坪境畦畔や南北方向の畦畔を検出した第7-1a面、第8面坪境の名残をとどめる坪境畦畔や、南北方向の畦畔を検出した第7-3a面、調査区南西で数条のピット列を検出した第7-3b面がある。この列を構成するピットから、小刀一振り（84）が鞆の破片（85）とともに出土した。

10世紀前半～11世紀後半に形成された第8-2a面では、最大幅4mを超える坪境畦畔と、そこから南へのびるやや幅広の畦畔、坪境畦畔の北側では南北方向の畦畔にやや斜行する東西方向の畦畔を検出した。

今回の調査で最も注目すべき成果は、第9層を明確に4枚の層に細分できたことである。中世～近世あるいは古墳時代以前の堆積層の土壌分析は、各所で実施してきたが、奈良時代各層の本格的な土壌分析は今回が初めてで、その成果は第4章で報告したとおりである。さらに大きな成果として、第9面にて池島・福万寺遺跡における条里型地割の初現を示す資料を得たことである。第9-3a面・4a面段階では調査区を北流していた9051・9052流路を第9-2a面段階で西方へ付け替え（9039溝）、以

後この位置に坪境畦畔を築くこととなる。

ほかの面・層とは異なり、奈良時代の流路・溝から出土した遺物は、比較的大形の破片が多い。一つは第9-2 a面の9039溝・9051・9052流路から出土した土器群で、その多くは奈良時代前期の特徴を有する。土師器ミニチュア土器甕・高杯も第9-1 a面9023流路、第9-2 a面9039溝、9051・9052流路やその前後の層から、完形に近い遺物が多数出土している。

そのほか、9023流路や第8-2 a層、第9-1 a層中から、小形の土師器甕の外面に人面を描いた人面墨書土器片も出土した。人面墨書土器が初めて当遺跡で見つかったことは特筆すべきであろう。

当遺跡の既往の調査にても検出例の多い土器埋納遺構が第9-2 a面で先述の9039溝、9051・9052流路沿いに点在し、遺構内から土師器杯・皿が出土しているものが多い。これらの遺物は意図的に割られているものが少なくない。裏底に線刻や墨書された土器もある。さらに、第7-3 b層から銅製鈴1点(97)、第8-2 a面直上から「萬年通寶」が1枚(107)が出土しているが、先述の鎌の出土を含め過去の調査例にも考察<sup>注1)</sup>されてきたように、地鎮的な祭祀に関係するものであろうか。第7-1 a層では毬杖の木毬(73)もみられる。なお、第9の各面・層にて牛馬骨・歯が少なからず出土しているが、雨乞いなど、天候に対する祭祀と関係するものであろうか。今回の調査では、これら祭祀に関係すると思われる中世・古代段階の遺構を多数検出し遺物が出土したことが特徴的であった。

土師器の壺・甕は、古墳時代の包含層である第10の各面・層や古代の第9-2 a面・層での出土が多く、それより上層では、だんだん少なくなる。須恵器の壺・甕は土師器のそれらと同様に第10の各面・層からやや時代の新しい第9-1・2の各面・層に出土量のピークがあり、須恵器杯類は第10の各面・層もしくは古代の第8-2面・層、第9-1 a面・層の2段階的に出土量のピークがある。

瓦は散見され、古代の瓦の割合も多いが、絶対的な数量が少なく、近隣に寺や屋敷があったとまでは断定できない。ただし、今後念頭には置くべきであろう。

煮沸具では土師器羽釜の出土が多い。特に9107溝や9039溝、9051・9052流路から多数出土している。9107溝の上層での破片は、ほぼ完形に復元できた個体(162)もある。溝埋没時の最終祭祀に関係する遺物であろうか。逆に、中世段階でも瓦質製品が少ない。土師質鍋もほとんどない。河内型と呼ばれる土師器羽釜が、ほかの煮沸具を圧倒的に凌駕することは当地の特徴といえるかもしれない。黒色土器の器種は多様ではあるが、その数は少ない。また、製塩土器や緑釉陶器の出土数も少ない。

古墳時代の遺構面(第10面)では顕著な遺構を確認することはできなかったが、先述のように須恵器・土師器はこの面・層にて出土量を増す。そのほか、古式土師器の出土が目につく。装飾壺(149)は八尾市所在の久宝寺遺跡<sup>注2)</sup>にて同様の出土遺物がある。

弥生時代後期の第11-2 a面では調査区西半では微高地が、東半では水田域が展開する。弥生時代中期の第12-1 a面では水田跡などの生産遺構は見つからなかったが、弥生時代前期末～中期初頭の第13-1 a面では部分的ながら畦畔を検出し、当該地に水田遺構が広がることを確認した。

第11面・層以下では弥生時代の遺物のみとなり、上層とは様相が一変する。第11面、第13面は水田跡が広く検出され、これらの面・層の間で石包丁(228・229)やその未成品(230・231)が出土している。遺物の総量は、水田遺構のためか若干量の破片が見つかったにすぎない。しかし弥生時代前期の土器は比較的まとまって第13-1 a・1 b層から出土した。また、これらの各面・層から縄文時代晩期最終末の深鉢が破片として数点が出土している。

第13-1 a層以下では1mを超える砂層の堆積を確認したが、それらは複数の流路によってもたら

された堆積物である。特に、調査区西端で検出した 1325 流路から供給された堆積物は、第 10 a 層段階の地形や土壌の形成にまで影響をおよぼしていることが観察できた。

今回の調査区を俯瞰すると、各層の遺物とも細片が多く、器種を特定できないものも少なくないが、逆に各時代の遺物が少しずつではあるが、ほぼ万遍なく検出されている。遺物量の少なさは、集落などではなく、耕作地としての使用が続いたことが影響していると考えられよう。今回の出土遺物と各面・層との対応関係は既往の調査によって導かれた年代観と概ね矛盾していないと思われる。

各時代にわたり遺構が連続するいわゆる複合遺跡といわれる遺跡であっても、その多くはいずれかの時代に偏りがあったり、一時途絶えたりする遺跡が多いなか、当遺跡はほぼ途切れることなく遺構の変遷が追える貴重な遺跡といえる。「玉櫛の荘の米、一によかりけり」藤原頼通が平等院創建にあたり、各荘園から徴収した米を品評した際の発言が『続古事談』や『中外抄』<sup>注3)</sup>に記されている。当地は時の最高権力者をも賞嘆させるほどの良質な農作物を産出した事がうかがえる。事実、各時代にて検出される整然と広がる田畑の跡は、農作業に対する並々ならぬ努力を、処々に見つかる祭祀行為の跡は恙無く良き作物の豊作を願う思いを、其々切に感じ取れ、関白の言葉にたがわぬ大きな恵をもたらしてくれる当地への愛着と誇りを、人々が連綿と持ち続けてきたことを今回の調査にて垣間見たように思えた。

注1) 江浦 洋 1992「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』VII (財) 大阪府文化財センター、松井章 1995「池島・福万寺遺跡の動物遺存体」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XI (財) 大阪府文化財センターほか

注2) (財) 大阪府文化財センター 2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書』VII 435p.

注3) 川端善明、荒木 浩校注 2005『古事談・続古事談』新日本古典文学大系 41 岩波書店

#### 【参考文献】

- 寺沢 薫・森岡秀人編 1989『弥生土器の型式と編年 近畿編』1 木耳社
- 土器持寄会論文集刊行会 2000『突帯文と遠賀川』
- 森岡秀人・西村 歩・竹村忠洋・駒井正明編 2003『古墳出現期の土師器と実年代』シンポジウム資料集
- 森岡秀人・西村 歩編 2006『古式土師器の年代学』(財) 大阪府文化財センター
- 米田敏幸 1991「土師器の編年 1、近畿」『古墳時代の研究』6 雄山閣
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし - 陶邑の須恵器 -』
- 古代の土器研究会 1992『古代の土器 1 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会 1993『古代の土器 2 都城の土器集成』II
- 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究 - 日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀 -』京都編集工房
- 中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 太宰府教育委員会 2000『大宰府条坊跡』XV - 陶磁器分類編 -
- 八尾市立歴史民俗資料館 1995『河内の中世考古学』八尾市教育委員会
- 東大阪市教育委員会 2002『瓜生堂遺跡第 46、47 - 1・2 次発掘調査報告書』
- 菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』国立奈良文化財研究所
- 森田稔 1986「東播系須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館紀要』3 神戸市立博物館
- 森島康雄 1990「河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会
- 奈良県立橿原考古学研究所 1988『十六面・薬王寺遺跡』
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』



## 遺物觀察表

各面・層 主要遺物出土數量表

遺構番号新旧對照表

遺物観察表

【土器類】

挿図 番号	遺物 番号	写真図版	材 質	器 種	出土層序	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率 (%)	外面の主な色調
9	1		染付	碗	第1層	(10.2)	4.8	30	(7.5GY8/1 明緑灰)
9	2		染付	碗	第1層	(10.6)	[4.4]	25	(10BG7/1 明青灰)
9	3		染付	碗	第1層	4.6	[3.2]	30	(5BG7/1 明青灰)
9	4		陶器	碗	第1層	4.2	[1.7]	30	(2.5GY7/1 明オリープ灰)
14	10		土師器	皿	第2-1a層	(11.0)	1.8	25	10YR7/4 にぶい黄橙
14	11		染付	碗	第2-1a層	(10.2)	[4.8]	20	(5G7/1 明緑灰)
14	12		青花	皿	第2-1a層	(7.0)	1.8	20	(10BG7/1 明青灰)
17	14		白磁	皿	第2-3a層	(11.0)	2.5	15	(5Y8/1 灰白)
17	15		青磁	碗	第2-3a層	3.6	[2.5]	25	(5Y4/4 明暗オリープ)
17	16		瓦質	火鉢	第2-3a層	—	[5.8]	U-5	N3/0 暗灰
17	17		瓦質	播鉢	第2-3a層	(12.5)	[4.4]	10	10Y7/1 灰白
22	18		土師器	皿	第3-1b層	7.2	1.8	100	2.5Y6/2 灰黄
22	19		瓦質	播鉢	第3-1b層	(25.4)	[5.3]	10	7.5YR4/2 灰褐
22	20		瓦質	播鉢	第3-1b層	—	[5.2]	U-5	N3/0 暗灰
27	21		青磁	碗	第4-1a層	—	[3.6]	U-5	(5GY7/1 明オリープ灰)
27	22		青磁	碗	第4-1a層 4017 島島内	—	[2.7]	U-5	(7.5Y6/2 灰オリープ)
27	23		瓦質	羽釜	第4-1a層	—	[4.6]	U-5	N5/0 灰
27	24		瓦質	羽釜	第4-1a層	—	[4.6]	U-5	10YR3/2 黒褐
29	28		土師器	皿	第5-1a層	(9.0)	[1.3]	20	2.5Y3/1 黒褐
29	29		白磁	皿	第5-1a面	(11.0)	[3.0]	15	(2.5GY8/3 淡黄)
29	30		青磁	碗	第5-1a面	(6.4)	[3.8]	25	(7.5Y5/2 灰オリープ)
29	31		須恵質	練鉢	第5-1a層	(23.6)	[3.4]	U-5	N5/0 灰
29	32		須恵質	練鉢	第5-1a層	(24.4)	[3.5]	U-5	N6/0 灰
29	33		瓦質	播鉢	第5-1a層	—	[6.8]	U-5	N4/0 灰
29	34		瓦質	播鉢	第5-1a層	(29.2)	[4.3]	U-5	N2/0 黒
31	36		土師器	皿	第5-2a層	8.4	1.6	60	7.5YR6/4 にぶい橙
31	37		土師器	皿	第5-2a層	(10.6)	1.9	15	10YR6/3 にぶい黄橙
34	38		土師器	皿	第6-1a層	(8.2)	[2.0]	20	2.5Y6/2 灰黄
34	39		土師器	皿	第6-1a層	(10.4)	[2.1]	30	2.5Y6/2 灰黄
34	40		瓦器	皿	第6-1a層	(11.6)	[2.2]	15	N4/0 灰
34	41		白磁	碗	第6-1a層	—	[3.1]	U-5	(5GY8/1 灰白)
34	42		土師器	ミニチュア 土器高杯	第6-1a層	5.6	[3.7]	40	2.5Y6/2 灰黄
34	43		土師器	羽釜	第6-1a層	(19.8)	[4.6]	10	10YR8/3 浅黄橙
34	44		土師器	羽釜	第6-1a層	(20.0)	[5.5]	10	2.5Y3/1 黒褐
37	46		青磁	碗	第6-1b面	—	[2.3]	U-5	(7.5Y5/2 灰オリープ)
39	47		瓦質	甕	第6-2a層	(24.0)	[1.7]	U-5	N3/0 暗灰
39	48		瓦質	三足羽釜	第6-2a層	—	[8.0]	U-5	N4/0 灰
39	49		瓦器	椀	第6-2a面	(5.8)	[1.6]	10	N3/0 暗灰

特 徴	備 考	時 期	地 区
全面施釉、見込み蛇目釉剥ぎ。外面草花文。高台砂付着。	波佐見焼系	18C 中	7A-4j
残存部全面施釉。外面梅花文。	波佐見焼系	18C 中	7A-4j
全面施釉、見込み蛇目釉剥ぎ。外面草花文。高台砂付着。	波佐見焼系	18C 中	7A-3f
内面から外面高台脇まで薄く施釉、細かい貫入あり。見込みに崩れた山水文の鉄絵。外面体部下半から高台部にかけて回転ヘラ削り。高台内「新」の刻印あり。	肥前系京焼風	17C 後～ 18C 前	6A-10j
口縁部横ナデ。内面底部ナデ。外面底部指押さえ。口縁部煤付着。	灯明皿	18C	7A-2j
残存部全面施釉。外面花卉文が退化したと思われる縦線状文。		19C	7B-1a
高台畳付以外全面施釉。見込み 2 条の圏線内に玉取獅子文。高台際に 1 条の圏線。高台内に変形字文に一重角枠。	景德鎮窯系	16C 後	6A-8j
高台畳付以外全面施釉。	C 群	16C	6A-7・8j
底部のみ。高台内以外全面施釉。見込みに印花文。	B 群	15C 前	6A-9i・10i
全面にヘラ削り後ナデ。外面上部に 2 条の凸帯間に唐草文刻印。上方の凸帯は剥離。円形の大型品。		15C	6A-9j
内面摩滅、摺目 (9 条単位)。外面ナデ、下部指押え。焼成やや不良。		15C 後～ 16C 前	7A-2f
内面ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。口縁端部に煤 2 箇所付着。	灯明皿	15C 後～ 16C 前	7A-4i
内面ナデ後ハケ後摺目。口縁部横ナデ。外面ヘラ削り。		15C 後	7A-1i
内面摩滅。口縁部横ナデ。外面ヘラ削り。		16C 前	7A-2i
全面施釉。外面片切彫り蓮蓮弁文。内面片切彫り刻花文か。	龍泉窯系	14C 後～ 15C 初	6B-10a
残存部全面施釉。外面櫛描文。内面片切彫り劃華文。	同安窯系 I -1b 類	12C 中～後	7A-1h
内面ナデ後横ハケ。口縁部横ナデ。外面ヘラ削り。鏝貼付け。		15C 前～中	7A-4h
内面ナデ後横ハケ。口縁部横ナデ。外面ヘラ削り。鏝貼付け。		15C 前～中	7A-4i
口縁部横ナデ。外面指押さえ。		14C 前か	6A-9j
内面から外面高台脇まで薄く施釉、細かい貫入あり。化粧土若干露出。外面体部下半から高台部にかけて回転ヘラ削り。	白磁皿 D 類	15C	7A-3i・4i
内面から外面高台際まで施釉、畳付釉剥ぎ。高台内露胎。見込み印字文。	龍泉窯系	14C 後～ 15C	7A-3i・4i
回転ナデ。口縁端部灰かぶりにより変色 (N3/0 灰)。	II -2 期	12C 末	7A-1h
回転ナデ。口縁端部灰かぶりにより変色 (N4/0 灰)。	II -2 期	12C 末	7A-1h
内面ナデ後ハケ後摺目 (9 条単位)。口縁部横ナデ。外面ヘラ削り。		14C 後～ 15C 前	6A-10j
内面ナデ、ハケ後摺目。口縁部横ナデ。外面体部ヘラ削り。		14C 後～ 15C 前	6A-8h
内面体部ナデ。口縁部横ナデ。外面底部指押さえ。		14C 後	7B-1a
口縁部横ナデ。内面底部ナデ。外面体・底部指押さえ。		14C	7B-3a
内面ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。	へそ皿か	14C	6A-7h
内面から口縁部まで横ナデ。外面底部指押さえ。		14C 前	7A-4h
見込みナデ後暗文。外面体部指押さえ。口縁部横ナデ。		13C か	6A-10i
外面の体部以外全面施釉。口縁端部の玉縁小さい。	Ⅲ類か	12C 後	6A-7j
手握ね成形。外面ナデ。脚内芯棒にて成形と指押さえ。		古代	6A-10h
内面ナデ。口縁部横ナデ、外側に 2 条の沈線。外面ナデか、煤付着。鏝貼付け。胎土緻密で大和産の可能性あり。	大和型 H2 型か	14C か	7A-3g
内面体部ナデ。口縁部横ナデ。外面ヘラ削り後ナデ。	大和型広口 B 型	14C	7A-2g
全面施釉。外面櫛描文。内面片切彫り劃華文。	同安窯系 I -1b 類か	12C 後	7A-4i
口縁部のみ。横ナデ。		14C 前	7A-2i
脚部のみ。指押さえにて成形。板状工具にてナデ。		13C	6A-9i
見込みナデ後格子状暗文。外面横ナデ。高台貼付け。	和泉型 II -3 期	12C 中	7A-1h

挿図 番号	遺物 番号	写真図版	材質	器種	出土層序	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率 (%)	外面の主な色調
39	50		瓦器	椀	第6-2a層	(3.6)	[1.3]	20	N4/0 灰
42	51		須恵器	練鉢	第6-3a層	(29.0)	[5.3]	U-5	N6/0 灰
42	52		須恵器	練鉢	第6-3a層	(27.6)	[4.6]	10	N7/0 灰白
42	53		瓦質	三足羽釜	第6-3a層	(19.0)	[3.4]	U-5	N2/0 黒
42	54		土師器	皿	第6-3a面	(8.2)	1.4	15	10YR6/3 にぶい黄橙
42	55		瓦器	椀	第6-3a層	(12.8)	3.2	35	N3/0 暗灰
42	56		青磁	碗	第6-3a面	—	[2.4]	U-5	(7.5Y5/2 灰オリープ)
42	57		青白磁	合子蓋	第6-3a層	(7.0)	1.8	25	(5G7/1 明緑灰)
45	62		土師器	皿	第7-1a層	(10.8)	[1.7]	20	10YR6/3 にぶい黄橙
45	63		土師器	皿	第7-1a層	(10.2)	1.9	15	7.5YR6/3 にぶい褐
45	64		土師器	皿	第7-1a層	(13.0)	[1.7]	10	10YR5/2 灰黄褐
45	65		瓦器	椀	第7-1a層	—	[4.1]	10	N4/0 灰
45	66		瓦器	椀	第7-2a層	(5.5)	[1.1]	20	N2/0 黒
45	67		瓦器	椀	第7-1a層	(6.6)	[1.8]	20	N2/0 黒
45	68		瓦器	椀	第7-1a層	(5.6)	[1.7]	20	N2/0 黒
45	69		瓦器	椀	第7-1a面 7003 土坑	(7.6)	[2.6]	U-5	7.5YR6/4 にぶい橙
45	70		白磁	碗	第7-1a層	(13.6)	[2.3]	U-5	(2.5GY7/1 明オリープ灰)
45	71		白磁	碗	第7-1a層	—	[2.4]	U-5	(7.5Y7/2 灰白)
45	72		白磁	碗	第7-1a層	—	[3.1]	U-5	(7.5Y7/1 灰白)
48	75		瓦器	椀	第7-3a層	(14.2)	[4.2]	10	N2/0 黒
48	76		瓦器	椀	第7-3a層	(7.6)	[1.6]	20	N3/0 暗灰
48	77		瓦器	椀	第7-3a面	(5.9)	[1.7]	10	5Y7/1 灰白
48	78		瓦器	椀	第7-3a層	(5.2)	[1.7]	10	N3/0 暗灰
48	79		土師器	皿	第7-3a層	(16.4)	[2.5]	10	10YR8/2 灰白
48	80		土師器	皿	第7-3a層	(10.2)	1.5	15	10YR5/3 にぶい黄褐
48	81		土師器	皿	第7-3a層	(8.6)	1.5	20	7.5YR6/4 にぶい橙
48	82		土師器	台付皿	第7-3a層	4.9	[3.0]	40	2.5Y6/1 灰黄
48	83		土師器	台付皿	第7-3a層	8.6	[2.4]	20	2.5Y6/2 灰黄
55	86		土師器	皿	第7-3b面 7058 土坑	(10.3)	[2.4]	20	7.5YR7/4 にぶい橙
56	87		土師器	皿	第7-3b面	(8.2)	1.4	15	10YR5/3 にぶい黄褐
56	88		土師器	皿	第7-3b層	(9.6)	1.6	25	5YR6/4 にぶい黄橙
56	89		土師器	皿	第7-3b層	(10.6)	1.7	30	10YR6/2 灰黄褐
56	90		土師器	杯	第7-3a面	(14.8)	[3.9]	10	10YR7/3 にぶい黄橙
56	91		土師器	ミニチュア 土器高杯	第7-3b層	(7.4)	4.5	80	7.5YR5/6 明褐
56	92		瓦器	椀	第7-3b面	(15.1)	[3.3]	10	N3/0 暗灰
56	93		土師器	椀	第7-3b層	(9.6)	[2.0]	10	10YR6/2 灰黄褐
56	94		須恵器	壺	第7-3b層	7.6	[4.3]	10	N6/0 灰、口縁端部 N5/0 灰
59	98		土師器	皿	第8-2a面	(9.2)	1.6	30	10YR6/2 灰黄褐
59	99		土師器	皿	第8-2a面	10.0	1.4	100	10YR7/2 にぶい黄橙

特 徴	備 考	時 期	地 区
内面ナデ後渦巻き状暗文。外面指押さえ。 高台は後に紐状の粘土を貼付け。	和泉型Ⅲ -2 ～ 3期	13C 前	7A-3j
回転ナデ。	Ⅱ -1 ～ 2期	12C 後	7A-3j
全面回転ナデ。内面は後に不定方向のナデ。 口縁端面灰色化 (N5/0 灰)。	Ⅱ -2 類	12C 後	6A-9i
口縁部横ナデ。罫下ヘラ削り。罫貼付け。		12C か	6B-7a
口縁部横ナデ。内面底部ナデ。 外面底部指押さえ。体部と底部の間に段。		12C	7A-2j
内面ナデ後渦巻き状暗文。口縁部横ナデ。 外面体部指押さえ。高台は後に紐状の粘土を貼付け。	和泉型Ⅲ -3 ～Ⅳ -1期	13C 前	6A-8i
残存部全面施釉。内面片切彫り劃華文。	龍泉窯系Ⅰ -2類か	12C 後～ 13C 初	6A-8j
外面と内面天上部施釉。		12C	側溝
内面ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。		12C 前	6A-9i
内・外面体部と口縁部横ナデ。 内面底部ナデ。外面底部指押さえ。		12C 前	7A-3i
内面から口縁部まで横ナデ。外面体・底部指押さえ。		12C	6A-10h
内面ナデ後ヘラ磨き。 外面体部指押さえ後横ナデ後上部ヘラ磨き。 下部重ね焼により薄く変色 (N5/0 灰)。	和泉型Ⅱ期	12C	7B-4a
見込みナデ後格子状暗文。 外面体部指押さえ後横ナデ。高台貼付け。	和泉型Ⅱ -1 ～ 2期	12C 前～中	7A-4i
見込みナデ後多重の格子状暗文。 外面体部指押さえ後横ナデ。高台貼付け。	和泉型Ⅰ -3期	11C 末～ 12C 前	6B-8a
見込みナデ後並行暗文。 外面体部指押さえ後横ナデ。高台貼付け。	和泉型Ⅱ -2期	12C 前～中	7A-1f
見込みナデ後暗文。外面体部指押さえ後横ナデ。 器壁に炭素吸着せず。高台貼付け。	和泉型Ⅱ期	12C	6B-10a
残存部全面施釉。口縁端部の玉縁小さい。	Ⅳ類	12C	7A-4j
残存部全面施釉。口縁端部の玉縁浮いている。 虫喰少しあり。	Ⅳ類	12C	7A-4i
残存部全面施釉。	Ⅳ類	12C	6A-8i
内面精緻なヘラ磨き。 外面指押さえ後横ナデ後ヘラ磨き。	和泉型Ⅱ -2期	12C 前～中	7A-4i
見込みナデ後ジグザグ状暗文。 外面体部指押さえ後高台横ナデ。	和泉型Ⅱ -1期か	12C 前か	6A-8j
見込みナデ後格子状暗文。 外面体部指押さえ後横ナデ。高台貼付け。	和泉型Ⅱ期	12C	6A-8j
見込みナデ後並行暗文。 外面体部指押さえ後横ナデ。高台貼付け。	和泉型Ⅱ -2期	12C 前～中	6A-8i
口縁部横ナデ。外面指押さえ。		11C 後	7A-4g
内面ヘラ磨き後輪状？暗文。 外面口縁部横ナデ。体部指押さえ。		12C 前	7A-1g
内面から口縁部まで横ナデ。 外面底部指押さえ後ナデ。		12C 前	6A-8j
高台内、外面横ナデ。見込みナデ。 高台輪状の粘土を貼付け。		11C	6B-8a
高台内・外面横ナデ。見込みナデ。 高台貼付け。		11C	6A-7j
内面ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。		11C 中～ 12C 初	7A-1h
内面から口縁部まで横ナデ。外面指押さえ。	「て」字状口縁皿	11C 後	6A-8j
内面摩滅し、調整不明。口縁部横ナデ。 外面指押さえ。高台貼付け。		11C 後～ 12C 初	6A-10j
内面ハケ。口縁部横ナデ。 外面指押さえ後ナデ。歪み強い。	「て」字状口縁皿	10C 後～ 11C 前	7A-2j
内面ナデ。口縁部横ナデ。 外面指押さえ。		11C 前	7A-1g
手捏ね成形。指押さえ後ナデ。 内面杯部ナデ丁寧。		古代	7A-3i
内面から口縁部まで横ナデ。外面指押さえ。	大和型Ⅱ類か	11C 末～ 12C 前	6A-10j
見込みナデ。外面横ナデ。高台貼付け。		11C	6A-10j
回転ナデ。底部ヘラ切り未調整。高台貼付け。	壺k、Ⅳ -3 ～ 4期	8C 後	6A-10g
内面ハケ後横ナデ。口縁部横ナデ。 外面指押さえ。	「て」字状口縁皿	10C 中	7A-3j
内面ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。 器壁薄い。	「て」字状口縁皿	10C 中	7A-3j

挿図 番号	遺物 番号	写真図版	材質	器種	出土層序	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率 (%)	外面の主な色調
59	100		土師器	皿	第8-2a層	(11.8)	[1.0]	10	10YR7/3 にぶい黄橙
59	101		須恵器	杯身	第8-2a層	(9.2)	[1.4]	30	N7/0 灰白
59	102		黒色土器	椀	第8-2a層	6.4	[2.1]	30	10YR7/2 にぶい黄橙 内面 2.5Y4/1 黄灰
59	103	図10 左下	黒色土器	椀	第8-2a面 9010 ピット (土器埋納遺構)	14.7	5.2	80	N3/0 暗灰
59	104		土師器	甕	第8-2a面 8018 坪境畦畔内	(16.8)	[6.4]	10	5YR5/3 にぶい赤褐
59	105	図13 中左下	土師器	甕	第8-2a層	—	[4.9]	U-5	5YR6/3 にぶい橙
59	106	図13 中右下	土師器	甕	第8-2a層	—	[3.2]	U-5	7.5YR6/3 にぶい褐
62	108		土師器	甕	第9-1a面 9023 流路	(14.0)	11.6	40	5YR5/3 にぶい赤褐
62	109		土師器	甕	第9-1a面 9023 流路	—	[3.9]	U-5	7.5YR5/3 にぶい褐
62	110		土師器	高杯	第9-1a面 9023 流路	(12.3)	[8.7]	45	7.5YR6/4 にぶい橙
62	111		土師器	ミニチュア 土器甕	第9-1a面 9023 流路	9.2	[4.2]	40	10YR6/2 灰黄褐
62	112		土師器	ミニチュア 土器高杯	第9-1a面 9023 流路	6.1	5.0	60	7.5YR5/3 にぶい褐
63	113		土師器	杯	第9-1a層	(14.4)	3.5	20	7.5YR6/4 にぶい橙
63	114	図12 左上	土師器	短頸壺	第9-1a層	(11.6)	[4.3]	U-5	7.5YR7/4 にぶい橙
63	115	図13 中左上	土師器	甕	第9-1a層	—	[8.2]	15	10YR5/3 にぶい黄褐
63	116	図13 中右上	土師器	甕	第9-1a層～2a面	(17.0)	[6.1]	10	10YR6/4 にぶい黄橙
63	117	図9 中 ・10 右上	土師器	ミニチュア 土器甕	第9-1a層	8.8	5.0	50	10YR6/3 にぶい黄橙
63	118		黒色土器	鉢	第9-1a層	(12.8)	[3.8]	U-5	N2/0 黒
63	119		黒色土器	椀	第9-1a層	(14.7)	5.1	60	2.5Y4/4 にぶい赤褐 内面 N2/0 黒
63	120		須恵器	壺	第9-1a層	(10.6)	[10.5]	30	N7/0 灰白
68	127		須恵器	杯蓋	第9-2a面 9039 溝	—	[1.5]	10	N6/0 灰
68	128		土師器	杯	第9-2a面 9039 溝	(16.4)	3.1	20	7.5YR7/4 にぶい橙
68	129		土師器	把手付甕	第9-2a面 9039 溝	(14.4)	[5.2]	U-5	10YR5/2 灰黄褐
68	130	図9 下	土師器	ミニチュア 土器高杯	第9-2a面 9039 溝	7.8	5.5	80	10YR6/3 にぶい黄橙
68	131		土師器	甕	第9-2a面 9039 溝	(28.0)	[4.9]	U-5	10YR6/3 にぶい黄橙
68	132		土師器	羽釜	第9-2a面 9039 溝	(29.0)	[8.8]	10	7.5YR6/4 にぶい橙
69	133	図9 上 ・10 左中	土師器	杯	第9-2a面 9039 溝、 9051・9052 流路合流部	19.4	3.6	100	10YR6/4 にぶい黄橙
69	134	図9 上 ・12 右中	土師器	杯	第9-2a面 9051 ・9052 流路合流部	14.4	3.1	100	10YR7/3 にぶい黄橙
69	135		土師器	杯	第9-2a面 9051 ・9052 流路合流部	12.8	3.0	85	7.5YR6/6 橙
69	136		土師器	杯	第9-2a面 9039 溝、 9051・9052 流路合流部	(13.6)	[3.0]	25	7.5YR6/4 にぶい橙
69	137	図9 上	土師器	皿	第9-2a面 9051 ・9052 流路合流部	15.6	3.8	97	10YR7/3 にぶい黄橙
69	138	図9 中	土師器	ミニチュア 土器甕	第9-2a面 9039 溝、 9051・9052 流路合流部	8.2	5.4	100	10YR5/3 にぶい黄褐
69	139	図9 中	土師器	ミニチュア 土器甕	第9-2a面 9039 溝、 9051・9052 流路合流部	8.8	5.4	99	7.5YR6/2 灰褐
69	140		土師器	ミニチュア 土器甕	第9-2a面 9039 溝、 9051・9052 流路合流部	(8.8)	[5.8]	25	7.5YR5/3 にぶい褐

特 徴	備 考	時 期	地 区
内面ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。	「て」字状口縁皿	10C 後	6A-8f
回転ナデ。底部ヘラ切り未調整。高台貼付け。	杯 B、IV -3 ~ 4 期	8C 後	6B-5a
内面ヘラミガキ。見込み暗文。外面横ナデ。高台内に「×」のヘラ記号あり。	A 類	10C 後	6B-9a
高台内含め全面に細かいヘラ磨き。低い高台貼付け。第9-1a面にて検出。	B 類	10C 後	6A-9g
内面ナデ後横ハケ。口縁部横ナデ。外面叩き後縦ハケ。		7C ~ 8C	6A-9j
内面ナデ。外面指押さえ後ナデ。「人面墨書土器」髭、口、右目か。		古代	6B-9a
内面ナデ。外面指押さえ後ナデ。「人面墨書土器」左右の目か。		古代	6B-9a
内面指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。底部外側より穿孔あり。外面に黒斑あり。	平城 V 期か	8C 後か	6A-10j
口縁部横ナデ。外面指押さえ後ナデ。「人面墨書土器」眉の一部か。		9C か	6A-10j
脚部のみ。外面を 14 面に面取り。接地部ハケ後横ナデ。内面指押さえ後ナデ。杯底部ナデ後螺旋状暗文。	高杯 A、平城 V 期か	8C 中~後か	7A-1j
内面指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。意図的に上部を水平に打ち欠いた可能性あり。		古代	7A-2j
手握ね成形。内面杯部丁寧なナデ。ほか是指押さえ後ナデ。		古代	7A-2j
内面から外面体部横ナデ。底部粗い指押さえ。	杯 C、平城 V 期	8C 中~後	6A-9i
口縁部横ナデ。内面体部ナデ。外面肩部横方向のヘラ磨き。内・外面頸部波状文の暗文。把手の付く可能性あり。	壺 A、平城 VI 期か	8C 後か	6A-9i
体部のみ。内面体部ナデ。頸部横ナデ。外面指押さえ。「人面墨書土器」顔右上部か。		古代	6A-10j
口縁部横ナデ。内面板ナデ。外面ナデ。「人面墨書土器」左目と右眉・鼻の一部か。		9C 前か	6B-9a
粘土板を輪状か螺旋状に積み上げ成形。内面指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。底部中央、焼成前に直径 1.7cm 程円状に穿孔。		古代	6A-9j
内面横方向のヘラ磨き。外面口縁部横ナデ。外面体部横方向のヘラ削り。	B 類	10C	6A-8h
内面細かいヘラ磨き。外面指押さえ後横ナデ。高台縁辺部横ナデ。口縁部内側に沈線。高台貼付け。	A 類	9C 後か	6A-10i
回転ナデ。外面高台際回転ヘラ削り、底部ヘラ切り未調整。内面底部と外面高台中央部に自然釉付着。	壺 k	8C 前	6B-9a
体部のみ。全面回転ナデ。内面ナデ。外面体部回転ヘラ削り。偏平な宝珠摘み付設。	杯 B 蓋、IV 期	8C	6A-10j
内面底部から口縁部横ナデ。底部外面ヘラ削り。内面体部 1 段斜放射状、底部螺旋状暗文。	杯 A、平城 III 期	8C 前~中	6A-10j
口縁部から内面体部上部まで横ナデ。把手指押さえ。把手を内側よりはめ込み。外面把手下位ナデ。		8C	6A-10j
手握ね成形。内面杯部ナデ。外面指押さえ後ナデ。		古代	6A-10j
口縁部横ナデ。外面体部ハケ。外面煤付着。		8C	6A-10j
内面体部指押さえ後ナデ、上位は板ナデ。口縁部から頸部横ナデ。頸部上、指押さえ。外面体部縦ハケ。		8C	6A-9j
内面から口縁部まで横ナデ。外面底部指押さえ。外面体部ヘラ磨き。内面体部 1 段斜放射状、底部螺旋状暗文。外面底部中央に木葉痕。	杯 A、平城 III 期	8C 前~中	6A-9j
内面から口縁部まで横ナデ。外面体・底部板ナデ。内面体部 1 段斜放射状、底部螺旋状暗文。	杯 C か、平城 IV 期	8C 中	6A-9i
口縁部、内面横ナデ。外面底部指押さえ。内面体部 1 段斜放射状、底部螺旋状暗文。	杯 C、平城 III 期	8C 前~中	6A-10h
内面から口縁部まで横ナデ。外面体・底部粗い指押さえ。	杯 C、平城 III 期か	8C 前~中か	6A-9j
内面から外面体部まで横ナデ。外面指押さえ。	皿 A、平城 IV 期	8C 中	6A-10i
粘土板を輪状か螺旋状に積み上げ成形。内面指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。		古代	6B-9a
粘土板を輪状か螺旋状に積み上げ成形。内面ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ。		古代	6A-9j
粘土板を輪状か螺旋状に積み上げ成形。内面指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ、粘土接合痕あり。		古代	6A-9j

挿図 番号	遺物 番号	写真図版	材質	器種	出土層序	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率 (%)	外面の主な色調
69	141	図9中	土師器	ミニチュア 土器甕	第9-2a面9039溝、 9051・9052流路合流部	8.8	5.5	50	7.5YR5/6明褐
69	142	図9中	土師器	ミニチュア 土器甕	第9-2a面9051 ・9052流路合流部	9.4	6.3	99	5YR5/6明赤褐
69	143	図9中 ・10左上	土師器	ミニチュア 土器甕	第9-2a面9039溝、 9051・9052流路合流部	9.7	6.6	80	7.5YR5/3にぶい褐
69	144	図9下	土師器	ミニチュア 土器高杯	第9-2a面9039溝、 9051・9052流路合流部	6.7	4.9	99	10YR6/4にぶい黄橙
69	145		土師器	鉢	第9-2a面9039溝、 9051・9052流路合流部	(10.6)	[8.4]	20	10YR6/3にぶい黄橙
69	146	図10右中	土師器	甕	第9-2a面9039溝、 9051・9052流路合流部	(16.2)	[8.5]	25	10YR5/3にぶい黄褐
69	147		土師器	羽釜	第9-2a面9051 ・9052流路合流部	(33.8)	[9.5]	15	7.5YR5/4にぶい褐
69	148		土師器	杯か	第9-2a面9051 ・9052流路合流部	—	[1.3]	U-5	10YR6/3にぶい黄橙
69	149		土師器	装飾壺	第9-2a面9039溝、 9051・9052流路合流部	—	[8.1]	U-5	2.5Y4/1黄灰
69	150		須恵器	杯身	第9-2a面9039溝、 9051・9052流路合流部	(15.0)	4.0	30	5Y4/1灰
69	151		須恵器	甕	第9-2a面9051 ・9052流路合流部	(25.6)	[8.8]	U-5	7.5Y5/1灰
71	152	図9上	土師器	杯	第9-2a面9049ピット (土器埋納遺構)	14.8	3.8	90	10YR6/3にぶい黄橙
71	153	図9上 ・11上	土師器	皿	第9-2a面9042ピット (土器埋納遺構)	22.2	2.6	90	2.5Y7/3浅黄
71	154	図9上 ・12左中 ・13左下	土師器	皿	第9-2a面9033ピット (土器埋納遺構)	22.6	16.0	95	10YR7/3にぶい黄橙
71	155	図9上 ・13中下	土師器	杯	第9-2a面9050ピット (土器埋納遺構)	16.2	3.5	80	5YR6/6橙
71	156	図9上 ・13右下	土師器	杯	第9-2a面9053ピット (土器埋納遺構)	15.0	3.7	90	10YR6/3にぶい黄橙
72	157	図9上 ・図10右下	土師器	杯	第9-2a層	15.8	3.4	95	5YR7/6橙
72	158	図11中 ・13左上	土師器	皿	第9-2a層	22.4	2.6	50	7.5YR6/6橙
72	159		土師器	杯	第9-2a層	(14.4)	3.9	25	10YR6/3にぶい黄橙
72	160	図9中	土師器	ミニチュア 土器甕	第9-2a層	9.4	5.4	80	10YR5/2灰黄褐
72	161		須恵器	杯蓋	第9-2a層	(11.6)	[1.9]	25	N6/0灰
74	162	図9上	土師器	羽釜	第9-3a面9107流路～2a層	27.9	49.2	60	10YR6/3にぶい黄橙
75	163		土師器	杯	第9-3a層	(13.2)	3.6	20	2.5Y6/2灰黄
75	164		土師器	杯	第9-3a層	[20.6]	[4.1]	10	5YR6/4にぶい橙
75	165	図12下	土師器	皿	第9-3a面	20.6	4.9	20	7.5YR6/3にぶい褐
78	166		土師器	杯	第9-4a面9107流路	(12.8)	[3.1]	20	7.5YR6/3にぶい褐
78	167		土師器	杯	第9-4a面9107流路	(15.8)	[3.6]	10	10YR5/2灰黄褐
78	168		土師器	杯	第9-4a面9107流路	(18.8)	3.6	10	10YR6/3にぶい黄橙



特 徴	備 考	時 期	地 区
粘土板を輪状か螺旋状に積み上げ成形。 内面指押さえ後ナデ。 口縁部横ナデ。外面指押さえ、粘土接合痕あり。 底部中央打ち欠いた可能性あり。		古代	6B-9a
粘土板を螺旋状に積み上げ成形。内面指押さえ後ナデ。 口縁部横ナデ。外面指押さえ、粘土接合痕、黒斑あり。		古代	6A-10h
粘土板を螺旋状に積み上げ成形。内面指押さえ後ナデ。 口縁部横ナデ。外面指押さえ、粘土接合痕あり。		古代	6B-9a
手捏ね成形。全体を指押さえ後ナデ。		古代	6A-9i
内外面体部指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。	ミニチュア土器 の類か	古代	6A-9j
内面ナデ。部分的に板ナデ。口縁部横ナデ。 外面指押さえ後ナデ、部分的に板ナデ。 粘土接合痕あり。	平城V期か	8C中～後か	6B-9a
内面指押さえ後ナデ。口縁部から罅部まで横ナデ。 外面体部縦ハケ。 罅部下から体部煤付着。		8C	6A-9j
内面ナデ、一部横ナデ。外面指押さえ後ナデ。 外面底部ヘラ記号の刻線あり。		古代	6A-9i
肩部のみ。複合口縁と思われる。内面ナデ。 外面上位に刻目突帯貼付け。 櫛描波状文間に多重直線文、下位縦方向のヘラ削り。	庄内I～II期	3C	6A-9j
外面底部以外回転ナデ。内面底部は後にナデ。 外面体部下位回転ヘラ削り。 外面底部ヘラ切り未調整。	杯B、IV-2期か	8C中か	6A-9i
全面回転ナデ。内面体部同心円叩き後ナデ。 外面体部平行叩き。 外面体部と口縁部から内面頸部に自然釉付着。	IV期	8C	6A-9i
内面体部から口縁部まで横ナデ。内面底部ナデ。 外面底部指押さえ。	杯A、平城III期	8C前～中	7A-1h
内面から口縁部まで横ナデ。内面底部ナデ。 外面底部指押さえ後粗いヘラ削り。 内面口縁から底部際まで1段放射状、底部螺旋状暗文。 割れ口が直線的で、口縁部体部の一部を 意図的に打ち欠いた可能性あり。	皿A、平城III期	8C前～中	6B-10a
内面体部、外面底部横ナデ、中央部はヘラ削り後ナデ。 外面体部ヘラ磨き。内面口縁部連弧状、 体部1段斜放射状、底部螺旋状暗文。 外面底部墨書「土□」。口縁部の一部を 意図的に打ち欠いた可能性あり。	皿B、平城II期	8C前	6A-9h
内・外面体部と口縁部横ナデ、内面底部ナデ。 外面体部は後にヘラ磨き。底部指押さえ後ヘラ削り。 内面口縁から底部際まで1段斜放射状、底部螺旋状暗文。 墨書土器外面底部中央に「土」と焼成前に線状のヘラ記号。 割れ口が直線的で、口縁部体部を意図的 に打ち欠いた可能性あり。	杯A、平城III期	8C前～中	7A-2g
内面体部から口縁部まで横ナデ。内面底部ナデ。 外面底部指押さえ。 外面底部墨書、記号か。口縁部体部の一部を 意図的に打ち欠いた可能性あり。	杯A、平城II～III期	8C前～中	7A-2g
内面から外面体部まで横ナデ。外面体部下位ヘラ削り。 外面底部粗い指押さえ。 内面体部1段斜放射状、底部螺旋状暗文。 口縁部の1/3が意図的に細かい単位で打ち欠かれている。 意図的に打ち欠かき半裁した可能性あり。	杯A、平城III期	8C前～中	6A-10h
内面指押さえ後ナデ。ハケ調整一部残る。口縁部横ナデ。 外面低部指押さえ後ナデ。調整は153に似る。 内面体部から底部上位まで1段斜放射状、底部螺旋状暗文。 外面十字の焼成前のヘラ記号あり。外面に黒斑あり。 割れ口が直線的で、意図的に打ち欠かき半裁した可能性あり。	杯A、平城III期	8C前～中	6A-9j・10j
内面ハケ後横ナデ。口縁部横ナデ。外面指押さえ後ナデ。	杯C、平城IV期か	8C中か	7A-1h
口縁部横ナデ。ほかは指押さえ後ナデ。内面ナデ丁寧。		古代	6A-9j・10j
回転ナデ。外面天井部回転ヘラ削り。外面全体に自然釉付着。	杯G蓋、TK217、III-2期	7C中	7A-1g
内面体・低部指押さえ。口縁部横ナデ。内面は後に横ハケ。 外面体・低部縦ハケ(10本/cm)。外面に黒斑あり。 外側から穿孔あり。		8C	6A-9i
内面から外面体部上位横ナデ。 外面下位は粗い指押さえ。	杯A、平城II期か	8C前か	6B-10a
内面から外面体部上位横ナデ。外面下位はヘラ削り。 内面体部2段放射状暗文。外面体部ヘラ磨き。	平城II期か	8C前か	6B-10a
内面体・低部横ナデ。外面体部ヘラ磨き、底部ナデ。 内面体部2段放射状、底部螺旋状暗文。	皿B、平城I期	7C末～8C前	6B-9a
内面から外面体部上位横ナデ。外面下位はヘラ削り。 内面体部1段斜放射状、底部螺旋状暗文か。	杯A、平城II期	8C前	6A-9h
内面から外面体部上位横ナデ。外面下位はナデ。 内面体部2段斜・正放射状暗文。外面体部ヘラ磨き。	杯C、平城II期か	8C前か	6A-10h
内面底部ナデ。内面体部から外面体部上位まで横ナデ。 外面体部下位・底部は粗い指押さえ。	杯A、平城II期か	8C前か	6A-9h

挿図 番号	遺物 番号	写真図版	材質	器種	出土層序	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率 (%)	外面の主な色調
78	169		土師器	皿	第9-4a面9107流路	(14.6)	2.4	20	7.5YR5/3にぶい褐
78	170	図9上	土師器	杯	第9-4a面9107流路	14.0	3.5	80	7.5YR5/4にぶい褐
78	171		土師器	皿	第9-4a面9107流路	22.4	2.5	30	7.5YR5/3にぶい褐
78	172		土師器	甕	第9-4a面9107流路	(22.4)	[8.9]	10	7.5YR6/4にぶい橙
78	173		土師器	羽釜	第9-4a面9107流路	(25.6)	[7.5]	25	7.5YR4/2灰褐
78	174	図9下	土師器	ミニチュア 土器高杯	第9-4a面9107流路	8.4	5.4	80	2.5Y5/2暗灰黄
78	175	図9下	土師器	ミニチュア 土器高杯	第9-4a面9107流路	7.9	5.6	80	2.5Y4/1黄灰
78	176		土師器	杯か	第9-4a面9107流路	—	[1.5]	U-5	10YR6/3にぶい黄橙
78	177		土師器	鉢	第9-4a面9107流路	(19.4)	[3.9]	U-5	10YR6/3にぶい黄橙
78	178	図9上	須恵器	杯蓋	第9-4a面9107流路	9.5	2.9	100	10Y6/1灰
78	179		須恵器	杯身	第9-4a面9107流路	(17.0)	4.4	10	10Y5/1灰
78	180		須恵器	杯身	第9-4a面9107流路	(11.4)	[1.3]	20	7.5Y7/1灰白
78	181	図11右下	須恵質	小形壺	第9-4a面9107流路	3.8	[8.7]	80	2.5Y5/2暗灰黄
79	183	図9上 ・11左下	土師器	杯	第9-4a面9138土坑 (土器埋納遺構)	14.6	4.9	60	10YR6/4にぶい黄橙
79	184		須恵器	杯蓋	第9-4a層	11.8	3.9	60	7.5Y7/1灰白
79	185	図9上	須恵器	杯身	第9-4a層	12.2	3.7	100	N4/0灰
79	186	図9上 ・12右上 ・13右上	土師器	杯	第9-4a層	14.0	3.5	98	7.5YR6/3にぶい褐
79	187		土師器	高杯	第9-4a面	—	[3.4]	20	2.5Y6/3にぶい黄
81	189		土師器	甕	第10a層	(13.6)	[8.9]	20	10YR5/2灰黄褐
81	190		土師器	甕	第10a層	17.0	9.6	U-5	10YR5/3にぶい黄褐
81	191		土師器	甕	第10a層	(14.6)	[12.0]	20	7.5YR6/3にぶい褐
81	192		土師器	高杯	第10a層	24.6	[8.4]	40	7.5YR6/4にぶい橙
81	193		土師器	高杯	第10a面	15.6	[4.1]	25	10YR6/2灰黄褐
81	194		土師器	高杯	第10b層	11.2	[9.6]	40	10YR5/4にぶい黄褐
81	195		土師器	小型丸底壺	第10a面1030ピット (土器埋納遺構)	8.6	9.2	98	7.5YR6/4にぶい橙
81	196		土師器	小型丸底壺	第10a層	(10.8)	[6.1]	20	10YR6/2灰黄褐
81	197		須恵器	杯蓋	第10a層	(13.0)	4.5	30	N5/0灰
81	198		須恵器	杯蓋	第10b層	(12.4)	[4.2]	20	N4/0灰
81	199		須恵器	杯身	第10a層	(10.6)	[3.9]	20	2.5Y4/1黄灰
81	200		須恵器	杯身	第10a面	(12.8)	[4.4]	25	N4/0灰
85	201		弥生土器	甕	第11-2a面1101溝	(18.0)	(24.0)	25	2.5Y3/1黒褐
85	202		弥生土器	鉢	第11-2a面1101溝	13.2	7.4	99	7.5YR5/4にぶい褐
85	203		弥生土器	鉢	第11-2a面 1107畦畔直上	5.4	[6.6]	60	2.5Y5/2暗灰黄

特 徴	備 考	時 期	地 区
内面から外面体部まで横ナデ、底部は後にナデ。 外面底部粗い指押さえ後ナデ。	皿A、平城Ⅱ期か	8C前か	6A-9h
内面から口縁部全体に横ナデ、内面底部指押さえ。 内面に付着物あり。口縁部体部の一部を 意図的に打ち欠かいた可能性あり。	杯A、平城Ⅱ期か	8C前か	6A-9j
内面から口縁部まで横ナデ、内面底部ナデ。 外面底部指押さえ後ヘラ削り。 内面口縁から底部際まで1段斜放射状、底部螺旋状暗文。	皿A、平城Ⅱ期	8C前	6A-9i
内面ナデ。口縁部から頸部まで横ナデ。外面体部ハケ。		8C	6A-9h
内面指押さえ後ナデ。口縁部から頸部まで横ナデ。 外面体部縦ハケ。頸部下から体部煤付着。		8C	6A-9i
手捏ね成形。内面ナデ。外面指押さえ、 口縁部は後にナデ。		古代	6A-10h
手捏ね成形。内面杯部ナデ。外面指押さえ後ナデ。 脚部内面ナデ。		古代	6A-10h
体部破片のみ。内面ナデ。外面指押さえ。 内面に墨書、文字不明。		古代	6A-10h
内面体部から口縁部まで横ナデ。 外面指押さえ後横方向のヘラ磨き。外面に墨書か。		8C	6A-10h
内外面体部と口縁部回転ナデ。内面底部ナデ。 外面回転ヘラ削り、天井部弱いナデ。 重ね焼により一部変色（N4/0灰）。 焼成前の線状のヘラ記号あり。	杯H蓋、TK217、Ⅲ-1期	7C中	7A-1f
内・外面体部、口縁部回転ナデ。内面底部ナデ。 外面高台貼付け前に腰部回転ヘラ削り。 外面回転ヘラ切り未調整。内面に暗赤灰色の付着物あり。	杯B、平城Ⅰ期	8C前	6A-9j
外面底部以外回転ナデ、内面底部は後にナデ。 外面底部ヘラ切り未調整。	杯B、Ⅳ期	8C	6A-10h
袋状を呈する。胎土3mm大以下の白色砂粒を多く含み粗い。 焼き締まりは良いが、酸化焼成か。 内面と外面体部上位回転ナデ、下位から底部回転ヘラ削り。		古代か	6B-9a
内面横ナデ（スキナデ）。体部細かい1段斜放射状暗文、 底部螺旋状暗文。 外面体部指押さえ後細かいヘラ磨き。 底部ヘラ削り。器壁薄い。割れ口が直線的で、 意図的に打ち欠かき半裁した可能性あり。	杯Cか、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期	7C中	7A-2i
内・外面体部と口縁部回転ナデ。内面底部ナデ。 外面回転ヘラ削り、 底部未調整。外面に重ね焼による変色箇所あり。	杯H蓋、TK209、 Ⅱ-5期	6C末	6A-3f
内面から外面体部まで回転ナデ。 外面体部下位回転ヘラ削り。底部ヘラ切り未調整。	杯A、平城Ⅲ、Ⅳ-1期	8C前～中	6A-10i
内面から口縁部全体に横ナデ、内面底部指押さえ。 内面口縁から底部際まで1段斜放射状、底部輪状暗文。 焼成前に線状のヘラ記号。	杯A、平城Ⅱ期	8C前	6A-10i
杯部のみ。内・外面ナデ。 外面ハケの痕跡か。脚内中央部に刺突。	布留Ⅱ～Ⅲ期か	4C前か	7A-2i
内面体部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 外面体部横・縦方向のハケ。	布留Ⅳ期か	4C後か	6A-10j
口縁部横ナデ。内面体部横方向のヘラ削り。 外面体部細かいハケ。外面全体に煤付着。	布留Ⅰ期か	3C末	6A-10j
内面指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。 外面体部ハケ。外面に煤付着。	布留期	古墳前	6A-10j
杯部のみ。内面底部ハケ後ナデ。ほかは横ナデ。 外面底部粗いナデ。外面脚部内中央を棒状物にて刺突。	布留Ⅲ期	4C中	6A-10j
全面摩滅。ナデか。	布留期	古墳前	7A-1h
脚部のみ。内面横方向のヘラ削り、底部ハケ、 中央部に粘土接合痕あり。外面ヘラナデ。頸部ハケ。	布留Ⅲ期か	4C中か	7A-2g
内面体・底部指押さえ。口縁部横ナデ。 外面頸部下位指押さえ後ナデ。 外面体・底部指押さえ後ハケ。外面に黒斑あり。	布留Ⅳ期	4C後	7A-2j
内面体部ナデ。内面頸部から外面体部までヘラ磨き。 内面口縁部斜放射状暗文。	布留Ⅱ期	4C前	6A-10j
内面から外面体部まで回転ナデ。内面天上部ナデ。 外面天井部回転ヘラ削り。	杯H、Ⅱ-1～2期	6C前	7A-4j
回転ナデ。外面天井部回転ヘラ削り。	杯H蓋、TK209、Ⅱ-5期	6C後	7B-1a
回転ナデ。外面体部回転ヘラ削り。第9-4a層出土の可能性あり。	杯H、TK10、Ⅱ-2期	6C中	7A-1h
回転ナデ。外面体部回転ヘラ削り。	杯H、TK209、Ⅱ-5期	6C後	7A-1i・1j
内面指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。 外面体部平行叩き。底部ナデ。 外面全体に煤付着。	Ⅵ期	弥生後期	6A-8h
口縁部歪み大きい。内面ハケ。口縁部ナデ。 外面指押さえ後ナデ。底部粘土充填。外面に黒斑あり。	Ⅴ-1期か	弥生後期前	6A-9f
口縁部歪み大きい。内面ハケ。口縁部ナデ。 外面指押さえ後ナデ。 底部粘土充填。外面に黒斑あり。	Ⅴ-1期か	弥生後期前	7A-1j

挿図番号	遺物番号	写真図版	材質	器種	出土層序	口径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	外面の主な色調
85	204		弥生土器	甕	第11-2a層	4.2	[3.9]	U-5	10YR3/3 暗褐
90	206		弥生土器	壺	第12-3a層	9.5	[6.9]	10	7.5YR4/2 灰褐
92	207		弥生土器	壺蓋	第13-1b層	12.5	3.4	98	10YR3/2 黒褐
92	208		弥生土器	壺蓋	第13-1a層	11.7	2.0	60	2.5Y4/2 暗黄灰
92	209		弥生土器	壺蓋	第13-1a層	(11.0)	[1.7]	30	7.5YR4/3 褐
92	210		弥生土器	甕蓋	第13-1a面 1325 流路	6.8	[7.5]	40	10YR3/2 黒褐
92	211		弥生土器	鉢	第13-1a層	(36.6)	[15.1]	25	7.5YR4/3 褐
92	212	図14上	弥生土器	壺	第13-1a層	(10.5)	[17.8]	10	7.5YR4/2 灰褐
92	213		弥生土器	壺	第13-1a層	(5.7)	[7.2]	60	10YR4/3 にぶい黄褐
92	214	図14下左下	弥生土器	長頸壺	第13-1a面 1325 流路	—	[16.4]	20	2.5Y4/1 黄灰
92	215		弥生土器	甕	第13-1a層	(24.0)	(46.4)	10	10YR5/3 にぶい黄褐
93	216	図14上	弥生土器	甕	第13-1a層	18.1	[13.0]	60	2.5Y4/1 黄灰
93	217	図14上	弥生土器	甕	第13-1a層	(20.6)	17.2	40	10YR2/2 黒褐
93	218	図14上・ 14下左上	弥生土器	甕	第13-1a層	23.2	25.3	80	10YR4/2 灰黄褐
93	219	図14上	弥生土器	甕	第13-1a層	37.0	50.0	60	5YR6/4 にぶい赤褐
93	220		弥生土器	壺	第13-1a層	[2.7]	[7.7]	U-5	10YR4/1 褐灰
95	221	図14上	弥生土器	壺	第13-1b面	9.6	[23.4]	60	10YR3/4 暗褐
95	222		縄文土器	深鉢	第13-1b層	—	[4.1]	U-5	10YR5/3 にぶい黄褐

※法量の下線は底部径。斜体の数字は体部のみ残存した個体の残存長。( )は推定 [ ]は残高・残長。  
U-5は5%以下の残存率。以下、瓦類、石器・石製品類、金属器類、木製品類も同じ。  
外面の主な色調の( )は釉の色調。

出土土器の年代の記載に関しては、第5章に記載した参考文献を使用している。また、型式については下記による分類に依拠した。  
貿易陶磁器：小野正敏（中世土器研究会1995）、山本信夫（太宰府教育委員会2000）  
瓦器：森島康雄（中世土器研究会1995） 中世の須恵器：森田稔（1986）  
羽(土)釜：菅原正明（国立奈良文化財研究所1983）、松本洋明（奈良県立橿原考古学研究所1988）

#### 【土製品類】

挿図番号	遺物番号	写真図版	材質	器種	出土層序	最大径(cm)	最大厚(cm)	残存率(%)	外面の主な色調
45	74		土製品	円盤	第7-1a面	3.6	1.5	100	5Y3/2 オリーブ黒

#### 【瓦類】

挿図番号	遺物番号	写真図版	材質	器種	出土層序	口径(cm)	器高(cm)	最大厚(cm)	残存率(%)
42	58		瓦	平瓦	第6-3a層	[9.6]	[7.3]	1.6	U-5
42	59		瓦	平瓦	第6-3a層	(10.9)	[16.3]	2.4	20

特 徴	備 考	時 期	地 区
外面平行叩き、底部ナデ。 内面ナデ、底部板状工具によるナデか。	MT15、II -1 期	弥生後期前	7A-2h
底部のみ。内・外面ヘラ磨き。 内面底部は剥落のため調整不明。		弥生中期	7A-1i・1j
全体を指押さえ後ナデ。		弥生前期	7B-1a
全体を指押さえ後ナデ。		弥生前期	6A-7i
全体を指押さえ後ナデ。		弥生前期	6A-7i
内・外面体部ヘラ磨き。内・外面天井部指押さえ後ナデ。 内面煤付着。	I -3 ~ 4 期	弥生前期新	7A-4j
内・外面体部ヘラ磨き。口縁部横ナデ。 外面頸部に1条のヘラ描き沈線、部分的に2条。 内・外面に黒斑あり。		弥生前期新	7B-2a
内・外面体部ヘラ磨き、底部直上はヘラ削り。 外面底部摩滅のため調整不明。	胎土生駒西麓産	弥生前期新	7A-3j
内面指押さえ後ナデ。外面摩滅のため調整不明。		弥生前期新	7A-2i
頸部のみ。内面上位指押さえ、下位ハケ後ナデ。 外面ナデ後太い多条櫛描直線文。		弥生前期新	7B-4a
内面摩耗のため調整不明、ヘラ磨きか。外面口縁部横ナデ。 外面体部ヘラ磨き。外面肩部に2条の ヘラ描き沈線を上下に配し、2条の山形の併行斜線文で埋める。 外面底部摩耗のため調整不明。		弥生前期新	7B-2a
内面指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。口縁部刻目。 外面摩耗激しい、ナデか。外面全体に煤付着。		弥生前期新	6B-8a
内面体部板ナデ。底部指押さえ。口縁部横ナデ。 外面体部上位ナデ、下位板ナデ。口縁部刻目。 外面頸部に2条のヘラ描き沈線		弥生前期新	7B-2a
内面指押さえ後ナデ。口縁部横ナデ。 外面上位ナデ、下位板ナデ。口縁部刻目。 外面頸部に4条のヘラ描き沈線。内面から底部穿孔。 内面下位に煤付着。甑として使用か。		弥生前期新	7B-1a・2a
内面体・低部と外面体部板ナデ。口縁部横ナデ。 外面底部摩滅のため調整不明。 口縁部刻目。外面頸部に4条のヘラ描き沈線、 内1条は全周せず。		弥生前期新	6A-7j
突帯のみ。内面ナデ。外面体部?ヘラ磨き。刻目突帯貼付け。		弥生前期新	7B-2a
内面底・体部上位指押さえ後ナデ。内面体部下位 外面体部ヘラ磨き。 外面底部ナデ。底部穿孔。		弥生前期新か	6A-9j
断面三角の凸帯文を外面口縁部直下に貼付け。 刻目は無い。摩滅激しい。	長原式か	縄文晩期末	6A-8g・8h

須恵器：中村浩、田辺昭三（大阪府立近つ飛鳥博物館 2006）  
 古代の土師器：小森俊寛他（古代の土器研究会 1992、93）  
 古式土師器：米田敏幸（米田 1991） 弥生土器：森井貞夫、寺沢薫（寺沢薫・森岡秀人 1989）  
 縄文土器：田中清美（土器持寄会論文集刊行会 2000）

特 徴	備 考	時 期	地 区
上面は粗いナデ。縁辺部の5箇所には1~2mmの切り込みあり。		古代か	7A-2j

外面の主な色調	特 徴	備 考	時 期	地 区
N3/0 暗灰	凹面コビキ。凸面縄目。 両面籬砂。		奈良	6A-8g
7.5YR7/4 に近い橙	凹面布目。凸面縄目。 側部面取り。		奈良	6A-8j

【石器・石製品類】

挿図番号	遺物番号	写真図版	材質	器種	出土層序	長さ(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	残存率(%)
42	61		石製品	紡錘車	第 6-3a 層	—	3.0	[1.3]	90
78	182		石製品	砥石	第 9-4a 面 9107 流路	[6.6]	[5.1]	[2.3]	—
96	223		石器	縦形石匙	第 13-2b 層	6.9	5.0	1.0	99
96	224		石器	横形石匙	第 13-2b 層	7.5	5.2	0.8	99
96	225		石器	楔形石器	第 13-1a 面 1302 畦畔内	4.4	7.6	1.1	99
96	226		石器	剥片	第 13-2b 層	6.6	8.6	0.8	100
97	227		石器	楔形石器	第 13-2b 層	9.7	12.5	1.6	100
98	228	図 14 右下	石器	石包丁	第 13-1a 面 1325 流路	14.4	4.4	0.6	99
98	229	図 14 右下	石器	石包丁	第 11-3a 層	[11.7]	5.5	0.9	50
98	230	図 14 右下	石器	石包丁	第 13-1a 層	14.0	5.4	1.1	99
98	231	図 14 右下	石器	石包丁	第 13-2b 層	13.4	5.8	1.3	99

【金属器類】

挿図番号	遺物番号	材質	器種	出土層序	長・直径(cm)	最大幅・径(cm)	最大厚(cm)	残存率(%)
14	13	銅製品	煙管	第 2-1a 層	6.0	1.0	—	95
27	25	鉄製品	釘	第 4-1a 層	[6.1]	—	0.6	98
27	26	銅製品	銭貨	第 4-1a 層	—	2.5	0.15	100
29	35	鉄製品	鎌	第 5-1a 面 5001 坪境 畦畔直上	17.0	3.4	0.35	99
38	45	鉄製品	釘	第 6-1a 層	12.3	—	0.6	98
42	60	鉄製品	環状製品	第 6-3a 層	6.9	0.8	0.35	99
55	84	鉄製品	短刀	第 7-3b 面 7132 ピット	30.3	2.7	0.6	98
56	95	鉄製品	刀子	第 7-3b 層	17.6	1.8	0.4	97
56	96	銅製品	双環状製品	第 7-3b 層	10.6	2.7	0.45	98
56	97	銅製品	鈴	第 7-3b 層	3.3	2.9	—	100
59	107	銅製品	銭貨	第 8-2a 面	—	2.65	0.2	100
—	—	鉄製品	釘	第 6-2a 面	[4.2]	—	0.9	60

【木製品・漆器類】

挿図番号	遺物番号	材質	器種	出土層序	長さ(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	残存率(%)
10	5	木製品	井戸枠	第 2-1a 面 2057 井戸 3 段目 14	88.2	10.0	2.8	—
10	6	木製品	井戸枠	第 2-1a 面 2057 井戸 3 段目 5	87.4	14.6	2.9	—
10	7	木製品	井戸枠	第 2-1a 面 2057 井戸 2 段目 11	88.3	7.5	2.9	—
10	8	木製品	井戸枠	第 2-1a 面 2057 井戸 1 段目 6	114.7	15.1	2.9	—
10	9	木製品	井戸枠	第 2-1a 面 2057 井戸 1 段目 1	114.3	18.8	2.8	—
27	27	漆器	椀	第 4-1a 層	(6.2)	[3.6]	—	30
45	73	木製品	毬	第 7-1a 層	4.4	3.8	—	100
55	85	木製品	鞘	第 7-3b 面 7132 ピット	(24.9)	3.2	0.4	U-5
66	121	木製品	杭	第 9-2a 面	(51.8)	3.2	—	—
66	122	木製品	杭	第 9-2a 面	(91.2)	4.7	—	—
66	123	木製品	杭	第 9-3a 面	(104.3)	7.3	—	—
66	124	木製品	杭	第 9-2a 面	(107.7)	6.2	—	—
66	125	木製品	杭	第 9-2a 面	(122.3)	4.7	—	—
66	126	木製品	杭	第 9-4a 面	(146.5)	6.5	—	—
79	188	木製品	「コ」字型部材	第 9-4a 層	38.4	9.3	8.1	—
85	205	木製品	板材	第 11-2a 面 1101 溝	159.7	18.2	3.7	—

特 徴	備 考	時 期	地 区
使用によると思われる擦痕あり。下部欠損。	滑石製	古墳後～古代	6A-10i
3面を全体が凹状に湾曲するまで使用。	砂岩 仕上げ砥	古代か	7A-2f
全体的に調整は粗い。側面の一部に自然面を残す。 左縁部から下方縁部にかけての、主にA面側に見える比較の細かい連続した調整剥離にて刃部を作る。	サヌカイト	弥生前期新	6B-9a・10a
A面に粗い調整剥離を施した後、両面から縁辺部のほぼ全域に、連続した細かい調整剥離を施し刃部を作るが、特に下方縁部の調整が細かい。B面は一枚の主要剥離面からなる。	サヌカイト	弥生前期新	6B-9a・10a
相対する上下の縁辺部に、潰れ状の剥離痕がある。 横長の方形を呈する。両面とも粗く打ちかかっている。 上方の側面には自然面を残す。	サヌカイト	弥生前期新	7A-2h
二次加工のある横長の剥片。側面の一部に自然面を残す。 B面は一枚の主要剥離面からなる。	サヌカイト	弥生前期新	6B-9a・10a
相対する上下の縁辺部に、潰れ状の剥離痕がある。 横長の方形を呈する。両面とも粗く打ちかかっている。	サヌカイト	弥生前期新	7A-2g
直線刃半月形、片刃、2孔、紐擦れあり。	緑泥片岩	弥生前期新	7B-4a
直線刃半月形、両刃、2孔、研磨痕顕著。	緑泥片岩	弥生前期新	7B-3a
未成品。器面全体を粗く打ち掻き、成形している。 半月形で湾曲部に刃部を付けようとしたか。	緑泥片岩	弥生前期新	6B-9a・10a
未成品。器面全体を粗く打ち掻き、成形している。 杏仁形に成形しようとしたか。	緑泥片岩	弥生前期新	6B-9a・10a

特 徴	備 考	時 期	地 区
吸口部のみ。肩部の無い型。		18C以降	B区
断面方形。上下部共に欠損。		中世	7A-3j
「咸平元寶」(初鑄 998年、北宋銭)		古代	7A-4h
鎌部のみ。		中世	6A-9h
断面方形。上部折れ曲がる。		中世	7B-3a
轡の部品か。		古代か	6A-8j
刀部のみ。		古代～中世	7A-3j
刀部のみ。		古代か	7A-3j
両側に輪状の円孔あり。轡の部品か。		古代	7B-2a
内部に玉あり。		古代か	7A-2j
「萬年通寶」(初鑄 760年、皇朝十二銭)		古代	7A-2i
断面直方形。上部一部欠損。		中世か	7A-1j

特 徴	備 考	時 期	地 区
柁目取。下方斜めにカット。	スギ	近世後期	7A-1g
柁目取。下方斜めにカット。	スギ	近世後期	7A-1g
柁目取。下方斜めにカット。	スギ	近世後期	7A-1g
柁目取。上部に墨書あり。記号と「久」か。	スギ	近世後期	7A-1g
柁目取。墨書あり。記号か。	スギ	近世後期	7A-1g
外面黒漆塗布、内面赤漆(7.5R4/6赤)塗布。	—	中世	6A-9j
毬杖の球。上・下端部細かく削り調整。 側面部細かく面取り状に調整。完形。	モミ	中世	7A-3i
84短刀鞘。	ヒノキ	古代	7A-3j
上部欠損。	スギ	古代	6A-9j
上部欠損。	スギ	古代	6A-9j
上部欠損。	スギ	古代	6A-9i
上部欠損。	スギ	古代	6B-9a
上部欠損。	スギ	古代	6A-9j
上部欠損。	スギ	古代	7A-1f
	スギ	古代か	6A-9j・10j
	アカガシ亜属	弥生後か	6A-9g

各面・層主要遺物出土数量表

各面・層に対する主要遺物の出土破(細)片点数

遺構・面・層名	弥生土器				古式土師器				土師器										須恵器							
	甕・壺	鉢	蓋	不明	壺・甕	小丸壺	裝飾壺	不明	杯・皿・椀	鉢	播鉢	蓋	高杯	壺・甕	鍋	羽釜	甗	甗	ミニチュア高杯	甕	不明	杯・蓋	鉢	高杯	壺・甕	
第2-1a層									1																	
第2-1b層																										
第2-2a層									2													4				1
第2-3a層									1													11				
第2-4a層																										
第3-1a面・層									1													1				
第3-1b層									17		1						1					7				1
第3-2a面・層									30					1		5						13	1			1
第4-1a面・層									58		1			4		2						26	1			3
第5-1a面・層						1			3		64			1		6						35	4			3
第5-2a面・層											10											6				
第6-1a面・層											120				2		4		1			79	4			1
第6-1b面																										
第6-2a面・層									105							5						71	1			1
第6-3a面・層				1					118					2		14						45				1
第7-1a面・層				1					155							2						94	4			3
第7-3a面・層				1					75				1	6								110	8	2		8
第7-3b面・層									49	1			4	15		9	2	1				349	29			72
第8-1a面・層						3			1							1						30				2
第8-2a面・層									69	2			3 ※4)	17		3	15					270	30			42
第9-1a面・層				1					56				5 ※5)	20		19	10		1		267	19		1	26	
第9-2a面・層	1					1		4	37				3	38		18	1	2	2		50	8		1	10	
9039溝、9051・9052流路								1	175	1		1	15 ※6)	335		71	3		3	8	295	34	1	4	30	
第9-3a面・層									11				2	23		3					15	2			3	
第9-4a面・層				1		1	2		14				17	289	1	2					51	90		1	17	
9107流路				1					85	1			28	188		37	2		4		199	20		2	31	
第10a面・層	6			1	2	24			3				34	260		5					73	42			15	
第10b面・層				1		23	1		1				11	159		1					6	7			1	
第11-2a面・層	21	1		1																						
第11-3a層				1																						
第11-3b層	1																									
第12-1a層	1																									
第12-3a層	38																									
第13-1a面・層	239	1	3	15																						
第13-1b面・層	32	1	1	15																						

遺構・面・層名	点数表以外の出土遺物	備考	遺構・面・層名	点数表以外の出土遺物	備考
第1層	159点の遺物出土		第8-2a面	土製品1 鉄滓1 銭貨1	
第2-1a層	近世陶磁器3 煙管吸口1		第8-2a層		※4) 人面墨書土器2を含む
第2-3a層	木製品1	※1) 中世の瓦一部含む	第9-1a層	緑釉陶器1 須恵器の瓦質化した把手1	※5) 人面墨書土器2を含む
第3-1b層	部材1	※2) 近世の瓦一部含む	9039溝、9051・9052流路	石器2	※6) 把手付甕
第3-2a層	木製品1		9107流路	製塩土器1 通有の須恵器とは異質な袋状壺1 砥石1	
第4-1a層	木製部材1 鉄釘1 北宋銭1 漆器椀1 サヌカイト片1 製塩土器1		第9-4a層	「コ」字型木製品1	
第6-1a層	サヌカイト細片1 砥石1 鉄釘1		第11-3a層	石包丁1	
第6-2a面	鉄釘1		第13-1a面	縄文深鉢1 サヌカイト細片4 石包丁1	
第6-2a層	サヌカイト細片1 木製品2		第13-1b面	縄文不明1	
第6-3a層	青白磁合子蓋1 環状鉄製品1 滑石紡錘車1	※3) 中世の瓦一部含む	第13-1b層	縄文深鉢1 サヌカイト細片2	
第7-1a面	土製円盤製品1		第13-2b層	石包丁(未成品)2 楔形石器1 石匙2 剥片1	
第7-3a層	鉄製刀子1 サヌカイト細片1 焼成粘土塊1				
第7-3b層	刀子1 銅製鈴1 双環状鉄製品1				





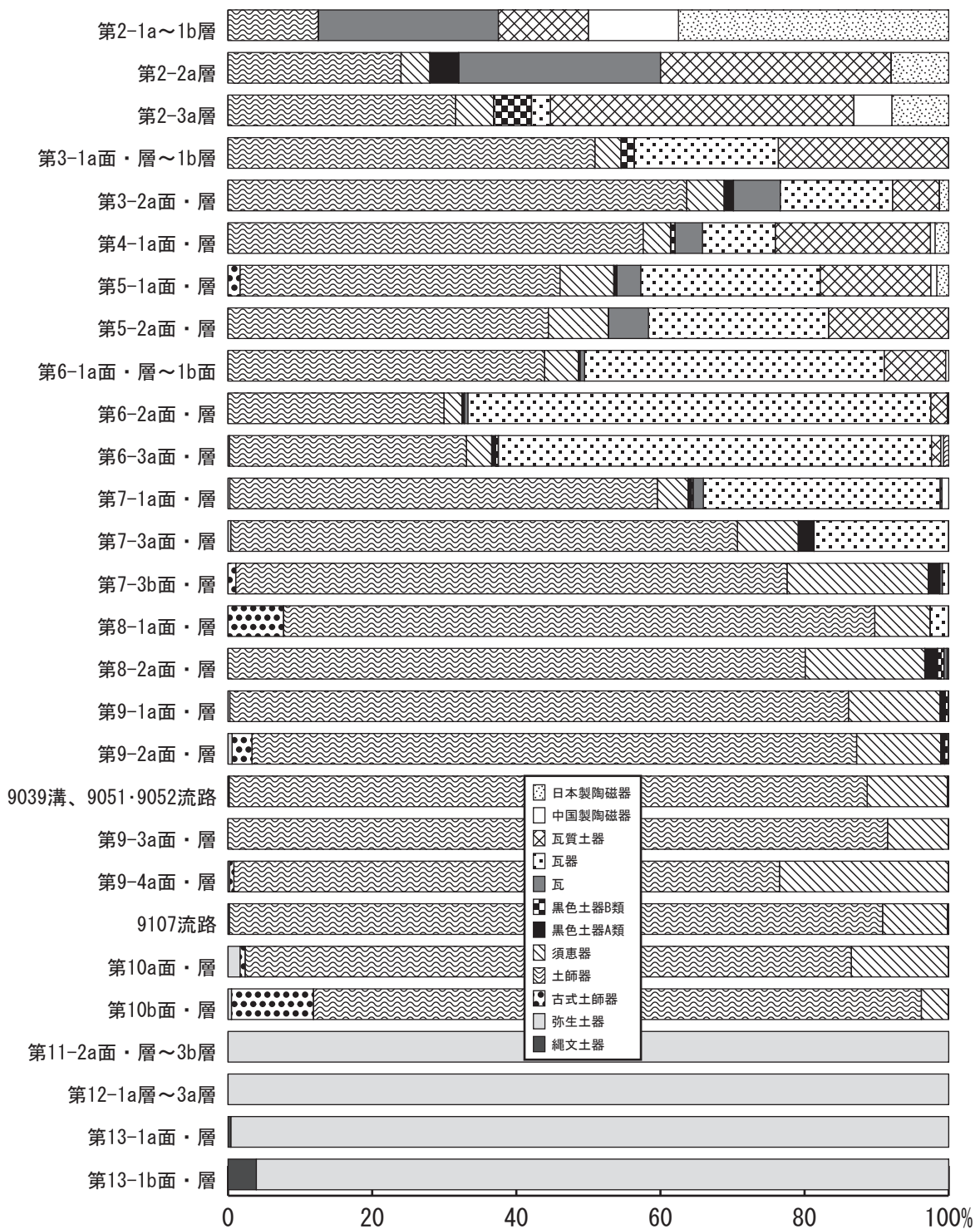


図102 各面・層出土主要土器割合グラフ

## 遺構番号新旧対照表

面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)	面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)	面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)
第1面・ 第2-1a面	2001土坑	8土坑	第3-1b面	3014水口	51水口	第6-1a面	×	118島島
	2002土坑	9土坑		3015水口	50水口		×	117島島
	2003土坑	10土坑		3016溝	54溝		×	128島島
	2004土坑	11土坑		3017土坑	52土坑		×	120島島
	2005土坑	12土坑		3018土坑	53土坑		×	119島島
	2006土坑	13土坑		3019土坑	56土坑	6009島島		
	2007土坑	14土坑		3020水口	55水口	6010島島		
	2008土坑	15土坑		3021土坑	57土坑	6011島島		
	2009土坑	16土坑		3022畦畔	86畦畔	6012島島		
	2010土坑	17土坑		3023畦畔	87畦畔	6013島島		
	2011土坑	18土坑		3024畦畔	82畦畔	6014島島		
	2012土坑	19土坑		3025畦畔	81畦畔	6015島島		
	2013土坑	20土坑		3026畦畔	80畦畔	6016島島		
	2014土坑	21土坑		3027畦畔	79畦畔	6017島島		
	2015土坑	22土坑		3028坪境畦畔	58坪境畦畔	6018島島		
	2016土坑	23土坑	3029溝	59溝	6019島島			
	2017土坑	24土坑	3030溝		6020島島			
	2018土坑	25土坑	3031畦畔	77畦畔	6021	欠番		
	2019土坑	26土坑	3032畦畔	62畦畔	6022坪境畦畔	130坪境畦畔		
	2020土坑	27土坑	3033畦畔	84畦畔	6023高まり			
	2021土坑	28土坑	3034畦畔	75畦畔	6024畠状遺構			
	2022土坑	29土坑	3035畦畔	74畦畔	6025畠状遺構			
	2023土坑	30土坑	3036畦畔	71畦畔	6026畠状遺構			
	2024土坑		3037畦畔	70畦畔	6027畠状遺構			
	2025溝		3038畦畔	69畦畔	6028畠状遺構			
	2026島島		3039畦畔	78畦畔	6029島島	131島島		
	2027島島		3040畦畔		×	132島島		
	2028土坑	34土坑	3041畦畔	76畦畔	×	137島島		
	2029溝		3042島島	63島島	6030土坑	139土坑		
	2030島島		3043溝状	72溝状	6031土坑	138土坑		
	2031島島		3044土坑		6032畝間の溝			
	2032溝		3045水口	85水口	6033畝間の溝			
	2033島島		4001擬似畦畔	105畦畔	6034畝間の溝			
	2034島島		4002擬似畦畔	102畦畔	6035畝間の溝			
	2035島島		4003擬似畦畔	101畦畔	6036	欠番		
	2036島島		4004擬似畦畔	100畦畔	6037土坑			
	2037坪境畦畔	31坪境畦畔	4005擬似畦畔	99畦畔	6038土坑			
	2038溝		4006坪境畦畔	67坪境畦畔	×	129島島		
	2039島島		4007溝	68溝	×	134島島		
	2040溝		4008擬似畦畔	106畦畔	×	133島島		
	2041島島		4009擬似畦畔	105畦畔	×	136畦畔		
	2042溝		4010水口	104水口	×	140島島状遺構		
	2043溝		4011擬似畦畔	103畦畔	6039土坑	141土坑		
	2044島島		4012高まり	98高まり	6040高まり	148畦畔		
	2045溝		4013水口	97水口	6041土坑			
	2046土坑		4014土坑	96土坑	6042溝			
	2047溝		4015擬似畦畔	87畦畔	6043島島	143島島		
	2048溝		4016擬似畦畔	88畦畔	6044島島	145島島状高まり		
	2049土坑		4017島島	65島島	6045坪境畦畔	142坪境畦畔		
2050土坑		4018擬似畦畔	89畦畔	6046土坑				
2051土坑	32土坑	4019畦畔	90畦畔	6047島島	144島島			
2052土坑	38土坑	4020擬似畦畔	64畦畔	6048水口				
2053土坑		4021坪境畦畔	107坪境畦畔	6049高まり				
2054土坑		4022溝	108溝	×	147土坑			
2055溝		4023水口	109水口	7001土坑	156土坑			
2056溝		5001坪境畦畔	110坪境畦畔	7002溝	158溝			
2057井戸	146井戸	5002島島	66島島	7003土坑	157土坑			
2058溝	1溝	5003畦畔	111畦畔	7004耕作痕	160耕作痕			
2059溝	2溝	×	112島島	7005耕作痕	161耕作痕			
2060溝	3溝	5004高まり		7006耕作痕	162耕作痕			
2061溝	4溝	5005坪境畦畔	114坪境畦畔	7007坪境畦畔	149坪境畦畔			
2062溝	5溝	×	115島島	7008土坑	150土坑			
2063溝	6溝	5006島島		7009土坑	165土坑			
2064溝	7溝	5007土坑		7010擬似島島				
第2-2a面	2052坪境畦畔	35坪境畦畔	5008溝		7011擬似島島	153擬似島島		
第2-3a面	2054坪境畦畔	36坪境畦畔	5009耕作溝群		7012土坑	164土坑		
	2055溝		6001島島	116島島	7013耕作痕	155耕作痕		
第3-1a面	3001畦畔	61畦畔	6002島島	123島島	7014擬似畦畔	152擬似畦畔		
	3002畦畔	60畦畔	6003坪境畦畔	125坪境畦畔	7015土坑	154土坑		
第3-1b面	3046島島		6004土坑	91土坑	7016耕作痕	159耕作痕		
	3003坪境畦畔	39坪境畦畔	6005土坑	92土坑	7017溝	158溝		
	3004溝	40溝	6006土坑	93土坑	7018畦畔	151畦畔		
	3005土坑	41土坑	6007溝	94溝	7019畦畔	163畦畔		
	3006ビット	42ビット	6008土坑		7020土坑			
	3007水口	43水口	×	124島島	7021土坑			
	3008溝	44溝	×	122島島	×	141土坑		
	3009水口	45水口	×	121島島	7021土坑	175土坑		
	3010溝	46溝	×	126島島	×	170土坑		
	3011水口	47水口						
	3012土坑	48土坑						
	3013土坑	49土坑						

面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)
第7-3a面	7023 耕作溝	
	7024 耕作溝	
	7025 土坑	169 土坑
	7026 落込み	179 落込み
	7027 土坑	172 土坑
	7028 土坑	167 土坑
	7029 溝状落込み	174 溝状落込み
	7030 土坑	166 土坑
	7031 土坑	168 土坑
	7032 畦畔	173 畦畔
	7033 溝	176 溝
	7034 溝状落込み	171 溝状落込み
	7035 畦畔	177 畦畔
	7036 畦畔	178 畦畔
	7037 島島	
	7039 土坑	170 土坑
	7040 土坑	183 土坑
7041 土坑	185 土坑	
7042 耕作痕		
7043 馬鍬痕?		
7044 擬似島島		
7045 耕作溝		
7046 耕作痕		
7047 土坑	365 土坑	
7048 溝	370 溝	
7049 土坑	363 土坑	
7050 耕作溝		
7051 擬似畦畔		
7052 擬似畦畔		
7053 耕作痕		
7054 土坑	358 土坑	
7055 土坑		
7056 土坑	360 土坑	
7057 土坑	361 土坑	
7058 土坑	362 土坑	
7059 溝		
7060 土坑	371 土坑	
7061 溝	187-191 ビット	
7062 馬鍬痕		
7063 馬鍬痕		
7064 馬鍬痕		
7065 土坑	184 土坑	
7066 土坑	376 土坑	
7067 土坑	180 土坑	
7068 土坑	375 土坑	
7069 土坑	374 土坑	
7070 土坑	181 土坑	
7071 土坑		
7072 土坑	182 土坑	
7073 土坑		
7074 土坑		
7075 溝		
7076 ビット	369 ビット	
7077 ビット	368 ビット	
7078 ビット	364 ビット	
7079 ビット	366 ビット	
7080 ビット	367 ビット	
7081 ビット	349 ビット	
7082 ビット	350 ビット	
7083 ビット	351 ビット	
7084 ビット	352 ビット	
7085 ビット	353 ビット	
7086 ビット	354 ビット	
7087 ビット	356 ビット	
7088 ビット	357 ビット	
7089 ビット	328 ビット	
7090 ビット	329 ビット	
7091 ビット	330 ビット	
7092 ビット	331 ビット	
7093 ビット	332 ビット	
7094 ビット	333 ビット	
7095 ビット	334 ビット	
7096 ビット	335 ビット	
7097 ビット	336 ビット	
7098 ビット	327 ビット	
7099 ビット	326 ビット	
8001 畦畔	378 畦畔	
8002 溝		

面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)
第7-3b面	7100 ビット	325 ビット
	7101 ビット	324 ビット
	7102 ビット	323 ビット
	7103 ビット	319 ビット
	7104 ビット	322 ビット
	7105 ビット	321 ビット
	7106 ビット	320 ビット
	7107 ビット	317 ビット
	7108 ビット	316 ビット
	7109 ビット	315 ビット
	7110 ビット	311 ビット
	7111 ビット	312 ビット
	7112 ビット	313 ビット
	7113 ビット	314 ビット
	7114 ビット	309 ビット
	7115 ビット	310 ビット
	7116 ビット	303 ビット
	7117 ビット	304 ビット
	7118 ビット	305 ビット
	7119 ビット	306 ビット
	7120 ビット	307 ビット
	7121 ビット	308 ビット
	7122 ビット	
	7123 ビット	242 ビット
	7124 ビット	302 ビット
	7125 ビット	243 ビット
	7126 ビット	245 ビット
	7127 ビット	244 ビット
	7128 ビット	246 ビット
	7129 ビット	247 ビット
	7130 ビット	234 ビット
	7131 ビット	235 ビット
	7132 ビット	236 ビット
	7133 ビット	237 ビット
	7134 ビット	238 ビット
	7135 ビット	239 ビット
	7136 ビット	240 ビット
	7137 ビット	241 ビット
	7138 ビット	253 ビット
	7139 ビット	254 ビット
	7140 ビット	255 ビット
	7141 ビット	256 ビット
	7142 ビット	257 ビット
	7143 ビット	258 ビット
	7144 ビット	259 ビット
	7145 ビット	260 ビット
	7146 ビット	261 ビット
7147 ビット		
7148 ビット	262 ビット	
7149 ビット	248 ビット	
7150 ビット	249 ビット	
7151 ビット	250 ビット	
7152 ビット	251 ビット	
7153 ビット	252 ビット	
7154 ビット	264 ビット	
7155 ビット	269 ビット	
7156 ビット	265 ビット	
7157 ビット	270 ビット	
7158 ビット	285 ビット	
7159 ビット	283 ビット	
7160 ビット	271 ビット	
7161 ビット	284 ビット	
7162 ビット	272 ビット	
7163 ビット	286 ビット	
7164 ビット	287 ビット	
7165 ビット	266 ビット	
7166 ビット		
7167 ビット	267 ビット	
7168 ビット	268 ビット	
7169 ビット	273 ビット	
7170 ビット		
7171 ビット	288 ビット	
7172 ビット	274 ビット	
7173 ビット	289 ビット	
7174 ビット	275 ビット	
7175 ビット	276 ビット	
9061 ビット	501 ビット	
9062 ビット	500 ビット	

面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)
第7-3b面	7176 ビット	290 ビット
	7177 ビット	277 ビット
	7178 ビット	278 ビット
	7179 ビット	279 ビット
	7180 ビット	280 ビット
	7181 ビット	281 ビット
	7182 ビット	282 ビット
	7183 ビット	301 ビット
	7184 ビット	300 ビット
	7185 ビット	299 ビット
	7186 ビット	298 ビット
	7187 ビット	297 ビット
	7188 ビット	293 ビット
	7189 ビット	292 ビット
	7190 ビット	296 ビット
	7191 ビット	295 ビット
	7192 ビット	291 ビット
	7193 ビット	294 ビット
	7194 ビット	233 ビット
	7195 ビット	232 ビット
	7196 ビット	231 ビット
	7197 ビット	230 ビット
	7198 ビット	229 ビット
	7199 ビット	228 ビット
	7200 ビット	227 ビット
	7201 ビット	226 ビット
	7202 ビット	225 ビット
	7203 ビット	224 ビット
	7204 ビット	223 ビット
	7205 ビット	221 ビット
	7206 ビット	220 ビット
	7207 ビット	218 ビット
	7208 ビット	215 ビット
	7209 ビット	217 ビット
	7210 ビット	216 ビット
	7211 ビット	214 ビット
	7212 ビット	213 ビット
	7213 ビット	212 ビット
	7214 ビット	211 ビット
	7215 ビット	209 ビット
	7216 ビット	208 ビット
	7217 ビット	207 ビット
	7218 ビット	206 ビット
	7219 ビット	210 ビット
	7220 ビット	204 ビット
	7221 ビット	205 ビット
	7222 ビット	203 ビット
7223 土坑	186 土坑	
7224 土坑		
7225 ビット	187 ビット	
7226 ビット	192 ビット	
7227 土坑		
7228 ビット	193 ビット	
7229 ビット	194 ビット	
7230 ビット	197 ビット	
7231 ビット	198 ビット	
7232 ビット	195 ビット	
7233 ビット	196 ビット	
7234 ビット	199 ビット	
7235 ビット	200 ビット	
7236 ビット	201 ビット	
7237 ビット	202 ビット	
7238 ビット	337 ビット	
7239 ビット	338 ビット	
7240 ビット	339 ビット	
7241 ビット		
7242 ビット	340 ビット	
7243 ビット	341 ビット	
7244 ビット	342 ビット	
7245 ビット	348 ビット	
7246 ビット	343 ビット	
7247 ビット	345 ビット	
7248 ビット	346 ビット	
7249 ビット	347 ビット	
7250 土坑	355 土坑	
7251 ビット	318 ビット	
9139 ビット		
9140 ビット		

面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)	
第8-1a面	8019 坪境畦畔	377 坪境畦畔	
	8003 畦畔	383 畦畔	
	8004 畦畔	386 畦畔	
	8005 畦畔	387 畦畔	
	8006 畦畔	388 畦畔	
	8007 畦畔	390 畦畔	
	8008 畦畔	391・392・393 畦畔	
	8009 畦畔	384 畦畔	
	第8-2a面	8010 畦畔	381・385 畦畔
		8011 畦畔	389 畦畔
8012 畦畔		382 畦畔	
8013 土坑		395 土坑	
8014 土坑		396 土坑	
8015 土坑		397 土坑	
8016 畦畔		380 畦畔	
8017 溝		394 溝	
8018 坪境畦畔		379 坪境畦畔	
第9-1a面		9001 ビット	407 ビット
	9002 ビット		
	9003 ビット	401 ビット	
	9004 ビット	402 ビット	
	9005 ビット	403 ビット	
	9006 ビット	404 ビット	
	9007 ビット	405 ビット	
	9008 ビット	406 ビット	
	9009 ビット	420 ビット	
	9010 ビット	517 ビット	
	9011 ビット	421 ビット	
	9012 ビット	419 ビット	
	9013 ビット	422 ビット	
	9014 ビット	423 ビット	
	9015 土坑	400 土坑	
	9016 土坑	399 土坑	
	9017 土坑	398 土坑	
	9018 畦畔		
	9019 畦畔		
	9020・9021	欠番	
9022 坪境畦畔	409 坪境畦畔		
9023 流路	410 流路		
9024 畦畔	411 畦畔		
9025	欠番		
9026 溝			
第9-2a面	9027 ビット	437 ビット	
	9028 溝	431 溝	
	9029 溝	433 溝	
	9030 溝	432 溝	
	9031 ビット	435 ビット	
	9032 ビット	436 ビット	
	9033 ビット	439 ビット	
	9034 ビット	418 ビット	
	9035 ビット	417 ビット	
	9036 ビット	416 ビット	
	9037 ビット	415 ビット	
	9038 ビット	414 ビット	
	9039 溝	426 流路	
	9040 ビット	431 ビット	
	9041 ビット	430 ビット	
	9042 ビット	507 ビット	
	9043 土坑		
	9044 ビット	429 ビット	
	9045 ビット	413 ビット	
	9046 ビット	412 ビット	
9047 ビット	425 ビット		
9048 ビット	424 ビット		
9049 ビット	464 ビット		
9050 ビット	453 ビット		
9051 流路	427 流路		
9052 流路	428 流路		
9053 ビット	448 ビット		
9054 ビット	430 ビット		
9055 ビット	440 ビット		
9056 ビット	438 ビット		
9057 ビット	508 ビット		
第9-3a面	9058 堤		
	9059 ビット	504 ビット	
	9060 ビット	502 ビット	
第11-2a面	1142 畦畔	611 畦畔	
	1143 畦畔	612 畦畔	

面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)
第9-3a面	9063 ビット	499 ビット
	9064 ビット	496 ビット
	9065 ビット	497 ビット
	9066 ビット	498 ビット
	9067 ビット	503 ビット
	9068 土坑	397 土坑
	9069 ビット	505 ビット
	9070 土坑	
	9071 ビット	489 ビット
	9072 ビット	491 ビット
	9073 ビット	490 ビット
	9074 ビット	488 ビット
	9075 ビット	492 ビット
	9076 ビット	493 ビット
	9077 ビット	494 ビット
	9078 ビット	495 ビット
	9079 ビット	486 ビット
	9080 ビット	487 ビット
	9081 ビット	484 ビット
	9082 ビット	480 ビット
9083 ビット	481 ビット	
9084 ビット	485 ビット	
9085 ビット	483 ビット	
9086 ビット	482 ビット	
9087 ビット	429 ビット	
9088 ビット	473 ビット	
9089 ビット	474 ビット	
9090 ビット	424 ビット	
9091 ビット	425 ビット	
9092 ビット	475 ビット	
9093 ビット	479 ビット	
9094 ビット	476 ビット	
9095 ビット	478 ビット	
9096 ビット	511 ビット	
9097 ビット	515 ビット	
9098 ビット	514 ビット	
9099 ビット	524 ビット	
9100 ビット	525 ビット	
9101 ビット	526 ビット	
9102 ビット		
9103 ビット		
9104 ビット	506 ビット	
9105 ビット	519 ビット	
9106 ビット		
9107 流路	442 流路	
9108 ビット	446 ビット	
9109 ビット	447 ビット	
9110 土坑	449 土坑	
9111 ビット	450 ビット	
9112 ビット	451 ビット	
9113 ビット	472 ビット	
9114 土坑	452 土坑	
9115 ビット	470 ビット	
9116 ビット	466 ビット	
9117 ビット	469 ビット	
9118 ビット	468 ビット	
9119 ビット	467 ビット	
9120 ビット	463 ビット	
9121 ビット	465 ビット	
9122 ビット	520 ビット	
9123 ビット	462 ビット	
9124 ビット	471 ビット	
9125 ビット	454 ビット	
9126 ビット	458 ビット	
9127 ビット	459 ビット	
9128 ビット	461 ビット	
9129 ビット	460 ビット	
9130 ビット	457 ビット	
9131 ビット	456 ビット	
9132 ビット	445 ビット	
9133 ビット	443 ビット	
9134 ビット	512 ビット	
9135 ビット	511 ビット	
9136 ビット	510 ビット	
9137 溝	509 溝	
9138 土坑	554 土坑	
第11-2a面	1170 畦畔	639 畦畔
	1171 畦畔	640 畦畔

面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)
第10a面	1001 ビット	518 ビット
	1002 ビット	521 ビット
	1003 堤	528 堤
	1004 ビット	534 ビット
	1005 ビット	535 ビット
	1006 ビット	536 ビット
	1007 ビット	547 ビット
	1008	欠番
	1009	欠番
	1010 ビット	545 ビット
	1011 ビット	546 ビット
	1012 ビット	529 ビット
	1013 ビット	530 ビット
	1014 ビット	555 ビット
	1015 ビット	556 ビット
	1016 ビット	557 ビット
	1017 ビット	558 ビット
	1018 ビット	559 ビット
	1019 ビット	560 ビット
	1020 ビット	561 ビット
	1021 ビット	562 ビット
	1022 ビット	563 ビット
	1023 ビット	564 ビット
	1024 ビット	565 ビット
	1025 ビット	567 ビット
	1026 ビット	568 ビット
	1027 ビット	569 ビット
	1028 ビット	570 ビット
	1029 ビット	571 ビット
	1030 ビット	572 ビット
	1031 ビット	573 ビット
	1032 ビット	574 ビット
	1033 ビット	575 ビット
	1034 ビット	
1035 ビット	533 ビット	
第11-2a面	1101 溝	537 溝
	1102 溝	538 溝
	1103 溝	539 溝
	1104 ビット	540 ビット
	1105 水口	541 水口
	1106 溝	542 溝
	1107 畦畔	576 畦畔
	1108 畦畔	577 畦畔
	1109 畦畔	578 畦畔
	1110 畦畔	579 畦畔
	1111 畦畔	580 畦畔
	1112 畦畔	581 畦畔
	1113 畦畔	582 畦畔
	1114 畦畔	583 畦畔
	1115 畦畔	584 畦畔
	1116 畦畔	585 畦畔
	1117 畦畔	586 畦畔
	1118 畦畔	587 畦畔
	1119 畦畔	588 畦畔
	1120 畦畔	589 畦畔
1121 畦畔	590 畦畔	
1122 畦畔	591 畦畔	
1123 畦畔	592 畦畔	
1124 畦畔	593 畦畔	
1125 畦畔	594 畦半	
1126 畦畔	595 畦畔	
1127 畦畔	596 畦畔	
1128 畦畔	597 畦畔	
1129 畦畔	598 畦畔	
1130 畦畔	599 畦畔	
1131 畦畔	600 畦畔	
1132 畦畔	601 畦畔	
1133 畦畔	602 畦畔	
1134 畦畔	603 畦畔	
1135 畦畔	604 畦畔	
1136 畦畔	605 畦畔	
1137 畦畔	606 畦畔	
1138 畦畔	607 畦畔	
1139 畦畔	608 畦畔	
1140 畦畔	609 畦畔	
1141 畦畔	610 畦畔	
第11-3a面	1197 溝	
	1198 溝	
第11-3b面		

面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)
第 11 - 2a 面	1144 畦畔	613 畦畔
	1145 畦畔	614 畦畔
	1146 畦畔	615 畦畔
	1147 畦畔	616 畦畔
	1148 畦畔	617 畦畔
	1149 畦畔	618 畦畔
	1150 畦畔	619 畦畔
	1151 畦畔	620 畦畔
	1152 畦畔	621 畦畔
	1153 畦畔	622 畦畔
	1154 畦畔	623 畦畔
	1155 畦畔	624 畦畔
	1156 畦畔	625 畦畔
	1157 畦畔	626 畦畔
	1158 畦畔	627 畦畔
	1159 畦畔	628 畦畔
	1160 畦畔	629 畦畔
	1161 畦畔	630 畦畔
	1162 畦畔	631 畦畔
	1163 畦畔	632 畦畔
	1164 畦畔	633 畦畔
	1165 畦畔	634 畦畔
	1166 畦畔	635 畦畔
	1167 畦畔	636 畦畔
1168 畦畔	637 畦畔	
1169 畦畔	638 畦畔	

面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)
第 11 - 2a 面	1172 畦畔	641 畦畔
	1173 畦畔	642 畦畔
	1174 畦畔	643 畦畔
	1175 畦畔	644 畦畔
	1176 畦畔	645 畦畔
	1177 畦畔	646 畦畔
	1178 畦畔	647 畦畔
	1179 畦畔	648 畦畔
	1180 畦畔	649 畦畔
	1181 畦畔	650 畦畔
	1182 畦畔	651 畦畔
	1183 畦畔	652 畦畔
	1184 畦畔	653 畦畔
	1185 畦畔	654 畦畔
	1186 畦畔	655 畦畔
	1187 畦畔	656 畦畔
	1188 畦畔	657 畦畔
	1189 畦畔	658 畦畔
	1190 畦畔	659 畦畔
	1191 畦畔	660 畦畔
	1192 畦畔	661 畦畔
	1193 畦畔	662 畦畔
	1194 畦畔	663 畦畔
	1195 畦畔	664 畦畔
1196 畦畔	665 畦畔	

面	遺構番号(新)	遺構番号(旧)
第 13 面	1301 大畦畔	666 大畦畔
	1302 大畦畔	667 大畦畔
	1303 大畦畔	668 大畦畔
	1304 大畦畔	669 大畦畔
	1305 畦畔	670 畦畔
	1306 畦畔	671 畦畔
	1307 畦畔	672 畦畔
	1308 畦畔	673 畦畔
	1309 畦畔	674 畦畔
	1310 畦畔	675 畦畔
	1311 畦畔	676 畦畔
	1312 畦畔	677 畦畔
	1313 畦畔	678 畦畔
	1314 畦畔	679 畦畔
	1315 畦畔	680 畦畔
	1316 畦畔	681 畦畔
	1317 畦畔	682 畦畔
	1318 畦畔	683 畦畔
	1319 畦畔	684 畦畔
	1320 畦畔	685 畦畔
	1321 畦畔	686 畦畔
	1322 畦畔	687 畦畔
	1323 畦畔	688 畦畔
	1324 畦畔	689 畦畔
1325 流路	690 流路	

# 写真図版



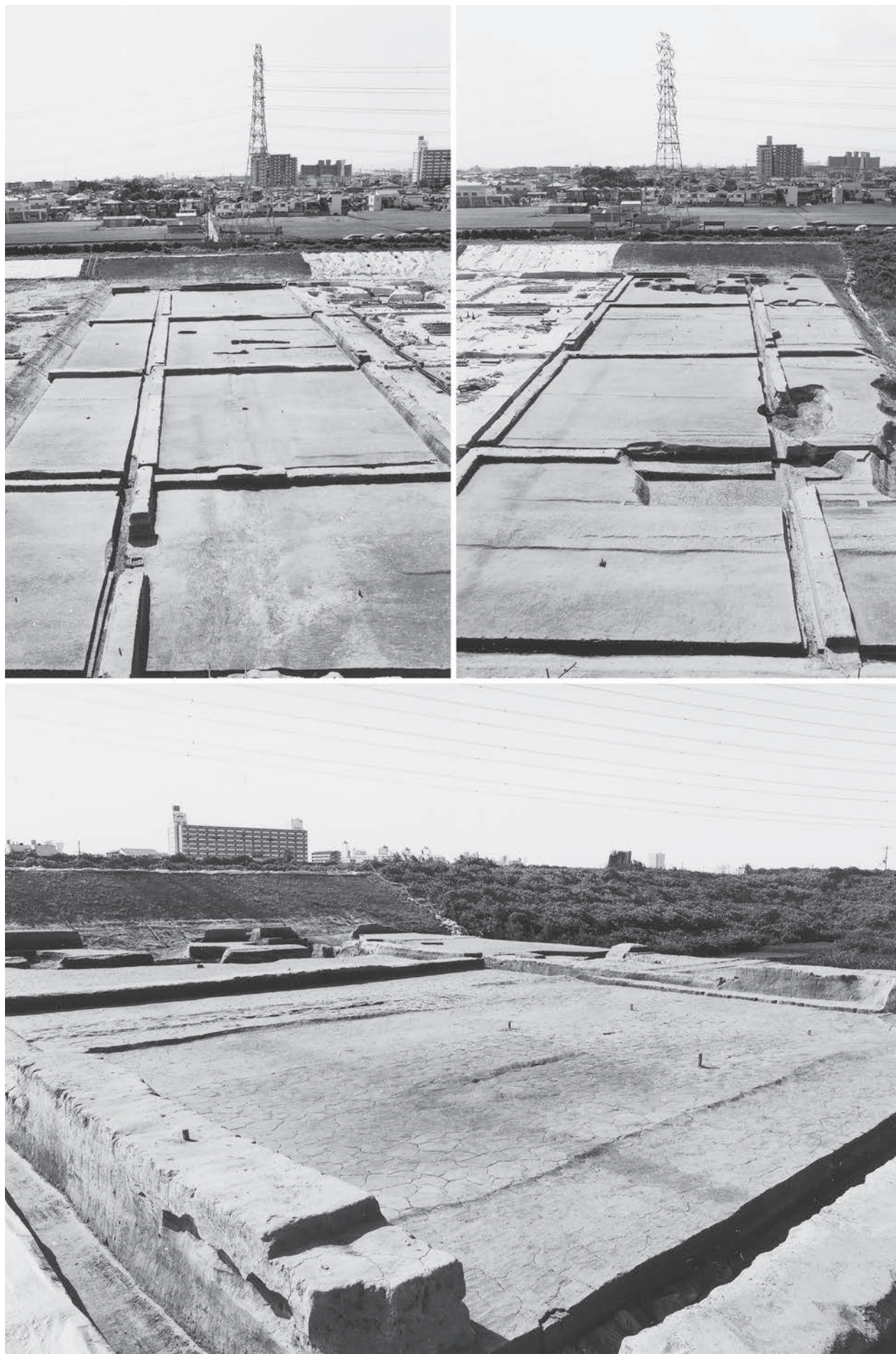


図版1 調査区全景1



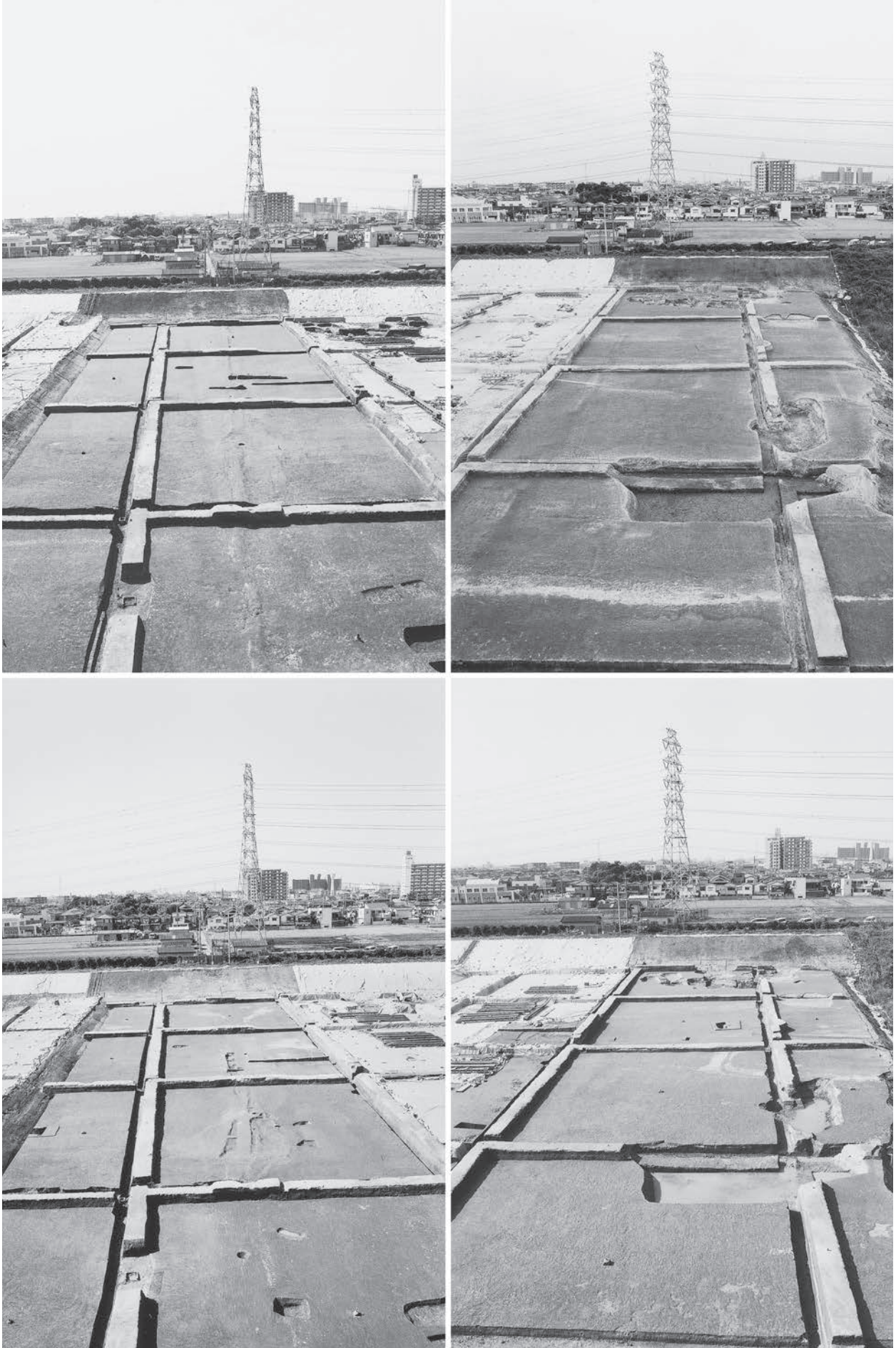
上段左：第2-1a面（B区 東から） 上段右：2-1a面（A区 東から）  
下段左：第3-2a面（B区 東から） 下段右：3-2a面（A区 東から）

## 図版2 調査区全景2



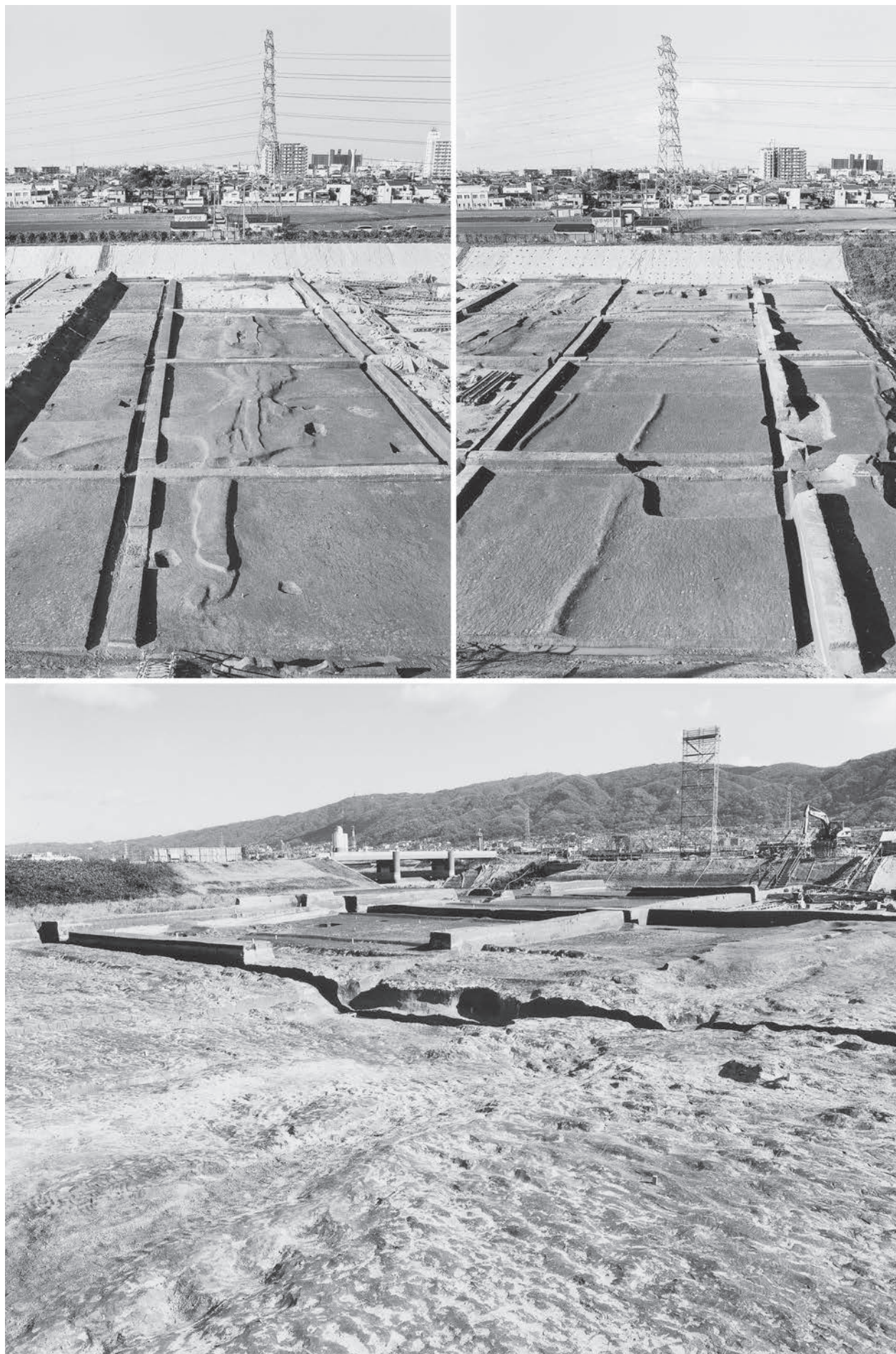
上段左：第6-2a面（B区 東から） 上段右：第6-2a面（A区 東から）  
下段：第6-2a面（A区 南東から）

図版3 調査区全景3



上段左：第7-1a面（B区 東から） 上段右：第7-1a面（A区 東から）  
下段左：第7-3a面（B区 東から） 下段右：第7-3a面（A区 東から）

## 図版4 調査区全景4



上段左：第8-2a面（B区 東から） 上段右：第8-2a面（A区 東から）  
下段：第8-2a面（B区南西から）

図版 5 調査区全景 5



上段：第9-2a面9039構（B区 北西から）

下段：第9-2a面9051・9052流路（B区 北西から）

図版6 調査区全景6

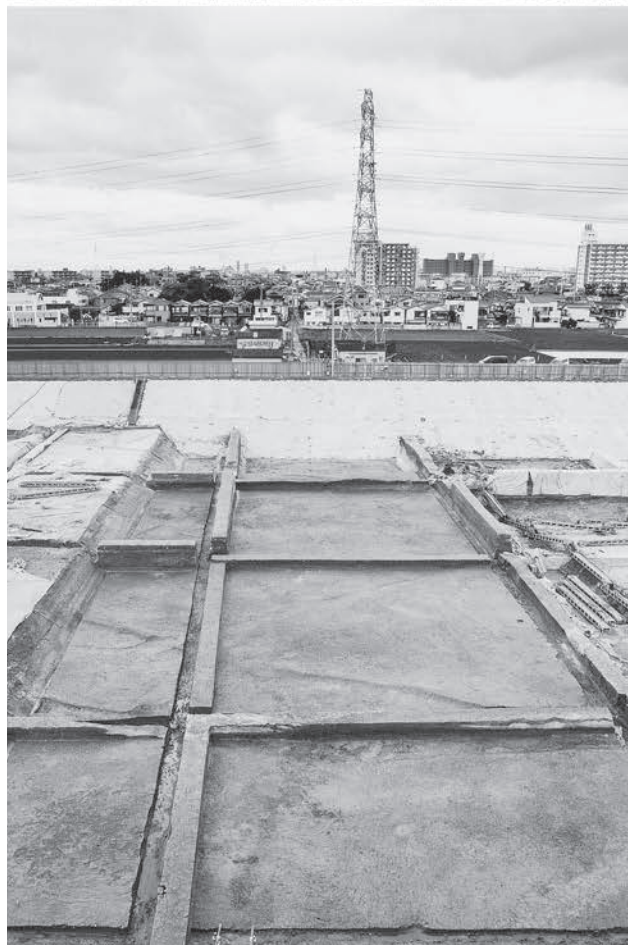


第11-2a面 (B区 東から)



第11-2a面 (A区 東から)

# 図版 8 調査区全景 8



上段左：第12-1a面 (B区 東から) 上段右：第12-1a面 (A区 東から)  
下段左：第13-1a面 (B区 東から) 下段右：第13-1a面 (A区 東から)





各9面・層出土の土師器羽釜・杯・皿／須恵器杯身・杯蓋

左上列奥から162、153、154、133、157、137、152、156、186、170、155、183、178、134、185



各9面・層出土の土師器ミニチュア土器甕 左上列から142、139、138、143、141、160、117



各9面・層出土の土師器ミニチュア土器高杯 左から174、130、144、175

# 図版 10 古代



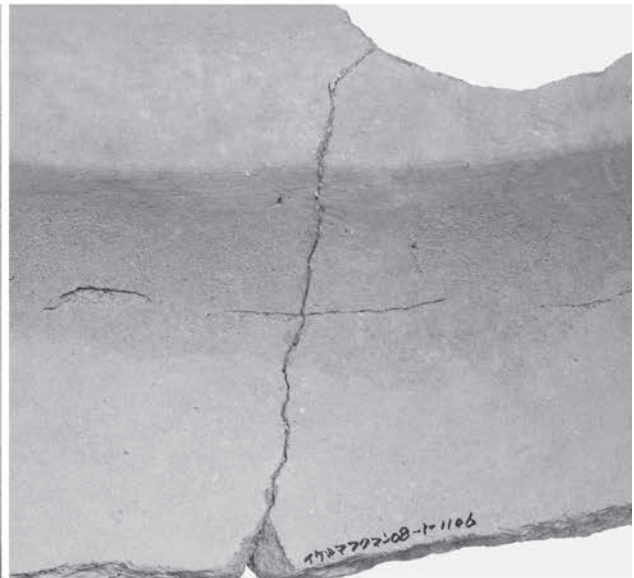
土師器ミニチュア土器甕の粘土接合痕 143



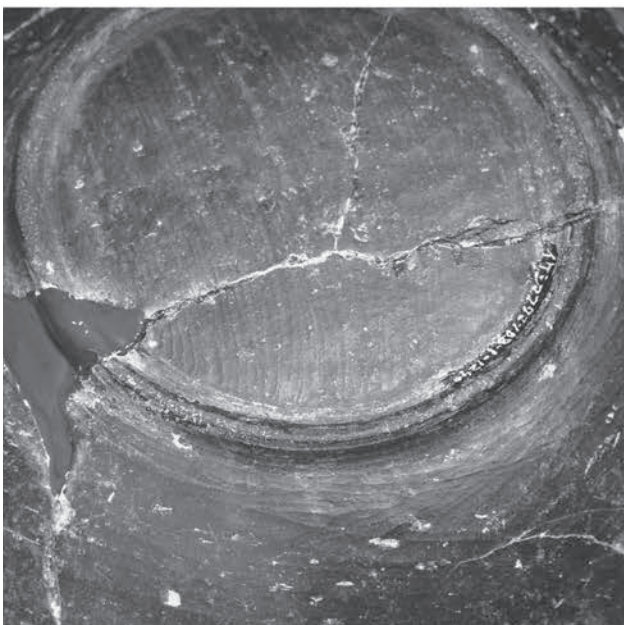
土師器ミニチュア土器甕底部の穿孔箇所 117



土師器杯の木葉痕 133



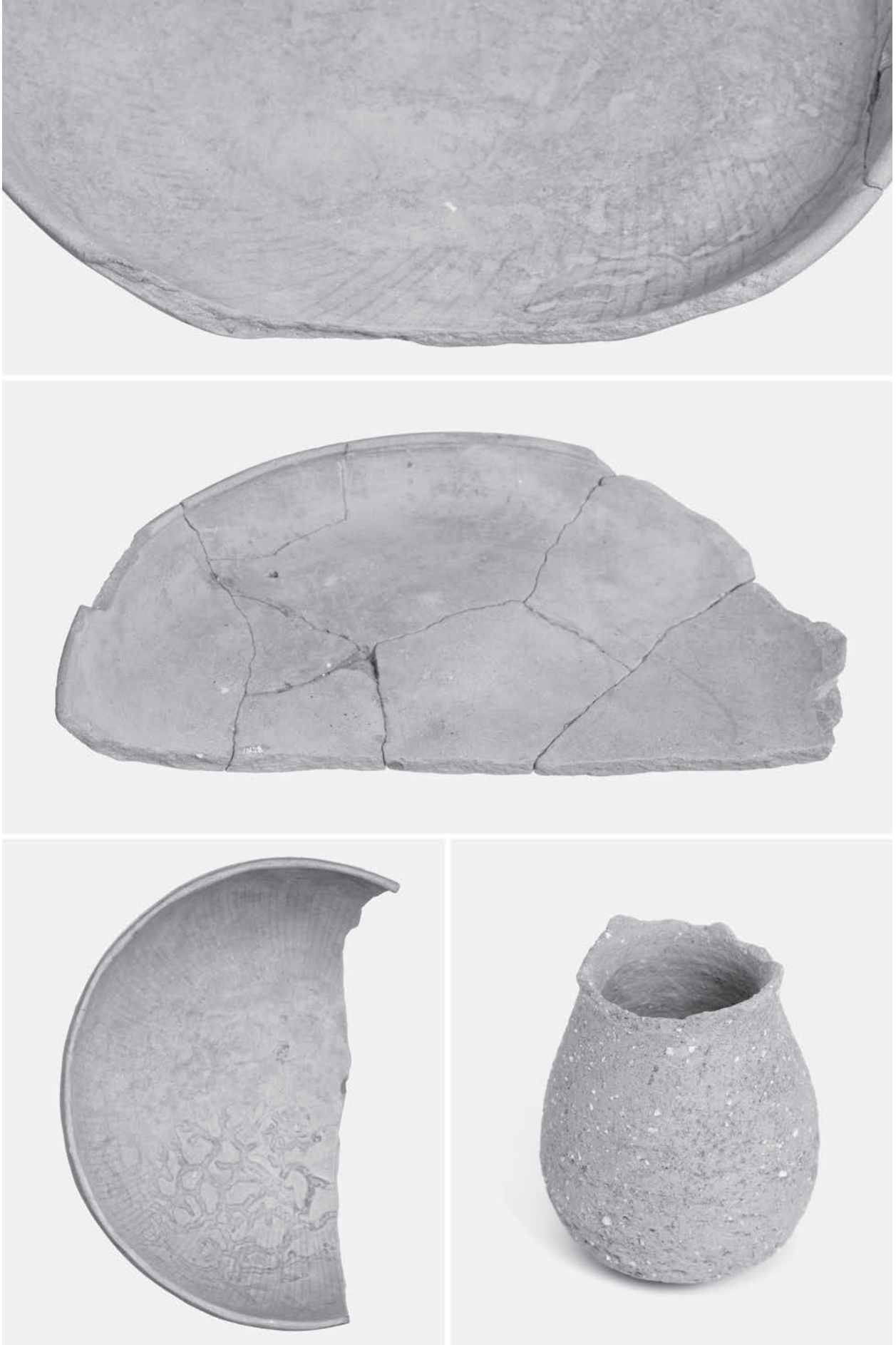
土師器甕内面の粘土接合痕 146



黒色土器碗外面全体へのヘラ磨き調整 103

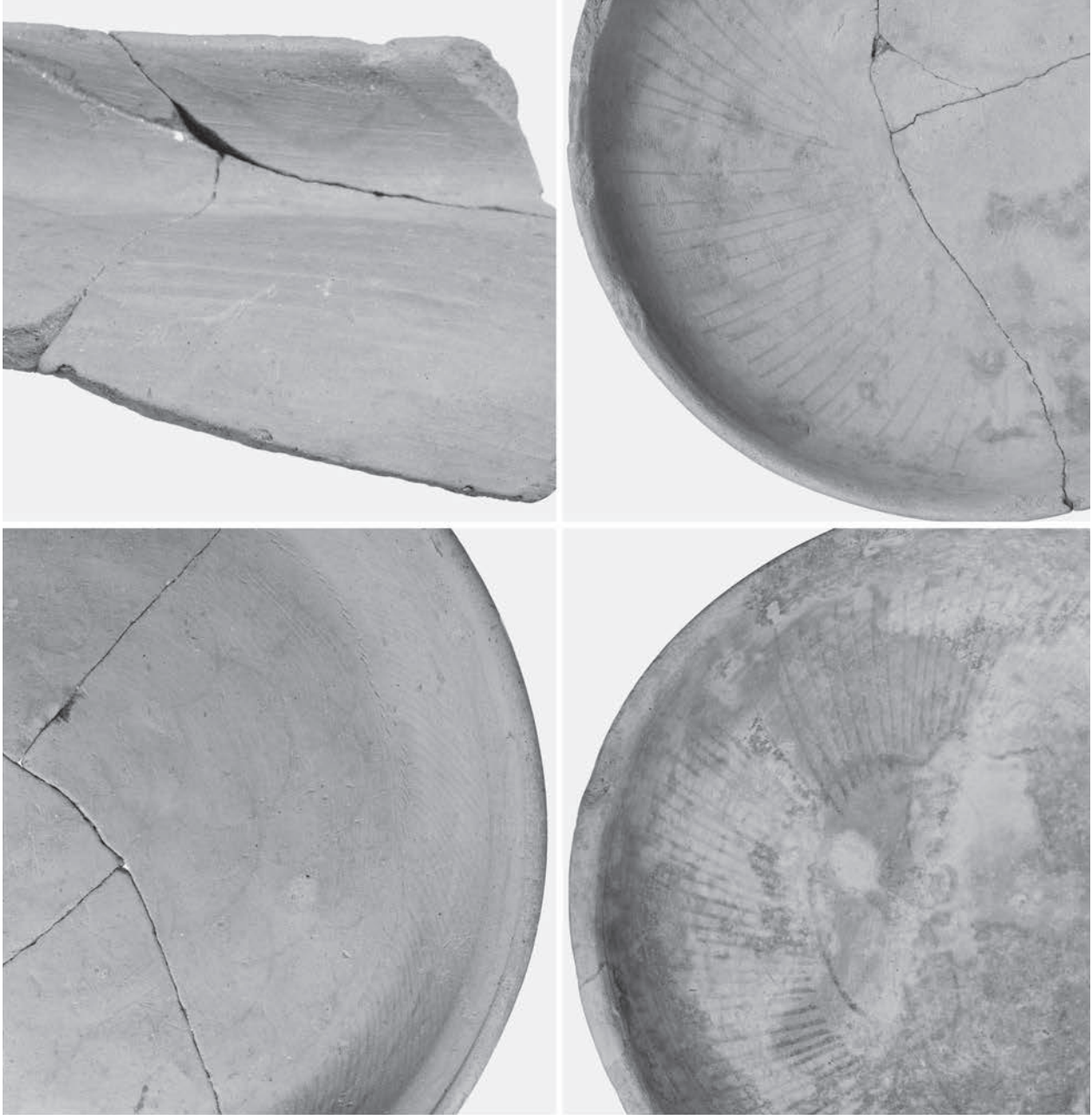


土師器杯外面底部のヘラ磨き調整 157

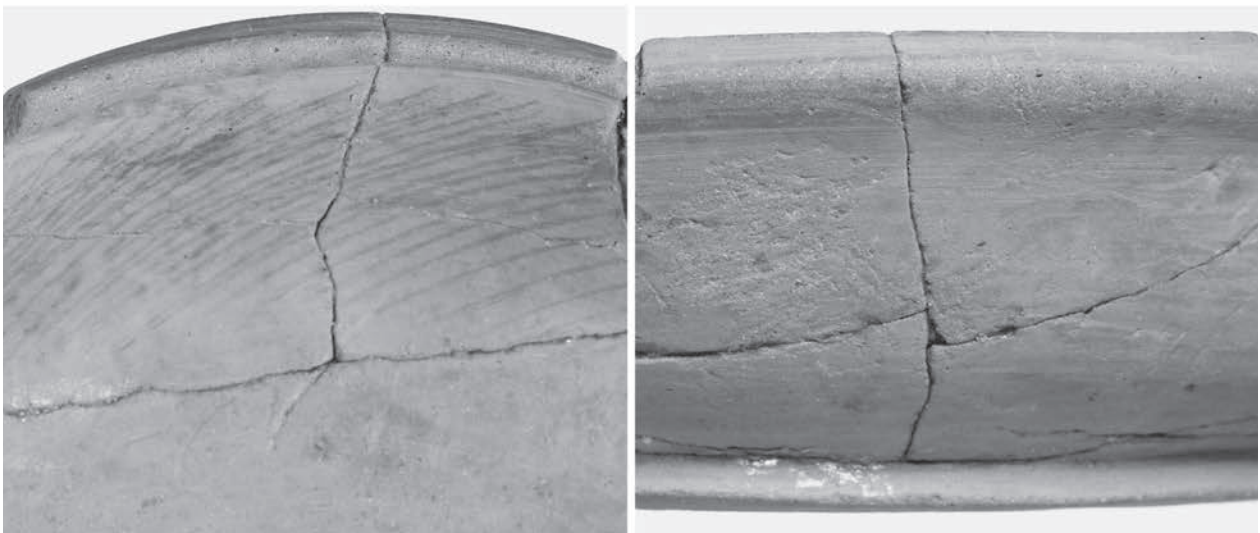


土師器・皿に見られる意図的な裁断による割れ口 上：153、中：158、左下：183  
須恵質壺 右下：181

図版 12 古代

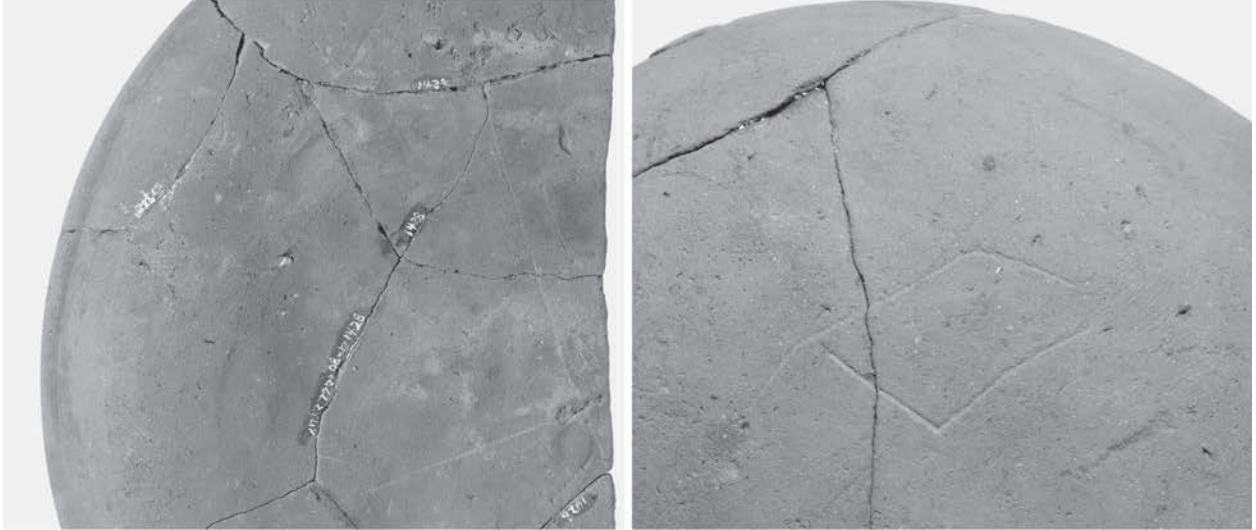


土師器杯・皿・壺の各種暗文 左上：114、右上：184、左下：154、右上：134

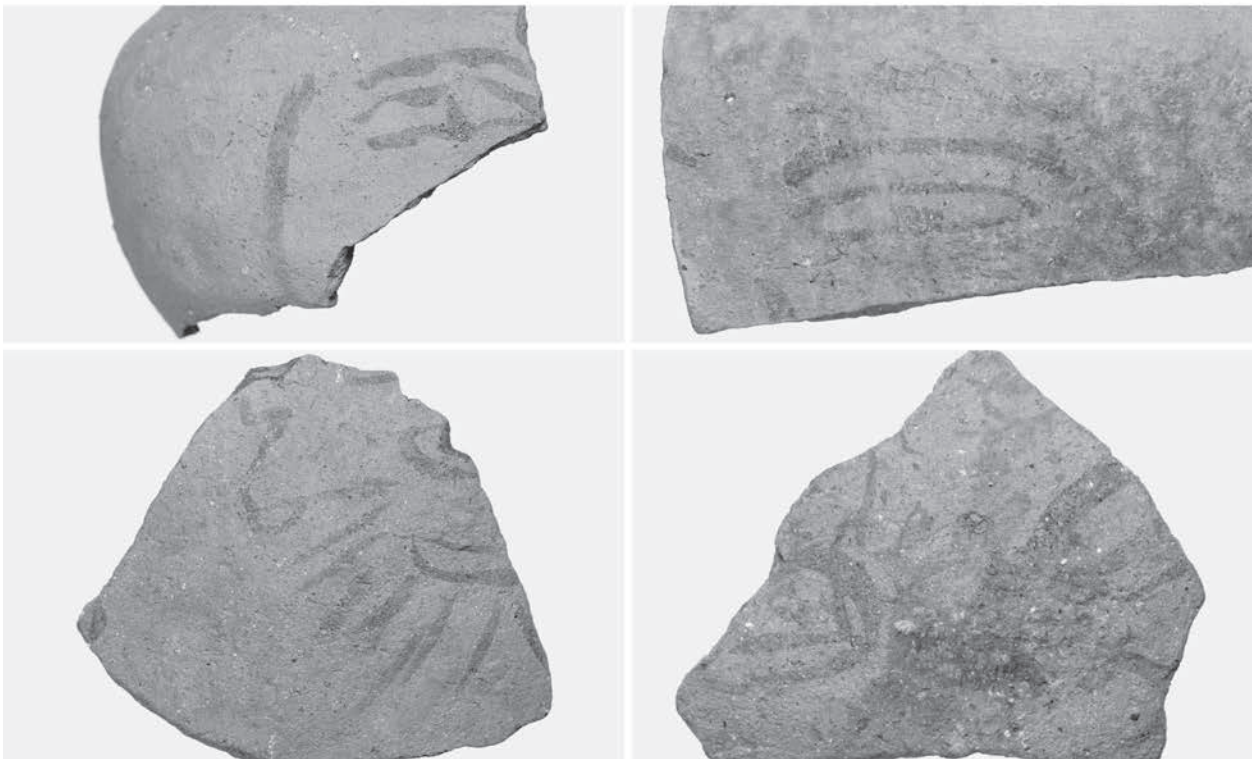


土師器皿内面（左）と外面（右）の調整 165

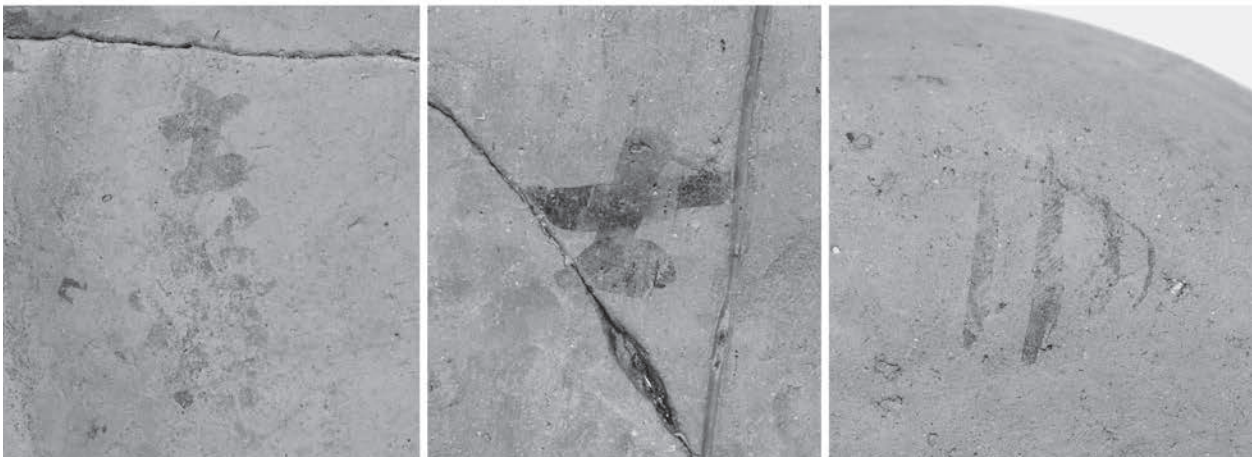
図版 13 古代



土師器杯・皿外面底部のへラ記号 左：158、右：184



土師器人面墨書土器 左上：115、右上：116、左下：105、右下：106

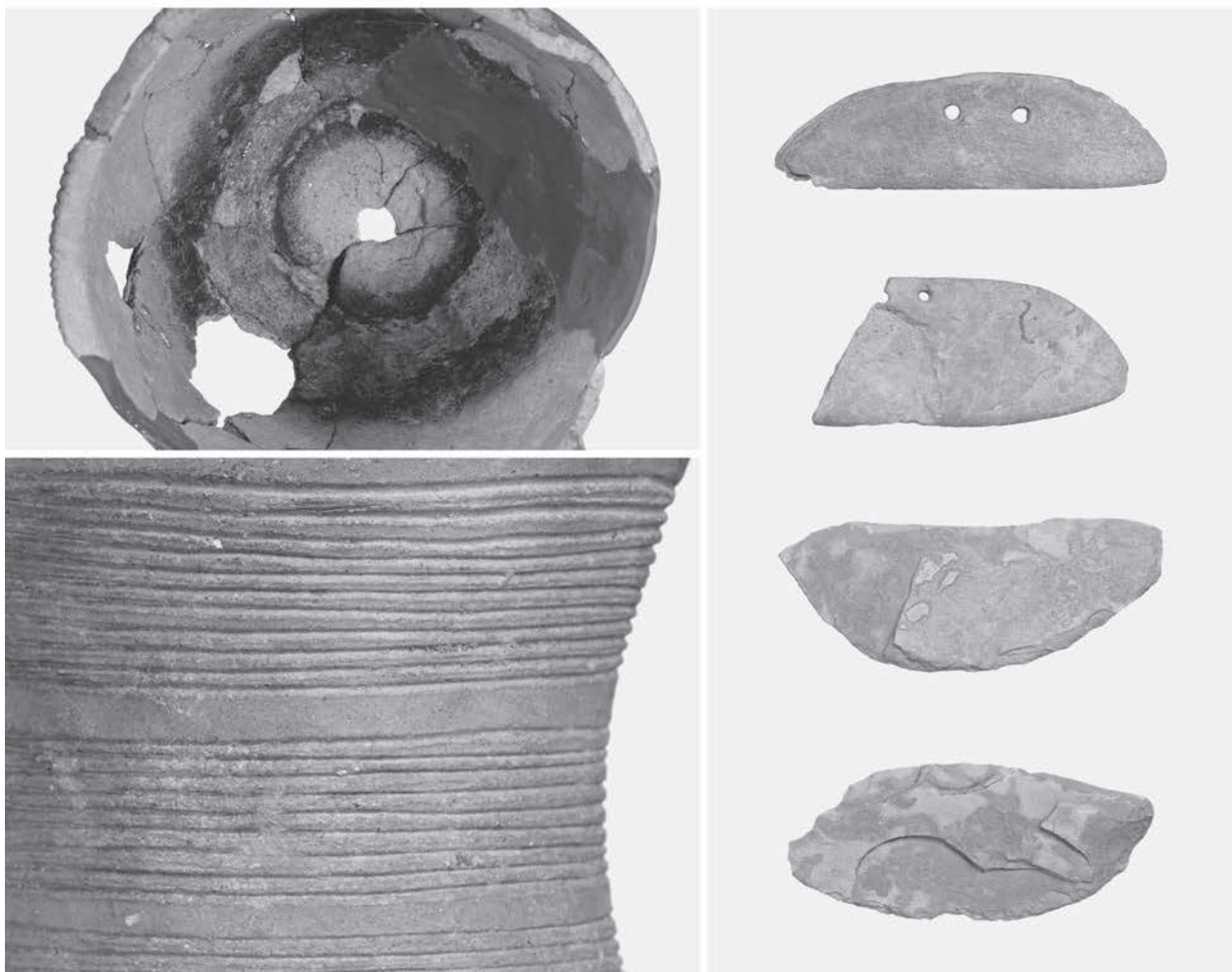


土師器杯・皿外面底部の墨書 左：154、中：155、右：156

# 図版 14 弥生時代



各13面・層出土の弥生時代前期の土器 左から217、218、216、219、221



甕として使用された甕 左上：218 太い多条沈線を持つ長頸壺 左下：214  
石包丁とその未成品 右上から228、229、230、231

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	いけしま・ふくまんじいせき 12							
書名	池島・福万寺遺跡 12 (福万寺Ⅱ期地区08-1調査区)							
副書名	一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第218集							
編著者名	駒井正明 岡本圭司 井上智博 山口誠治							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072-299-8791							
発行年月日	2011年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いけしま ふくまんじ 池島・福万寺 遺跡	おおさか ふ や お し 大阪府八尾市 ふくまんじちよう 福万寺町 ちない 地内	27212	72	34° 38′ 48″	135° 37′ 21″	20080901 ～ 20100831	3,982㎡	一級河川恩智川治水緑地建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
池島・福万寺 遺跡	田畠	古代～近世	坪境畦畔・水田・島畠・井戸・土坑・溝・土器埋納遺構	陶磁器・瓦質土器・土師器・須恵器・瓦・銭貨・鉄製品・木製品・漆器		条里型水田の変遷 福万寺地区最古段階の条里地割関連遺構		
	集落	古墳	ピット・土坑	土師器・須恵器		集落の縁辺部か		
	水田	弥生	水田・水口・溝・ピット	弥生土器・突帯文土器・土製品・石製品・石器・木製品		弥生時代の水田の変遷		
		縄文		突帯文土器				
要 約	弥生時代前期末～中期初頭、および弥生時代後期の水田面を検出した。古墳時代の遺構は希薄であったが、奈良時代前期の北流する自然流路を西方へ付け替えた跡を検出するとともに、土器埋納遺構を確認した。中世は短期間に廃絶した島畠が顕著であった。出土遺物は細片化したものが多かったが、その中で比較的まとまって弥生時代前期ならびに奈良時代の土器が出土した。							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第218集

## 池島・福万寺遺跡

(福万寺Ⅱ期地区08-1調査区)  
一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

発行年月日／2011年11月30日

編集・発行／公益財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 近畿印刷センター

大阪府柏原市本郷5丁目6番25号